
久喜市

小林八束1遺跡Ⅳ

総合交付金（河川）工事（小林調節池）
埋蔵文化財発掘調査報告
（第1分冊）

2022

埼玉県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 縄文時代の耳飾り



2 古墳時代の土器（第116号住居跡）

序

埼玉県では、平成29年度からの5か年計画において、「希望と安心」「活躍と成長」「うるおいと誇り」の埼玉を目指すべき将来像に掲げ、様々な施策に取り組んできました。その中には、あらゆる危機や災害に備え生活の安心を高める、総合的な治水対策が含まれています。

小林調節池建設事業は、その一環として久喜市小林地内に計画されたものです。久喜市内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数所在しており、小林八束1遺跡はその一つです。今回実施した発掘調査は、埼玉県の委託を受け、調節池建設のための事前調査として、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、地中深くから埋没した台地とその縁辺の斜面地や、斜面を切り込む谷といった複雑な地形が現われました。そして、そこを舞台とした縄文時代から中・近世までの人々の活動の痕跡が、累々と確認されました。

なかでも、今から約3,500年前の縄文時代後晩期の人々による、自然の流路に貯水施設や足場となる木組、木道を設けた水場の痕跡は、より良い生活を目指して自然と対峙し、格闘した当時の人々の姿をよみがえらせます。

時を超え、それから千数百年後の古墳時代前期の人々も、同じ谷を水場として維持・管理していたことが明らかになりました。こうした、先人たちの「治水の記録」は、さらに時を超えた、現代の我々にとってかけがえのない資料と言えるでしょう。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・活用の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の調整に御尽力を賜りました埼玉県県土整備部河川砂防課をはじめ、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、埼玉県杉戸県土整備事務所、久喜市教育委員会並びに地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 依 田 英 樹

- 会社に、第6次調査は新日本エグザに、第7次調査は三和航測株式会社に委託した。
- 8 巻頭図版の写真撮影は小川忠博氏に委託した。
- 9 自然科学分析は、第5次調査および令和2年度整理は株式会社パレオ・ラボに、第6次調査はパリノ・サーヴェイ株式会社に、第7次調査は加速器分析研究所に委託した。
- 10 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は加藤が行った。
- 11 出土品の整理・図版作成は、加藤が行い、土器は福田・富田和夫、赤熊浩一、木製品は矢部瞳の協力を得た。
- 12 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、それ以外を加藤が行った。
- 13 本書の編集は加藤が行った。

- 14 本書にかかる諸資料は、令和4年3月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
- 15 発掘調査、報告書刊行にあたり、下記の関係機関及び皆様からご教示・ご協力を賜った。記して感謝致します。(敬称略)
- 久喜市教育委員会
 阿部芳郎、池尻篤、磯野治司、江口誠一、江原英、大木美南、奥野麦生、小野美代子、栗島義明、小杉秀幸、小林竜太、齊藤成元、佐々木由香、笹森紀巳子、笹森健一、嶋村英之、清水康守、杉野森淳子、高橋龍三郎、竹内俊吾、中沢道彦、中村和夫、別所鮎実、中山真理、能城修一、細田勝、堀内謙一、宮内慶介、村田章人、吉岡卓真、吉川純子

凡例

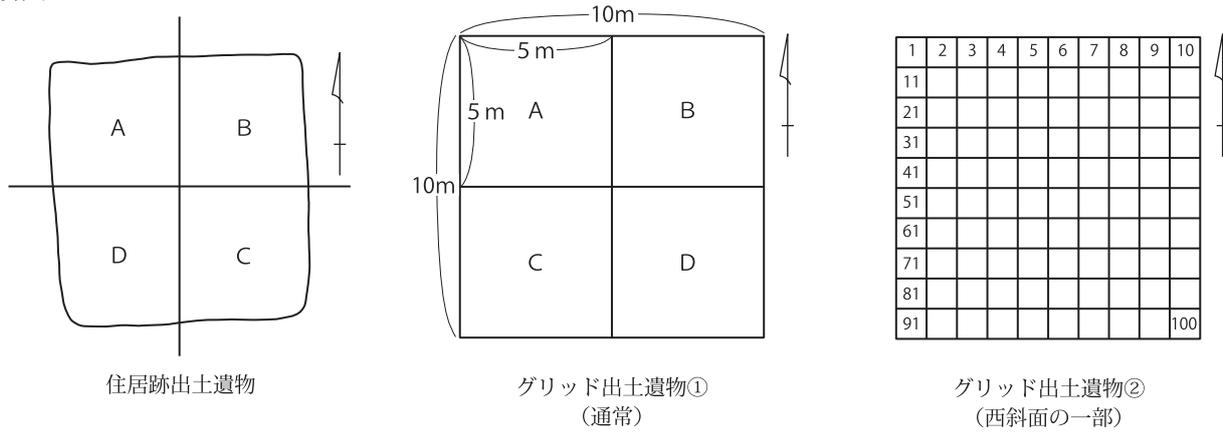
- 1 遺跡全体におけるX・Y座標の値は、世界測地系による国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00")に基づく座標値であり、Z座標の値は標高を示す。各挿図に示した方位はすべて座標北を示す。
- C-14グリッド北西杭の座標は、以下の通りである。
- $X = 6440.000\text{m}$ 、 $Y = -21110.000\text{m}$ 、 $Z = 8.016\text{m}$ 、北緯36° 03' 28"、東経140° 04' 03"
- 2 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標第IX系に基づく10×10mの範囲を1グリッドとし、調査区全体に方眼網を組んだ。
- 3 グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット(A・B・C…)、西から東方向に数字(1・2・3…)を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばA-1グリッドと呼称した。
- 4 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下の通りである。

SJ…住居跡 SR…方形周溝墓
 SD…溝跡 SK…土壌・粘土採掘坑
 SX…谷 P…小穴・柱穴
 第○号木組遺構…○号木組
 第○号木道状遺構…○号木道
 第○号導水溝状遺構…○号導水溝

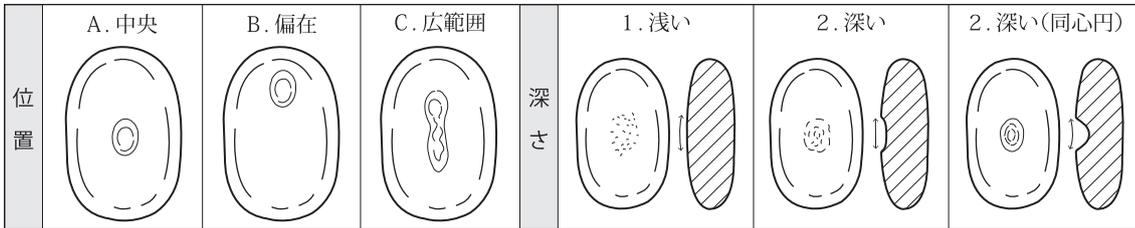
- 5 本書における挿図の縮尺は、以下の通りである。ただし、一部例外もある。
- 遺構図 1:60・1:30
 土器実測図・拓影図 1:3・1:4
 土製品 1:3
 石器・石製品 1:3・2:3
 木製品 1:4・1:6・1:8・1:10
 出土状況図の遺物縮尺は上記の50%とする
- 6 遺構図・遺物実測図の表記方法は以下の通りである。
- ・ 焼土 炭 粘土 地山
- ・ 彩色等の特徴をもつ土器は、その範囲に網を掛けて示し、これ以外は図中に示した。

- 土器：赤彩20%
- 石器・石製品：磨痕20% 敲打痕B30%
- 7 遺構断面図に表記した水準数値は標高 (m) で示した。
- 8 遺物観察表の表記方法は以下の通りである。
- ・遺物の計測値は原則 cm、g 単位で示した。
 - ・() は推定値、[] は残存値を示す。
 - ・土玉の計測値は下記の通りである。
- A：高さ B：幅 C：孔径 D：重量
- ・胎土は土器に含まれる特徴的な鉱物等を記号で示した。
- A：雲母 B：片岩 C：角閃石・輝石
D：長石 E：石英 F：軽石 G：砂粒子
H：赤色粒子 I：白色粒子 J：針状物質
K：黒色粒子 L：チャート
M：白シャモット N：赤シャモット
- ・残存率は、図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
 - ・焼成は良好・普通・不良の3段階で示した。
 - ・色調は『新版標準土色帖』に照らし、最も近い色相を記した。
 - ・住居跡は北を基準に、北西から時計回りにA区～D区に区分し、遺物を一括で取り上げた。
- 9 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図、久喜市発行の1/2,500都市計画図を編集して使用した。
- 10 遺構番号は、原則、調査時のものを用いたが、整理作業と第1次・第2次調査成果を踏まえた変更結果は以下に示した。
- 11 文中の引用文献は(著者(組織名)発行年)の順で表記し、参考文献とともに巻末に掲載した。
- 12 木質遺物の番号表記は下記の通りである。
- 明朝体：取上番号 ゴシック体：掲載番号
- 13 遺物の出土位置の記録について、点上げしたものの以外は別図1の通りに行った。
- 14 整理作業の結果、遺構名を変更したものは別表1のとおりである。
- 15 土器片を素材とし、二次的加工(剥離、敲打、磨り等)を施すものを「土器片加工品」とし、素材と形状により下記のように分類した。下記以外の、土器表裏面や破断面に特殊な研磨痕を残すものをIV類とした。
- I) 口縁部 II) 胴部 III) 底部
A) 円形基調 B) 半円形 C) 三角形
D) 方形 E) その他
- 16 礫石器の使用痕は下記のように観察した。
- 磨り：ツルツルの平滑な磨面や線状痕の集合など、対象との水平方向の運動により生じた痕跡。
敲打痕：素材礫の端部や縁辺に生じるあばた状の痕跡。対象との垂直方向の運動で生じたもの。
敲打痕B：敲打痕のうち、特に幅狭の側面に形成される凹凸の少ないざらついた使用痕。「敲打痕(敲石)」や「ざらざらした磨り」として捉えられているもの。
凹痕：素材礫の幅広面に生じる凹状の痕跡。凹みと表現できない、ざらつき(弱い敲打の集中)を含む。特に凹んだものを「凹穴」とする。別図2のように観察・表記する。
- 17 礫石器の器種分類は、上記の使用痕が一種のみのものを単独機能の「磨石」、「敲石」、「凹石」とし、二種以上確認できるもの(複合機能)をその組み合わせより「磨敲石」、「磨凹石」、「凹敲石」、「磨凹敲石」とした。また、これらの総体を「敲磨器(類)」とする。なお、転用の認定は、使用痕の形成過程が明瞭なもののみとした。
- 18 縄文時代における杭材の端部加工の観察・分類は別図3の通りとした。

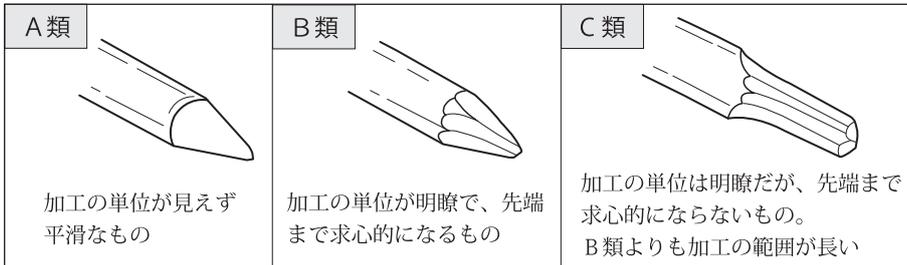
別図1



別図2



別図3



別表1

遺構名新旧対照表

新(本書)	旧(調査時)	備考	新(本書)	旧(調査時)	備考
縄文時代			縄文時代		
第5号木組遺構	第2号木組遺構	新番取得	第3号導水溝状遺構	S D 57	新番取得
第5号木組遺構堆積土	S K 728	遺構種別変更	第3号導水溝状遺構	S K 774	新番取得
第726号土壙	S K 727	第726号土壙に統合	古墳時代		
第730号土壙	S K 731	第730号土壙に統合	第51号住居跡	S J 115・116	第51号住居跡に統合
第783号土壙	SK782-I27	新番取得	第108号住居跡P3	H-24 P1	帰属振替
第784号土壙	SK782-I28	新番取得	第60号溝跡	S D 44	新番取得
第785号土壙	SK782-I29	新番取得	第61号溝跡	S D 45	新番取得
第795号土壙	S K 794	第795号土壙に統合	第805号土壙	S E 9	遺構種別変更
第1号導水溝状遺構	S D 59	新番取得	東の谷	S X 3	
第2号導水溝状遺構	S D 58	新番取得	古代		
第3号導水溝状遺構	S D 56	新番取得	第2号炭焼窯跡	S X 4	遺構種別変更
			第5号炭焼窯跡	S X 5	遺構種別変更

目次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言 凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	3 古代の遺構と遺物	411
1 発掘調査に至る経過	1	(1) 炭焼窯跡	411
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	(2) 溝跡	417
3 発掘調査・報告書作成の組織	3	(3) 土壌	418
II 遺跡の立地と環境	5	(4) ピット	419
1 地理的環境	5	(5) 遺構外出土遺物	420
2 歴史的環境	7	4 中世以降の遺構と遺物	420
III 遺跡の概要	14	(1) 溝跡	420
1 小林八束1遺跡の概要	14	(2) 土壌	424
2 基本層序	27	(3) 遺構外出土遺物	424
IV 遺構と遺物	33	V 自然科学分析	425
1 縄文時代の遺構と遺物	33	1 放射性炭素年代測定(1)	425
(1) 住居跡	33	2 放射性炭素年代測定(2)	428
(2) 焼土跡	40	3 木質遺物の樹種同定と年代測定	432
(3) 集石	41	4 樹種の同定(1)	436
(4) 土壌	41	5 樹種の同定(2)	438
(5) 溝状遺構	65	6 西斜面のテフラ分析	442
(6) ピット	67	7 東の谷のテフラ分析	444
(7) 谷と水場遺構	71	8 花粉の分析	449
(8) 包含層とその他の遺物	172	9 珪藻化石の分析	452
2 古墳時代の遺構と遺物	313	10 種実の同定	456
(1) 住居跡	314	11 大型植物遺体の同定	459
(2) 方形周溝墓	359	12 自然科学分析のまとめ	464
(3) 溝跡	363	VI 調査のまとめ	466
(4) 土壌	367	1 縄文時代の様相	466
(5) ピット	372	2 古墳時代の様相	476
(6) 東の谷と水場遺構	376	3 古代の様相	478
(7) 北の谷と水場遺構	400	4 中世以降の様相	481
(8) 遺構外出土遺物	406	写真図版	

挿図目次

(第1分冊)

第1図	埼玉県の地形	5	第35図	土壙(6)	57
第2図	遺跡周辺の旧地形	6	第36図	土壙(7)	58
第3図	周辺の遺跡(1)	8	第37図	土壙(8)	59
第4図	周辺の遺跡(2)	9	第38図	土壙出土遺物(5)	62
第5図	調査区位置図	15	第39図	土壙出土遺物(6)	63
第6図	全体図	19	第40図	溝状遺構・出土遺物	66
第7図	区割図(1)	20	第41図	ピット区割位置図	67
第8図	区割図(2)	21	第42図	ピット断面図	67
第9図	区割図(3) 縄文面	22	第43図	ピット(1) 区割図①~⑤	68
第10図	区割図(4) 古墳面	23	第44図	ピット(2) 区割図⑥~⑧	69
第11図	区割図(5)	24	第45図	縄文時代の谷と水場関連遺構	71
第12図	区割図(6)	25	第46図	谷の既報告分との関係	73
第13図	区割図(7)	26	第47図	谷の土層と遺物取り上げ概念図	74
第14図	基本層序(1)	30	第48図	縄文時代の谷の土層(1)	76
第15図	基本層序(2)	31	第49図	縄文時代の谷の土層(2)	77
第16図	斜面土層	32	第50図	縄文時代の谷の土層(3)	78
第17図	縄文時代の主な遺構	33	第51図	縄文時代の谷の土層(4)	79
第18図	第121号住居跡(1)	34	第52図	縄文時代の谷の土層(5)	80
第19図	第121号住居跡(2)	35	第53図	縄文時代の谷の土層(6)	81
第20図	第121号住居跡出土遺物(1)	36	第54図	木組遺構より上面の自然木出土状況	82
第21図	第121号住居跡出土遺物(2)	37	第55図	第3号木組遺構(1) 各部名称	83
第22図	第122号住居跡(1)	38	第56図	第3号木組遺構(2) 平面図	84
第23図	第122号住居跡(2)・出土遺物	39	第57図	第3号木組遺構(3) 掘方	85
第24図	焼土跡	40	第58図	第3号木組遺構(4) 土層	86
第25図	第1号集石・出土遺物	40	第59図	第3号木組遺構(5) 杭打設①	87
第26図	土壙(1)	43	第60図	第3号木組遺構(6) 杭打設②	88
第27図	土壙(2)	45	第61図	第3号木組遺構(7)	89
第28図	土壙(3)	47	第62図	第3号木組遺構出土遺物(1)	90
第29図	土壙(4)	49	第63図	第3号木組遺構出土遺物(2)	91
第30図	土壙(5)	51	第64図	第3号木組遺構出土遺物(3)	92
第31図	土壙出土遺物(1)	52	第65図	第3号木組遺構出土遺物(4)	93
第32図	土壙出土遺物(2)	53	第66図	第4号木組遺構(1) 横木	95
第33図	土壙出土遺物(3)	54	第67図	第4号木組遺構(2) 土層	96
第34図	土壙出土遺物(4)	55	第68図	第4号木組遺構(3) 杭群	97

第69図	第4号木組遺構(4)杭打設①	……	98	第103図	水場関連遺構出土遺物分布	……	144
第70図	第4号木組遺構(5)杭打設②	……	99	第104図	水場遺構最下層出土遺物(1)	……	146
第71図	第4号木組遺構(6)杭深度分布①	……	100	第105図	水場遺構最下層出土遺物(2)	……	147
第72図	第4号木組遺構(7)杭深度分布②	……	101	第106図	水場遺構最下層出土遺物(3)	……	148
第73図	第4号木組遺構出土遺物(1)	……	103	第107図	水場遺構最下層出土遺物(4)	……	150
第74図	第4号木組遺構出土遺物(2)	……	104	第108図	水場遺構最下層出土遺物(5)	……	151
第75図	第4号木組遺構出土遺物(3)	……	105	第109図	水場遺構出土遺物(1)	……	152
第76図	第5号木組遺構(1)全体図	……	107	第110図	水場遺構出土遺物(2)	……	153
第77図	第5号木組遺構(2)土層	……	108	第111図	水場遺構出土遺物(3)	……	155
第78図	第5号木組遺構(3)木組部①	…	110	第112図	水場遺構出土遺物(4)	……	156
第79図	第5号木組遺構(4)木組部②	…	111	第113図	水場遺構出土遺物(5)	……	158
第80図	第5号木組遺構(5)杭群①	……	112	第114図	水場遺構出土遺物(6)	……	159
第81図	第5号木組遺構(6)杭群②	……	113	第115図	水場遺構出土遺物(7)	……	160
第82図	第5号木組遺構出土遺物(1)	……	114	第116図	水場遺構出土遺物(8)	……	161
第83図	第5号木組遺構出土遺物(2)	……	115	第117図	水場遺構出土遺物(9)	……	163
第84図	第5号木組遺構出土遺物(3)	……	116	第118図	水場遺構出土遺物(10)	……	164
第85図	第5号木組遺構出土遺物(4)	……	117	第119図	水場遺構出土遺物(11)	……	166
第86図	第5号木組遺構出土遺物(5)	……	118	第120図	水場遺構出土遺物(12)	……	167
第87図	第5号木組遺構出土遺物(6)	……	119	第121図	水場遺構出土遺物(13)	……	168
第88図	木組遺構部材規模一覧	……	120	第122図	水場遺構出土遺物(14)	……	169
第89図	第1号木道状遺構	……	126	第123図	水場遺構出土遺物(15)	……	170
第90図	第2号木道状遺構	……	127	第124図	水場遺構出土遺物(16)	……	171
第91図	木道状遺構出土遺物	……	128	第125図	土器重量分布図(1)	……	173
第92図	その他の水場関連遺構(1)	……	130	第126図	土器重量分布図(2)	……	174
第93図	その他の水場関連遺構(2)	……	132	第127図	土器重量分布図(3)	……	175
第94図	第1・2号導水溝出土遺物	……	133	第128図	東斜面の主な出土遺物	……	177
第95図	第3号導水溝出土遺物(1)	……	134	第129図	西斜面の主な出土遺物(1)	……	178
第96図	第3号導水溝出土遺物(2)	……	135	第130図	西斜面の主な出土遺物(2)	……	179
第97図	その他の水場関連遺構(3)	……	137	第131図	東斜面出土遺物(1)	……	182
第98図	開削部土器集積層出土遺物(1)	…	138	第132図	東斜面出土遺物(2)	……	183
第99図	開削部土器集積層出土遺物(2)	…	140	第133図	東斜面出土遺物(3)	……	184
第100図	開削部土器集積層出土遺物(3)	…	141	第134図	東斜面出土遺物(4)	……	185
第101図	開削部土器集積層出土遺物(4)	…	142	第135図	東斜面出土遺物(5)	……	186
第102図	開削部土器集積層最下層出土遺物	……	143	第136図	東斜面出土遺物(6)	……	187
				第137図	東斜面出土遺物(7)	……	188
				第138図	東斜面出土遺物(8)	……	189
				第139図	東斜面出土遺物(9)	……	190

第140図	東斜面出土遺物 (10)	191	第177図	西斜面出土遺物 (22)	242
第141図	東斜面出土遺物 (11)	194	第178図	西斜面出土遺物 (23)	243
第142図	東斜面出土遺物 (12)	195	第179図	西斜面出土遺物 (24)	245
第143図	東斜面出土遺物 (13)	196	第180図	西斜面出土遺物 (25)	246
第144図	東斜面出土遺物 (14)	197	第181図	西斜面出土遺物 (26)	248
第145図	東斜面出土遺物 (15)	198	第182図	西斜面出土遺物 (27)	249
第146図	東斜面出土遺物 (16)	199	第183図	西斜面出土遺物 (28)	250
第147図	東斜面出土遺物 (17)	202	第184図	西斜面出土遺物 (29)	251
第148図	東斜面出土遺物 (18)	203	第185図	西斜面出土遺物 (30)	252
第149図	東斜面出土遺物 (19)	204	第186図	西斜面出土遺物 (31)	253
第150図	東斜面出土遺物 (20)	205	第187図	西斜面出土遺物 (32)	254
第151図	東斜面出土遺物 (21)	207	第188図	西斜面出土遺物 (33)	255
第152図	東斜面出土遺物 (22)	208	第189図	西斜面出土遺物 (34)	256
第153図	東斜面出土遺物 (23)	209	第190図	西斜面出土遺物 (35)	257
第154図	東斜面出土遺物 (24)	210	第191図	西斜面出土遺物 (36)	258
第155図	東斜面出土遺物 (25)	211	第192図	西斜面出土遺物 (37)	259
第156図	西斜面出土遺物 (1)	214	第193図	西斜面出土遺物 (38)	260
第157図	西斜面出土遺物 (2)	215	第194図	西斜面出土遺物 (39)	261
第158図	西斜面出土遺物 (3)	216	第195図	西斜面出土遺物 (40)	262
第159図	西斜面出土遺物 (4)	217	第196図	西斜面出土遺物 (41)	264
第160図	西斜面出土遺物 (5)	220	第197図	西斜面出土遺物 (42)	265
第161図	西斜面出土遺物 (6)	221	第198図	西斜面出土遺物 (43)	266
第162図	西斜面出土遺物 (7)	222	第199図	西斜面出土遺物 (44)	268
第163図	西斜面出土遺物 (8)	223	第200図	西斜面出土遺物 (45)	269
第164図	西斜面出土遺物 (9)	224	第201図	西斜面出土遺物 (46)	270
第165図	西斜面出土遺物 (10)	226	第202図	西斜面出土遺物 (47)	271
第166図	西斜面出土遺物 (11)	227	第203図	西斜面出土遺物 (48)	272
第167図	西斜面出土遺物 (12)	228	第204図	西斜面出土遺物 (49)	273
第168図	西斜面出土遺物 (13)	230	第205図	西斜面出土遺物 (50)	274
第169図	西斜面出土遺物 (14)	231	第206図	西斜面出土遺物 (51)	275
第170図	西斜面出土遺物 (15)	232	第207図	西斜面出土遺物 (52)	276
第171図	西斜面出土遺物 (16)	233	第208図	遺構外出土遺物 (1)	278
第172図	西斜面出土遺物 (17)	236	第209図	遺構外出土遺物 (2)	279
第173図	西斜面出土遺物 (18)	237	第210図	遺構外出土遺物 (3)	281
第174図	西斜面出土遺物 (19)	238	第211図	遺構外出土遺物 (4)	282
第175図	西斜面出土遺物 (20)	240	第212図	遺構外出土遺物 (5)	283
第176図	西斜面出土遺物 (21)	241	第213図	遺構外出土遺物 (6)	284

第214図 遺構外出土遺物 (7)……………	285	第216図 遺構外出土遺物 (9)……………	287
第215図 遺構外出土遺物 (8)……………	286		

表目次

(第1分冊)

第1表 周辺の遺跡一覧表……………	10	第8表 第5号木組遺構の使用部材一覧……	124
第2表 小林八束1遺跡 主な検出遺構……	15	第9表 縄文土器(復元実測)観察表……	288
第3表 第122号住居跡ピット新旧対照表 ……	39	第10表 縄文土器(破片)一覧……………	290
第4表 縄文時代の土壌一覧……………	65	第11表 土器片加工品一覧……………	300
第5表 縄文時代のピット一覧……………	70	第12表 土製品観察表……………	304
第6表 第3号木組遺構の使用部材一覧……	121	第13表 石器・石製品観察表……………	305
第7表 第4号木組遺構の使用部材一覧……	122	第14表 縄文時代の木製品観察表……………	311

写真図版目次

(第1分冊)

巻頭図版1	1	縄文時代の耳飾り
	2	古墳時代の土器(第116号住居跡)

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県では、平成29年度からの5年間の県政運営の基本となる『埼玉県5か年計画—希望・活躍・うるおいの埼玉—』を策定している。このうち生活の安心を高める分野では、「危機や災害に備える」という基本目標を掲げ、台風や土砂災害から県民の生命や財産を守るために、治水・治山対策や土砂災害防止対策を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前から関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

総合治水対策特定河川事業（小林調節池建設事業）における埋蔵文化財の取扱いについては、平成14年11月20日に実施した「平成15年度公共事業と埋蔵文化財保護の調整会議」で照会があった。事業予定地については、文化財保護課（当時）では、周辺に埋蔵文化財包蔵地が所在しないこと、現在の地形から低湿地と想定されること、菖蒲町教育委員会（当時）の意見を踏まえて、工事に着手して差し支えない旨、口頭で回答した。

それを受けて、平成14、15年度に北側の調節池「池Ⅱ」の一時掘削が施行された。一時掘削終了後の平成16年4月8日、菖蒲町教育委員会から調節池法面において、多量の土器が発見されたとの報があり、翌9日、当課職員が現地を確認したところ、縄文土器片が多数確認され、さらには遺構断面が法面に露出しており、周辺は埋没ローム台地であることが判明した。

4月12日に河川砂防課に状況説明を行い、今後の工事計画や取扱いについて協議し、未掘削部分の確認調査を実施することが了承された。

なお、4月22日に菖蒲町教育委員会から当該箇所に係る遺跡の把握について報告され、県教育委員会は同日付で受理し「池Ⅱ」周辺を「小林八東

1遺跡」として遺跡台帳に登載した。

平成16年4月22日付け河砂第70号で、河川砂防課長より文化財保護課長宛て「小林調節池改修事業地内における埋蔵文化財の所在および取扱いについて」の照会があった。小林八東1遺跡範囲内「池Ⅰ」の未掘削範囲は、出水期明けの11月10日から12日までの3日間で確認調査を実施した結果、遺構・遺物が濃密に分布することが判明し、平成16年11月17日付け教文第1220号で、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査が必要となる旨回答した。

その後、関係機関で協議を重ね、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査は公益財団法人埼玉県埋蔵文化座調査事業団が実施することになった。

小林八東1遺跡の発掘調査のうち、本報告に係る第5、6、7次調査は、平成26、29、30年度に発掘調査が実施された。

なお、文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埼玉県知事からの通知に対し、同条第4項の規定により埼玉県教育委員会教育長から発掘調査を実施する必要がある旨を勧告している。

平成26年10月8日付け教生文第4-940号

また、文化財保護法第92条第1項の規定に基づく公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの発掘調査届に対し、埼玉県教育委員会教育長からの慎重に実施すべき旨を通知している。

平成26年10月15日付け教生文第2-43号

平成29年6月5日付け教生文第2-12号

平成30年5月1日付け教生文第2-3号

(埼玉県教育局市町村支援部文化資源課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

小林八束1遺跡の第5次発掘調査は、総合交付金（河川）工事（小林調節池・事業地内埋蔵文化財発掘調査業務委託）より実施した。調査面積は2,200㎡である。

平成26年9月23日に発掘調査届等の事務手続きを行った。10月に事務所を設置後、重機による表土掘削を行った。その後、基準点測量を実施し、人力による遺構確認と精査を開始した。

遺構確認作業の結果、縄文時代の土壌やピット、包含層のほか、古墳時代の包含層を検出した。確認された遺構は順次掘削・精査に着手し、土層断面図・平面図の作成、写真撮影を行った。1月19日に自然科学分析を、2月3日と13日、3月5日に高所作業車による写真撮影、2月10日に空中写真撮影を実施した。

3月上旬に調査区の埋め戻し作業を進め、3月19日に発見届と保管証を提出し、調査を終了した。事務所等の施設は3月下旬に撤収した。

第6・7次発掘調査は、総合交付金（河川）工事（小林調節池・埋蔵文化財発掘調査業務委託その1・同その2）により実施した。調査面積は4,430㎡である。

第6次調査は平成29年7月3日から平成30年3月31日まで実施した。

平成29年6月1日に発掘調査届等の事務手続きを行った。7月から9月にかけて重機による表土掘削を行った。その後、基準点測量を実施し、人力による遺構確認と精査を開始した。

遺構確認作業の結果、縄文時代の土壌や古墳時代の住居跡、方形周溝墓のほか、東の谷では杭列や木製品集中地点などが検出された。確認された遺構は順次掘削・精査に着手し、土層断面図・平面図の作成、写真撮影を行った。2月28日に空中写真撮影並びに高所作業車による写真撮影、1月29日に自然科学分析を実施した。3月19日に発見

届と保管証を提出し、調査を終了した。

第7次調査は平成30年4月1日から平成31年の1月31日まで実施した。

平成30年4月1日に発掘調査届等の事務手続きを行い、同月より遺構確認と精査を開始した。

遺構確認作業の結果、縄文時代の住居跡や土壌、ピット、谷部では木組遺構や木道状遺構などの施設を含む水場遺構のほか、斜面部で遺物包含層を検出した。このほか、古墳時代の住居跡や土壌、古代の炭焼窯跡などが確認された。遺構は順次、掘削・精査に着手し、土層断面図・平面図の作成、写真撮影を行った。12月5日に空中写真撮影、11月8日と12月5日に高所作業車による写真撮影、11月28日に自然科学分析を実施した。

1月上旬に調査区の埋め戻し作業を進め、1月18日に発見届と保管証を提出し、調査を終了した。事務所等の施設は1月下旬に撤収した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、令和元年11月12日から令和4年3月31日まで約2年半にわたり実施した。

11月から出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業を行った。復元を終えた遺物は、令和3年10月まで実測、トレース、採拓を行った。実測には磁場式3次元位置計測装置、正射投影画像撮影機などを活用した。仕上がったトレース図と拓本は、スキャナでパソコンに取り込み、印刷用の版下を作成した。令和3年2月～11月には図版用の遺物写真を撮影し、発掘調査で撮影された遺構写真と合わせて、写真図版用の版下データを作成した。

発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等は、照合・修正を加えた第二原図を作成した。

これをスキャナでパソコンに取り込み、画像編集ソフトを用いてトレースした。これに土層説明等を組み込み、印刷用の版下データを作成した。

自然科学分析は令和2年10月に、縄文時代の谷

と古墳時代の谷で出土した木製品の放射性炭素年代測定、樹種同定および大型植物遺体同定分析を実施した。

報告書の巻頭写真は、令和3年1月に縄文時代の耳飾りと古墳時代の住居跡から出土した土器を対象に撮影を委託した。

9月から各版下データをもとに、原稿の執筆と

報告書の割付・編集を行った。その後、原稿を印刷業者に入稿し、3回の校正を経て、令和4年3月22日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第476集『小林八束1遺跡Ⅳ』を刊行した。

遺物および図面類・写真類・データ類等の諸資料は、3月に整理分類の上、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3 発掘調査・報告書作成の組織

平成26年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男	調 査 部	
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之	主幹兼調査第二課長	木 戸 春 夫
総 務 課 長	藤 倉 英 明	主 幹	西 井 幸 雄
		主 事	砂 生 智 江

平成29年度（発掘調査）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調 査 部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	赤 熊 浩 一
総務部		調 査 部 副 部 長	田 中 広 明
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	主幹兼調査第二課長	上 野 真由美
総 務 課 長	曾 川 浩 二	主 任	加 藤 隆 則
		主 幹	近 藤 洋
		主 事	吉 留 頌 平

平成30年度（発掘調査）

理 事 長	藤 田 栄 二	調 査 部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	瀧 瀬 芳 之
総務部		調 査 部 副 部 長	吉 田 稔
総 務 部 副 部 長	田 中 広 明	主幹兼調査第二課長	上 野 真由美
総 務 課 長	新 井 了 悟	主 任	加 藤 隆 則
		主 任	渡 邊 理伊知
		主 任 専 門 員	木 戸 春 夫
		主 事	砂 生 智 江

令和元年度（発掘調査）

理 事 長	藤 田 栄 二	調 査 部	
常務理事兼総務部長	高 津 導	調 査 部 長	黒 坂 禎 二
総務部		調 査 部 副 部 長 兼 整 理 第 一 課 長	上 野 真 由 美
総 務 部 副 部 長	山 本 靖	主 任	加 藤 隆 則
総 務 課 長	新 井 了 悟		

令和2年度（発掘調査）

理 事 長	藤 田 栄 二	調 査 部	
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調 査 部 長	吉 田 稔
総務部		調 査 部 副 部 長 兼 整 理 第 一 課 長	上 野 真 由 美
総 務 部 副 部 長	山 本 靖	主 幹 兼 整 理 第 二 課 長	大 谷 徹
総 務 課 長	鈴 木 裕 一	主 査	加 藤 隆 則

令和3年度（発掘調査）

理 事 長	依 田 英 樹	調 査 部	
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調 査 部 長	田 中 広 明
総務部		調 査 部 副 部 長 兼 整 理 第 一 課 長	福 田 聖
総 務 部 副 部 長	上 野 真 由 美	整 理 第 二 課 長	金 子 直 行
総 務 課 長	鈴 木 裕 一	主 査	加 藤 隆 則

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

小林八東1遺跡は、埼玉県の一部、久喜市菖蒲町小林字八東に所在する。遺跡はJR高崎線桶川駅から北東へ約7km、JR宇都宮線久喜駅から西方約7kmに位置している。

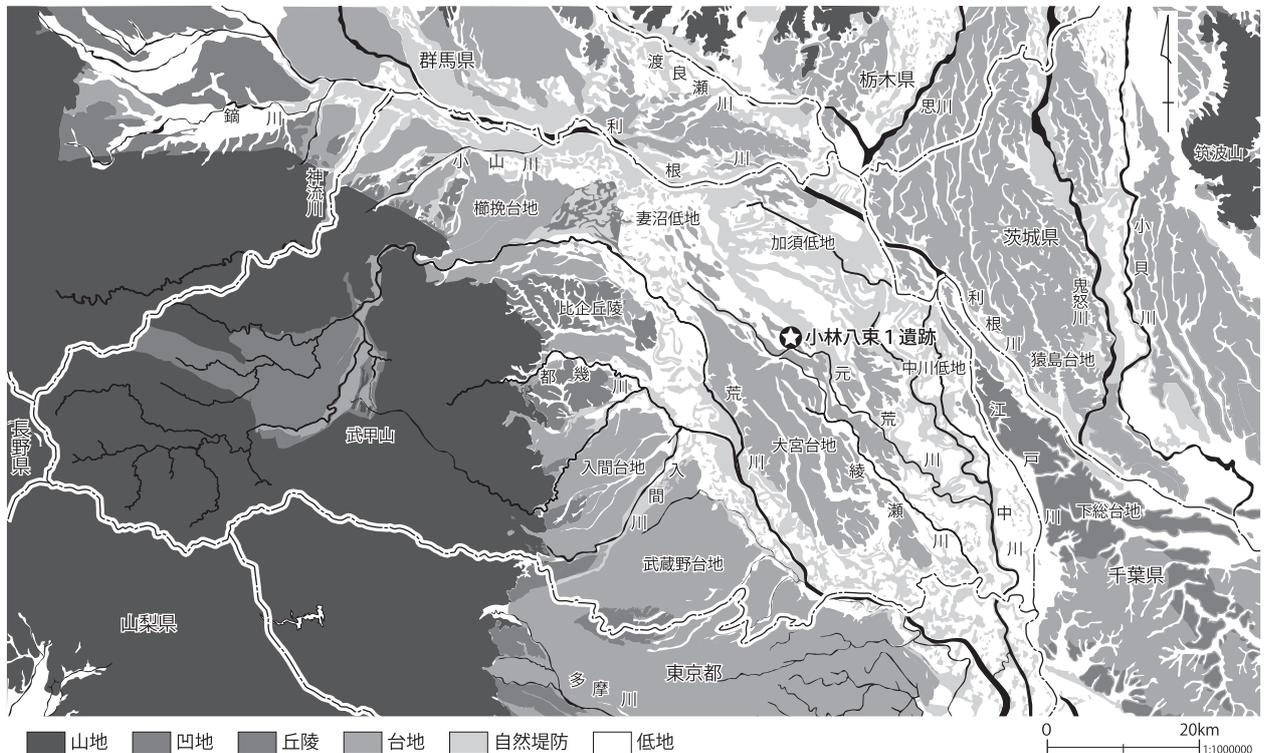
第1図に埼玉県の地形と小林八東1遺跡の位置を示した。埼玉県は西高東低の地形で、①関東山地と秩父盆地からなる県西部地域（秩父）、②それに連なる丘陵と台地からなる県中部地域（比企・入間）、③荒川や中川の低地帯と、それに挟まれた大宮台地からなる県東部地域、の三つの地域として理解されている。

久喜市は埼玉県の北東部に位置し、北は加須市、南は蓮田市・白岡市・宮代町・杉戸町・幸手市、東は利根川を境に茨城県古河市・五霞町、西は鴻巣市・桶川市に接している。市域は東西約15.6km、南北約13.2km（面積82.41km²）、人口は151,824人（令和3年11月1日）である。気候は内

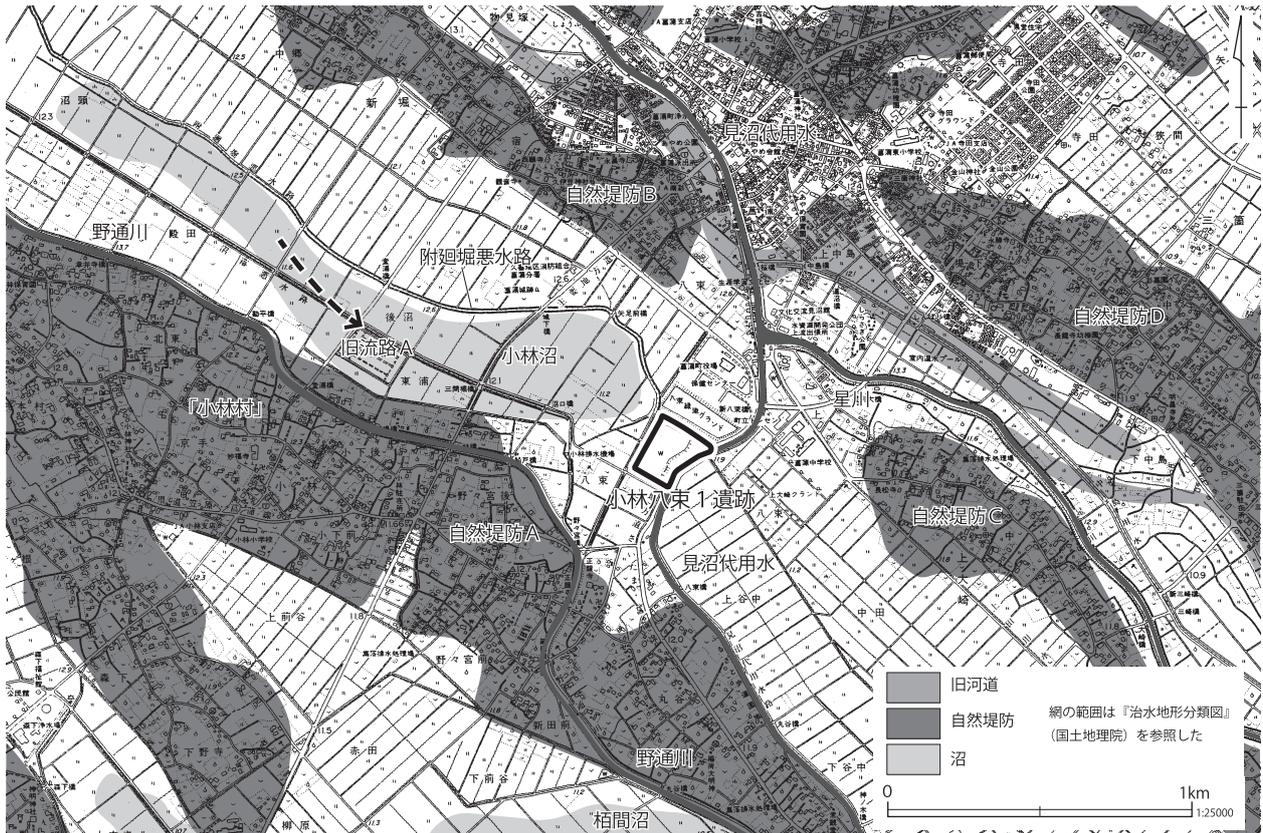
陸性の太平洋側気候に属し、夏は高温多湿、冬は低温乾燥である。

遺跡の所在する菖蒲町地区は、2010年に久喜市、鷲宮町、栗橋町との新設合併により、久喜市として新たな歩みを始めた。市街地は商業中心で、南東部は工業団地となっており、旧町域西部では、元荒川水系の星川、野通川などの河川によって肥沃な水田地帯が形成されている。

周辺の地形は、大宮台地が北側の加須低地に移行する部分にあたる。大宮台地は旧浦和市（現さいたま市）から鴻巣市まで続く、長さ30km、幅8～10kmの台地である。かつては群馬県館林辺りまで続く台地であったが、関東造盆地運動による地盤沈降や、河川の浸食、堆積作用により、寸断された島状の台地となっている。加須低地と接する北方では、低地部との比高差が少ない平坦な埋没台地の地形を形成している。



第1図 埼玉県の地形



第2図 遺跡周辺の旧地形

遺跡の北側に広がる加須低地は、利根川右岸に位置した、台地の沈降と利根川の沖積作用により形成された低地である。当該地域では、沖積作用が進み、土に覆われ埋没した台地に遺跡が発見されることがしばしばあり、小林八束1遺跡もそのひとつである。類例は周辺でも同じ久喜市の神ノ木遺跡や、九宮1・2遺跡、菖蒲城跡、地獄田遺跡など枚挙に暇がない。

第2図は遺跡周辺の地形を示した。遺跡の標高は約10m前後で、第1図でも示されている北西方向から南東方向へのびる台地や、流れる大小の河川や流路等を確認できる。

まず周辺の自然堤防に目を向けると、遺跡の南側には「小林村」の形成された自然堤防Aがあり、遺跡の北側には、自然堤防B・Cとした微高地が広がる。遺跡と自然堤防Aとの間にある、小林八束2遺跡の調査の結果、本遺跡と同一の埋没台地上に形成されたことが予想される（「基本層

序」第15図参照）。一方、自然堤防BとCは、遺跡北側で見沼代用水（星川）により分断されているものの、それ以外での分断はなく、上流側は加須市上種足付近まで、また下流側は久喜市下大崎付近まで20km以上途切れずに延びている。

次に低地を見ると、遺跡の西側隣接地には、江戸中期の享保の改革以前まで存在した「小林沼」が遺跡北西部をかすめている。こうした名残か、遺跡北側の八束緑地グラウンドには周囲より一段低くなったあやめ園が存在していた。

以上の自然堤防や低地の分布、近世期の記録やこれまでの調査成果から推測すると、遺跡の載る埋没台地は、自然堤防A側から延びてきものと推測できる。また、自然堤防AとB・C間の低地部には、小林沼以前にも流路（旧流路Aとする）が存在していたことが予想される。今報告の北向きの斜面地は、かつての小林沼や、旧流路Aに面した斜面地だったと推測される。

2 歴史的環境

旧石器時代 (第3図①)

小林八束1遺跡では、旧石器時代の遺物は本調査で初めて検出された。ただし、旧菖蒲町をはじめ、旧川里町(現鴻巣市)、旧騎西町(現加須市)など、元荒川や綾瀬川に面した大宮台地でも加須低地に接する辺りでは、旧石器時代の遺跡はあまり確認されていない。土地の沈降や河川による台地の浸食、沖積層の堆積など、様々な要因が作用していると思われる。

綾瀬川や元荒川流域でも、伊奈町・蓮田市以南では、旧石器時代の遺跡が発見されている。綾瀬川流域の伊奈町では、戸崎前遺跡(81)、原・谷畑遺跡(83・84)、北遺跡(86)、大山遺跡(95)、上尾市では宿前Ⅲ遺跡(58)、二十一番耕地Ⅰ遺跡(60) 諏訪坂貝塚(61)がある。戸崎前遺跡では2箇所、北遺跡では3箇所、大山遺跡でも3箇所の石器集中が検出され、武蔵野Ⅳ層下部に相当するナイフ形石器や角錐状石器が出土した。原・谷畑遺跡では、細石刃や石核が出土している。諏訪坂貝塚、宿前Ⅲ遺跡、二十一番耕地Ⅰ遺跡は、綾瀬川支流の原市沼川右岸に所在し、宿前Ⅲ遺跡や二十一番耕地Ⅰ遺跡ではナイフ形石器が、諏訪坂貝塚では、細石刃が出土した。

荒川流域では、鴻巣市中三谷遺跡(29)、北本市提灯木山遺跡(33)、蓮田市宿下貝塚(99)、同市天神前遺跡(101)、同市ささら遺跡(103)、同市久台遺跡(104)が旧石器時代の遺跡である。提灯木山遺跡では、3面の文化層があり、第1面から細石刃、第2面からナイフ形石器などが出土している。元荒川右岸側では中心的な遺跡であろう。宿下貝塚では、1箇所の石器集中が検出された。中三谷遺跡や天神前遺跡、久台遺跡ではナイフ形石器が、ささら遺跡では石槍が出土している。

荒川左岸では、上尾市殿山遺跡・古墳(69)は国府形を含むナイフ形石器が出土したことで注目された。

このほか、桶川市大沼遺跡(41)、同市大平遺跡(42)、上尾市柏座遺跡(66)、同市石神遺跡(67)などが挙げられる。大沼遺跡では3箇所の石器集中が検出された。柏座遺跡や石神遺跡ではナイフ形石器が出土している。

加須低地の埋没台地上では、加須市(旧騎西町)前遺跡(26)から黒曜石製の小型槍先形尖頭器が集中して出土した。久喜市九宮2遺跡(6)では、石器集中が検出され、ナイフ形石器が出土した。この他にも、加須低地には多くの遺跡が埋没しているものと考えられる。

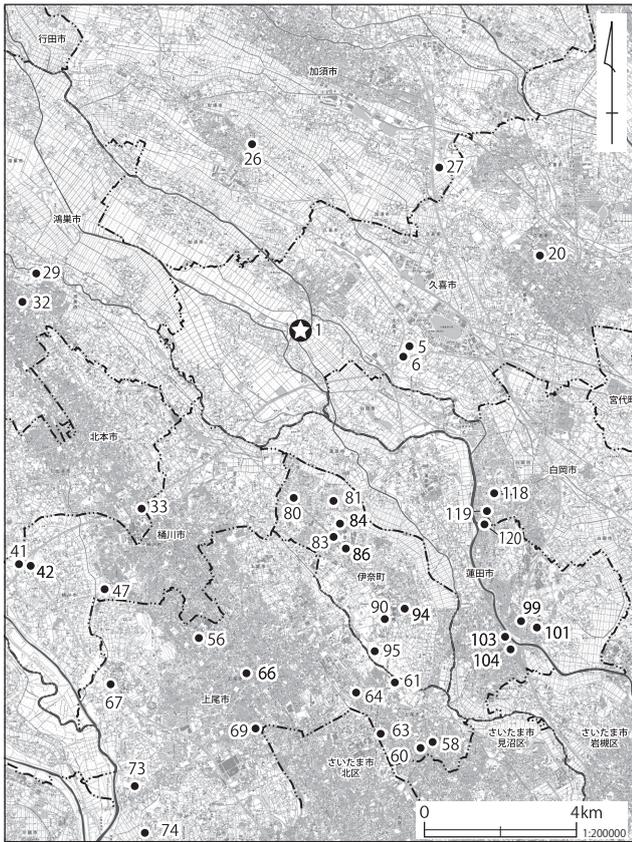
縄文時代 (第3図②・③)

草創期～早期前半 今報告では、撚糸文系土器の破片が1点出土した。周辺の九宮1遺跡(5)でも撚糸文系土器が出土している。荒川流域では、中三谷遺跡で有舌尖頭器が出土したほか、上尾市十二番耕地遺跡(64)で、微隆起線文や爪型文、押圧縄文の土器群が出土した。

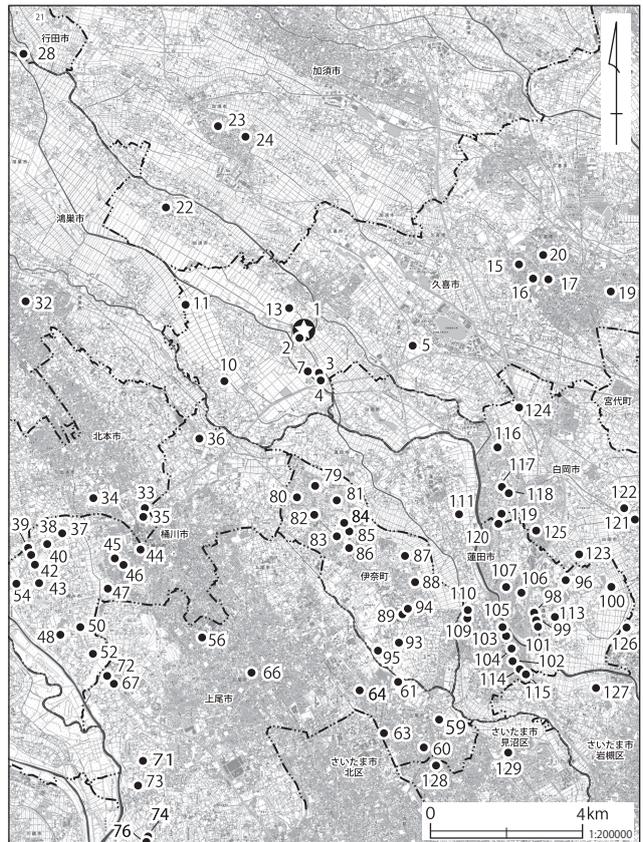
早期後半 当該地域では、早期後半以降に集落遺跡が増加する。綾瀬川右岸の伊奈町薬師堂根遺跡(79)や隣接する戸崎前遺跡で、条痕文期の竪穴住居跡が検出された。このうち戸崎前遺跡の1軒は大型住居跡である。このほか、元荒川左岸の白岡市中妻遺跡(116)で条痕文期の竪穴状遺構の検出例がある。

当該期を特徴づける遺構のひとつに炉穴があるが、本遺跡の南側(第2次や第4次調査区の南側)から、隣接する小林八束2遺跡(2)にかけて、約80基以上の炉穴が検出された。このほか、元荒川左岸の天神前遺跡、中妻遺跡、白岡市入耕地遺跡(118)、同市山遺跡(119)、荒川左岸の柏座遺跡、綾瀬川流域の諏訪坂貝塚などでも炉穴が検出されている。

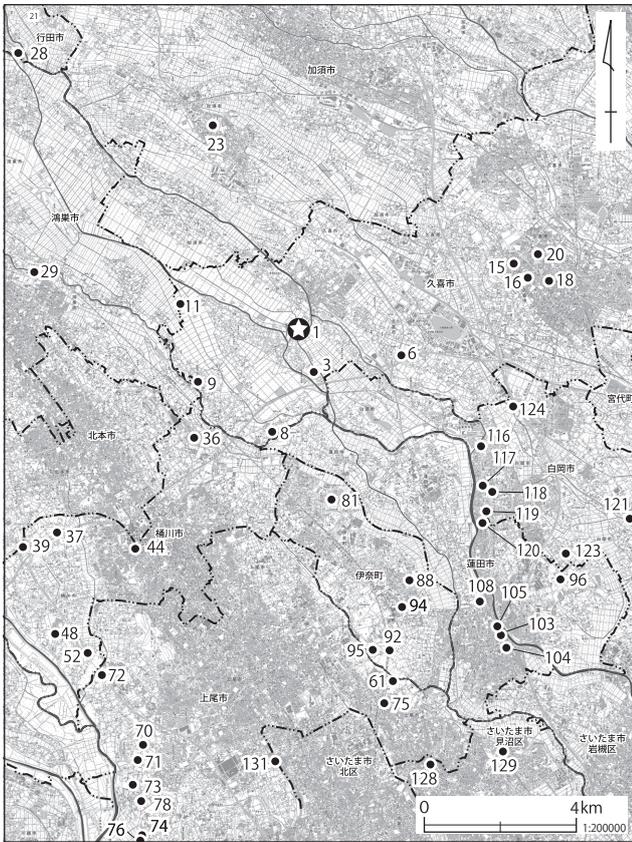
上尾市薬師耕地前遺跡(76)や第2図の範囲からは外れるが、荒川左岸の平方貝塚では、前期を主体とする元荒川・綾瀬川流域よりも遡る、条痕



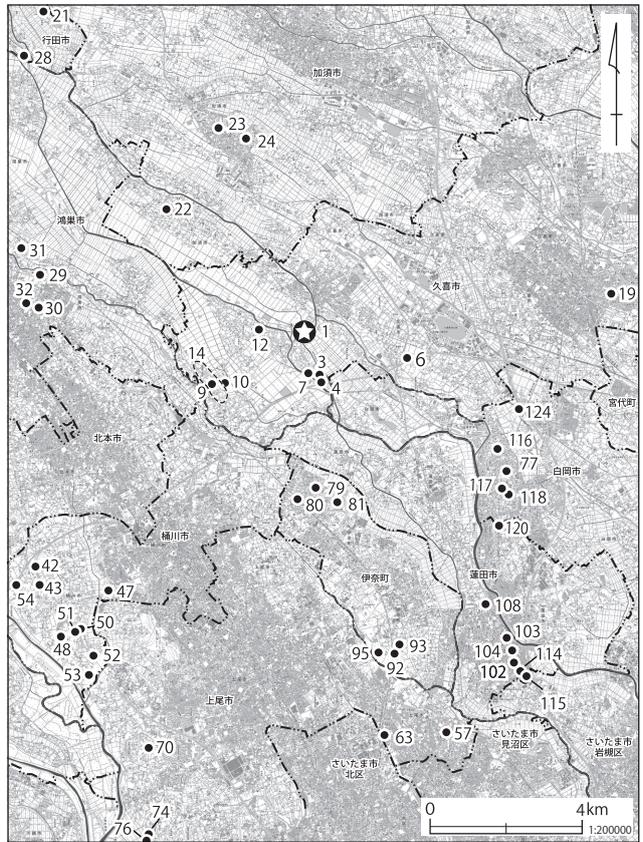
①旧石器時代



②縄文時代 (早期～中期)

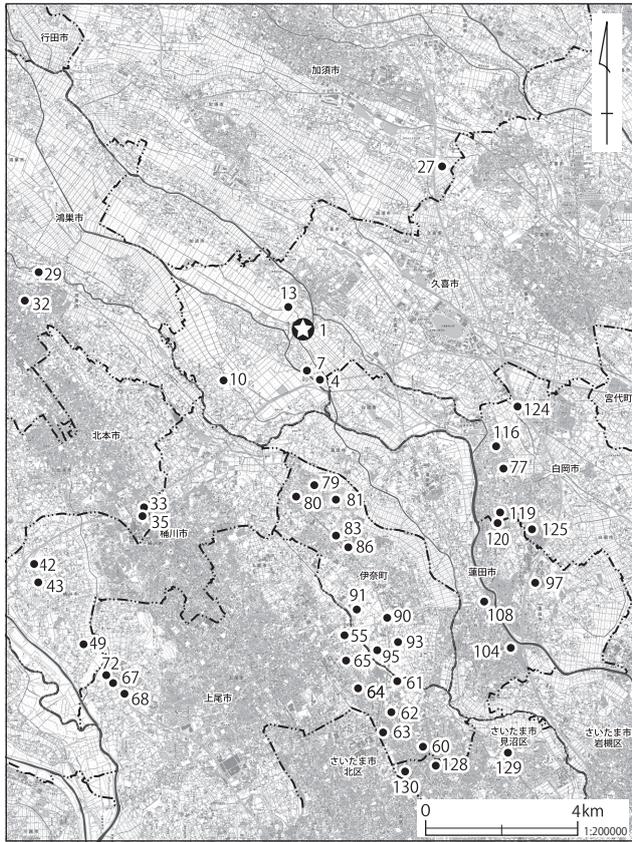


③縄文時代 (後期～晩期)

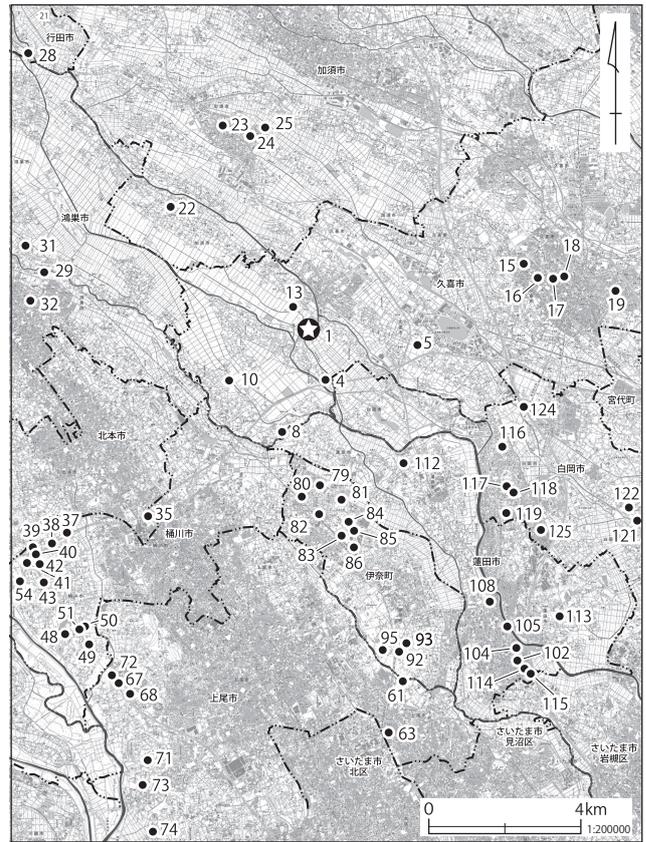


④弥生・古墳時代

第3図 周辺の遺跡 (1)



⑤奈良・平安時代



⑥中・近世

第4図 周辺の遺跡(2)

文期の貝塚が形成されている。

前期前葉～中葉 元荒川・綾瀬川・荒川流域では、関山式から黒浜式期にかけて、海水面の上昇に伴う内陸部へ海水の流入、いわゆる海進と連動し貝塚を伴う集落遺跡が数多く形成された。貝塚を伴う集落遺跡は、前期初頭の花積下層式から関山式を経て、前期中葉黒浜式期が最も多く、前期後葉諸磯a式期になるとその数が減り、諸磯c式以降はみられなくなる。

本遺跡では、当該期の資料は少量出土したに過ぎず、伴う遺構も発見されていない。

元荒川流域では蓮田市黒浜(炭釜屋敷)貝塚(106)、同市宿上遺跡(98)、宿下貝塚、天神前遺跡、白岡市正福院貝塚(117)、さいたま市古ヶ場貝塚(126)、綾瀬川流域では蓮田市関山貝塚(110)、さいたま市貝崎貝塚(129)、伊奈町大針貝塚(85)、同町小貝戸貝塚(87)、蓮田市坂堂貝塚(109)があり、学史や研究史上著名な遺跡が

多い。大針貝塚は綾瀬川流域最奥の貝塚である。

前期後葉～末葉 本遺跡では、諸磯a～b式期や十三菩提式期の遺物はほとんど見つからないが、諸磯c式期の土器片は少量確認されている。

当該期、周辺地域では、諸磯c式期から十三菩提式期にかけて集落規模が小さくなり、また集落の継続性も乏しくなる。元荒川流域では、正福院貝塚、蓮田市江ヶ崎貝塚(100)、天神前遺跡、蓮田市綾瀬貝塚(111)、さいたま市掛貝塚(127)が、綾瀬川流域では貝崎貝塚がある。なお、正福院貝塚は、綾瀬川水系最奥の貝塚である。加須市小沼耕地遺跡(22)では、前期末葉の住居が発見されている。

中期 本遺跡では、中期初頭～前葉は、五領ヶ台式、阿玉台I・II式、貉沢式、新道式、藤内式の土器片が少量出土した。中期後葉期には加曽利EⅢ式の土壌を1基検出し、大型の土器片も少量出土する。

周辺一帯では、中期中～後葉の勝坂式から加曾利E式期では、集落形成が盛んになり、大規模集落が数多く残された。久喜市神ノ木2遺跡(4)では、加曾利EⅢ～Ⅳ式の住居が100軒以上調査され、この地域の中心的な集落と考えられる。

荒川水系では、支流の江川に面して、北本市デーノタメ遺跡(34)、桶川市諏訪野遺跡(37)、同市高井遺跡(46)、上尾市中井遺跡(72)等が、綾瀬川水系では原・谷畑遺跡、北遺跡、上尾市秩父山遺跡(59)があり、それぞれ大規模な環状集落を形成している。デーノタメ遺跡や諏訪野遺跡は近接し、高井遺跡と諏訪野遺跡、また原・谷畑遺跡と北遺跡は谷を隔てて対峙するような位置関係にあり、相補的な関係が推定される。

これら大規模な環状集落は、加曾利EⅢ式期には集落の終焉を迎えるものが多く、小規模な集落が増加し「環状集落の解体」として捉えられている。桶川市諏訪北Ⅱ遺跡(39)、同市諏訪南遺跡(40)、同市高井北遺跡(45)、二十一番耕地Ⅰ遺跡、薬師堂根遺跡、戸崎前遺跡、蓮田市椿山遺跡(107)、山遺跡、加須市修理山遺跡(23)などは比較的比較的小規模な集落である。

後期前～中葉 小林八束1遺跡で、本格的な集落展開の始まる時期で、今報告の台地縁辺部から、遺跡西側の第2次、同東側の第3・4次調査区まで、比較的広範囲に居住域が展開し、縁辺部には斜面包含層が形成される。

地域全体としては、前時期の環状集落の解体に伴い、集落は相対的に小規模化する。当該地域では、十棟前後からなる集落が多く発見されており、元荒川流域では鴻巣市赤城遺跡(28)や中三谷遺跡などで、台地縁辺の低地への移行部に住居が立地するようになる。久喜市では九宮2遺跡でも称名寺式から連続して、堀之内式期の住居跡や埋甕が検出された。

後期後葉～晩期 小林八束1遺跡において、盛土遺構のほか晩期の祭祀遺物集中地点や土器集中地

点、台地縁辺部では引き続いて斜面包含層が形成された。一方で集落形成(土地利用)上の大きな変更もあり、それまで遺跡範囲のほぼ全面に展開していた集落が、西側の第2次調査区方面に集中し、斜面包含層は西側のみで厚みを増す。東の谷では、構築時期は不明ながら、木組遺構や木道をはじめとする晩期中葉頃までの水場遺構が形成された。前時期にもこの谷の湧水利用はあったと思われるが、水場の形成も当該期の集落計画の変更の中に組み込まれたものと推測される。

周辺遺跡を見てみると、小林八束1遺跡の西方約3kmに久喜市地獄田遺跡(11)のほか、南西約4km地点に桶川市後谷遺跡(36)がある。大きくはともに元荒川流域の遺跡であるが、前者は小林八束1遺跡と同じ台地の上流部で、後者は大小の河川を何筋か経た位置関係にある。

地獄田遺跡は、埋没したローム台地の縁辺部に形成され、現地表からその存在はほとんど視認できない。北に開いた埋没谷を囲むように、曾谷式から晩期安行式の住居跡6軒や竪穴状遺構が検出されたほか、土偶や耳飾り、石棒、石剣などの集中する晩期中葉までの祭祀遺物の集中地点も検出されている。

後谷遺跡は、環状盛土を伴う集落で、後期末から晩期の住居跡が検出されたほか、谷部には木道や杭列、木組を伴う水場遺構が形成された。漆塗りの櫛や飾弓などの優品も多数出土し、これらは国の重要文化財に指定されている。

遺跡の北西約10kmの地点には、みみずく形土偶の出土で著名な鴻巣市赤城遺跡がある。北側に開いた谷を取り巻く台地上に居住域が形成され、谷部には土偶や石棒等を集めた祭祀遺物集中地点が検出されている。低地部の1号竪穴状遺構(安行1式期)は杭と横木からなる木組遺構で、湧水点への溝状の掘り込みを伴う。

遺跡の南東7kmに位置する綾瀬川右岸の伊奈町本上遺跡(88)は、径100m超の環状盛土が想定

される、後晩期を中心とする遺跡である。盛土の一部が調査され、住居跡とともに土器や土製品などが多数出土した。

元荒川流域には、蓮田市雅楽谷遺跡(96)、久台遺跡、ささら遺跡、白岡市前田遺跡(123)、同市清左衛門遺跡(121)などがあり、このうち雅楽谷遺跡と久台遺跡は盛土の確認された遺跡である。雅楽谷遺跡では、長径160m、短径110mで、中央部には径40~45mの窪地をもつ環状盛土遺構の存在が明らかになっている。110号土壇出土の安行式土器は埼玉県指定文化財となっている。

久台遺跡は安行式期の住居跡が調査された。包含層からは多量の遺物が出土しており、中でも亀形土製品が出土したことで知られている。

清左衛門遺跡では後期前葉から晩期前中葉まで続く、谷頭部を利用した水場遺構が発見された。それまでの集落が後期後半以降に谷頭部へ集中する土地利用の変化が明らかにされている。

荒川流域では、桶川市高井東遺跡(44)、さいたま市東北原遺跡(128)、同市奈良瀬戸遺跡(131)があり、高井東遺跡には盛土遺構が想定されている。晩期後半以降は遺跡数が激減し、この状況は弥生時代まで継続する。当遺跡では遺構に伴う形ではないが、少量ながら晩期後半の浮線文期の土器群が出土した。大宮台地では、同時期の遺跡に稲荷台遺跡がある。

弥生時代(第3図④)

当地域における当該期の遺跡は、上尾市稲荷台遺跡やささら遺跡など数えるほどしかなく、空白の時代と認識されている。本遺跡では、西斜面とした低地部で、磨製石鏃1点がその他の遺構や遺物を伴わず出土している。磨製石鏃は久喜市高輪寺遺跡(19)でも出土しているが、本資料が弥生期のものか、古墳時代前期にまで下るのは判然とししない。本書では、第IV章第2節で扱った。

古墳時代(第3図④)

古墳時代に入ると、それまでの状況を払拭する

ように遺跡が急増する。古墳時代前期は、小林八束1遺跡でも、居住域や墓域(方形周溝墓)からなる大規模な集落が発見された時期である。なかでも谷では木組施設や杭列のほか、木製品の集中廃棄層などが検出された。

上流の加須市種垂城・小沼耕地遺跡からも周溝持建物跡が検出されている。元荒川左岸の蓮田市荒川附遺跡(108)、ささら遺跡、帆立遺跡は、100軒を超える古墳時代の住居跡が検出されており、この流域では最大規模の集落と考えられる。

綾瀬川水系では、薬師堂根遺跡、戸崎前遺跡、大山遺跡、上尾市尾山台遺跡(57)が古墳時代前期の集落として挙げられる。戸崎前遺跡では、40軒を超える住居跡や、方形周溝墓が検出されている。古墳時代に至り、元荒川や綾瀬川流域の開発が進められたことを示している。

やや時代が下ると、近接する神ノ木2遺跡で古墳が築造された。同遺跡からは、方墳跡2基、円墳跡2基、周溝状遺構2基が検出された。また5世紀中葉と考えられる土壇1基から、鉄刀・鉄剣が各1振に加え、鉄鎌や鉄鏃が出土した。

久喜市東浦古墳(12)は6世紀中葉に築造された前方後円墳で、全長57mを測る。

久喜市栢間古墳群(14)は埼玉県選定の重要遺跡となっており、現在、前方後円墳2基を含む9基の古墳が残る。久喜市天王山北遺跡(9)で確認された本村1号墳(前方後円墳)を除いて、発掘調査は行われていない。古墳群の中心となる天王山塚古墳は、墳長約109mの前方後円墳で、墳丘から埴輪片や加工痕のある角閃石安山岩が採集されている。埴輪の一部は鴻巣市生出塚埴輪窯産とされる。古墳時代後期の大型前方後円墳である。

鴻巣市生出塚遺跡(30)は古墳時代後期に造営された埴輪窯跡として知られている。ここで製作された埴輪は、埼玉県内はもとより、千葉県や東京都、神奈川県古墳から出土しており、国内でも屈指の埴輪生産遺跡といえる。

奈良・平安時代（第4図⑤）

周辺における奈良・平安時代の動向として、大山遺跡における製鉄関連遺構群と、荒川附遺跡の鍛冶関連遺構群の発掘調査成果は特記される。

大山遺跡では、台地斜面部から、現在までに28基の製鉄炉（縦形炉）が調査されている。加えて鍛冶工房跡や多数の竪穴状遺構、粘土採掘坑なども存在することから、当時の当地域における鉄の一大生産地であることが明らかになった。

小林八束1遺跡では、当該時期の炭焼窯跡が5基検出され、本書でこのうち4基を報告する。炭焼窯跡は周辺の大宮台地でも多数確認されている。原市沼川流域では、前述の大山遺跡を起点に小室天神前遺跡（91）、谷津下I遺跡（55）、赤羽遺跡、八番耕地遺跡（65）、十二番耕地遺跡（64）、愛宕山遺跡（62）、二十一番耕地I遺跡等がある。またやや北側の綾瀬川上流域では、向原遺跡（80）、薬師堂根遺跡、戸崎前遺跡、原遺跡、北遺跡等で、南側の芝川流域では、三番耕地遺跡（63）、高台山遺跡（130）等で多数の検出事例がある。窯の規模や構造、新窯構築の方法等に共通性が見られることから、分布の中心からはやや離れる本遺跡の炭焼窯跡も、同一集団の残したものと見て大過ないだろう（第VI章3節）。

このほか、水系の異なる元荒川流域でも沖山西遺跡（125）で遺存状況の良好な炭焼窯跡が発見された。生産の担い手としては、鍛冶工房跡が60軒以上の竪穴住居跡を伴って検出された荒川附遺跡が想定されており、当該地域一帯が鉄生産関連地として強固な地盤を築いていたことが理解される。今後、水系単位の製鉄集団の動向も明らかにされていくだろう。

遺跡の北側約1.5kmの距離にある久喜市菖蒲城跡（13）は、前述第2図の自然堤防Aと同Bの間に位置する。本遺跡と同様の立地にある点で注目される。平安時代の住居跡や溝跡のほか、軒丸瓦が出土した。堀跡は掘削土を土堤状に盛り上げ

たもので、一般集落ではない性格が指摘されている。当該期の遺構は洪水層に覆われ廃絶したようで、この頃には沖積作用を受ける環境へ変化したことが読み取れる。第3図では当該期、遺跡北側の加須低地の遺跡分布が空白となるが、こうした事情と関連があるのだろうか。

中・近世（第4図⑥）

前述のように遺跡の北西部では、享保の改革以前まで「小林沼」が、遺跡の北西部をかすめる位置まで延び、「附廻堀悪水路」として、その名残を留めている。小林八束1遺跡の中・近世期は、大小の溝跡が検出されるが、出土遺物は極端に少なく、全容は不明になる。斜面地は、それまでの黒色土の形成がほとんどなくなり、灰褐色シルト質土（基本層II層）が供給される環境へと変化した。この層の上部に堆積した浅間A軽石の分布高から、斜面は江戸時代中頃には高低差0.5m程度の微窪地になったことがわかっている。

小林八束1遺跡の北西1kmの地点には、古河公方足利成氏の築城とされる菖蒲城が存在した。狭小な調査であったが、堀状遺構や土塁状遺構とともに、龍泉窯系の輸入陶磁器や、国産陶磁器、在地系の土器などが見つかった。出土量もその内容も豊富である。現在は陣屋跡の一部が移築され、公園となっている。

加須市（旧騎西町）私市城（25）は根古屋城とも呼ばれている。築城時期は不明だが、上杉氏配下の太田氏により築城されたとの説がある。障子堀や橋跡、井戸跡などが発掘されている。

伊奈町伊奈氏屋敷跡（92）・赤羽遺跡（93）は、伊奈備前守忠次の陣屋跡として知られている。発掘調査では障子堀が検出されており、埼玉県指定史跡となっている。

蓮田市井沼遺跡・館跡（112）は、14世紀から16世紀頃の館跡と推定されている。また、近年、蓮田市新井堀の内遺跡（113）では、中世の館内で、国内最大級の埋蔵銭が発見された。

III 遺跡の概要

1 小林八束1遺跡の概要

遺跡の位置と範囲 小林八束1遺跡は、埼玉県の東部、久喜市菖蒲町小林4795番地他・4805番地他に所在し、久喜市役所菖蒲支所の南側の、調節池(池Ⅱ)(以下「調節池Ⅱ」)の周囲に位置している。周辺には、星川、野通川、元荒川をはじめとする大小の河川や用水が南東方向に流れ、肥沃な水田地帯を形成している。台地の東端部には、見沼代用水が流れている。

発見の契機 小林八束1遺跡は、調節池Ⅱの建設を契機として、平成16年に不時発見された。その後、河川砂防課と生涯学習文化財課(当時)で、今後の工事計画や取扱いについて協議がなされ、調節池Ⅱの周囲を新規の埋蔵文化財包蔵地「小林八束1遺跡」として遺跡台帳に登録された。

遺跡の範囲 遺跡は、南側を除いた調節池Ⅱの三方に広がる。その範囲は、東は県道5号線、西は附廻堀悪水路、北は八束緑地グラウンド、南は調節池Ⅰに囲まれた範囲で、規模は南北250m、東西は北側で240m、南側で130mの台形状の範囲となり、面積は約46,000㎡である。なお、南側の調節池Ⅰには、縄文早期の炉穴が多数検出された小林八束2遺跡があり、本遺跡第1次調査の成果とともに刊行されている(当事業団第356集)。

小林八束1遺跡の発掘調査は、これまでに第7次まで実施され、第1～4次までの成果は第356集、第442集、第457集の3冊として報告されている(第5図・第2表)。今回の報告とする対象は第5～7次調査で、これまでの調査の成果を第2表に示し、以下にその概要を記す。

第1次調査 調節池の東側に隣接する調査地点で、調査範囲は500㎡と狭小ながら、縄文時代後期の住居跡や古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓、古代の炭焼窯跡など、その後の発掘調査成果を予感させるような内容であった。出土した小

型の筒形土偶(縄文後期)はその後、様々な企画展で紹介される優品である(群馬県立歴史博物館2019、茨城県立歴史館2020など)。

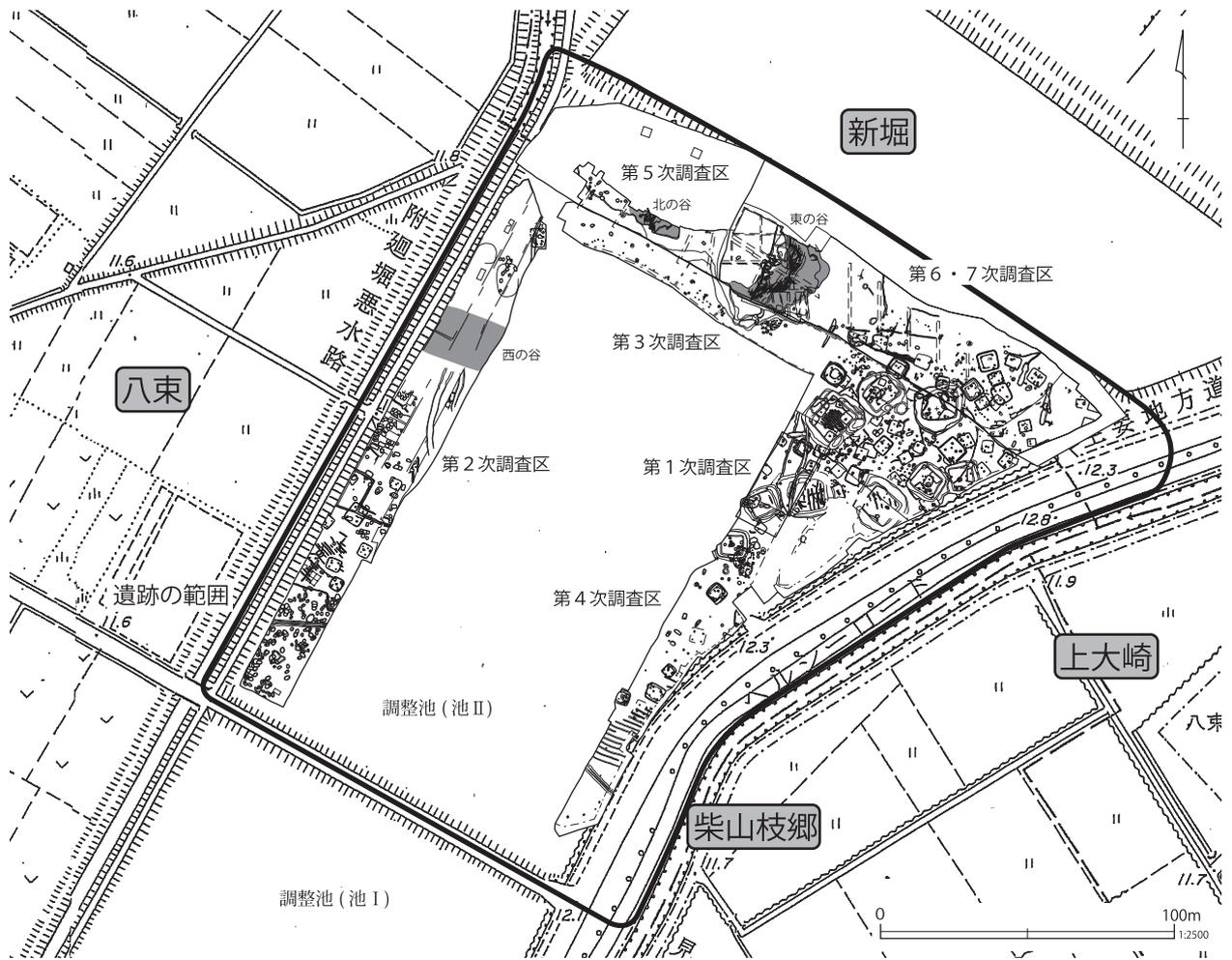
第2次調査 調節池西側に位置する、南北に長い調査区(5,020㎡)である。縄文早期の炉穴のほか、後晩期の大規模な盛土遺構を確認した。炉穴は主に南半部に集中することから、小林八束2遺跡から続く一連の遺構群として理解されている。後晩期の盛土は大きく5面が捉えられ、住居跡や多数の土壙群を伴っている。土偶やミニチュア、注口土器などの集積する晩期の祭祀遺物集中地点は、当時の祭祀のあり方をうかがわせる資料である。ここで出土したみみずく形中空土偶(縄文晩期前葉)は、前述の筒形土偶同様、公開の機会に度々展示される優品である。

古墳時代前期では、住居跡が調節池西側でも検出され、居住域が相当の広がりを持っていることが予想された。

第3・4次調査 調節池の北側と東側を囲うL字形の調査区(4,430㎡)である。この調査では、遺跡で初めて、旧石器時代の槍先形尖頭器やナイフ形石器、削器を確認した。これを受けて、主に台地の北側でローム層以下のトレンチ調査を実施したが、層位的な資料の発見には至らなかった。

縄文時代では調査区全域で後期堀之内式期の住居跡や土壙群を多数検出した。北西部で検出した北側への地形の落ち込みと、そこに堆積する後期中葉から晩期の遺物包含層は、第2次調査区の盛土遺構や祭祀遺物集中地点との関係を想起させた。この調査により、遺跡全域を覆う堀之内式期の集落が、後期中葉以降、西側と北側の特定地点に集約されていく様子がおぼろげながら示された。同様の傾向は、今報告の北側斜面部でも追認された。

古墳時代前期では、住居群や畠跡といった遺構



第5図 調査区位置図

第2表 小林八束1遺跡 主な検出遺構

調査年度	調査回数	報告書	縄文時代					古墳時代前期					古代		中近世			特筆事項			
			住居跡	土壇	炉穴	集石	埋甕	水場遺構	住居跡	竪穴状遺構	方形周溝墓	土壇	井戸跡	溝跡	畠跡	水場遺構	炭焼窯跡		掘立柱建物	土壇	井戸跡
H18	第1次	第356集	2	7				10		3						1					古代～近世の溝跡3、土壇1
H23～24	第2次	第442集	11	406	32	1		6	2							1	29	5	14	縄文後晩期の盛土遺構、土器集中地点 祭祀遺物集中地点	
H24～25	第3次	第457集	3	101			2	45	1	6	30		5	2	1			14	2	古墳前期の水場遺構 木製品集中	
H25	第4次		7	61	1			16	1	3	17	2	9	2		1	9		1		
H26	第5次	第476集		16											1					縄文後晩期の斜面包含層 古墳前期の水場遺構2	
H29	第6次			3				14		1	14		5		1		1		6	縄文後期の溝状遺構1 古墳前期の水場遺構 (杭列1、木製品集中)	
H30	第7次		2	40		1		1	7							4				縄文後晩期の水場遺構 (木組遺構3、木道状遺構2、導水溝状遺構3)	
H18	小林八束2	第356集		37	29															縄文早期の炉穴	

群とともに、方形周溝墓群が発見された。当該地域特有の地盤沈下（ローム台地の埋没）とその後の沖積作用の結果、後世の削平を免れ、多くの方形周溝墓で盛土が残されていたことは特筆される。周溝内の供献土器の在り方は当時の葬送儀礼の様子を示す。北陸系装飾器台や信州系高坏、東海系の壺・甕類といった外来系土器や、第6号方形周溝墓出土のガラス玉・管玉は、被葬者像に迫る内容を持っている。分布域の重なる住居跡群と方形周溝墓群は、後者が前者を壊しており、当該地点における居住域から墓域への変遷は明瞭である。

このほか、古墳時代前期の特記事項として、谷と水場遺構の発見がある。前述の北向きの斜面に隣接する、湾状に挟り込んだ谷地形で、2基の木組遺構と、夥しい数の木製品類（農耕具類や加工材、自然木）が発見された。谷を下りた位置の第1号木組遺構は、杭と横木で囲った方形区画内をローム土で充填した土橋状の構造物で、低地部へ侵入してくための施設と見られる。木製品には平鍬・横鍬・鋤・横槌・竪杵などがあり、未成品や炭化した加工材なども確認された。

中世以降の遺構からは、遺物がほとんど出土していないが、堆積土中の基本層Ⅱ層（中近世期に形成、後述）由来の灰褐色シルト土の有無である程度の識別が可能である。第1号溝跡は、溝の両肩に掘削土を土堤状に盛り上げた大規模な溝で、何らかの区画溝と考えられる。このほか、掘立柱建物1棟や土壙・ピットが発見されている。

今報告の対象の第5～7次調査は、遺跡範囲の北側にあたり、西半が第5次、東半が第6・7次調査区である。複数年にわたる調査であったが、全域を斜面地で占める第5次調査は、第6・7次調査区の成果を踏まえて初めて理解できること、また第5次調査区から連続する遺物包含層を分断して報告すると様相が不明瞭となることから、調査概要を下記に示し、調査回数に関わらず、遺構ごとにまとめて報告する書の構成を取る。

第5次調査 南側を第3次調査区と、また西側の一部を第2次調査区と接している（面積2,200㎡）。第3次調査の地形の落ち込みと縄文後晩期の斜面包含層が、調査区全体を覆うことを確認した。遺構は多くはないものの、縄文時代では、早期条痕文期の土壙や、後期堀之内式期の土壙群を検出した。層厚30～50cmの斜面包含層は、細かい堆積状況を示さず大別2層が識別された。調査区東側では、特に後期後葉～晩期前葉を中心とする土器集中分布域があり、第6・7次調査区側へ連続する。

古墳時代前期では斜面下の谷地形で、打ち込み杭と横木のまとまりや、土壙状の掘り込みと打ち込み杭のまとまりが、木質遺物や巨大な倒木を伴って検出された。当初、これらの遺構群をまとめて「SX4」として調査したが、前者は横木と杭が組み合う状況から、また後者は第457集で報告された第2号木組遺構との類似性から、それぞれ「第6号木組遺構」「第7号木組遺構」として報告する。木組遺構や木製品の廃棄状況は、第457集の「水場遺構」を彷彿とさせ、本書でもこのエリア全体を「水場遺構」と捉えた。

全域が斜面地に相当する第5次調査では、台地部ではほとんど発見が期待できないテフラ（6世紀初頭のHr-FAや4世紀の降下と見られるAs-C）を検出した（第V章4節参照）。このほか土壌中から検出した珪藻化石や花粉から、古環境の復元を実施した（同章8・9節参照）。珪藻化石群集の特徴から、西斜面における縄文時代から古墳時代の古環境は、ジメジメした陸域環境を伴うやや乾いた環境から、ジメジメした陸域環境を伴う沼沢湿地へ変化したことが推定された。

第6・7次調査 遺跡範囲の北東部に位置する東西方向に長い調査区で（4,430㎡）、平成29年度に着手した同一地点の調査である。南側を第3次調査区、また西側を第5次調査区と接している。第6次調査では主に台地部の遺構群と古墳時代の谷を、第7次調査では台地側の遺構群の続きと、古

墳時代の谷の下層にある縄文時代の谷を調査した。

地形とエリア名称 地形的には、南側から続く「台地部」、その縁辺の「斜面地」、既報告457集の水場遺構を谷頭部とする「谷」に三分され、斜面地はさらにその「谷」によって東西に分断されている。本書では、この複雑な地形と、時代や時期による土地利用の差を説明するため、既報告の3書で「谷」や「地形の落ち込み」とされてきた、複数ある遺跡内の谷状の地形を、下記のように整理して記載する。

西の谷 第442集第167図等で報告されたF～G列に位置する東西に延びる谷地形。縄文後晩期の盛土遺構の北側限界で、その対岸（北側）に祭祀遺物集中地点や土器集中地点があることから、すでに縄文後晩期には存在している谷地形と見られるが、後述する東の谷のように、水場利用や包含層の形成（廃棄場としての積極的利用）はない。自然科学分析の結果、浅間B軽石（天仁元年降下）、Hr-FA（6世紀初頭頃降灰）、As-C（4世紀中葉）の3枚のテフラが検出されている。

東の谷 第457集の水場遺構（第1・2号木組遺構）を谷頭部（湧水点でもある）とし、第6・7次調査区側へ延びる谷地形。少なくとも縄文時代後期前葉にはすでに存在しており、縄文時代晩期前中葉までの水場遺構や古墳時代前期の水場遺構などの活動の拠点となった。その後徐々に埋没しながら、少なくとも中世初期までは挿鉢状の地形が残っている。

北の谷 第5次調査で、台地斜面下のC-14～16グリッド付近で検出した窪地状の地形。「SX4」として調査していたが、古墳時代前期の木組遺構や木製品の廃棄状況が「東の谷」と類似することから、水場遺構を形成していた谷地形と判断し、整理段階で東の谷に対する「北の谷」とした。

なお、第457集で「谷」とされた、北側へ落ち込む斜面地形（第457集106頁）は、その後の調査で台地縁辺の斜面地（西斜面の一部）であること

が判明した。当然、遺跡外を含めた広い視点に立てば、おそらくこれもかつての河川（第2図の旧流路A）によって浸食された「谷」の一部であろう。しかしながら、この斜面を切り込む、遺跡内で完結する谷地形（東の谷や北の谷）が検出された以上、南側から延びる台地の縁辺、すなわち北向きの斜面とするのが適切であると判断した。よって本書では、北の谷より東側を「東斜面」、西側を「西斜面」として記述する。

第6・7次調査の遺構・遺物 縄文時代の遺構は、住居跡2軒、焼土跡2基、集石1基、土壇64基、溝状遺構1条、ピット47基、水場遺構（木組遺構3基、木道状遺構2基、導水溝状遺構3条、開削部、平場など）のほか、4箇所（台地部、東斜面、西斜面、谷）の遺物包含層を検出した。

2軒の住居跡ともに後期前葉掘之内式期のもので、第121号住居跡は台地の縁辺、第122号住居跡これよりやや奥まった位置にあり、第3・4次調査区側から連続する集落域である。

土壇は64基見つかり、早期条痕文期が1基（SK689）、中期後葉（加曾利E式期）が1基（SK706）あるほかは、ほとんどが後晩期のものである。北の谷の周辺、特に左岸側では規模や形状の一定しない土壇が群在する。いずれも堆積土は人為堆積で、地山の白色粘土ブロックを大なり小なり含んでいる。重複状況が著しく、無秩序、無軌道な掘削にも見え、多くの場合、新旧関係を明確にできない。横穴状に掘り込む様子も散見されることから、地山白色粘土の露頭を狙った粘土採掘坑の可能性が高い。時期的には、後期前半の遺物包含層を切り込むものと、堆積土中に包含層が流れ込むものがある。これらの所見から、時期的には後期のものと晩期のものが含まれているようである。なお「第IV章1節（4）土壇」では、台地部と東の谷周辺の土壇を分けて掲載した。

溝状遺構は、北の谷左岸に延びる幅狭の溝で、谷と西斜面の境界付近に位置する。検出当初は古

墳時代の可能性も考えたが、層位的状況から縄文後期後葉以降の遺構として報告する。

東の谷では、古墳時代の水場遺構の下層で、縄文後晩期の水場遺構を検出した。同じ谷に形成されながら、両者は周辺環境や構成される遺構が随分と異なる。縄文時代の水場遺構は、木組遺構3基と木道状遺構2基のほか、流路底面への掘削痕跡として、主に水管理に関わる導水溝状遺構3条、下流側で大規模な階段状掘削を見せる「開削部」、流路とは直接関与しないが、谷右岸側の切土痕跡としての「平場」などで構成される。

木組遺構はそれぞれ異なる構造を持つもので、流路内の西斜面寄りを土壌状に大きく掘り込み、内部に長方形木枠状の木組部を設けた第5号木組遺構（後期前葉）、上流からの流水を堰き止める大型木枠状の第3号木組遺構（晩期前～中葉）、流路上に突き出した棧橋状の木敷施設である第4号木組遺構（晩期中葉）がある。この木組に木道状遺構や導水溝状遺構、開削部といった構造物や造成の痕跡が付帯し、複雑に絡み合う。

水場遺構の出土土器は、後期前葉堀之内1式から突如増加し、後期中葉はやや減少するものの、晩期前葉安行3b式まで安定的に認められる。安行3c～3dに向けて減少するが、集落の存続時期や動向とも一致することから、台地に居を構えた集団の残した水場と考えて良いだろう。

古墳時代の住居跡は21軒検出した。このうち2軒は第457集と同一の遺構で、新規に19軒を追加する。斜面の落ち際付近まで分布し、東側は調査区域外まで延びている。一部の方形周溝墓とは分布が重なり、既報告でも指摘された、居住域から墓域への変遷を追認する形となった。

方形周溝墓の分布は、住居跡同様、東側の調査区域外まで延びていくことが予想される一方で、北側へは延びず、第5号方形周溝墓がその北限のようである。同周溝墓は今回の調査で全容が判明し、性格不明とされていた方台部中央の土壌は埋

葬主体部であると判断された。周溝部では籠目のある壺が出土し、東の谷の木製品集積地点と、70m程度離れた地点間接合がある。このほか、第1号木組遺構（第457集）出土の赤彩壺の同一個体破片も出土しており（距離約70m）、方形周溝墓との東の谷の水場遺構との関係性が示唆される。

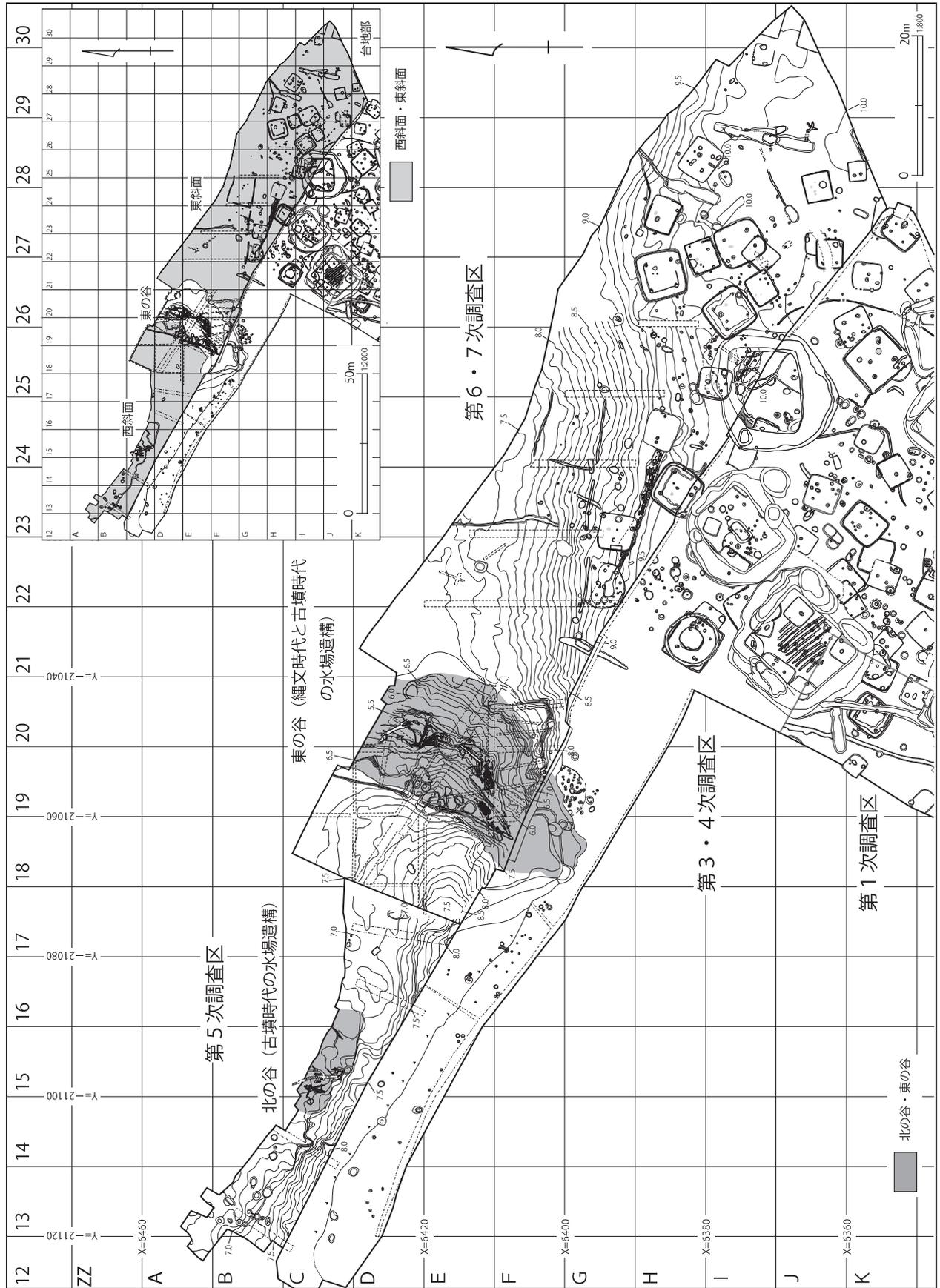
第6・7次調査では、第457集の「水場遺構」と連続する地形を検出した。このことにより、第1号木組遺構を擁する「水場遺構」が、北側に開いた谷の谷頭部（湧水点）に位置し、縄文時代後晩期の谷埋積後に築かれたこと、また、湧水点付近の人為痕跡とは裏腹に、北側は後述の杭列以外の地形改変がほとんどないこと、木製品の集中分布域が北側の杭列付近まで連続すること等を確認した。木質遺物には自然木、加工木のほか、鋤、鍬、横槌などの農耕具、建築材や杭、編み錘、机（椅子）などが含まれており、「木製品集中地点」として取り扱う。

杭列はこの下流部で、谷を横断するように杭26本を約0.5mの間隔で打設したもので、横木やしがらみといった上部構造は発見されなかった。古墳時代の東の谷全体を見ると、湧水点付近以外に大きな地形改変はなく、下流の杭列までの間に木製品が多量に出土する様子から、貯木場のように利用されていた可能性がある。

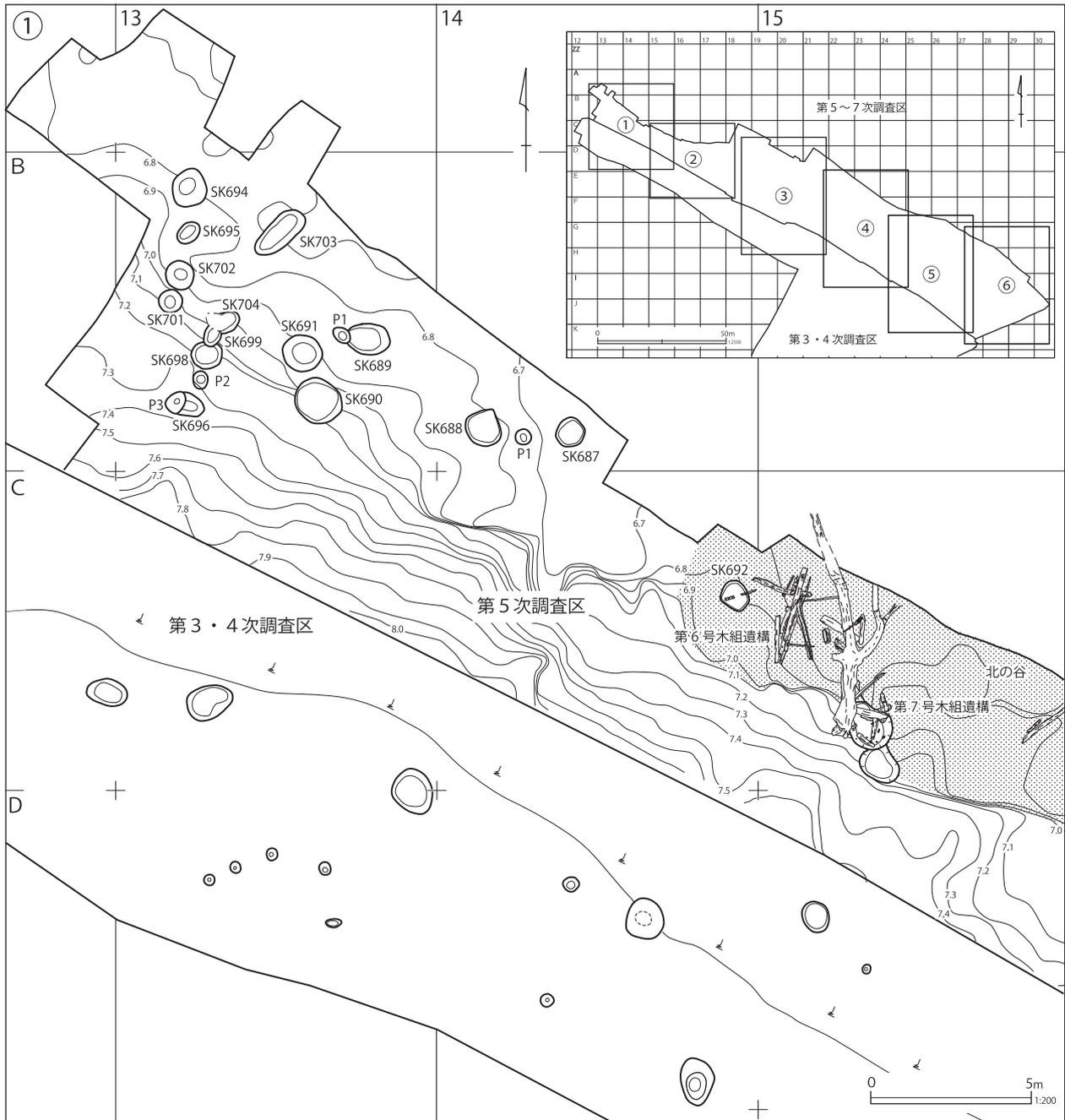
西方40mに位置する北の谷でも、木組（第6号・第7号木組遺構）や木製品が発見された。廃棄状況等に共通性が見られ、水場遺構として報告するが、谷奥部の一部の調査のため詳細は不明である。

古代の遺構は、炭焼窯跡4基や土壌3基、溝跡1条を検出した。このうち、土壌1基と溝跡は炭焼窯跡に関連する遺構である。

第2号炭焼窯跡は単独で、第3～5号炭焼窯跡は同一地点における3基の重複である。窯跡は炭化室と前庭部、煙道部の構造を持つ。古い窯との前庭部の共有や、かつての炭化室内に前庭部を作り出す構築方法は、周辺事例と共通する。



第6図 全体図

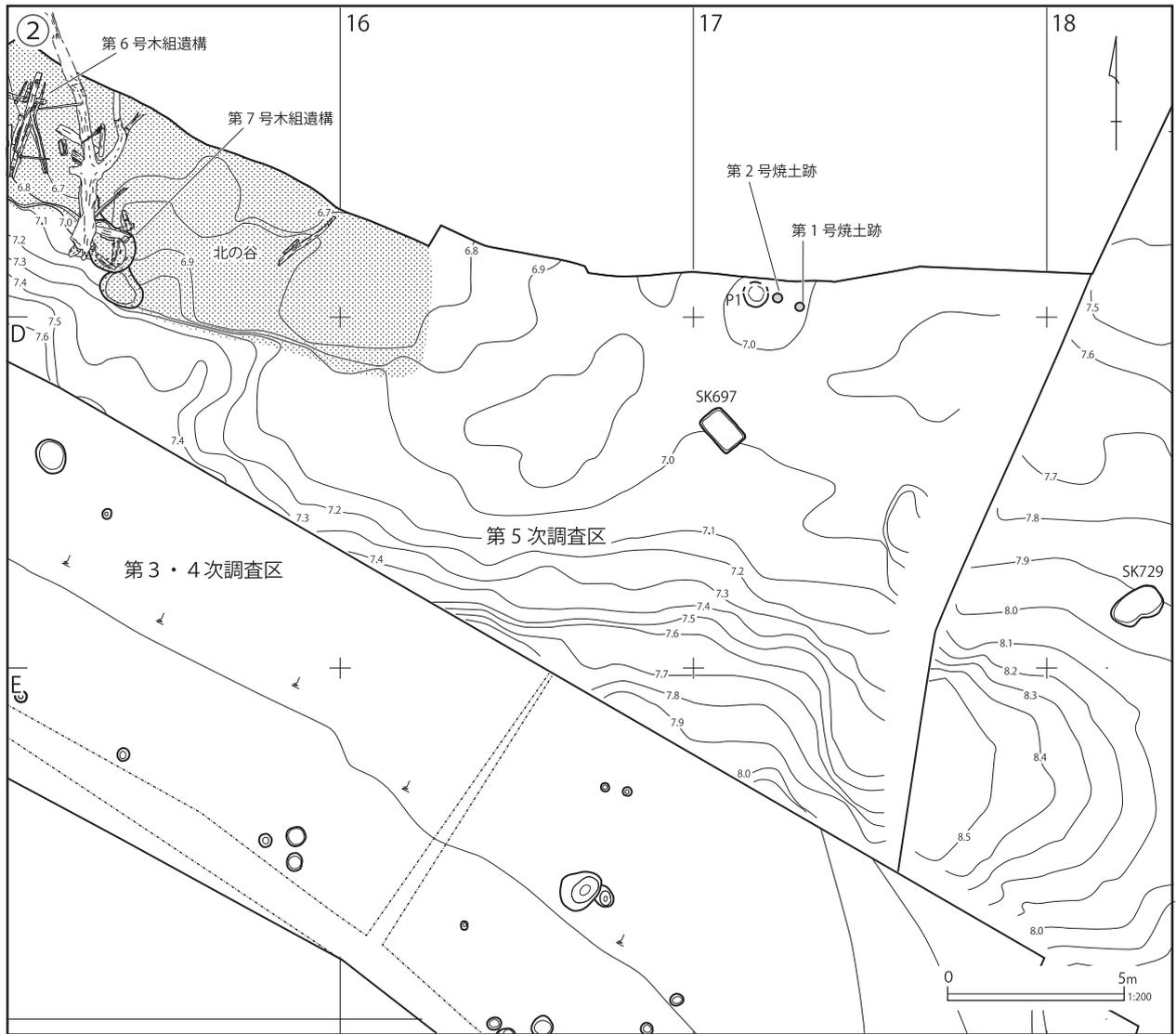


第7図 区割図(1)

調査区東側の台地縁辺部に位置し、開口部を斜面下方に向けている。炭化室の側壁はおおむね平行で、焚口へ向かって括れる羽子板状である。焚口前面には前庭部がつき、側壁と直交するトンネル状の煙出しが付属する。前庭部の前面に、第2号炭焼窯跡では溝が、また第3・5号炭焼窯跡ではスロープ状の施設が付属する。炭化室に残された燃料材を除き、時期を決定する遺物は皆無だったが、炭化材の放射性炭素年代測定の結果、

平安時代前半頃の成果を得た(第IV章3節(1)参照)。窯体構造や、独特な新規築窯方法における周辺地域との共通性、また第1次調査の第1号炭焼窯跡の年代観(第356集)とも調和する。

当遺跡では、天仁元年噴火の浅間山の降下軽石層(As-B)が、低地部の黒色粘土中の上部(A層、後述)に確認されるが、この頃の遺構は検出されていない。なお、同層の最上面では、13~14世紀の陶磁器片がわずかに出土する。この黒色土を遺



第8図 区割図(2)

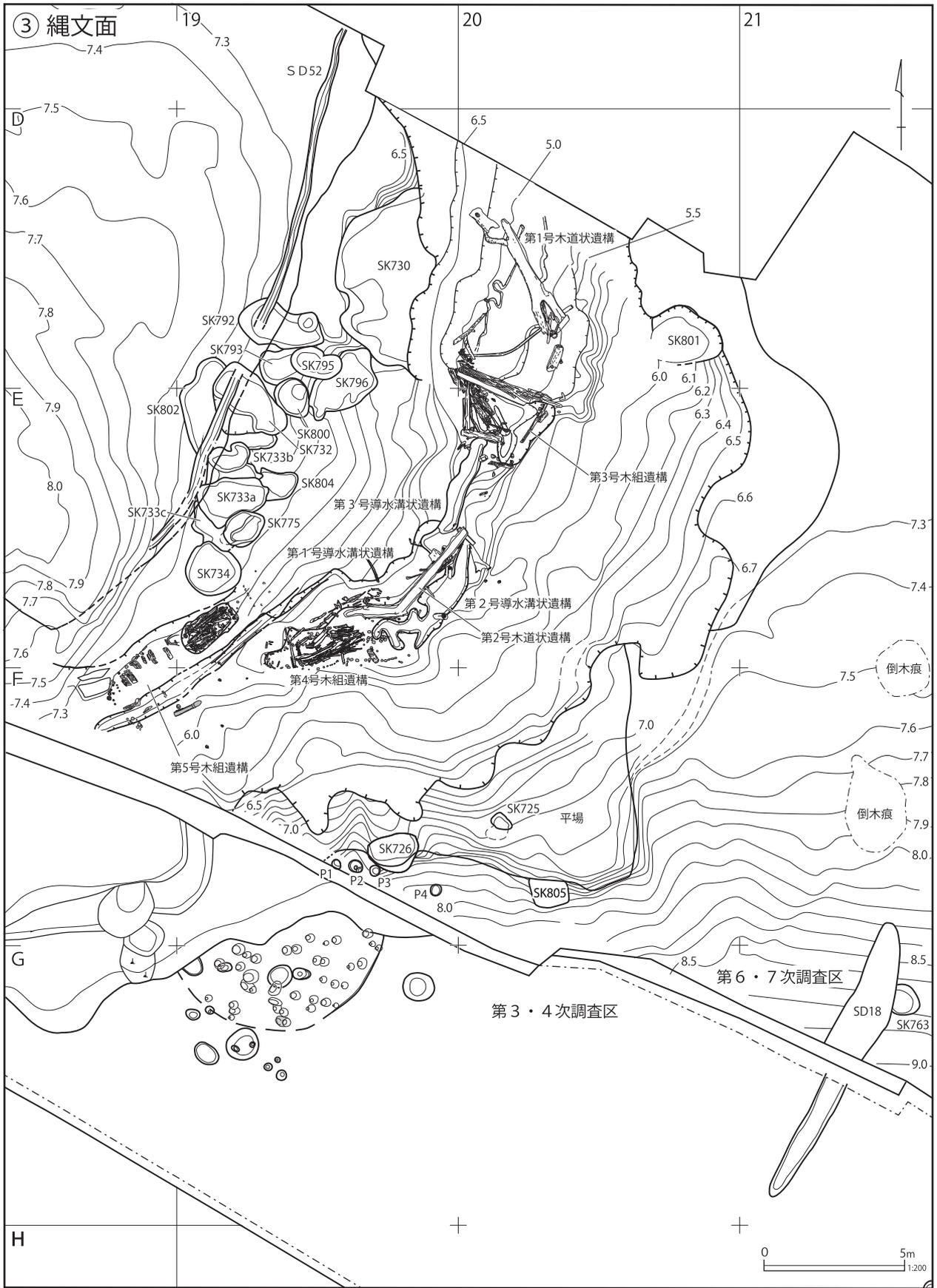
跡全体で広く覆うのが、基本層Ⅱ層（中世以降の形成）とする灰褐色土である。遺物の出土がほとんど期待できない中・近世の遺構の判別において、遺構堆積土中のⅡ層の有無は有効である。

中・近世の遺構は、溝跡6条、土壇1基でいずれも斜面地で検出した。斜面に平行する溝とこれに直交する溝があり、それぞれ一体となって機能していたと見られる。なお、Ⅱ層の最上部には天明期に降灰した浅間A軽石が堆積するが、この頃までには東の谷や東西斜面への土砂(Ⅱb層)の堆積が進み、地形はおおむね平坦になったようである。

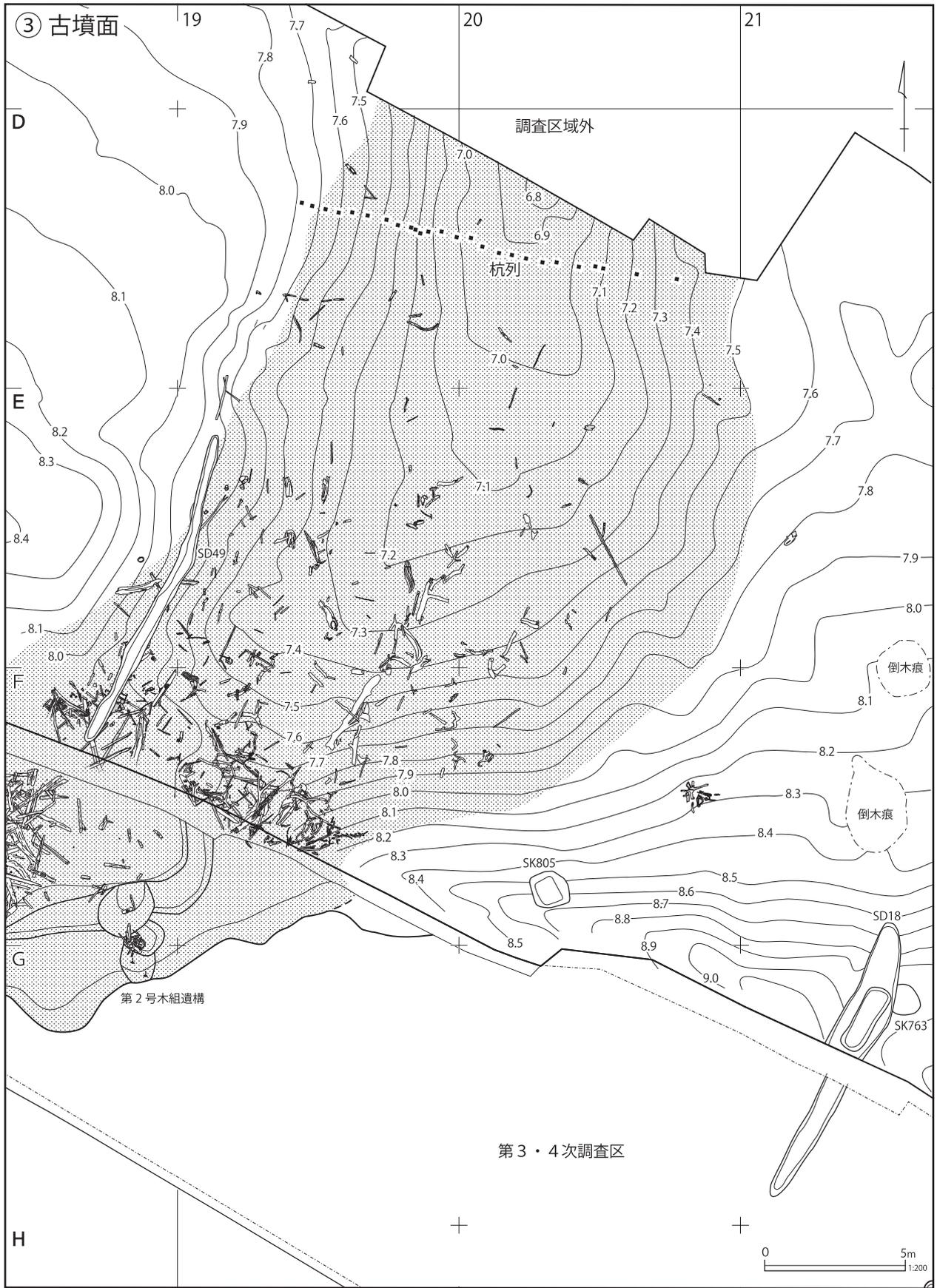
出土遺物の概要 縄文土器は、早期(撚糸文期)から晩期末葉(浮線文)までが出土した。斜面に

形成された遺物包含層の遺物出土量や分布状況はIV章第128~130図に示し、遺跡全体の出土傾向についてはVI章で触れる。

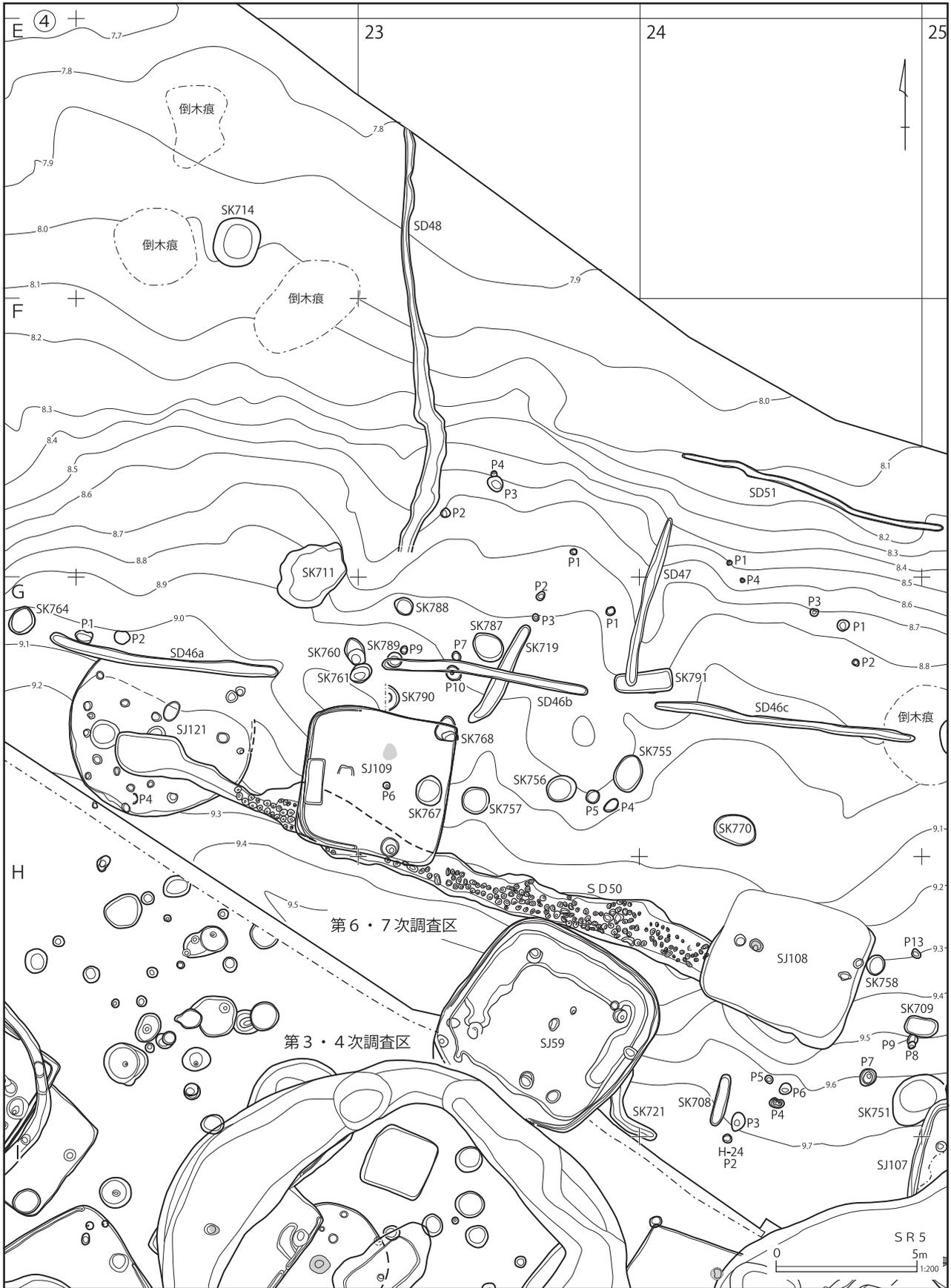
早期の多くは条痕文期のもので、前期では諸磯c式が少量出土した。その他の時期はごく微量である。中期から後期初頭期では、五領ヶ台式、阿玉台式、勝坂式は微量ないしは少量で、加曾利E式~称名寺式期は少量だが个体土器も出土する。後期前葉堀之内式は本遺跡のピークの一つで、集落展開と同調する。加曾利B~曾谷式はやや少なく、安行1式期以降安行3b式期までが第二のピークである。後期前葉の遺跡全面的な分布から、中葉以降、遺跡西方に偏った分布を示すよ



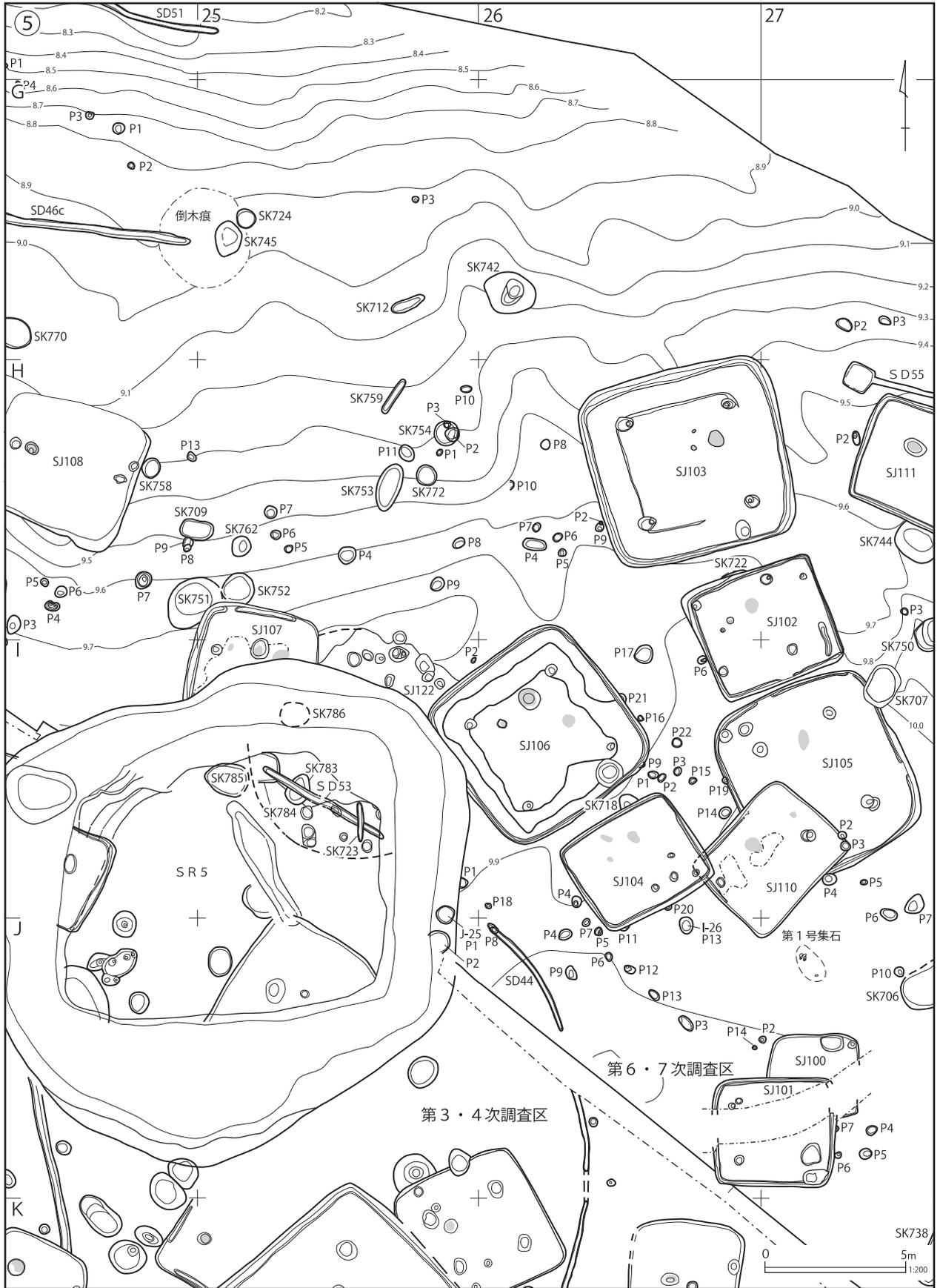
第9図 区割図(3) 縄文面



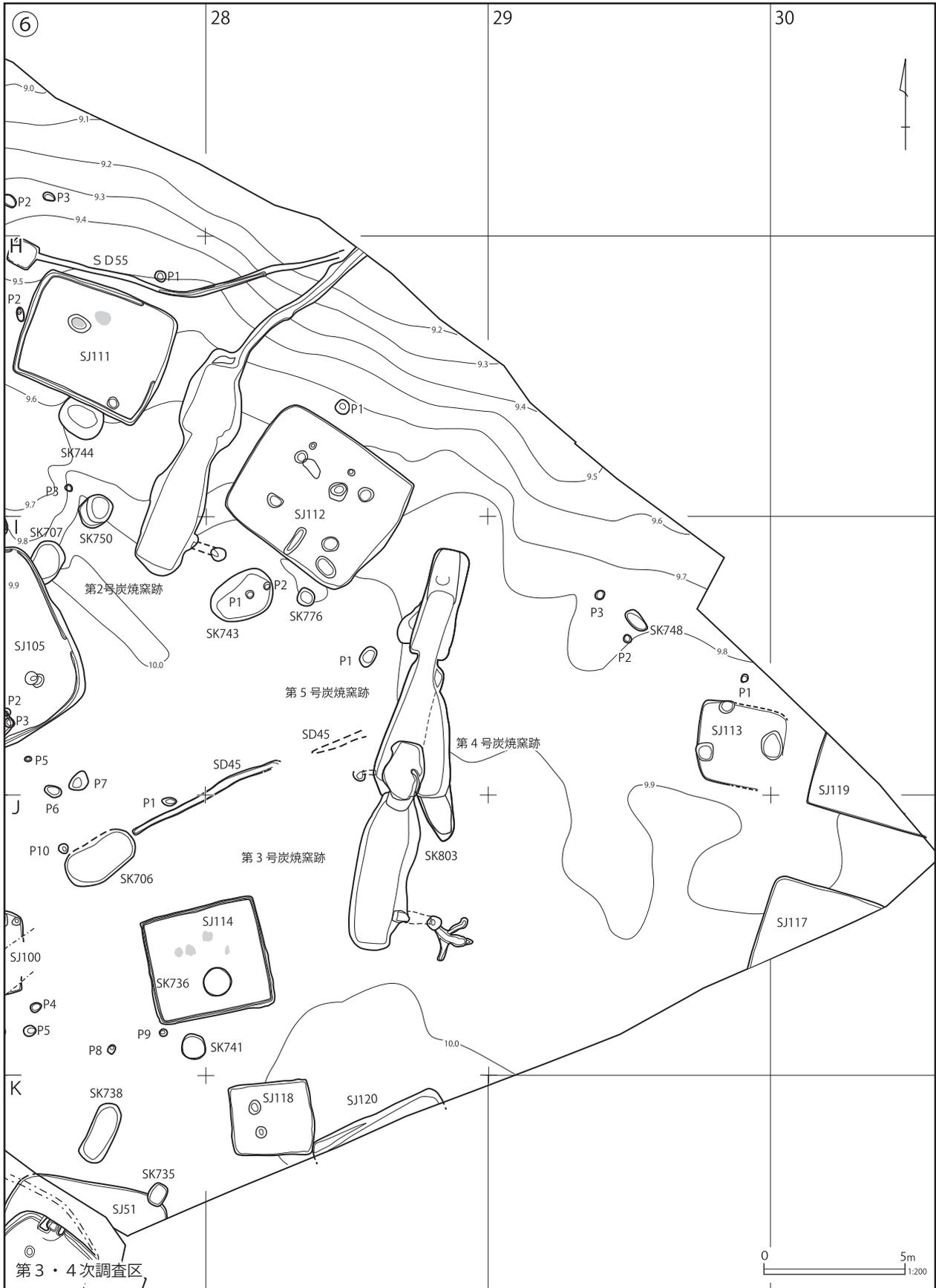
第10図 区割図(4)古墳面



第11図 区割図 (5)



第12図 区割図 (6)



第13图 区割图 (7)

うになり、第442集（西側）と第457集（東側）の調査成果を追認する形となった。集落展開の画期と言えるだろう。安行3c～d式の出土量は全体からすればわずかだが、水場遺構の最下面（底面の地山直上層）で出土した点において看過できない。また微量であるが、晩期末葉の浮線文土器の出土も、集落の終焉を指し示すものとして、見過ごせない。

土製品は、土製円板（盤）や土器片錘を含む、土器片素材の二次加工品（「土器片加工品」と呼称する）や、耳飾りや土偶、手燭形土製品等のほか、焼成粘土塊が出土した。このうち磨石・石皿を模倣した土製品は類例が少なく特記される。

石器は石鏃、石槍、石匙、石錐、削器、スクレイパー、二次加工剥片、微細剥離剥片などの小型剥片石器のほか、礫素材の磨石、凹石、敲石とその複合機能の石器や台石・石皿類、打製石斧、磨製石斧、浮子などの軽石製品、石棒・石刀・石剣類が出土した。石製装身具は4点出土し、いずれも水場遺構関連土で出土した。特に開削部は出土遺物相が異彩を放つ。なお時代は異なるが、西斜面では磨製石鏃1点その他の遺構・遺物を伴わず出土した。

縄文時代の木質遺物は、いずれも東の谷で出土した。いわゆる道具としての木製品は、開削部出土の丸木弓と、第5号木組遺構の杭材として転用

された掘り棒のみで、その他は木組や木道の構成材である。このうち特に杭材では、伐採痕とは異なる、端部を尖らせたものがあり、端部加工A～C類とした（「凡例」別図3）。第3号木組遺構と第4号木組遺構の杭材では、同一母材を分割した、半裁材の接合事例が1組ずつあった。構成材は代表的なものを掲載し、第6～8表には非掲載資料も含めた構成材一覧を遺構別に示し、第88図では木組別の構成材の規模を比較した。

古墳時代の遺物は、土師器を中心とし、少量の土玉や焼成粘土塊、貝巢穴痕泥岩のほか、多量の木質遺物が出土した。土師器は、壺、甕、台付甕、甌、高坏、坩、器台などが組成され、第16表に出土遺物一覧を示した。東の谷では、高坏脚部の破断面を砥面とした転用砥具が出土した。第457集でも同時期のものが4例出土している。

古墳時代の木質遺物は、杭列や木組遺構の構成材（杭材や横木）のほか、鋏、鋏、横槌などの農耕具、建築材や杭、編み錘、机といった木製品類、加工木や自然木が出土した。

古代の遺物は、炭焼窯跡の燃料材を除けば、遺構外で須恵器2片が出土したのみである。同一個体の可能性が高く、うち1点は内面に摩耗面を持つ転用硯である。

中近世の遺物は極端に少なく、陶器（常滑甕）や磁器（壺・碗）が5片出土し、すべて掲載した。

2 基本層序

第5～7次調査は、台地の縁辺（斜面地）や谷（流路）といった多様な地形の中に、様々な時代の活動の痕跡を確認したことに大きな成果がある。低地部では調査の序盤から、これまでの台地部の基本層序とは異なる土層が確認されたため、これを無理に台地部に組み込まず、低地部の基本層序を掴んだ上で台地部との対応関係を捉えることとした。このため本書では、既存の台地部のI、II……V層といったローマ数字に加え、新規

に低地部で付したA、B……F層という二種類の基本層が併存する。

台地部の基本層序 台地部ではI層（現代の盛土）、II層（灰褐色シルト土）、III層（黒色シルト土）、IV層（縄文包含層）、V層（ローム層）にの5層に大別した。一方、低地部ではA層（黒色粘土）、B層（Hr-FA）、C層（黒色粘土で上部は古墳時代の、下部は縄文後晩期の包含層）、D層（縄文後期の包含層）、E層（黒色粘土の無遺物

層)、F層(地山白色粘土層)の6層に大別した。

各層の対応関係は第14図中の表に示した。I・II層は地点を問わず広く遺跡全体を覆う共通の層である。台地部II層は低地側のII a層に相当し、II b層は低地部に特有のラミナ状堆積層である。

台地部III層は低地部のA～C層並びに谷内部の縄文包含層に相当する、古代末から縄文後期後葉頃までの層である。また台地部IV層は、低地部のD層に相当する、縄文後期前葉までの遺物包含層である。以下に各層の概要を示す。

I層 現代の盛土で遺跡全体を覆う。一帯の地表面標高は約12.0mで、A・B地点では1m近く堆積している。

II層 大局的には灰褐色土として捉えられる土層で、台地から低地まで広く遺跡全体を覆う。低地部では上部をII a層(台地部のII層に相当)、ラミナ堆積となる下部をII b層にさらに分層できる。II層全体としての層厚は、台地側で0.8m程度、低地の谷部分では4.0m近くにもなる。

II b層は灰褐色粘土層をベースとして、黒味を帯びた有機物腐植土と厚さ1～2cm程度の砂層が交互に繰り返すラミナ堆積で、あたかも湖底堆積物のようである。第14図B地点の26・27層は、III層(黒色粘土)とII層(灰褐色土)の交互堆積で、III層からII層への移行が示された土層である。II b層(7層以下)で特に発達するラミナについて、人的痕跡は窺えなかったため、詳細な図化は行わなかったが、第15図中の*印は、葉理構造がさらに発達する土層である。細分層については、土層注記で「○層以上」と記した。

II a層(6層以上)ではおおむねラミナ構造がなくなり、台地側II層と共通化する。埋積を続けた結果、それまでの低地部の標高が台地側と揃い、辺り一帯がおおむね平坦化し、かつての堆積環境ではなくなったことを示す。このことは、元禄5(1702)年の「堤土置論裁許状(白岡市田口家文書)」の絵図において、すでにこの地が沼地

ではなくなっていることから窺える。

また、深くは追及していないが、全体的にラミナ構造がなくなることは、土地改変行為(土壌の攪拌)を示す可能性もある。II層の上部には、遺跡一帯に天明3(1783)年降下の浅間A軽石(As-A)が堆積するが、低地部では、As-A堆積後の土層がブロック状に攪拌された様子を確認している(B地点3層)。

II層の年代観は、上述のように最上部にAs-Aが堆積することから上限は近世中頃である。一方、下部ははっきりしないものの、直下のC層(黒色粘質土、後述)の上部に天仁元(1108)年降灰の浅間B軽石が堆積し、最上面で13～14世紀の陶磁器片が出土することから、II層の形成は中世以降であることが確実である。なお、第2次調査以降、遺構堆積土中におけるII層の有無を、中世以降の遺構の時期判定の目安としてきたが、上記の状況より、この判断が妥当であることが確認された。

III層 黒色シルト土。低地部のA～C層に相当する。台地部での層厚は0.3～0.4mで、低地部へは色調を大きく変えることなく、厚みと粘度を増していく。低地部では地点により極めて多様なあり方を示しており、後述する。

IV層 暗褐色～褐色シルト土の縄文時代後期前葉までの遺物包含層で、既報告部も含め台地をかなり広範に覆う。平均層厚は0.2m前後だが、縁辺部では0.4mを超える地点もある。低地部へ向かって徐々に粘質化しD層に移行する。

V層 いわゆるローム層で台地部における地山である。上部はソフトロームで、下位に0.4m以上に達する暗色帯が発達する。古墳時代の住居跡の多くは暗色帯中に床面を造るほか、古代の炭焼窯跡もそれ以前の遺構の分布を避け、堅固な地盤を選地している。

低地部の基本層序 I・II a層までは台地側と共通し、II b層以下では異なる様相を示す。II b層

の灰褐色土、Ⅲ層の黒色シルト土は低地部へ向けてかなりの厚みを増し、標高の低い地点ほど細分可能である。Ⅲ層の上部では、低地部のほぼ全域で厚さ1～2cm程度の榛名二ツ岳火山灰層(Hr-FA)を確認したため、これをB層とし、上位をA層、下位をC層と大きく捉えた。なお、B層を挟んだ上下層に質的な違いはなく、降灰前後における大きな堆積環境の変化はなかったと考えられる。

前述のように、低地最深部のA層のところどころには、天仁元年降灰の浅間B軽石が堆積する。また、最上面付近に13～14世紀の陶磁器片をわずかに含み、黒色土(Ⅲ層)から灰褐色土(Ⅱ層)への移行が、古代から中世への移行期と必ずしも一致しているわけではない。

以下、各層の概要を示す。

A層 後述のB層よりも上位の、Hr-FA降灰後の黒色粘土層。C層と土性の差はない。低地でも最深部でAs-Bが凹凸を持って堆積している。

B層 Hr-FA層。西斜面から東斜面まで広く低地に分布する。層厚1～2cmで安定的に堆積。

C層 B層下位の黒色粘土層で、斜面下方ほど厚みを増す。谷と斜面で、また斜面でも谷を挟んだ東西で様相は大きく異なる。C層を特徴づけるピート層(植物遺体の密集する層)は、東側では23グリッドライン付近から、また西斜面側ではほぼ全域で確認されるが、東の谷の内部ではこれがさらに細分される。

東の谷におけるC層は、層厚0.7m前後で0.05～0.1m程度のピート層と黒色粘土とが各3～4枚ずつ交互に顔を出す。C1層の一角では自然木が出土している(第277図)。また、C2～C4層中では、第3次調査区から連続して木製品が集中的に出土する。

西斜面のC層は、東斜面側にはない縄文後期中葉以降の遺物包含層が形成されているため、東斜面よりも総じて厚い。最上部では土師器や磨製石

鏃などが、縄文晩期の遺物群とさほど標高差をもたず混入する。調査では、C層における古墳前期と縄文晩期の面の分層を試みたが、平面的、また断面的にも肉眼で区別できなかった。少なくとも西斜面側では、晩期以降古墳時代前期までの堆積土の形成は低調だったようである。

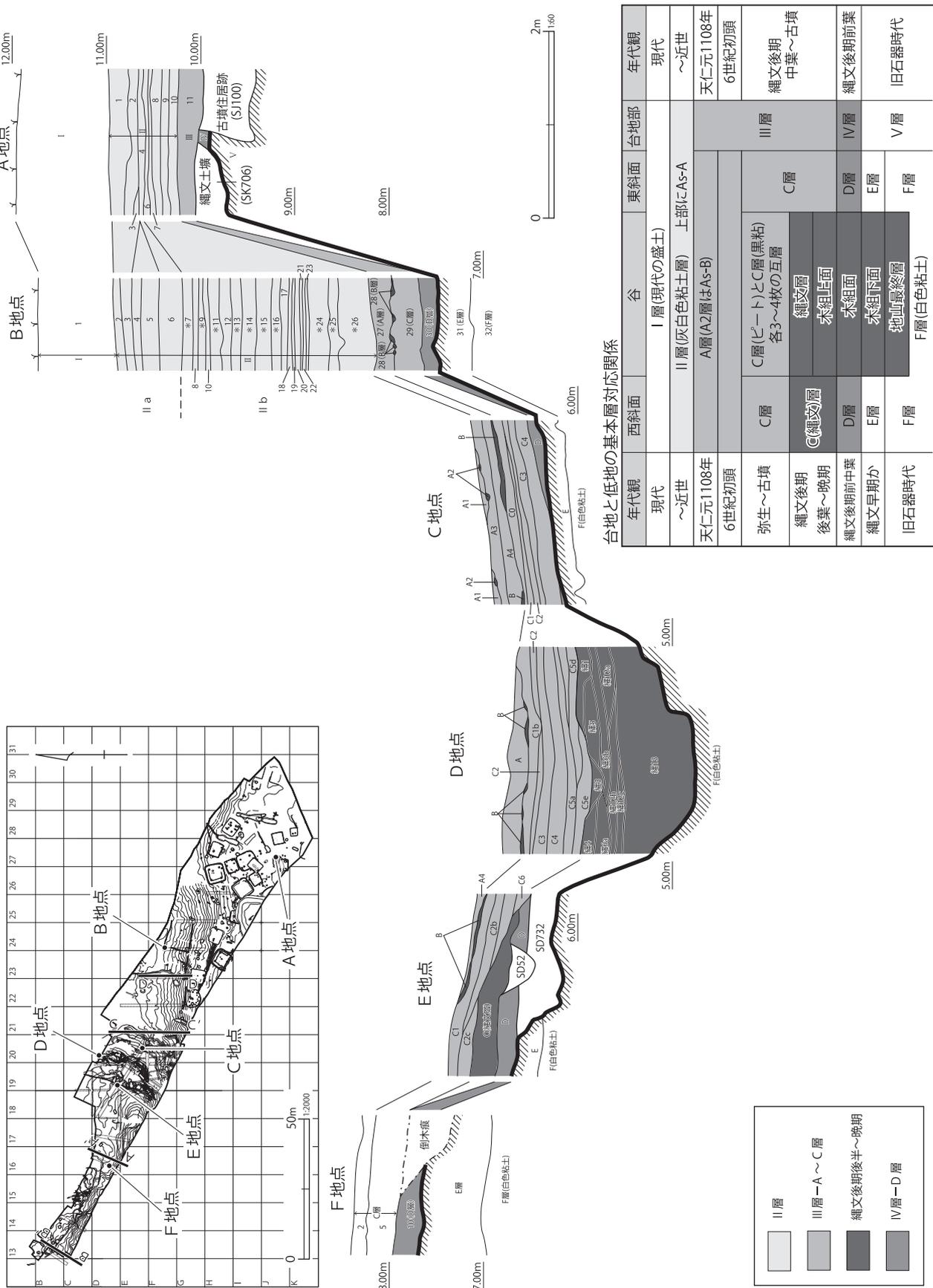
D層 平均層厚0.15～0.20mの暗褐色粘土で縄文後期前～中葉までの遺物包含層である。上下の黒色粘土に挟まれた、かなり特徴的な土層で、谷を除いた東西斜面一帯に分布する。東斜面と西斜面の一部では、本層を切り込む倒木痕が確認される(第16図A断面やC断面など)。

東の谷の肩部では、晩期の包含層が本層を切り込んでいる(第14図E地点・C地点)。よって、「東斜面」や「西斜面」とした範囲は、本層の分布範囲とおおむね同義である。

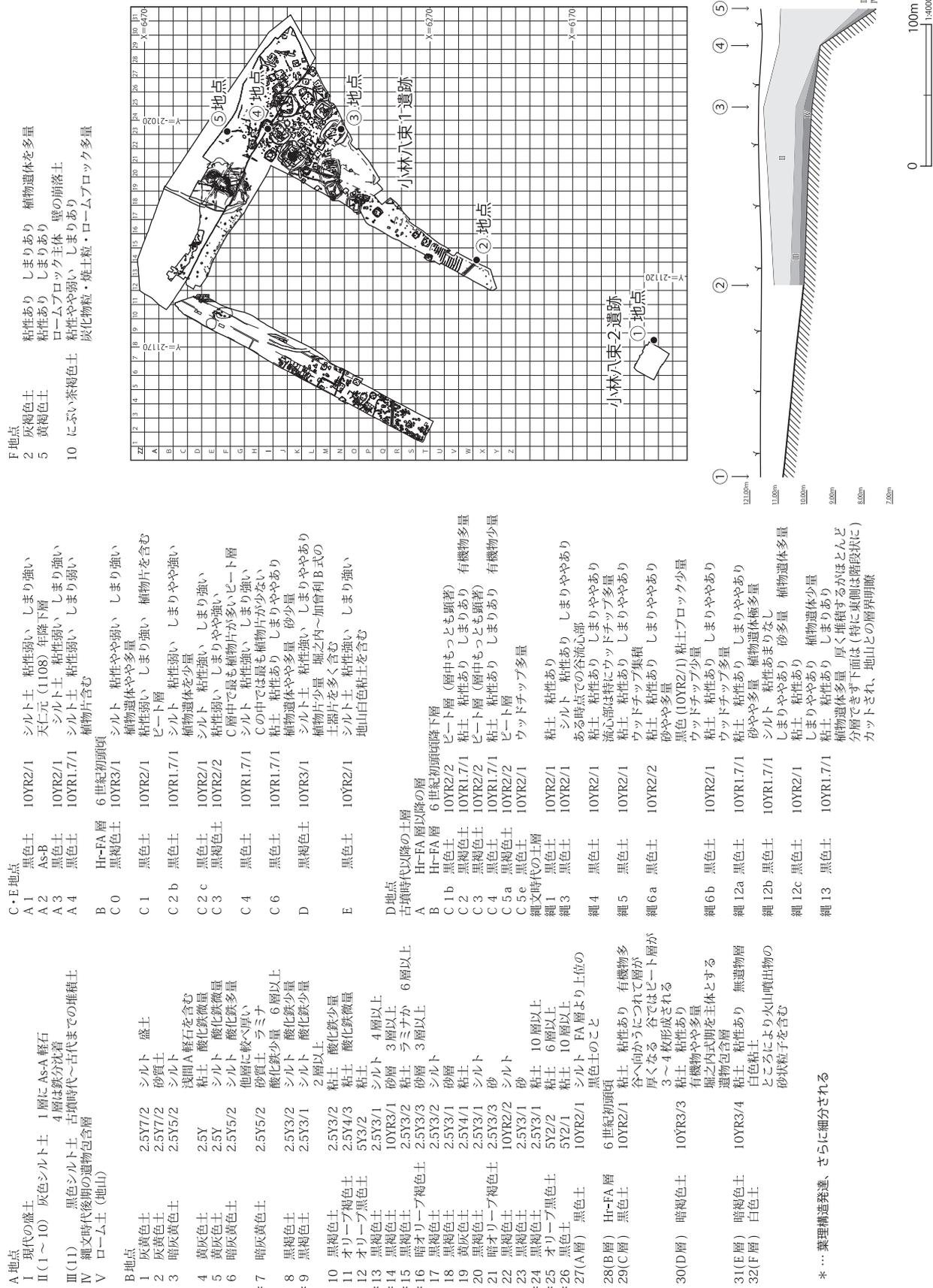
E層 平均層厚0.5～0.6m程度の黒色粘土で、原則的に遺物は含まない。第5次調査では本層下面で縄文早期条痕文期の土壌や時期不明の焼土遺構を検出したため、第6・7次調査でも斜面全域を重機掘削し遺構の検出に努めたが、遺構は発見されなかった。

F層 E層下位の白色粘土で、層厚は不明ながら、斜面側では標高7.5m付近(第36図第725・726号土壌の断面図)で確認され、谷の最深部では標高5.5mの高さまで分布する、分厚い土層である。縄文時代後晩期の東の谷では、兩岸の全域で本層が露出する。特に西斜面側の肩部では不整形の土壌群が群在し、白色粘土層の露頭を狙った採取目的の粘土採掘坑と考えられる。

以上、台地部I～V層と、低地部A～F層の特徴と対応関係について概括した。本書の対象とする第5～7次調査区において、またこれまでのいずれの調査区においても、基本土層中に石器の素材となるような礫を含む層は無く、遺構堆積土や包含層中の礫は、加工や使用の有無に関わらず、原則的に遺跡外からの搬入と見なされるだろう。



第14図 基本層序 (1)



第15図 基本層序(2)

IV 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第121号住居跡 (第18~21図)

位置・検出 台地の縁辺部、G-22グリッドに位置する。斜面部の土層堆積状況を確認するトレンチにおいて、竪穴状の掘り込みと柱穴を検出した。その後、台地縁辺の包含層を掘削する過程で、さらに数基の柱穴を確認したため、住居跡の存在を予測し、平面プランの検出に移行した。竪穴内の堆積土は、台地縁辺部の遺物包含層と大きく変わらず、平面プランの検出は難渋し、北側は範囲を明らかにできなかった。

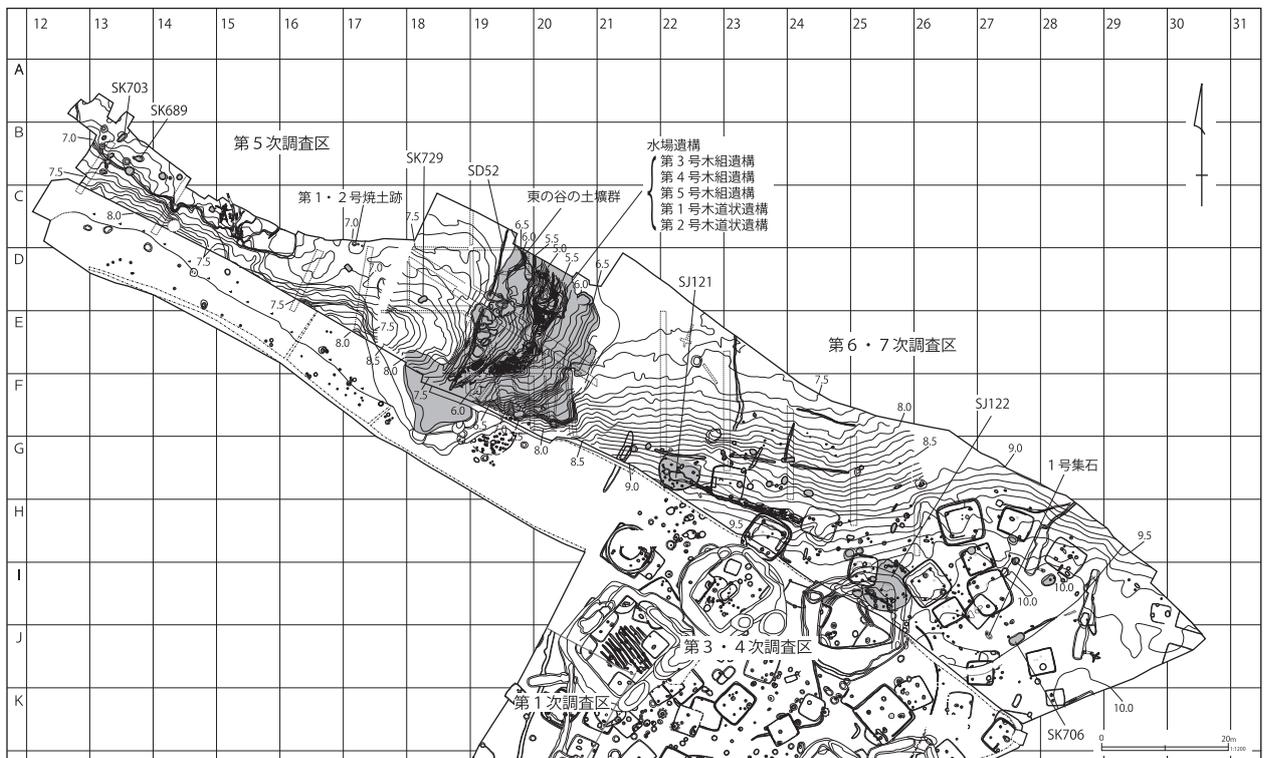
規模・形状 推測される平面形および規模は、直径約6.0m前後の円形と見られ、東西長約6.2m、南北長は残存部で5.5mである。

構造・施設 柱穴はP1~22までの20基 (P3・P19は欠番) を検出した。このうちP22は竪穴外に位置するが、関連遺構として報告する。多

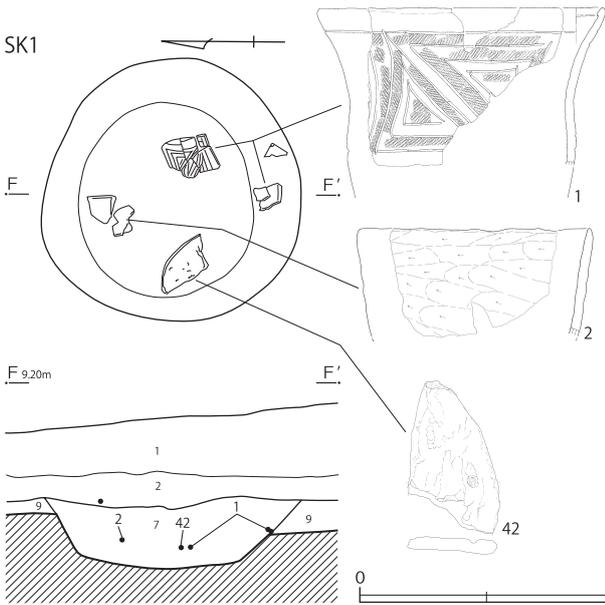
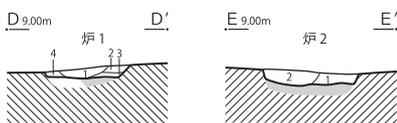
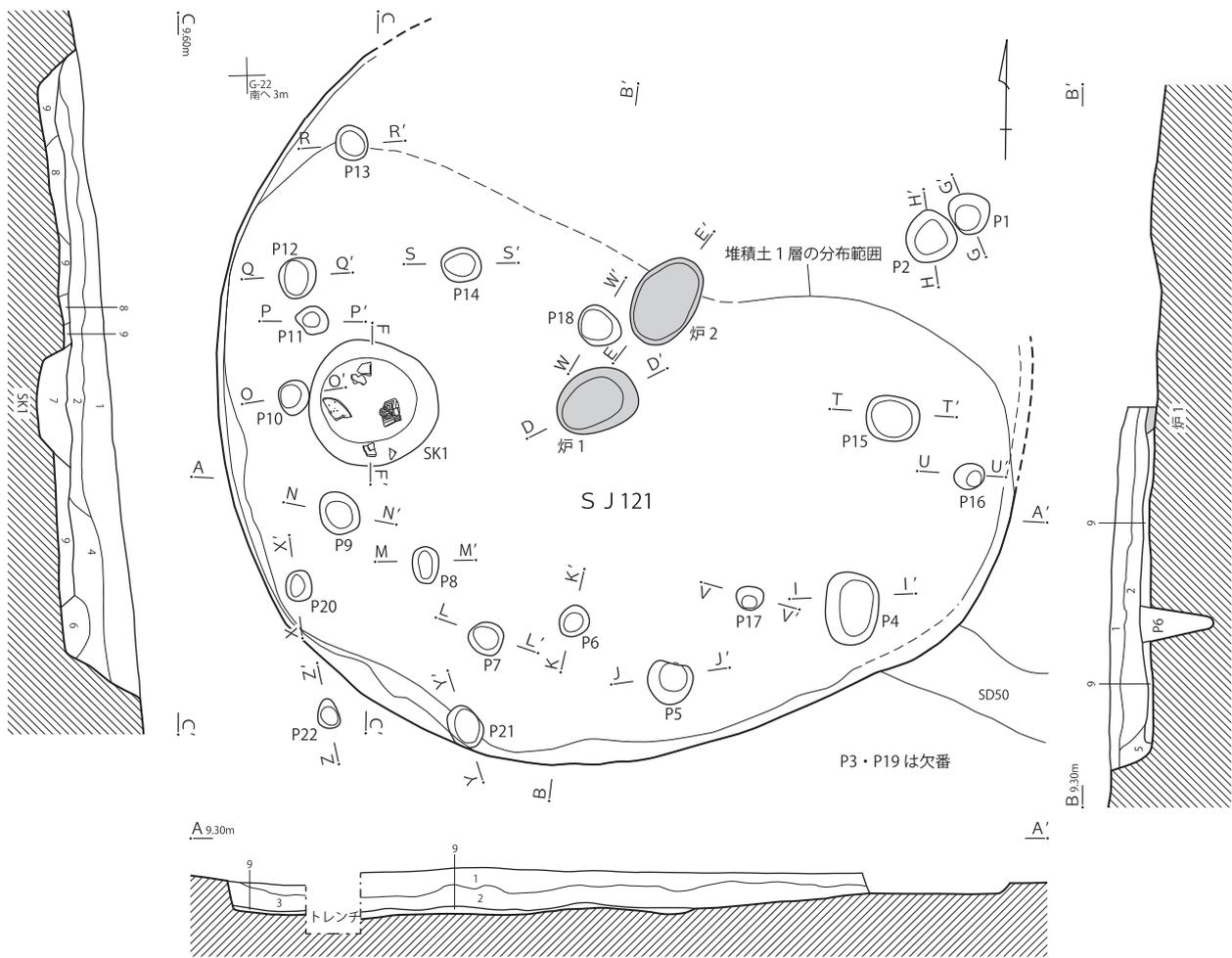
くは、竪穴壁面よりやや内側に分布するが、P14・P18は中央に寄りに位置する。堆積土はにぶい黄褐色土の単層 (P1・P2・P10・P14・P17) と、黒褐色土の単層 (P12・P21) があり、P5・7~9・15では上下に分層され、P4・P6・P16・P18では柱痕状に分層できた。

炉は、竪穴中央で炉1・炉2の2基を検出した。炉1は長軸0.60m×短軸0.50m、炉2は長軸0.70m×短軸0.50mの範囲が浅く掘り窪められ、底面が顕著に被熱している。炉内堆積土は、炉1を4層、炉2を2層に分層した。

その他の施設として、西側の壁面寄りの床面上で、SK1とする土壇状の掘り込みを検出した。直径1.0m程度の円形で、深さは約0.3mである。堆積土は黒褐色土の単層で、底面からやや浮いた位置で、第20図1・2の深鉢や、第21図42の石皿が出土した。

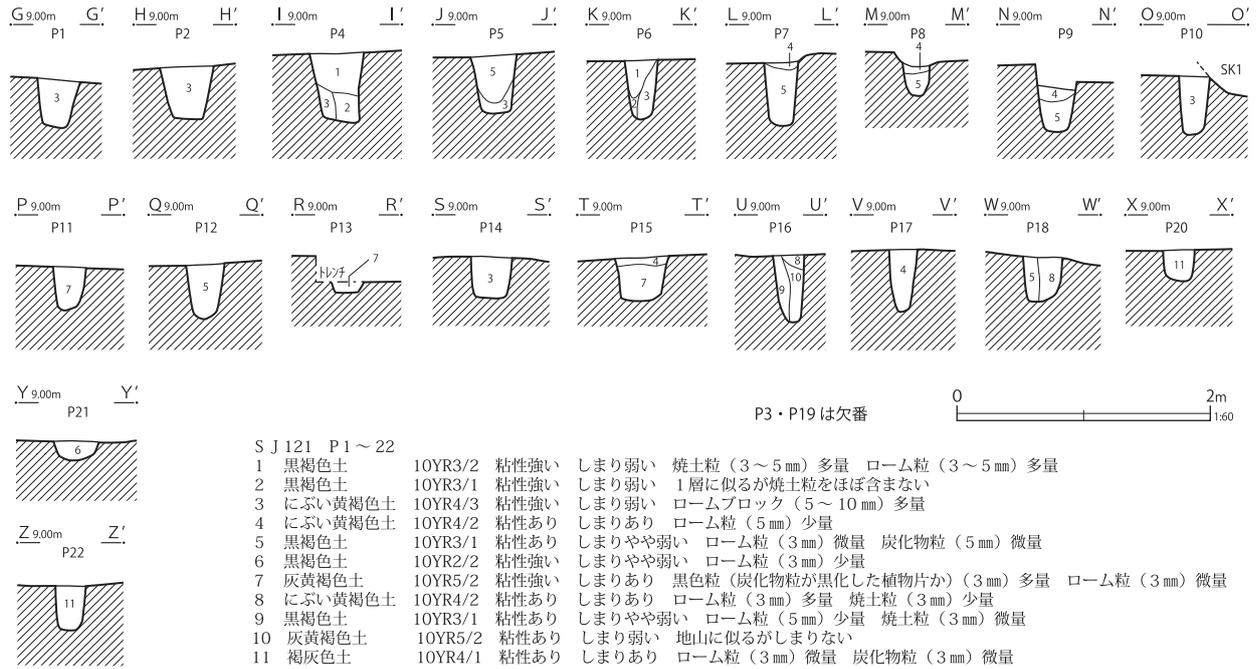


第17図 縄文時代の主な遺構



- S J 121
- | | | |
|---|-------|--|
| 1 | 黒褐色土 | 10YR3/1 粘性あり しまりあり 炭化物粒 (3~10mm) 多量
ローム粒 (3mm) 多量 |
| 2 | 褐灰色土 | 10YR4/1 粘性あり しまりあり ローム粒 (3mm) 多量
黒色粒 (10mm) 少量 |
| 3 | 黒褐色土 | 10YR3/1 粘性あり しまりあり 炭化物粒 (3mm) 少量
ローム粒 (3mm) 少量 |
| 4 | 灰黄褐色土 | 10YR4/2 粘性あり しまりあり 炭化物粒 (3mm) 少量
ローム粒 (3mm) 少量 |
| 5 | 黒褐色土 | 10YR3/2 粘性あり しまりあり 3層に似るが炭を含む |
| 6 | 褐灰色土 | 10YR4/1 粘性あり しまり強い ローム粒 (3mm) 多量
ブロック状に極めてしまる |
| 7 | 黒褐色土 | 10YR3/1 粘性あり しまりありローム粒 (5mm) 多量 (SK1) |
| 8 | 灰黄褐色土 | 10YR4/2 粘性あり しまりあり 炭化物粒 (3mm) 少量 (掘方) |
| 9 | 灰黄褐色土 | 10YR4/2 粘性あり しまりやや強い
ロームブロックを主体とする (掘方) |
- S J 121 炉1
- | | | |
|---|------|---|
| 1 | 灰褐色土 | 10YR4/1 粘性ややあり しまりあり焼土ブロック (10~20mm) 多量 |
| 2 | 褐灰色土 | 10YR4/1 粘性ややあり しまりあり 焼土ブロックを含まない
表面が一部被熱して硬化する |
| 3 | 褐灰色土 | 10YR4/2 粘性ややあり しまりあり
被熱した地山ブロック (20~30mm) を主体とする |
| 4 | 黒色土 | 10YR2/1 3層より強く焼きしまる |
- S J 121 炉2
- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 褐灰色土 | 10YR4/1 粘性ややあり しまりあり焼土ブロック (10~20mm) 多量 |
| 2 | 灰黄褐色土 | 10YR4/2 粘性ややあり しまりあり
被熱した地山ブロック (20~30mm) を主体とする |

第18図 第121号住居跡 (1)



第19図 第121号住居跡 (2)

堆積土 竪穴堆積土は1~9層に分層した。7層はSK1の堆積土、8・9層は床面ないしは掘方埋土、1~6層は廃絶後の堆積土である。

出土遺物 遺物は縄文時代後期前葉頃の縄文土器、石器が出土した。第20・21図に出土遺物を示した。第20図1~3は器形を復元できた土器、第21図42は石器で、その他は破片資料である。

第20図1は三角形区画文をもつ堀之内2式の深鉢で、胴部下半は欠損している。口縁部は外反し端部の内面に段を作る。

2は無文の深鉢で、外面は粗いナデ (ケズリ) 調整である。3は胴部がくの字に張る注口土器で、上半は欠損している。外面調整は縦方向の丁寧なミガキである。

4~27は堀之内1式で、4~16は口縁部破片、17~27は胴部破片である。4~7・10は地文に縄文をもつもの、8・11は無文地、9は櫛歯状工具による条線を地文とする。

4~11は口端部に沈線が巡り、9・11は二本沈線で、6の沈線は細い。12~16は主文様を持たない縄文のみの資料で、15はRL縄文、その他は

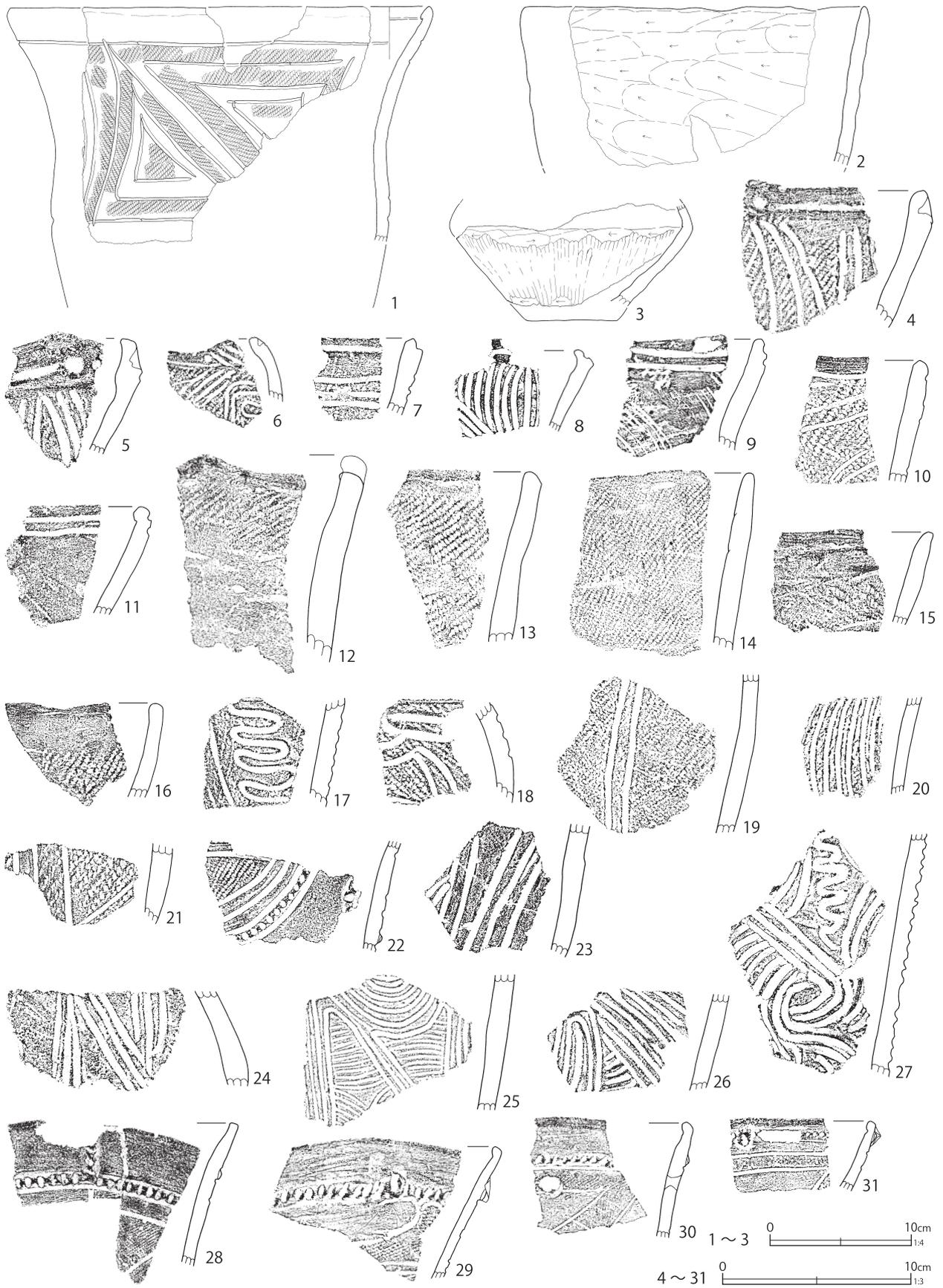
LR縄文の横位回転である。

17~22は縄文地に主文様をもつもの、23~27は無文地のものである。22はキザミ隆帯が垂下し、同様の隆帯が横位沈線から弧状に配される。

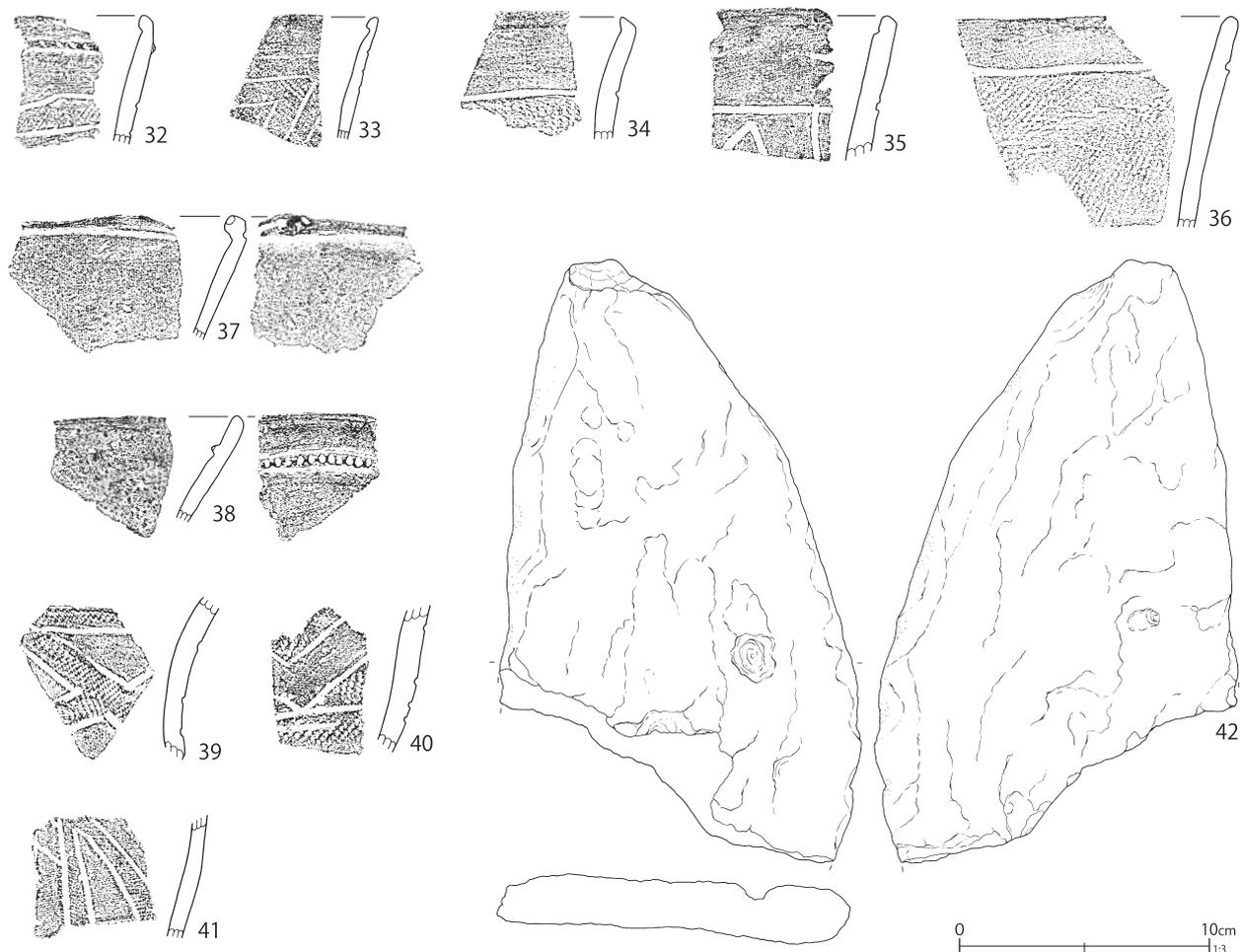
28~41は堀之内2式で、28~38は口縁部、39~41は胴部破片である。28~32は口縁部にキザミ隆帯を施し、29・31は8字状貼付文を、28は口端部から垂下する縦位の隆帯を配す。28~34は沈線区画内に縄文を充填し、29は曲線的なモチーフをもち、その他は直線的なモチーフである。35は無文地に文様を描出するもの、36は口縁部の横位沈線以外の文様をもたないものであろう。37は口縁端部が内屈し、内側に突起状に張り出した口唇部に竹管状工具で1対の円文を配す。38は内面にキザミ隆帯をもつ。

42は表裏2面利用の結晶片岩製の石皿である。節理部での凹凸が著しく器面は平滑ではない。表裏2面に磨面を形成し、凹凸の凸部で特に発達する。一部は縁辺にも及び、裏面には使用面の磨り減りがある。凹穴は表面に2箇所ある。

時期 出土遺物から縄文時代後期前葉である。



第20图 第121号住居跡出土遺物 (1)



第21図 第121号住居跡出土遺物（2）

第122号住居跡（第22・23図）

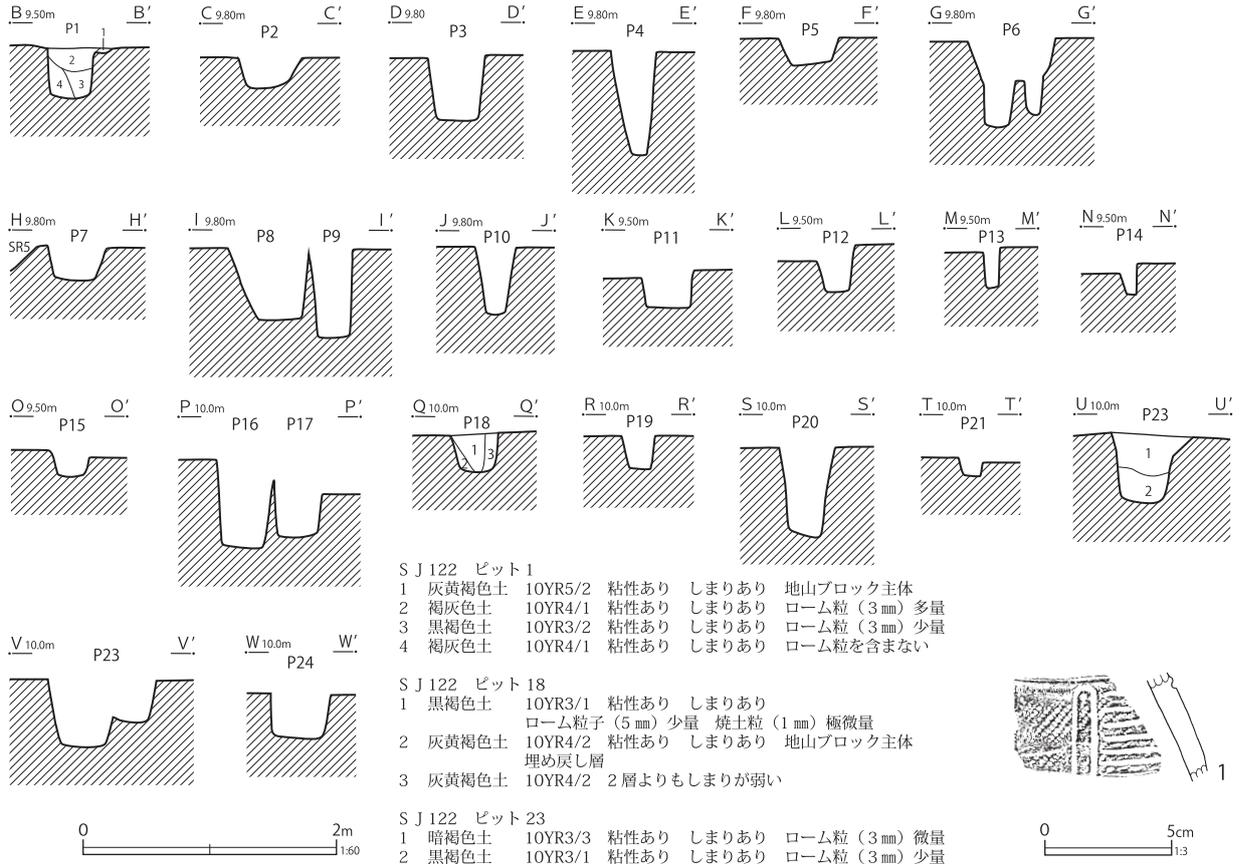
位置・検出 調査区東側の台地上、I-25グリッドに位置する。方形周溝墓を調査する過程で、盛土下から縄文時代後期の遺物を包含する土層を検出した。当初、一帯に分布する縄文後期の遺物包含層として認識していたが、周溝を調査する過程で、被熱面を検出したことから、住居跡の可能性を考えた。調査当初はA断面のd～h層を方形周溝墓の盛土と捉えていたが、周溝北側（A断面右手）との標高差を考えたとき、同層群も縄文時代の堆積土と理解した方が自然であることから、整理段階で縄文時代の土層群と考えを改めている（その他の理由について、第2節（2）方形周溝墓を参照）。なお、これより下位の1～6層は本住居跡として確実な土層である。

このため、大半の遺物は方形周溝墓の盛土や当該グリッドの包含層出土遺物として取り上げられ、本住居跡としての取り上げ遺物はわずかである。

第3表は、整理段階で単体のピットから本住居跡に帰属させたものの一覧である。また逆に、本住居跡との関連を明らかにできなかった第783・784・786号土壇については第23図に図示したが、「土壇」で正式報告する。

規模・形状 住居跡の平面形は、調査では明らかにできず、柱穴分布や掘方、土層断面等からの推定を破線で示した。想定される規模は、おおむね直径7.8m前後の円形である。

構造・施設 柱穴はP1～24までの24基を検出した。P1・P11～15は周溝の底面で検出したもので、掘削深度はかなり深い。P6・P23は2基の重複



第23図 第122号住居跡(2)・出土遺物

第3表 第122号住居跡ピット新旧対照表

新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
第122号住居跡 P2	I-25-P8	第122号住居跡 P8	I-25-P5	第122号住居跡 P14	SR5-P15	第122号住居跡 P20	SK782-I12
第122号住居跡 P3	I-25-P11	第122号住居跡 P9	I-25-P5	第122号住居跡 P15	SR5-P14	第122号住居跡 P21	I-25-P20
第122号住居跡 P4	I-25-P7	第122号住居跡 P10	I-25-P12	第122号住居跡 P16	SK782-I22	第122号住居跡 P22	新番取得
第122号住居跡 P5	I-25-P3	第122号住居跡 P11	SR5-P16	第122号住居跡 P17	SK782-I13	第122号住居跡 P23	SK782-I26
第122号住居跡 P6	I-25-P4	第122号住居跡 P12	SR5-P17	第122号住居跡 P18	SK782-I19	第122号住居跡 P24	SK783
第122号住居跡 P7	I-25-P6	第122号住居跡 P13	SR5-P18	第122号住居跡 P19	I-25-P19		

の可能性がある。P22を除き、想定される竪穴壁寄りに分布する。柱穴は深度の比較的深いもの(P4・6・8~10・16・17・20)と浅いもの(P2・5・7・21)がある。P1・P18・P23は複数に分層でき、前二者では柱痕状の土層を確認した。

炉は竪穴中央に1基検出した。北側は方形周溝墓の盛土に壊されている。残存範囲での規模は、東西0.90m、南北0.50mで、0.30mの厚さで被熱している。

堆積土 床面は竪穴中央部に地山由来のにぶい黄褐色土(4層)を貼り、外周は地山を直接床面と

する。また、炉の周囲では特に硬化面(3層)が発達する。A断面3・4・7層は床面に関連する土層、5層は掘方埋土、1・2・6層は竪穴堆積土である。

出土遺物 図示した遺物は第23図1の1点である。堀之内1式の胴部破片で、頸部は括れ沈線区画を持つ。胴部はLR縄文地に、沈線で区画文や横線を描出する。

時期 出土遺物は少ないものの、周辺の包含層や巻き上げと見られる方形周溝墓の盛土出土遺物の様相から、縄文時代後期前葉と考えられる。

(2) 焼土跡

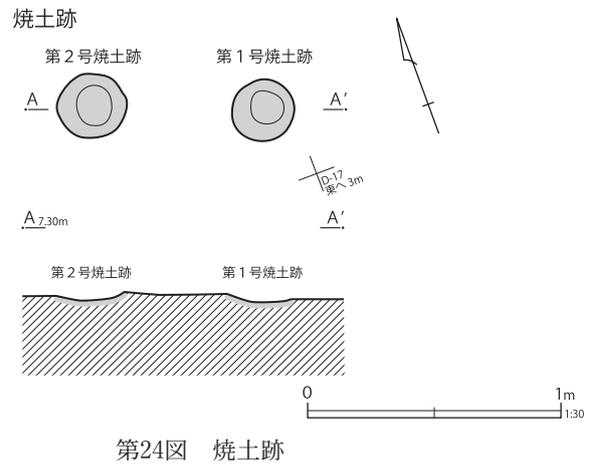
西斜面のD-17グリッドで2基の焼土跡を検出した。D-17P1とは至近の距離にある。検出面は基本層F層とした地山白色粘土上で、上位にE層とする層厚0.3~0.5m程度の黒色粘土の無遺物層（縄文後期前葉以前）が覆う。直接伴う遺物はなく時期は不明ながら、分厚いE層を掘り下げたとは考えにくく、縄文後期以前のものと推定される。地点はやや異なるが、第689号土壌（早期条痕文期）があるため、その可能性もある。

第1号焼土跡（第24図）

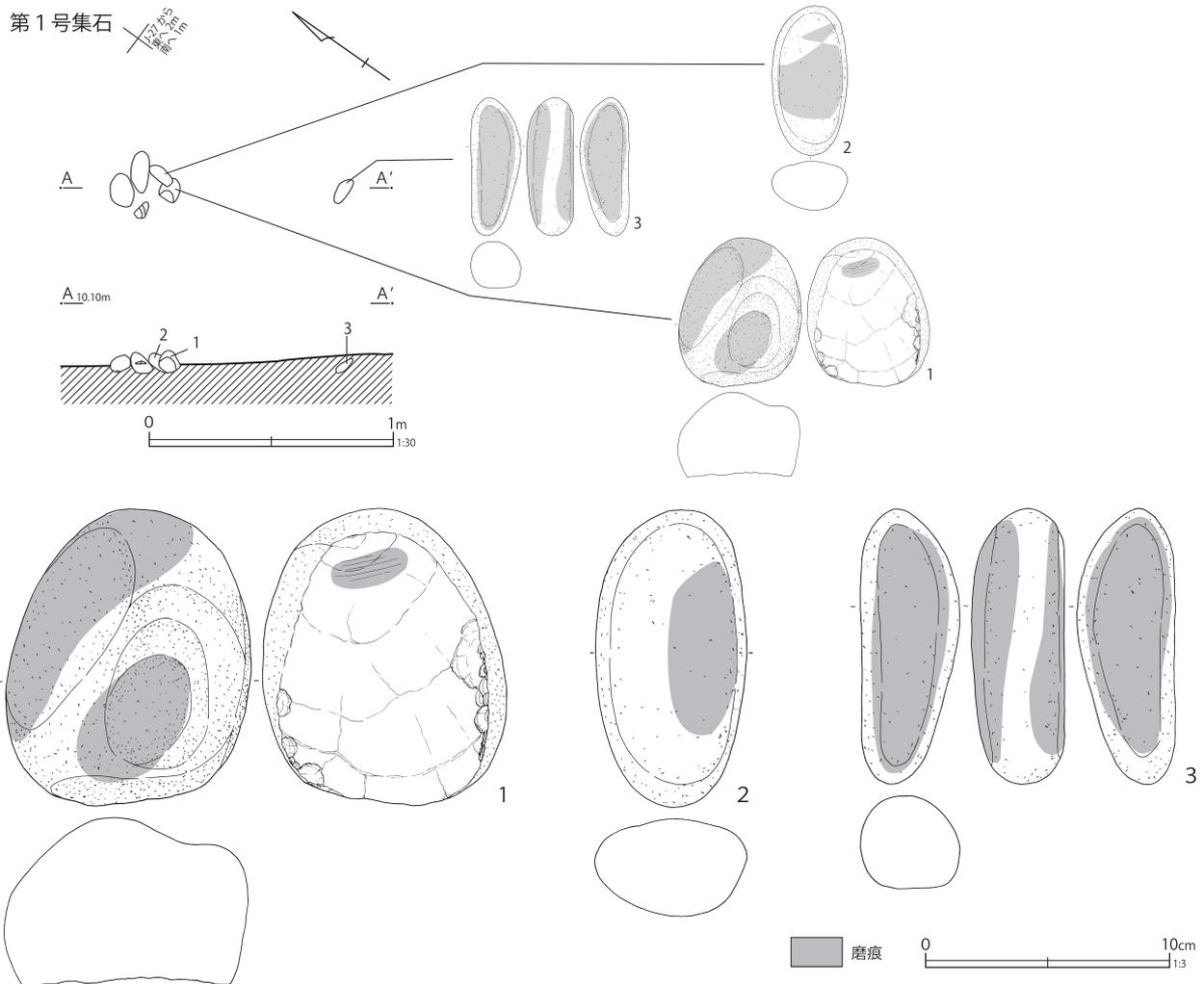
西斜面のD-17グリッドに位置し、基本層F層とする地山白色粘土上で検出した。浅く窪んだ直径0.25mの円形範囲が被熱する。伴う遺物はなく、詳細時期は不明である。

第2号焼土跡（第24図）

西斜面のD-17グリッドに位置し、基本層F層とする地山白色粘土上で検出した。浅く窪んだ直径0.23mの円形範囲が被熱する。伴う遺物はなく、詳細時期は不明である。



第24図 焼土跡



第25図 第1号集石・出土遺物

(3) 集石

第1号集石 (第25図)

調査区東側、J-27グリッドに位置する。基本層IV層の縄文時代後期の遺物包含層を精査中に検出したが、第V層に接している。断ち割り調査を実施したが、これに伴う掘り込みは確認できなかった。周囲に土器等も伴わず詳細時期は不詳ながら、検出層位から縄文時代の遺構とした。

やや大型の円礫や棒状礫6点からなる集石で、No.6 (礫の破片) のみ約0.5m程度離れている。観察の結果、このうち3点は使用痕から磨石と判断し、残り3点は自然礫とした。

第25図1は円礫、2・3は長円ないしは棒状礫を素材とする。2・3の磨痕は微弱で、1は顕著である。1は破損面の縁辺に微細剥離と、線状痕を伴う磨面がある。いずれも磨石とはしたが、いわゆる食物粉碎加工の磨石とは異質である。

(4) 土壌

縄文時代の土壌は64基検出した。第3・4次調査区から続く台地や斜面に分布する一群と主に第5次調査で検出された西斜面の斜面先端部の一群、加えて東の谷 (水場遺構) の緩斜面中に分布する一群がある。前二者では、早期条痕文期 (第689号土壌) や中期後半 (第706号土壌) など含むが、大半は後期前～中葉期のものである。

一方、後者は以下の①～④の諸特徴をもつことから、地山である基本層F層 (白色粘土) そのものを求めた粘土採掘坑の可能性が高い。

- ①白色粘土の露頭部にのみ分布し (第37図参照)、横方向に掘り抜く土壌 (第725・775・806号土壌等) もある。
- ②隣接土壌との重複が著しく、平面検出段階での新旧関係の判断は多くの場合極めて困難である。計画的な配置も窺えない。
- ③平面形、立ち上がりともに不整な掘り込みが多い。調査で認識した以上に、細かい単位での掘

削が行われている。

- ④堆積土は地山F層由来の白色粘土のブロックや粒子を含んだ人為堆積土。隣接土壌との新旧関係の把握は、断面観察上でもかなり難渋した。掘削と埋め戻しの単位が不一致 (掘って埋めるが一つのサイクルではない) である。

これらの土壌は、「東の谷の周辺の土壌群」として第35～39図に一括掲載する。

層位的には、基本層D層 (縄文後期中葉頃までの包含層) に覆われる土壌 (第732・802号土壌) は、後期中葉以前と考えられる。

出土遺物は総じて僅少で、土壌に確実に伴う遺物は少ないが、第734号土壌で縄文時代晩期頃と見られる完形の鉢 (第39図95) のほか、第732号土壌では後期後葉以降と見られる鉢の下半部 (第38図80) が出土している。

従ってこれらの土壌群は、後期中葉以前から晩期まで、ひとつの土器型式に収まらない時期幅を持った土壌群と考えられる。

なお、自然科学分析等は実施していないが、第732・733c・795号土壌では図示した位置で、堆積土中の白色粘土を周辺の地山白色粘土とともに土壌サンプルとして採取した (第36・37図)。

このほか、D-19グリッド付近の土壌4基 (第792・793・795・796土壌) の重複について、東の谷の調査状況により、断面観察等の満足いく記録が残せなかった。平面観察上は、白色粘土ブロックを含む黒色粘土の落ち込みとして認識でき、検出段階での新旧のわからない土壌群で、周辺一帯の土壌群と同様のものと判断されることを付記しておく。

以下では個別に記載するが、位置や規模等の属性については第4表に一覧した。

第687号土壌 (第26図)

西斜面の斜面下方、B-14グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸0.90m、短軸0.88m、深さ0.20mである。堆積土は粘性の強い黒色土の単層で、検出層位から縄文時代のものと判断され

るが、出土遺物はなく詳細な時期は不明である。

第688号土壙 (第26・31図)

西斜面の斜面下方、B-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.21m、短軸1.19m、深さ0.16mである。堆積土は粘性の強い黒褐色土の単層である。

遺物は後期前葉までの土器を少量含み、このうち1点を掲載した。第31図1は堀之内1式の口縁部破片で、小波状口縁直下に円文を複数配す。

出土遺物より、時期は後期前葉である。

第689号土壙 (第26・31図)

西斜面の斜面下方、B-13グリッドに位置し、B-13P1より古い。平面形は東西に長い長円形で、残存する規模は長軸1.26m、短軸0.97m、深さ0.45mである。堆積土は2層に分層し、下層で条痕文期の土器片がまとまって出土した。

第31図2～6が出土遺物で、いずれも早期後葉条痕文期のものである。2・3は口縁部、その他は胴部である。4は口端部に刻みがある。

出土遺物より、時期は早期後葉である。

第690号土壙 (第26図)

西斜面の斜面中腹、B-13グリッドに位置する。平面形は概ね円形で、規模は長軸1.50m、短軸1.35m、深さ0.33mである。堆積土は3層に分層でき、1・2層は粘性ある黒色土だが、3層はやや明るい暗褐色土である。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第691号土壙 (第26・31図)

西斜面の斜面中腹、B-13グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸1.26m、短軸1.14m、深さ0.47mで、掘り込み形状は浅い鉢状である。堆積土は2層に分層できた。

第31図7は頸部で括れ、胴部が張る堀之内2式の深鉢で、無文地に懸垂文が施される。

出土遺物より、時期は後期前葉であろう。

第692号土壙 (第26・31図)

西斜面の斜面下方、C-14グリッドに位置す

る。古墳時代の北の谷に隣接し、本遺構の方が古い。平面形は方形基調で、規模は長軸0.98m、短軸0.89m、深さ0.11mで、底面は平坦である。

出土遺物は第31図8～10に示した。8は加曾利B～曾谷式の深鉢で口端部は肥厚する。9の作りはかなり粗く、輪積痕を随所に残す。地文は無く、二本の並行沈線から2～3本の斜線を施す。10は紐線文土器で、8ともに加曾利B3～曾谷式と見られる。

出土遺物より、時期は後期中葉と見られる。

第694号土壙 (第26・31図)

調査区西端、西斜面の斜面下方のB-13グリッドに位置する。平面形は円形を基調としており、規模は長軸1.25m、短軸1.09m、深さ0.35mで、堆積土は2層に分層した。2層は有機物を含み、底面には木葉の薄層が堆積する。

出土遺物は第31図11～13に示した。11・12は堀之内2式の胴部破片で、11は沈線区画内を縄文で充填し、12には充填がない。13は外傾する口縁部が内屈し、屈曲部に沈線を巡らせている。

出土遺物より、時期は後期前葉である。

第695号土壙 (第26・31図)

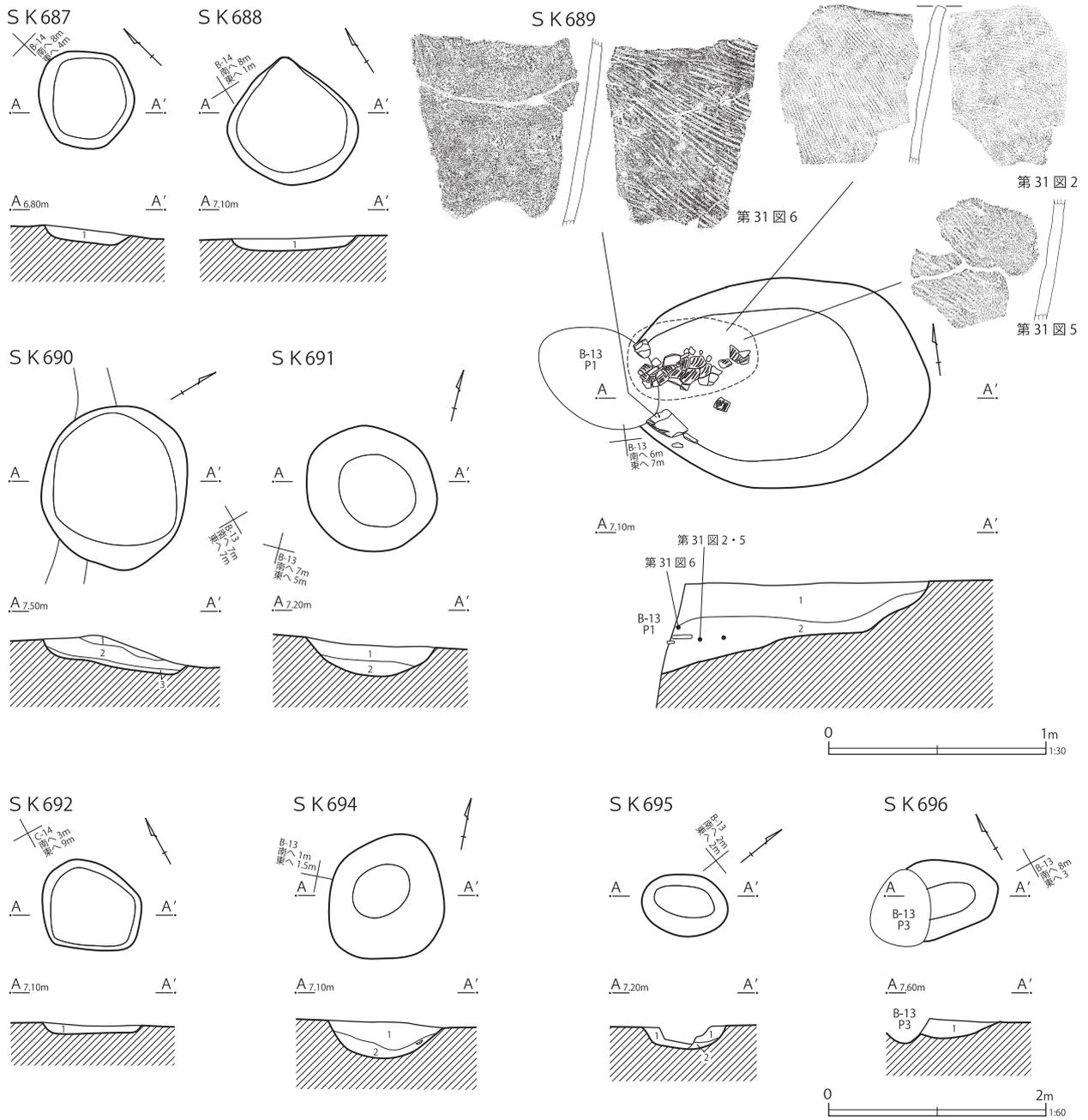
調査区西端、西斜面の斜面下方のB-13グリッドに位置する。平面形は長円形で、規模は長軸0.79m、短軸0.57m、深さ0.22mである。堆積土は2層に分層した。

出土遺物は第31図14・15に示した。14は無文地に三本単位の沈線で文様を描出する堀之内2式の深鉢である。15は内文を持つ堀之内2式の鉢で、口縁部内面に3本の沈線が巡る。

出土遺物より、時期は後期前葉以降と見られる。

第696号土壙 (第26図)

調査区西端、西斜面の斜面中腹のB-13グリッドに位置する。B-13P3より古い。平面形は長円形と推測され、残存部での規模は長軸0.66m、短軸0.73m、深さ0.15mで、堆積土は暗褐色土の単層である。



- S K 687
1 黒色土 粘性強い しまりあり 白色粘土粒微量 植物遺体少量
- S K 688
1 黒褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒微量 まこも少量
- S K 689
1 黒褐色土 粘性強い しまりあり 焼土粒 (φ 3~5mm) 少量
ローム粒 (φ 3mm) 少量
2 暗灰褐色土 粘性強い しまりあり ローム粒 (φ 5~8mm) 少量
- S K 690
1 黒褐色土 粘性あり しまりあり 焼土粒 (φ 2cm) 多量
2 黒褐色土 粘性あり しまりあり 灰色粘土粒 (φ 2cm) 少量
3 にぶい暗褐色土 粘性あり しまりあり 灰色粘土粒 (φ 2cm) 少量
- S K 691
1 暗褐色土 粘性あり しまり弱い 焼土粒 (φ 2mm) 微量
小枝・木片・木葉等が主体の層
2 黒褐色土 粘性強い しまりあり 小枝・木片・木葉等極微量
底面に木の葉が薄く堆積。

- S K 692
1 黒褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒 (φ 3mm) 微量
- S K 694
1 暗褐色土 粘性あり しまりあり 炭化物粒 (φ 2~5mm) 多量
ローム粒 (φ 2mm) 多量
2 暗褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒 (φ 2mm) 多量
炭化物粒 (φ 2~5mm) 少量 焼土粒 (φ 2mm) 少量
- S K 695
1 にぶい褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒 (φ 5mm) 少量
炭化物粒 (φ 2mm) 微量
2 黒褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒 (φ 3mm) 少量
炭化物粒 (φ 3mm) 少量
- S K 696
1 暗褐色土 粘性やや弱い しまりあり ローム粒 (φ 2~5mm) 少量
ガラガラして砂っぽい

第26図 土壇 (1)

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第697号土壙 (第27図)

西斜面の斜面下方、D-17グリッドに位置する。平面形は長方形で、底面は平坦である。規模は長軸1.23m、短軸0.79m、深さ0.28mで、堆積土は2層に分層した。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第698号土壙 (第27・32図)

調査区西端、西斜面の斜面中腹のB-13グリッドに位置する。第699号土壙と重複し、本遺構が古い。第699号土壙とは堆積土が似るが、ローム粒の多寡で分層した。平面形は円形で、規模は長軸0.97m、短軸0.83m、深さ0.20mである。

出土遺物を第32図16・17に示した。16は内屈する口縁部に沈線の巡る堀之内1式の口縁部である。17は肥厚した口縁部に押圧の加えられた土器で、後期安行式期の粗製深鉢と見られる。

出土遺物より、時期は後期後葉以降である。

第699号土壙 (第27図)

調査区西端、西斜面の斜面中腹のB-13グリッドに位置する。第698・704号土壙と重複する。第698号土壙よりも新しく、第704号土壙とは新旧不明である。平面形は長円形と見られ、残存部での規模は長軸0.56m、短軸0.52m、深さ0.18mである。堆積土は暗褐色土の単層で、出土遺物は無く、時期は不明である。

第701号土壙 (第27図)

調査区西端、西斜面の斜面中腹のB-13グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸0.74m、短軸0.73m、深さ0.28mで、断面形はボウル状である。堆積土は黒褐色土の単層である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第702号土壙 (第27・32図)

調査区西端、西斜面の斜面中腹のB-13グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸0.93m、短軸0.88m、深さ0.48mである。堆積土は黒褐色土の単層である。出土遺物は第32図18・19に示した。18

は口端部に沈線の巡る堀之内1式の深鉢で、19は口縁部に刻み隆帯の巡る堀之内2式の深鉢である。

出土遺物より、時期は後期前葉と見られる。

第703号土壙 (第27・32図)

調査区西端、西斜面の斜面下方のB-13グリッドに位置する。平面形は長円形で、規模は長軸1.88m、短軸0.81m、深さ0.27mである。堆積土は黒褐色土の単層である。底面からは加曾利B2式の深鉢がまとまって出土した。

出土遺物は第32図20~23に示した。20は大森タイプの加曾利B2式の平口縁深鉢で、外面にはスガべったりと付着している。胴部上半の屈曲部の円文を起点に弧線文を配す。屈曲部以下は無文帯を挟み、下部は斜線文を施す。21は口縁部が内側に肥厚する3単位波状口縁深鉢で、口縁部外面に沈線が巡る。頸部は横位沈線で区画し、区画内はLR縄文で充填する。加曾利B3式であろうか。22・23は口縁部内面に浅い幅広の沈線を持つ。22は口縁部に押圧による窪みと細かい刻列をもつ。23は口縁部に押圧隆帯を施し、下部に横位沈線を多段に配す。加曾利B2式であろう。

出土遺物より、時期は後期中~後葉であろう。

第704号土壙 (第27図)

調査区西端、西斜面の斜面中腹のB-13グリッドに位置する。第699号土壙と重複するが、新旧は明らかにできなかった。平面形は長円形と見られ、残存部での規模は長軸0.66m、短軸0.57m、深さ0.24mである。

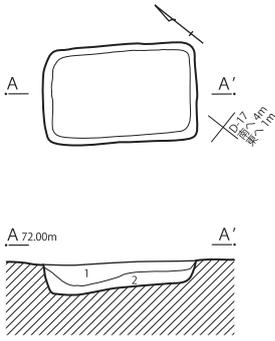
出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。

第706号土壙 (第27・32図)

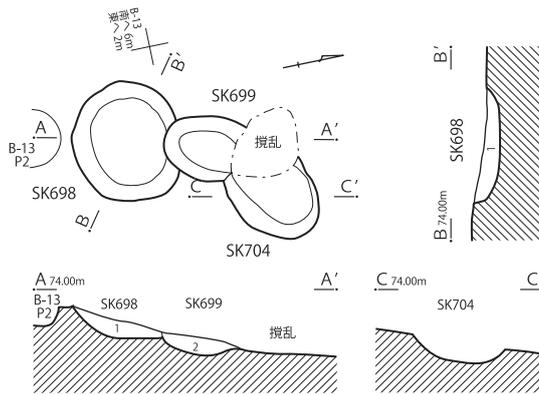
調査区東側、J-27グリッドに位置し、IV層の遺物包含層精査中に検出した。西側は調査時の側溝のため確認できなかった。

平面形は東西方向に長い長楕円形で、短辺側(A断面側)の壁は比較的急角度で立ち上がるが、B断面側では、特に2層と3層(遺物包含層、基本層IV層に同じ)の層界は不明瞭で、だらだらと立

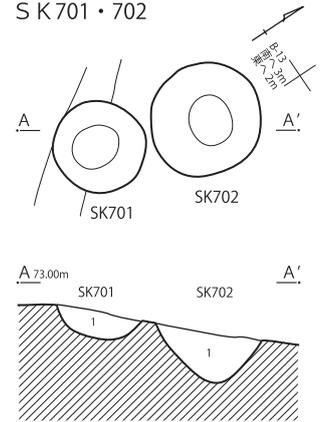
S K 697



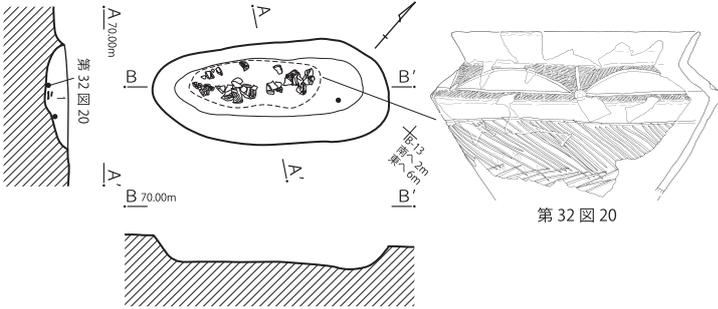
S K 698・699・704



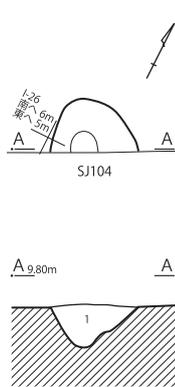
S K 701・702



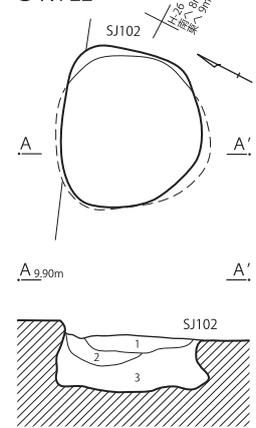
S K 703



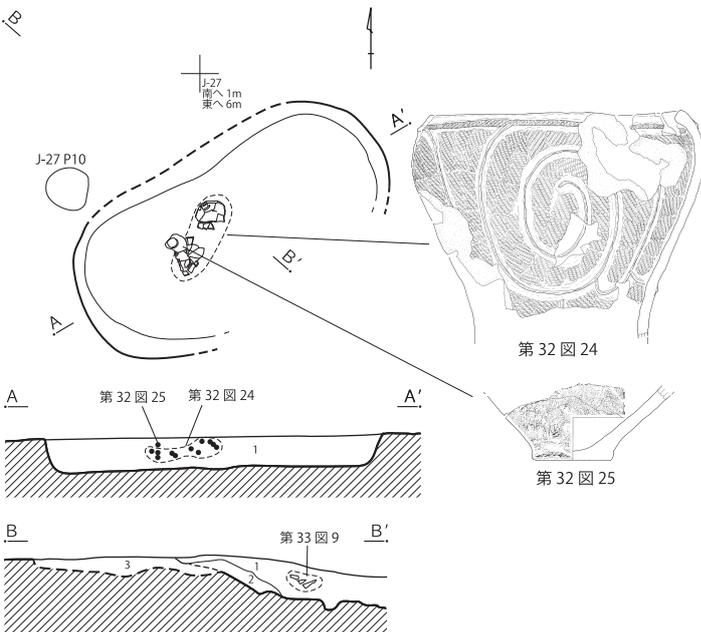
S K 718



S K 722



S K 706



S K 697

- 1 暗褐色土 粘性強い しまり弱い ローム粒 (φ 3mm) 少量
炭化物粒 (φ 3mm) 少量
- 2 暗褐色土 粘性強い しまり弱い
ロームブロック (φ 10cm) 多量
ローム粒 (φ 3mm) 中量

S K 698・699

- 1 暗褐色土 粘性あり しまりあり ローム粒 (φ 6mm) 多量
- 2 暗褐色土 粘性弱い しまりあり ローム粒 (φ 3mm) 微量

S K 701

- 1 黒褐色土 粘性あり しまりやや強い ローム粒 (φ 3mm) 中量

S K 702

- 1 黒褐色土 粘性弱い しまりあり ローム粒 (φ 3mm) 中量
焼土粒 (φ 3mm) 微量 炭化物粒 (φ 3mm) 微量

S K 703

- 1 黒褐色土 粘性弱い しまりあり ローム粒 (φ 2~5mm) 多量
炭化物粒 (φ 2mm) 少量 焼土粒 (φ 2mm) 少量
全体が砂っぽい

S K 706

- A-A'
- 1 黒褐色土 10YR シルト ローム (IIプラ) ブロック多量 酸化鉄少量
- B-B'
- 1 黒褐色土 10YR3/2 シルト 粘性あり しまりあまりなし 酸化鉄少量
 - 2 褐色土 10YR4/4 シルト 粘性あり しまりややあり 酸化鉄微量
ロームブロック少量
 - 3 褐色土 10YR4/4 シルト 粘性あり しまりややあり 酸化鉄微量
ロームブロック少量
※ 2層との層界不明瞭

S K 718

- 1 暗褐色土 10YR3/3 シルト 粘性やや強い しまりやや強い
焼土ブロック少量 黄褐色ブロック少量

S K 722 (SJ102の中)

- 1 暗褐色土 10YR3/3 シルト 粘性やや強い しまりやや強い 酸化鉄少量
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 シルト 粘性やや強い しまりやや強い 酸化鉄少量
ロームブロック少量
- 3 褐色土 10YR4/4 粘性やや強い しまりやや強い 酸化鉄少量
ロームブロック少量



第27図 土壌 (2)

ち上がりそのまま移行するように観察された。

規模は長軸2.67m、短軸1.45m、深さ0.33mで、底面は概ね平坦である。底面からやや浮いた高さで、加曾利EⅢ式の平口縁深鉢ほか（第32図24・25）が出土した。第32図24はキャリパー型の平口縁深鉢で、口縁部に縄文施文の隆帯が巡り、胴部には、断面三角形の微隆起線による渦巻文を配す。

遺構の時期は加曾利EⅢ式期で、本遺跡では数少ない当該期の遺構である。

第718号土壙（第27図）

調査区東側、I-26グリッドに位置し、古墳時代の第104号住居跡の精査中に、同住居跡の壁面で検出した。南側は不明だが、円形基調である。残存部での規模は長軸0.69m、短軸0.43m、深さ0.32mで、堆積土は暗褐色土の単層である。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明であるが、堆積土や重複状況より、縄文時代のものと判断した。詳細な時期は不明である。

第722号土壙（第27・32図）

調査区東側の台地部、H-26グリッドに位置する。古墳前期の第102号住居跡のトレンチ調査中に、床面下に重複する土壙状掘り込みとして検出した。同遺構とは堆積土も異なり、一部が住居外へ延びることから縄文時代の土壙と判断した。

平面形は円形で、断面形は筒状で下方が外へ広がる、いわゆるフラスコ形である。規模は長軸1.30m、短軸1.22m、深さ0.45mで、堆積土は3層に分層した。

遺物は第32図26・27に示した。ともに堀之内2式の平口縁深鉢で、26は沈線で曲線的なモチーフを描き、沈線区画内に縄文を充填するもの、27は縄文をもたないものである。

出土遺物より、時期は後期前葉である。

第729号土壙（第28・32図）

西斜面のD-18グリッド、遺物包含層D層を精査中に地山白色粘土ブロックの分布範囲として確認した。遺構の掘り込みは不鮮明ながら、この範

囲を半裁して下層を確認したところ、堆積土中より堀之内式の深鉢の大型破片を検出したため、土壙として認定した。平面形は不整な長円形で、規模は長軸1.54m、短軸0.91m、深さ0.18mである。堆積土は単層で、ベースとなる土は本遺構の基盤土となるE層と類似し、F層由来の白色粘土ブロックを多量に含んだ人為堆積土である。

出土遺物は第32図28～31に示した。28・29は堀之内1式の平口縁深鉢で同一個体である。胴部は膨らみ外反し、口縁部には一定間隔で円文が配され、これを繋ぐように沈線が巡る。胴部文様は円文を起点に二本単位の沈線による懸垂文が、縄文地に描出される。30は頸部の8字状貼付文を起点として、縄文地に並行沈線で文様が描出される堀之内2式である。31は肥厚する口縁部の沈線区画内に列点を充填するもので、胴部に地文は無く沈線のみで文様を描出する。

出土遺物より、時期は後期前葉であろう。

第743号土壙（第28・33図）

調査区東側の台地縁辺、I-28グリッドに位置し、基本層IV層の縄文時代包含層精査中に確認した。I-28P1・2と重複し、本遺構が古い。平面形は、東西にやや長い楕円形で、壁は全体的に開いて立ち上がる。底面はおおむね平坦だが、小規模なピットを2基持っている。規模は長軸2.35m、短軸1.63m、深さ0.58mで、堆積土は4層に分層できた。

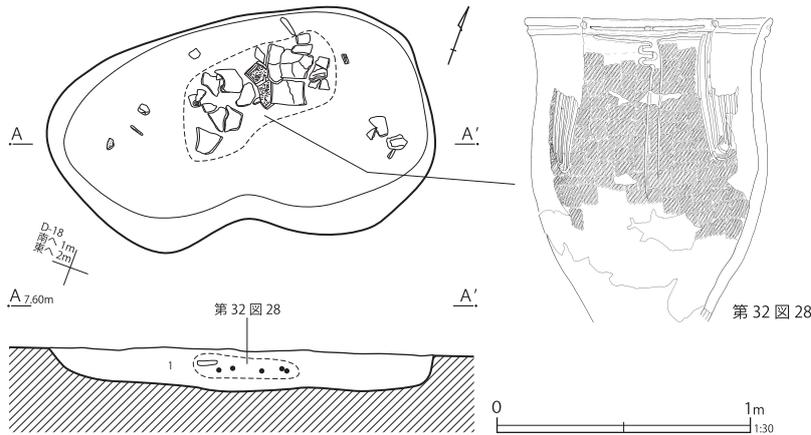
第33図32～35が出土遺物で、早期から中期初頭までの土器を含んでいる。32・33は早期条痕文系の土器で、34・35は本遺跡では数少ない五領ヶ台式の土器である。前者は焼成堅緻で、後者は砂粒を多く含む。

出土遺物より、時期は中期初頭以降であろう。

第744号土壙（第28・33図）

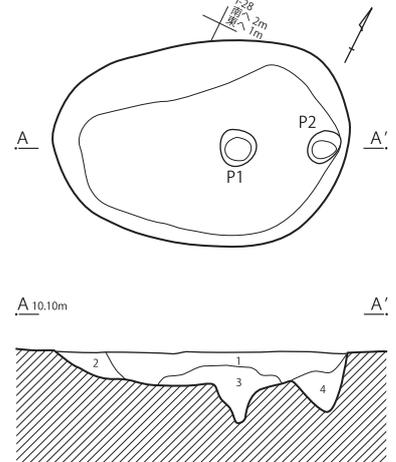
調査区東側の台地縁辺部、H-27グリッドに位置し、古墳時代の第111号住居跡の精査中に、南壁に隣接するこれより古い土壙状落ち込みとして

S K 729

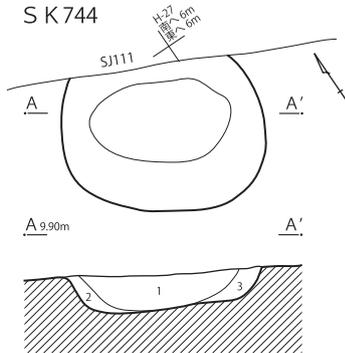


S K 729
1 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性あり しまりややあり
白色粘土ブロック多量 炭化物粒少量

S K 743

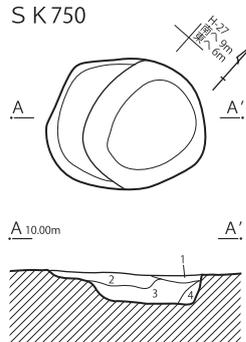


S K 744



S K 743
1 黒褐色土 10YR3/2 シルト 粘性あり しまりややあり
2 暗褐色土 10YR3/3 シルト 粘性あり しまりややあり
3 黒褐色土 10YR2/1 シルト 粘性あり しまりややあり ロームブロック少量
4 黒褐色土 10YR2/1 シルト 粘性あり しまりあり ロームブロック多量

S K 750



S K 744
1 褐灰色土 粘性あり しまりあり ローム粒 (1mm) 多量
2 褐灰色土 1層よりやや粘性強い
3 灰黄褐色土 地山よりしまりやや弱い 極めて地山に近い よくしまる

S K 750

1 灰黄褐色土 10YR4/2 シルト 粘性やや強い しまりやや強い 炭化物少量 黄褐色ブロック少量
2 暗褐色土 10YR3/3 シルト 粘性やや強い しまりやや強い 黄褐色地山ブロック少量
炭化物微量
3 にぶい黄褐色土 10YR4/3 シルト 粘性やや強い しまりやや強い 黄褐色ブロック少量
炭化物微量
4 暗褐色土 10YR3/4 シルト 粘性やや強い しまりやや強い 黄褐色ブロック少量
炭化物微量

K 751

1 黒褐色土 10YR2/3 シルト 粘性ややあり しまりあり 焼土ブロック少量 ロームブロック微量
2 暗褐色土 10YR3/4 シルト 粘性ややあり しまりあり ロームブロック多量
3 黒褐色土 10YR2/3 シルト 粘性ややあり しまりあり 焼土ブロック少量 ロームブロック少量
1層よりやや明るい
4 暗褐色土 10YR3/3 シルト 粘性ややあり しまりあり ロームブロック多量 焼土ブロック少量

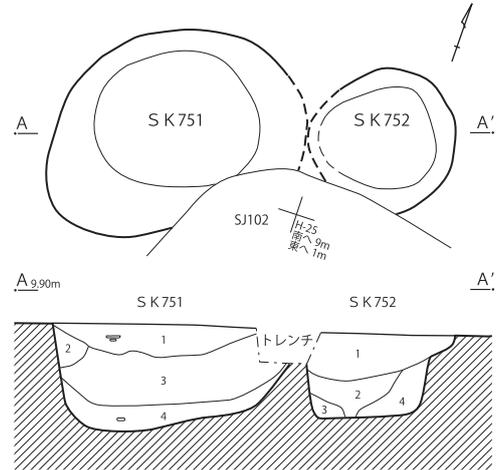
S K 752

1 黒褐色土 10YR2/3 シルト 粘性ややあり しまりあり 焼土ブロック少量 炭化物少量
ロームブロック微量
2 暗褐色土 10YR3/4 シルト 粘性あり しまりあり ローム粒やや多量
3 暗褐色土 10YR4/3 シルト 粘性あり しまりあり ロームブロック多量 ローム粒多量
4 暗褐色土 10YR3/4 シルト 粘性あり しまりあり ロームブロック多量 ローム粒多量

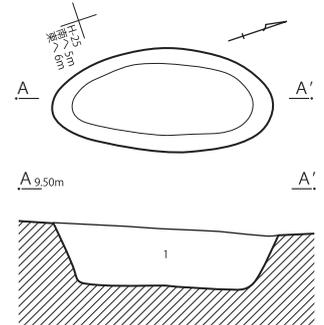
S K 753

1 黒褐色土 10YR3/1 粘性あり しまりあり ローム粒 (5~10mm) 多量 焼土粒 (5~10mm) 少量

S K 751・752



S K 753



第28図 土壙 (3)

検出した。平面形は東西にやや長い円形で、残存部の規模は長軸1.53m、短軸1.23m、深さ0.38mである。堆積土は3層に分層できるが、人為的な埋め戻し土と見られる。

出土遺物は第33図36～38に示した。早期条痕文から後期前葉までの土器を含んでいる。37は砂粒を多く含み、胎土や焼成は第743号土壙出土の第33図35に似る。縄文地に二本沈線で文様を描出する。地文はLR縄文の縦回転で、末端にS字状結節が見られる。38は節の細かい縄文地に横位、斜位の並行沈線が描出される土器で、わずかに列点も見られる。後期前葉であろうか。

出土遺物より、時期は後期前葉以降である。

第750号土壙 (第28図)

調査区東側の台地縁辺部、H・I-27グリッドに位置する。周辺の基本層IV層の遺物包含層精査中に検出した。平面形は楕円形で、底部には段差がついている。規模は長軸1.27m、短軸1.05m、深さ0.28mで、堆積土は4層に分層した。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。

第751号土壙 (第28・33図)

台地縁辺から東斜面にかけてのH-24・25に位置する。斜面包含層の精査中に第752号土壙とともに検出した。南側の一部は古墳前期の第107号住居跡に壊されている。平面形は楕円形で、掘り込みは比較的深い。規模は長軸2.12m、短軸1.38m、深さ0.85mで、堆積土は4層に分層した。

出土遺物は第33図39～43に示した。40は堀之内1式、39・41～43は堀之内2式である。39は接点のない胴部と底部の同一個体破片を図上で復元した。40は縄文地に竹管状工具(二本の並行沈線)で懸垂文、斜線文を描出する。42は波頂部に円孔、8字状貼付が縦列する。口縁部内面は折り返され帯状に肥厚する。

出土遺物より、時期は後期前葉であろう。

第752号土壙 (第28・33図)

台地縁辺から東斜面にかけてのH-25に位置す

る。当初、25ライントレンチの下面で存在を確認し、斜面包含層の精査中に第751号土壙とともに平面的に検出した。南側の一部は古墳前期の第107号住居跡に壊されている。平面形はおおむね円形で、第751号土壙同様に掘り込みは比較的深い。規模は長軸1.15m、短軸1.06m、深さ0.68m。堆積土は4層に分層でき、様相は第751号土壙に似る。

出土遺物は第33図44～46に示した。44・45は堀之内2式の口縁部と胴部の破片で、胎土や色調、焼成に加え、節の細かいLR縄文、集合沈線の施文状況等、同一個体と判断される。46は粗製のスクレイパーで、小型の扁平礫の端部を打撃し、鋭利となった縁辺を刃部としている。

出土遺物より、時期は後期前葉であろう。

第753号土壙 (第28・33図)

東斜面の斜面上部、H-25グリッドに位置する。斜面包含層精査後のE層上面で検出した。平面形は長円形で、長軸は等高線に直交する。規模は長軸1.75m、短軸0.83m、深さ0.55mで、堆積土は黒褐色土の単層である。

出土遺物は第33図47で、堀之内1式の破片である。出土遺物より、時期は後期前葉以降である。

第755号土壙 (第29・33図)

東斜面の斜面上部、G-23グリッドに位置する。斜面包含層精査後の地山上面で検出した。平面形は南北にやや長い楕円形で、規模は長軸1.35m、短軸0.96m、深さ0.35mである。

第33図48はチャート製の無茎平基の石鏃である。時期決定遺物はなく、詳細な時期は不明である。

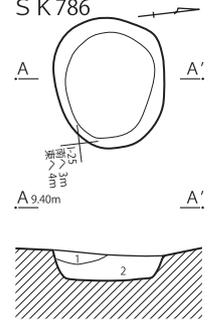
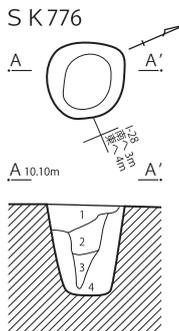
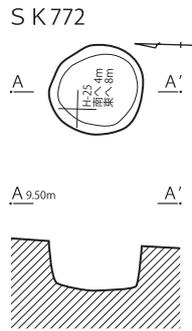
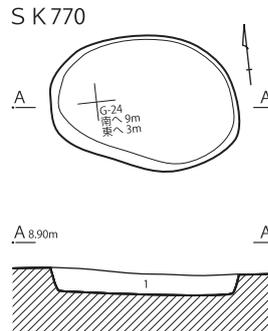
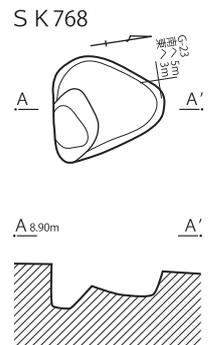
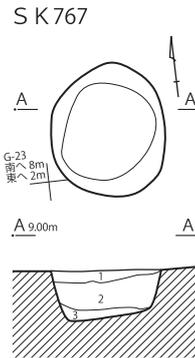
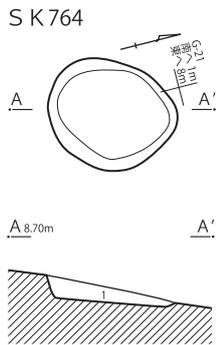
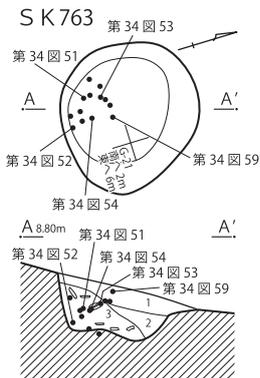
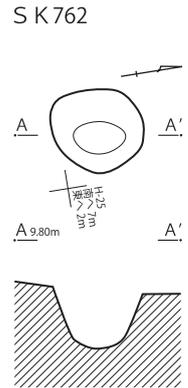
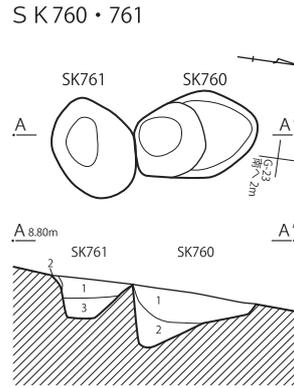
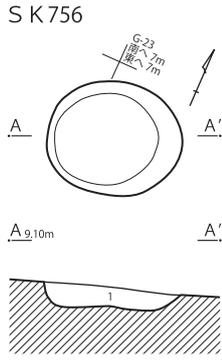
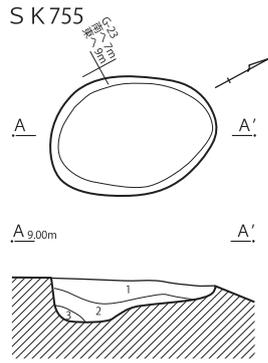
第756号土壙 (第29図)

東斜面の斜面上部、G-23グリッドに位置する。斜面包含層精査後の地山上面で検出した。平面形はおおむね円形で、規模は長軸1.08m、短軸0.91m、深さ0.24mである。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。

第760号土壙 (第29図)

東斜面の斜面上部、G-22・23グリッドに位置



S K 755
 1 黒褐色土 10YR3/2 粘性あり しまりあり ローム粒 (3~5mm) 多量
 2 灰黄褐色土 10YR4/2 粘性あり しまりあり ローム粒 (5~10mm)
 3 にぶい黄褐色土 10YR5/3 粘性あり しまりあり ロームブロックを
 主体とする 壁の崩落土

S K 756
 1 黒色土 10YR2/1 粘性やや強い しまりあり
 ロームブロック (20mm) 多量

S K 760
 1 黒色土 10YR2/1 粘性強い しまりあり
 ロームブロック (10~20mm) 多量 ローム粒 (3~5mm) 少量
 2 黒色土 10YR1.7/1 粘性強い しまりあり ローム粒 (5mm) 微量

S K 761
 1 黒色土 10YR1.7/1 粘性あり しまりあり ローム粒 (3~5mm) 少量
 炭化物粒 (3~5mm) 少量 焼土粒 (3~5mm) 少量
 2 黒褐色土 10YR2/2 粘性あり しまりあり ロームブロック (10mm) 多量
 3 黒褐色土 10YR3/2 粘性あり しまりあり ローム粒 (3~5mm) 多量
 ロームブロック (10mm) 多量

S K 763
 1 褐灰色土 10YR4/1 粘性やや強い しまりあり 焼土粒 (3mm) 微量
 炭化物粒 (5~10mm) 極微量
 2 褐灰色土 10YR4/1 粘性やや強い しまりあり
 ロームブロック (10~30mm) 多量
 3 黒褐色土 10YR3/1 粘性やや強い しまりあり ローム粒 (5mm) 少量

S K 764
 1 灰黄褐色土 10YR4/2

S K 767
 1 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 (5~20mm) 多量 ふかふか
 2 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 (5~20mm) 極多量 ふかふか
 3 黒色土 10YR2/1 粘性強い ロームブロック (20~30mm) 微量

S K 770
 1 灰黄褐色土 10YR4/2 黒褐色土が斑に混じる

S K 776
 1 褐灰色土 10YR4/1 粘性あり しまりあり ローム粒 (1mm) 多量
 2 黒色土 10YR2/1 粘性あり しまりあり ローム粒 (1mm) 微量
 やややわらかい 柱穴か
 3 黒褐色土 10YR3/1 粘性あり しまりあり ローム粒子 (1mm) 微量
 やややわらかい 柱穴か
 4 黒褐色土 10YR3/1 粘性あり しまりあり
 ロームブロック (10~20mm) 多量 埋戻し

S K 786
 1 褐色土 10YR4/4 粘性強い しまりあり ロームの埋戻しと思われる
 2 黒褐色土 10YR3/1 粘性強い しまりあり
 ロームブロック (10~20mm) 多量

※ S R 5 周溝底面で溝検出



第29図 土壙 (4)

する。隣接する第761号土壙とともに、斜面包含層除去後に検出した。平面形は南北に長い長円形で、底面は一部が深くなっている。規模は長軸0.98m、短軸0.69m、深さ0.49mで、堆積土は2層に分層した。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明だが、堆積土や周辺状況から、第761号土壙と同時期と推測される。

第761号土壙 (第29・33図)

東斜面の斜面上方、G-22・23グリッドに位置する。隣接する第760号土壙とともに、斜面包含層除去後に検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸0.82m、短軸0.65m、深さ0.35mである。堆積土は3層に分層した。

第33図49は、堀之内1式の平口縁深鉢で、口端部に沈線が巡り、無文地に二本単位の沈線で縦位の文様を描出する。

出土遺物より、時期は後期前葉である。

第762号土壙 (第29図)

東斜面の斜面上方、H-25グリッドに位置する。東斜面の斜面包含層除去後に検出した。平面形は、おおむね円形で、底面はやや丸底状である。規模は長軸0.77m、短軸0.67m、深さ0.50mである。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。

第763号土壙 (第29・34図)

東斜面の肩部、G-21グリッドに位置する。古墳時代の第18号土壙と重複し、一部を壊されている。平面形は楕円形で、規模は長軸1.22m、短軸1.11m、深さ0.55mである。堆積土は3層に分層でき、3層を中心に多量の遺物が出土している。

遺物は第34図50～59に示した。50～55は土器、56は土器片加工品、57～59は石器や石製品である。50～52は堀之内1式で、53～55は同2式である。56は土器片加工品で、素材は縄文後期（前葉か）の地文のみの胴部破片である。

57は破断面の縁辺利用の敲石である。元は断面方形の棒状礫と見られ、上下の破断面縁辺に潰れ

があり、下部では特に顕著である。58は打製石斧としたが定型的ではない。表裏に原礫面が残る小型の石材で、刃部は片面加工である。裏面刃部側の原礫面には線状痕を伴わない顕著な磨面がある。59は小型の石棒で上部は破損している。断面形は楕円形で、表裏は平坦に、側面は曲線に作り出す。端部にも欠損面にも研磨がある。

第764号土壙 (第29図)

東斜面の斜面上方、G-21グリッドに位置する。斜面包含層の除去後、地山上面で検出した。平面形は楕円形で底面は平坦である。長軸1.03m、短軸0.88m、深さ0.25mで、堆積土は灰黄褐色土の単層である。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。

第767号土壙 (第29図)

東斜面の斜面上方、G-23グリッドに位置する。第109号住居跡の床面下で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸1.07m、短軸0.90m、深さ0.40mである。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。

第768号土壙 (第29・34図)

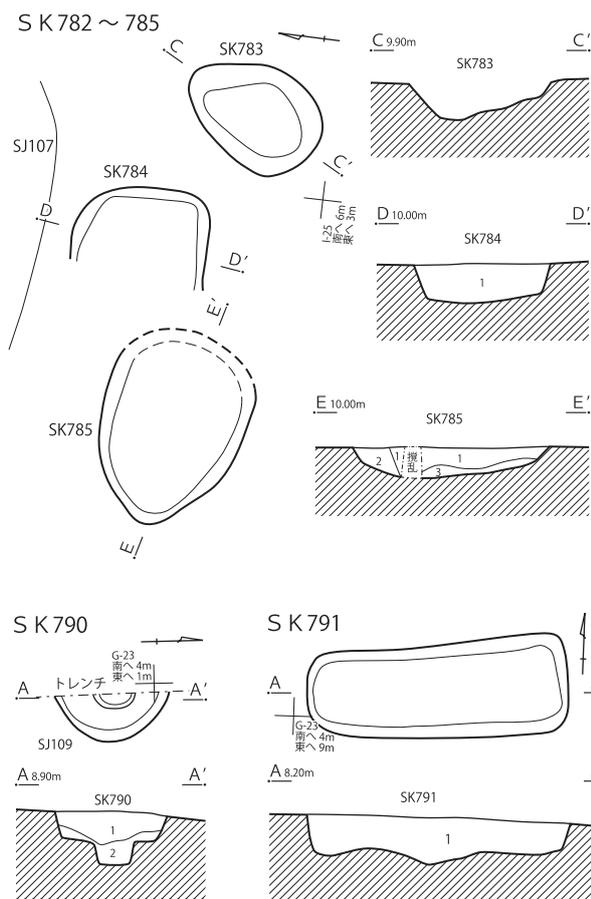
東斜面の斜面上方、G-23グリッドに位置する。第109号住居跡の床面下で検出した。平面形は楕円形で、底面は一部がピット状に深くなる。規模は長軸0.95m、短軸0.80m、深さは最深部で0.35mである。

遺物は第34図60・61に示した。それぞれ堀之内1式、同2式の破片である。61は8字状貼付と刻み隆帯を持つ口縁部である。

出土遺物より、時期は後期前葉とみられる。

第770号土壙 (第29図)

東斜面の中腹、G-24に位置し、斜面包含層除去後に検出した。平面形は東西にやや長い円形で、底面は平坦である。規模は長軸1.53m、短軸1.07m、深さ0.22mで、堆積土は灰黄褐色土の単層である。出土遺物は無く、詳細な時期は不明だが、検出状況から縄文後期前葉以前と考えられる。



第30図

第772号土壌 (第29図)

東斜面の斜面上部、H-25グリッドに位置する。斜面包含層精査後のE層上面で検出した。平面形はおおむね円形で、壁は垂直に立ち上がる。規模は長軸0.76m、短軸0.70m、深さ0.39mである。

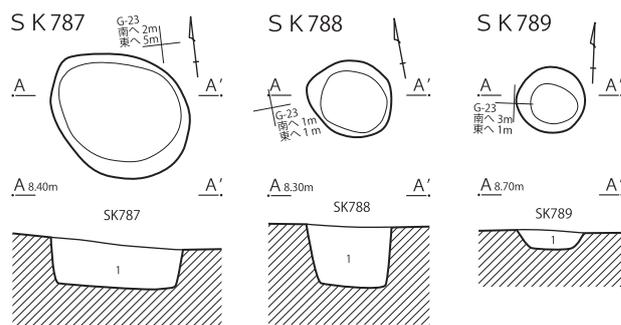
出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。

第776号土壌 (第29・34図)

調査区東側の台地縁辺、I-28に位置し、IV層の遺物包含層除去後に検出した。平面形はおおむね円形で、掘り込みは円筒状である。柱痕跡状の土層を確認でき、本来は柱穴として扱うべきものである。規模は長軸0.67m、短軸0.63m、深さ0.71mで、堆積土は4層に分層した。2・3層は柱痕跡で、4層は掘方であろう。

遺物は第34図62が出土した。口縁部の内面側がやや肥厚し、内側に稜をもつ無文の鉢である。

時期判別のできる遺物に乏しいが、後期前葉～中葉頃と見ておきたい。



SK 784

1 黒褐色土 10YR3/1 粘性あり しまりあり ローム粒 (5mm) 多量

SK 785

1 黒褐色土 10YR3/1 粘性あり しまりあり ローム粒 (2mm) 少量
2 灰黄褐色土 10YR5/2 粘性あり しまりあり ロームブロック主体
3 黒褐色土 10YR3/1 粘性あり しまりあり ロームブロック多量

SK 787

1 黒褐色土 10YR3/1 粘性あり しまりあり ロームブロック (5~10mm) 多量
※縄文包含層除去後に検出

SK 788

1 暗褐色土 10YR3/3 粘性あり しまりあり ローム粒 (3mm) 多量
※縄文包含層除去後に検出

SK 789

1 黒褐色土 10YR3/1 粘性あり しまりあり ローム粒 (3mm) 多量
※縄文包含層除去後に検出

SK 790

1 暗褐色土 10YR3/3 粘性あり しまりあり ローム粒 (3~5mm) 少量
2 黒褐色土 10YR2/3 粘性あり しまりあり ロームブロック (20~30mm) 多量

SK 791

1 黒色土 10YR1.7/1 粘性あり しまりあり ローム粒 (5mm) 少量
炭化物粒 (3mm) 少量
※縄文包含層除去後に検出



土壌 (5)

第783~785号土壌 (第30・34図)

第5号方形周溝墓の盛土下で検出した。第785号土壌で加曽利B式の破片が出土したが、それ以外の時期を判断する遺物に乏しい。縄文後期前葉と見られる第122号住居跡の堆積土を掘り込む状況から、縄文後期中葉以降であろうが、古墳時代に属する可能性を否定はできない。

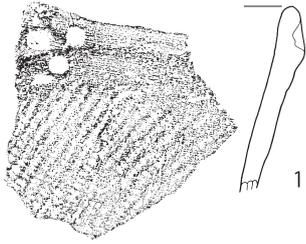
しかしながら、周囲の遺構の分布状況や堆積土の状況から、縄文時代の遺構と判断して、以下に報告する。

第783号土壌 (第30図)

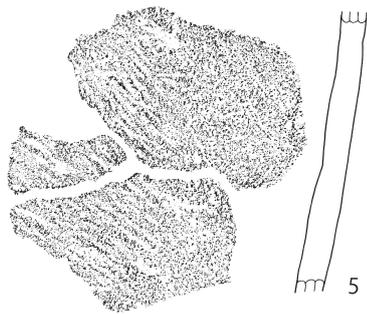
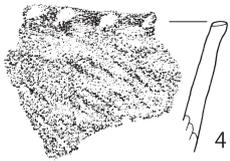
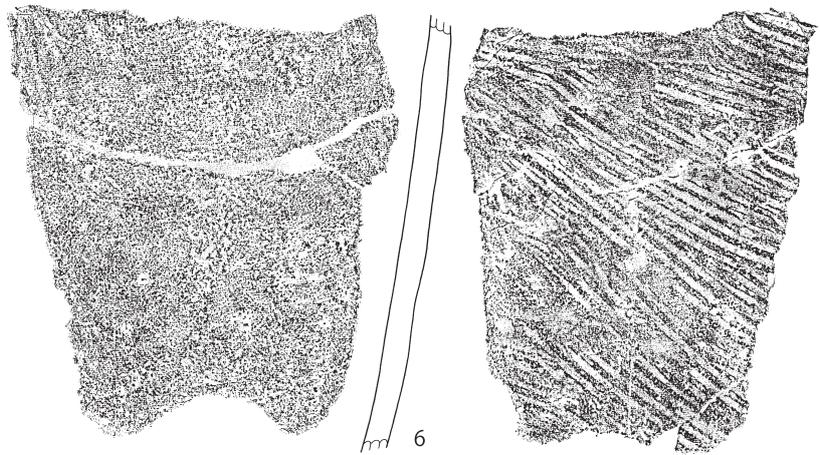
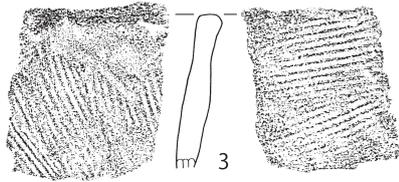
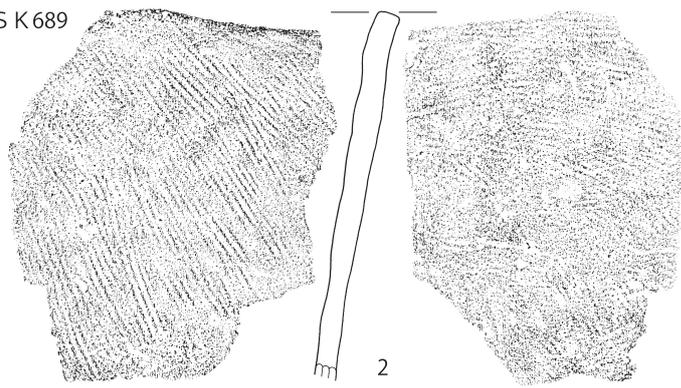
I-25グリッドに位置し、第5号方形周溝墓の盛土下面で検出した。古墳時代の第53号溝跡と重複する。平面形は南北にやや長い楕円形で、底面は乱れている。規模は長軸1.12m、短軸0.77m、深さ0.33mである。

出土遺物はなく、層位的な状況と堆積土から縄文時代と判断した。詳細な時期は不明である。

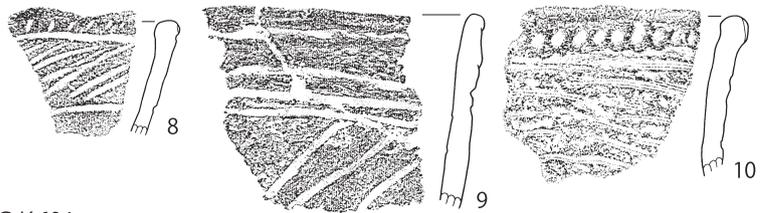
S K 688



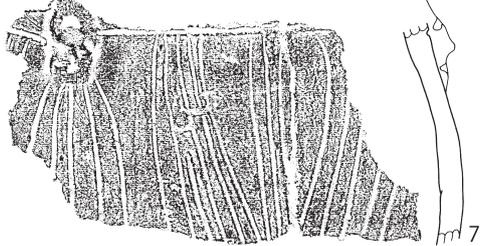
S K 689



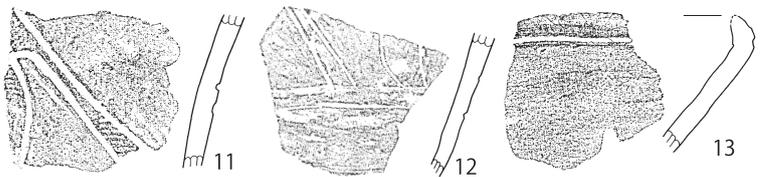
S K 692



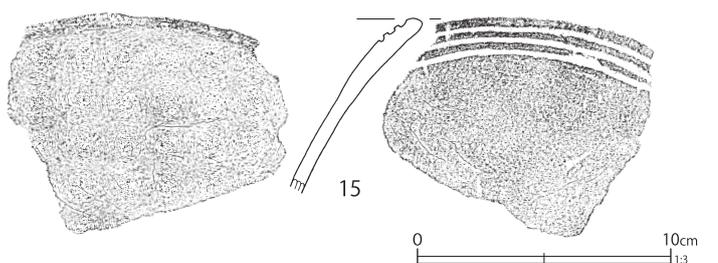
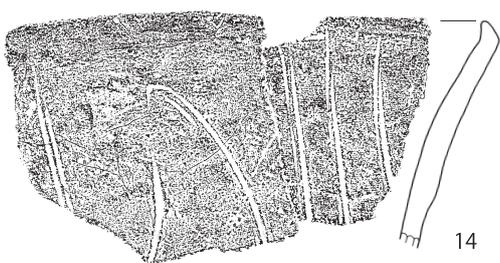
S K 691



S K 694



S K 695

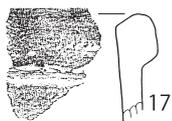


第31図 土壙出土遺物 (1)

S K 698

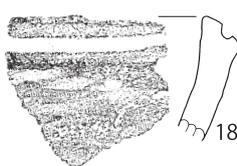


16

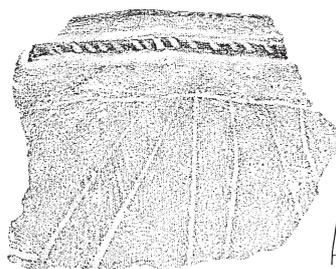


17

S K 702

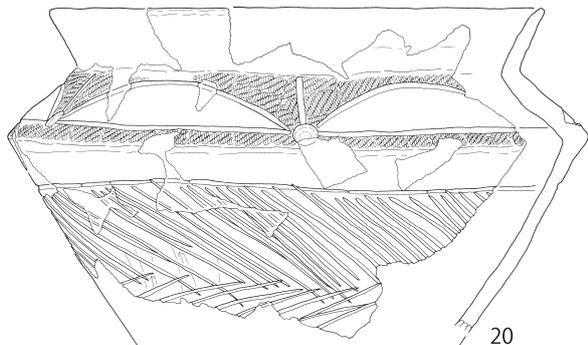


18

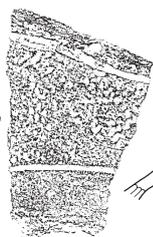


19

S K 703



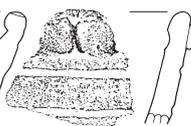
20



21

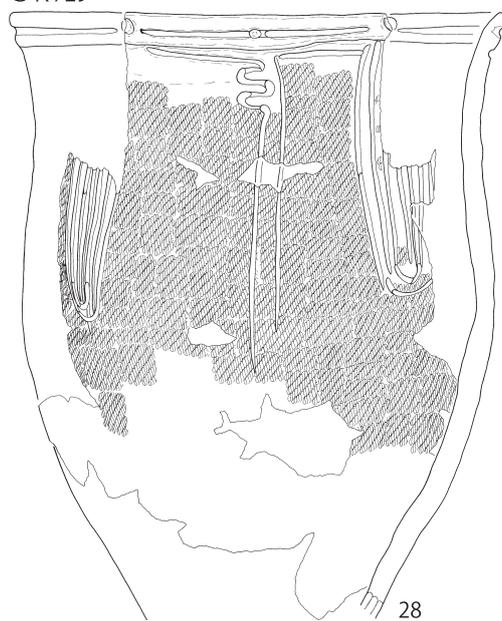


22



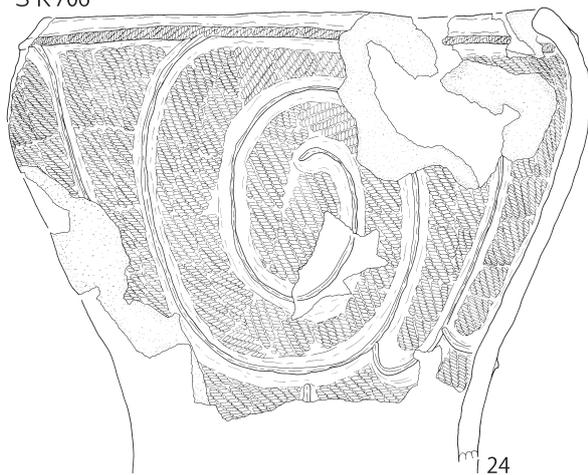
23

S K 729

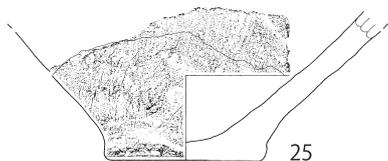


28

S K 706

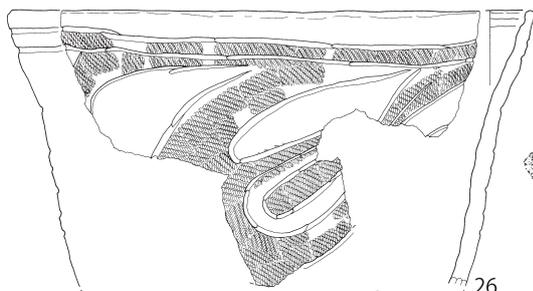


24

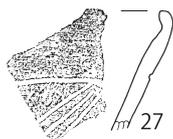


25

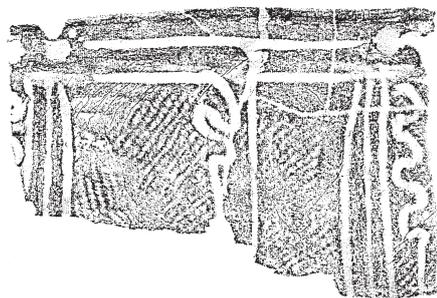
S K 722



26



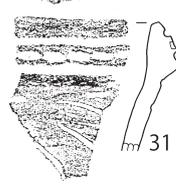
27



29



30



31

20 · 24 ~ 26 · 28

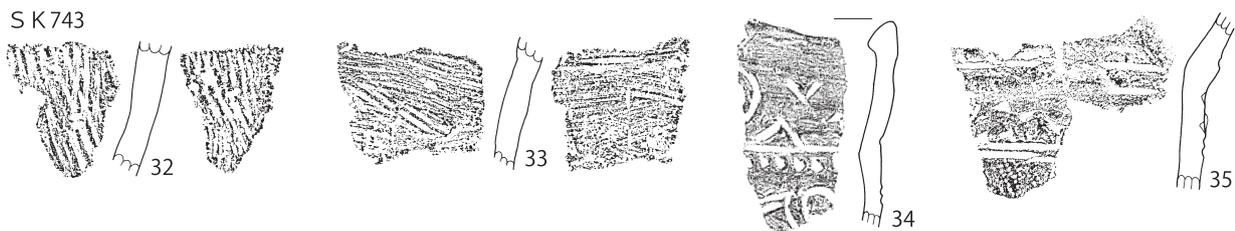
0 10cm 1/4

16 ~ 19 · 21 ~ 23 · 27 · 29 ~ 31

0 10cm 1/3

第32図 土壙出土遺物(2)

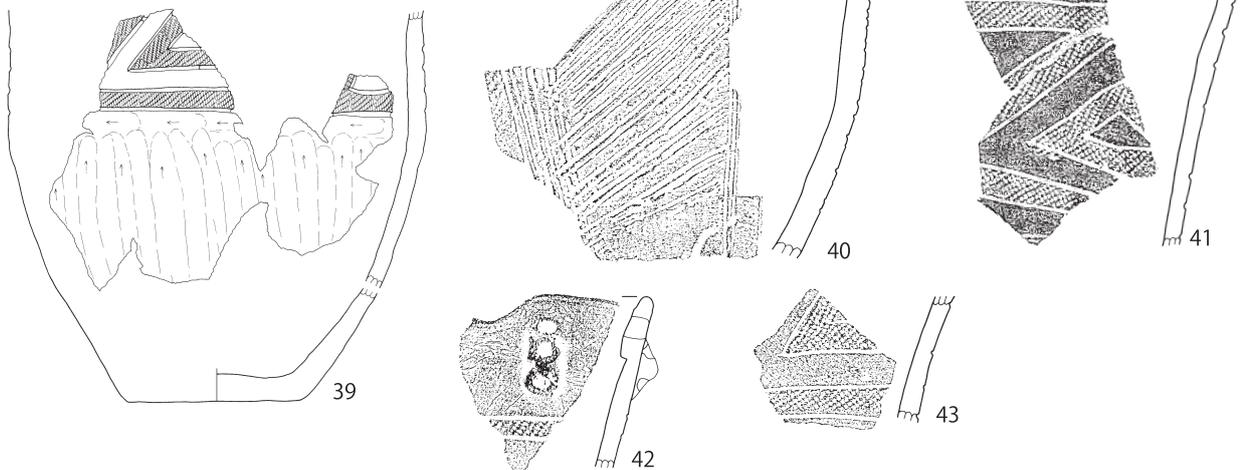
S K 743



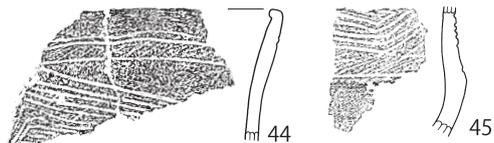
S K 744



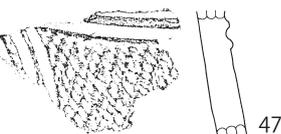
S K 751



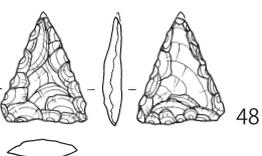
S K 752



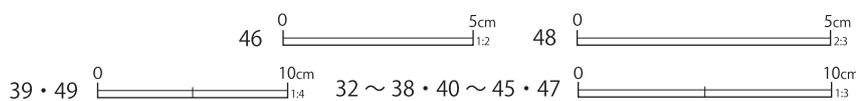
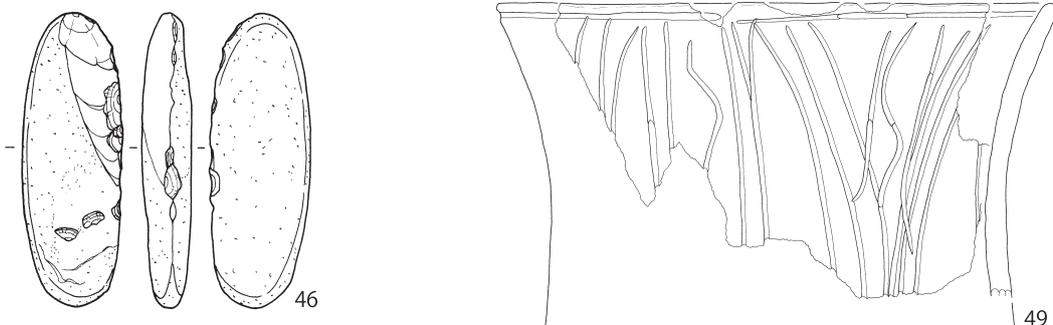
S K 753



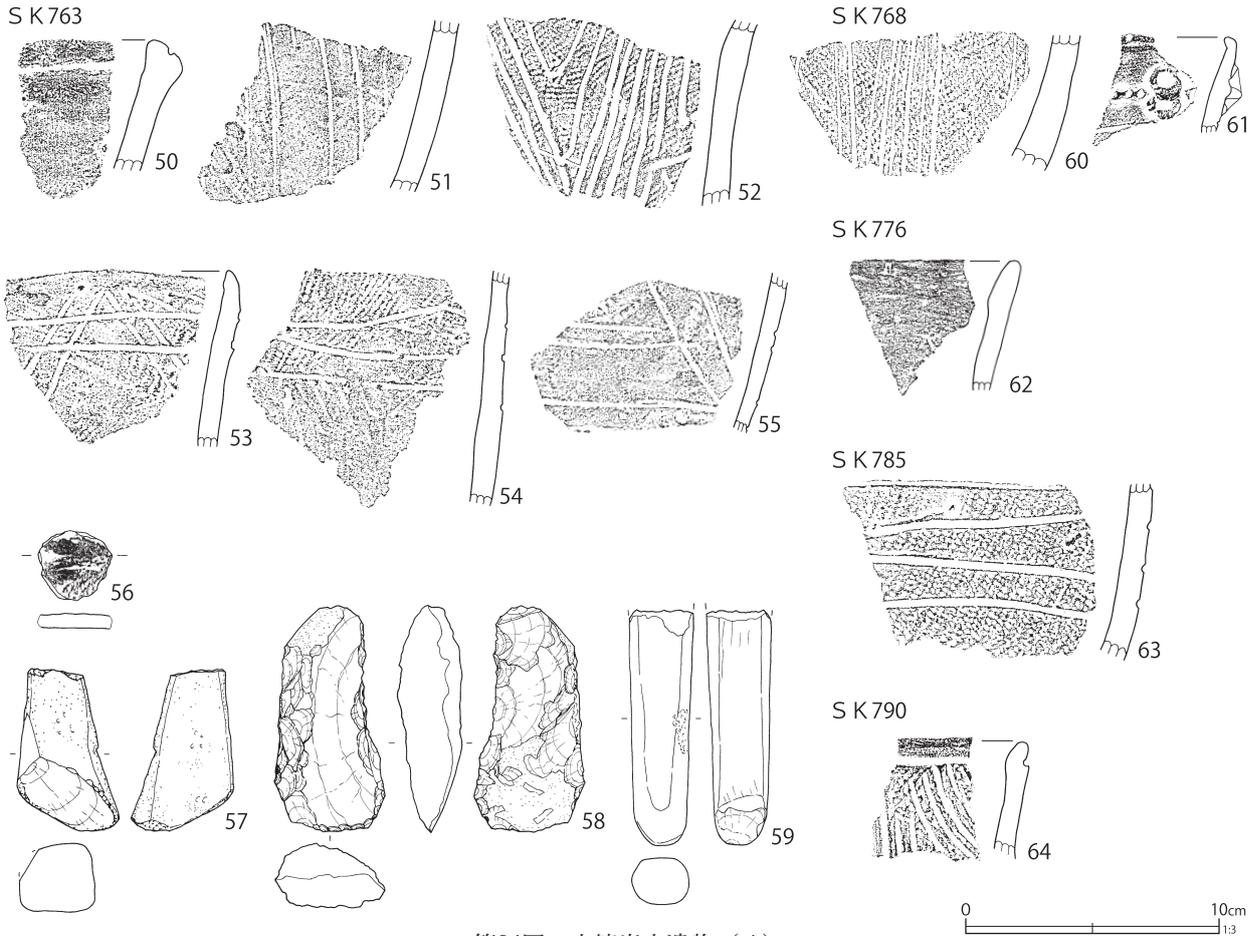
S K 755



S K 761



第33図 土壙出土遺物 (3)



第34図 土壙出土遺物（4）

第784号土壙（第30図）

第5号方形周溝墓の盛土下面、I-25グリッドに位置する。方形周溝墓の盛土を断ち割るトレンチの土層観察で確認した。西側は不明瞭でトレンチ調査の過程で検出できなかった。古墳時代の第53号溝跡と重複するほか、第121号住居跡と重複する。残存する範囲での平面形は方形基調と見られ、底面は平坦である。規模は南北1.09m、東西は残存部で0.73m、深さ0.30mである。

出土遺物はなく、層位的な状況と堆積土から縄文時代と判断した。詳細な時期は不明である。

第785号土壙（第30・34図）

第5号方形周溝墓の盛土下面、I-25グリッドに位置する。平面形は東西にやや長い楕円形で、規模は長軸1.59m、短軸1.15m、深さ0.25mである。堆積土は3層に分層した。

第34図63が出土遺物で、縄文地に横位沈線を施

す加曽利B2式である。

出土遺物より、時期は後期中葉以降であろう。

第786号土壙（第29図）

台地の縁辺、I-25グリッドに位置し、第107号住居跡の下面（第5号方形周溝墓の周溝部底面）で検出した。平面形は楕円形で、底面は平坦である。規模は長軸1.05m、短軸0.89m、深さ0.24mで、堆積土は2層に分層した。

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

第787号土壙（第30図）

東斜面の斜面上部、G-23グリッドに位置する。斜面包含層除去後のE層上面で検出した。平面形は楕円形で、壁立ち上がりは垂直に近く、底面は平坦である。規模は長軸1.19m、短軸0.96m、深さ0.40mで、堆積土は黒褐色土の単層である。出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、縄文時代の遺物包含層の除去後に検出した

ことから、本節の対象とした。

第788号土壌 (第30図)

東斜面の斜面上部、G-23グリッドに位置する。斜面包含層除去後のE層上面で検出した。平面形はおおむね円形で、断面形は円筒形である。規模は長軸0.71m、短軸0.61m、深さ0.50mで、堆積土は暗褐色土の単層である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第789号土壌 (第30図)

東斜面の斜面上部、G-23グリッドに位置する。斜面包含層除去後のE層上面で検出した。

中世以降の第46号溝跡とは平面上は重複するが、掘り込み面が異なる。平面形は円形で、断面形は浅い皿状である。規模は長軸0.55m、短軸0.52m、深さ0.15mで、堆積土は暗褐色土の単層である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第790号土壌 (第30・34図)

東斜面上方、G-23グリッドに位置する。東斜面の土層堆積状況を確認する23ライントレンチの断面観察中に、落ち込みとして検出したため、西側半分は失われている。平面形は円形基調と見られ、底面中央にピット状の落ち込みがあり、柱穴として理解する方が適当かもしれない。

残存する範囲での規模は、長軸0.90m、短軸0.39mで、最深部の深さは0.40mで、堆積土は上下2層に分層した。

出土遺物は第34図64で、口端部に沈線が巡る堀之内1式の平口縁深鉢で、縄文地に竹管状工具による二本一対の平行沈線で文様を描出する。

出土遺物より、時期は縄文後期前葉である。

第791号土壌 (第30図)

東斜面の中腹、G-23・24グリッドに位置する長方形の土壌である。斜面包含層除去後の、E層上面で検出した。平面形は東西に長い長方形で、底面はやや乱れる。規模は長軸2.06m、短軸0.80m、深さ0.32mで、堆積土は黒色土の単層である。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明である。

東の谷周辺の土壌群

第725号土壌 (第35・36図)

東の谷右岸、F-20グリッドに位置する。北向きの斜面上方に当たり、周辺地形はやや勾配が急である。縄文時代の斜面包含層を除去後、地山上面で検出した。掘り込み形状は、竪坑を掘った後、底面付近で奥側へ横穴状に延びている。横穴の位置と基盤の白色粘土層(F層)の位置が一致することから、粘土採掘坑の可能性がある。開口部での規模は、長軸0.95m、短軸0.78mの楕円形で、奥側にさらに0.3mほど掘り進めている。

出土遺物は無く、詳細な時期は不明であるが、谷の斜面という位置や層位的状況から、縄文後期以降と見られる。

第726号土壌 (第35・36・38図)

東の谷左岸、F-19グリッドに位置する。北向きの斜面上方に当たり、周辺はやや急勾配である。縄文時代の斜面包含層を除去後、地山上面で半円形の黒褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は半円形で底面は平坦である。規模は東西方向が1.82m、南北方向が1.73m、深さ0.48mである。

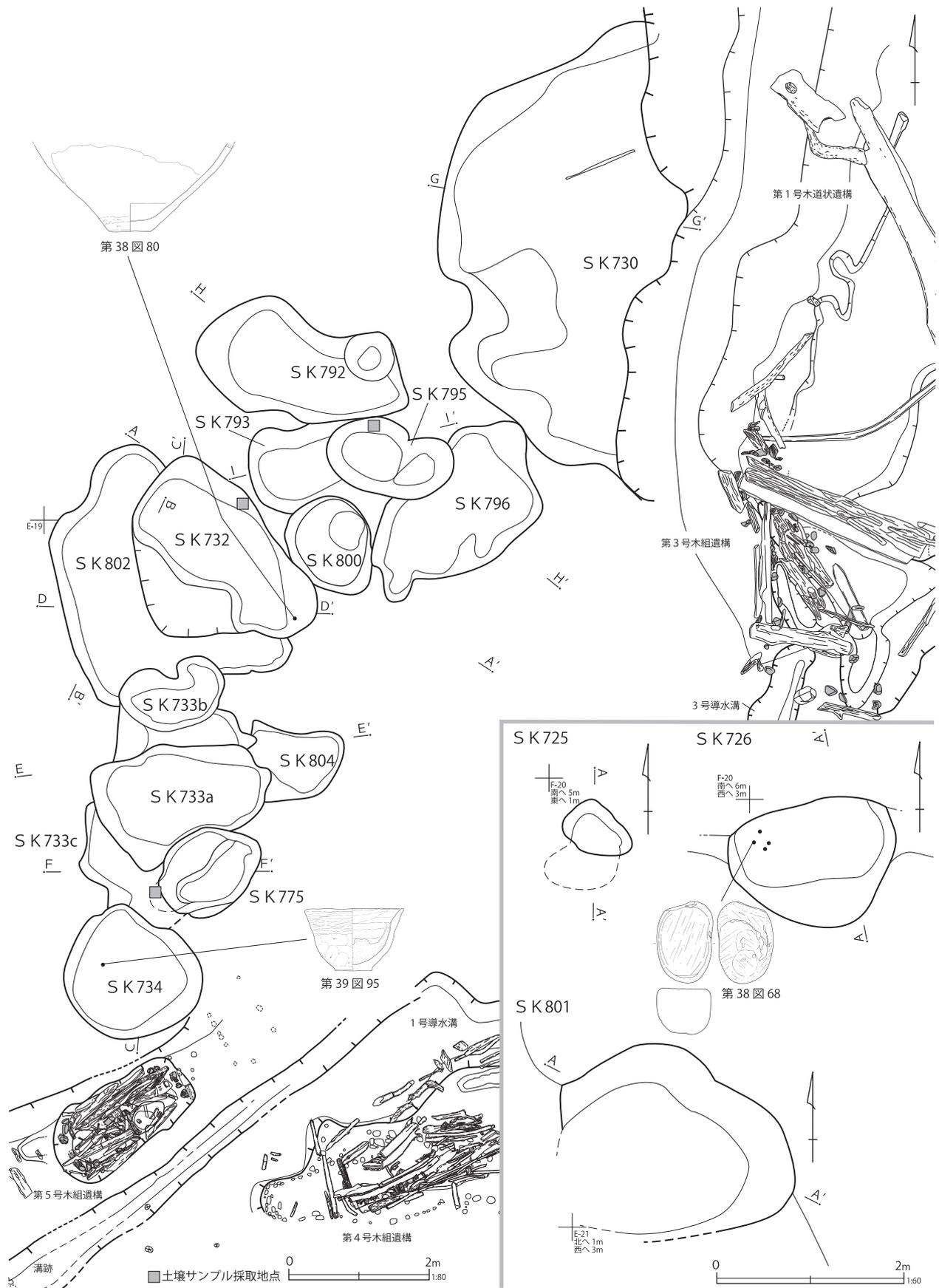
遺物は第38図65～68に示した。65は堀之内1式、66・67は晩期前葉～中葉の土器と見られ、67の砂粒を含む胎土や最終調整のケズリは安行3c式期のそれに似る。68は楕円礫利用の磨石で、使用面は2面でともに顕著である。

出土遺物より、時期は晩期中葉頃と見られる。

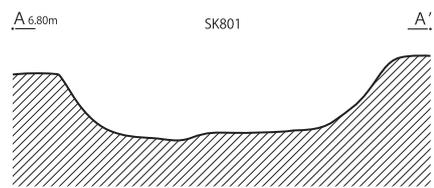
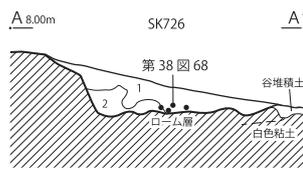
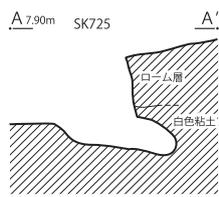
第730号土壌 (第35・36・38図)

東の谷左岸、D-19に位置し、西斜面から谷へ落ちる傾斜面中にある。東側は谷下流の開削部と接し急激に落ち込んでいる。

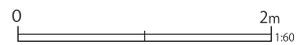
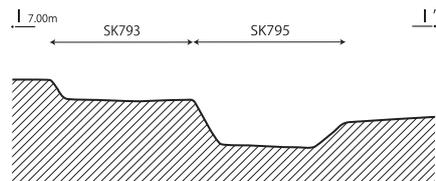
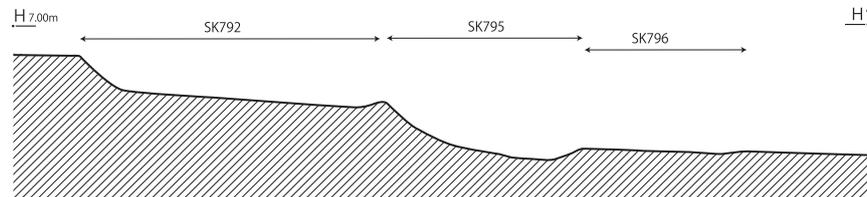
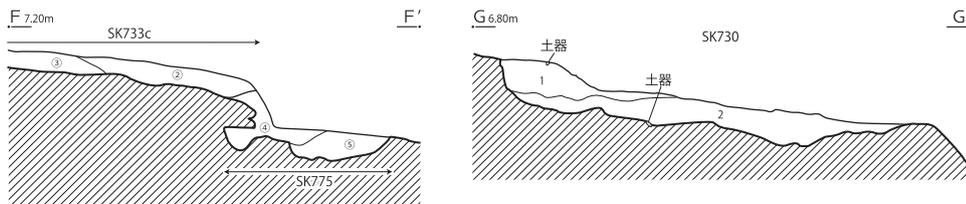
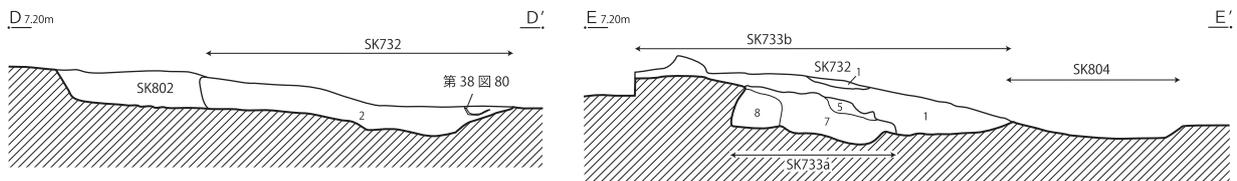
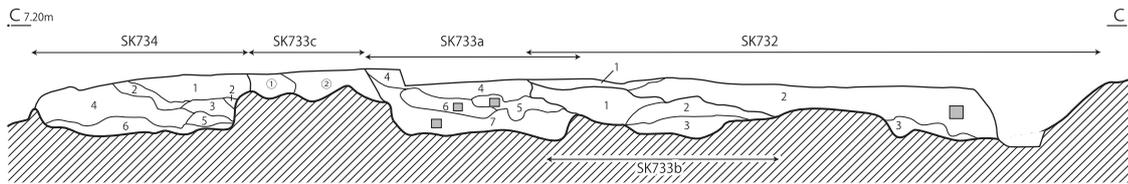
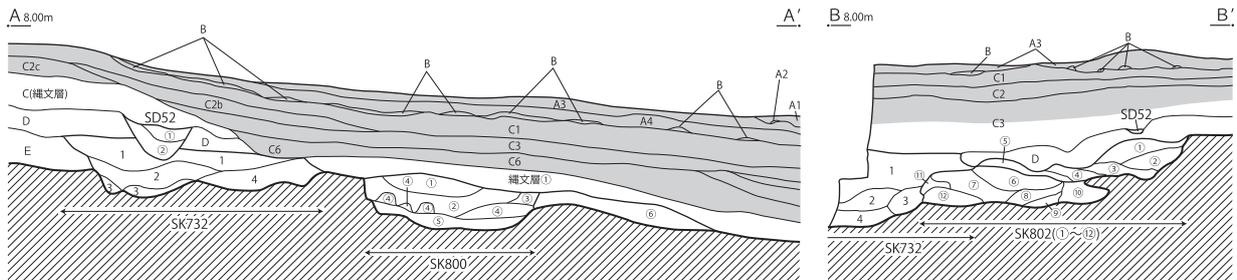
古墳時代の東の谷杭列を調査する際の断ち割りトレンチで、不明瞭な掘り込みとして断面観察で確認した後、谷の調査の過程で平面的に検出した。当初、南半は別の土壌(第731号土壌)としていたが、土層観察の結果、切り合いは無く堆積土が連続していたため、やや歪なひとつの大型の



第35図 土壙 (6)



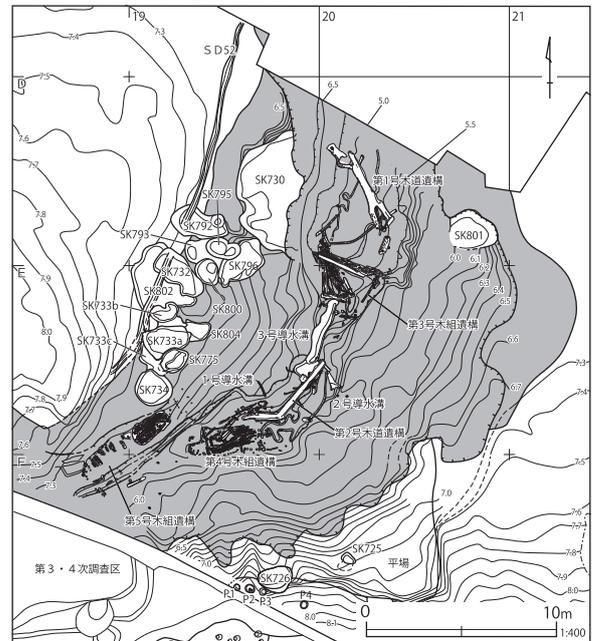
SK726
 1 黒褐色土 10YR2/3 シルト 粘性あり しまりややあり
 ローム粒・ブロックともに多量
 2 褐色土 10YR4/4 褐色ロームブロック集積層
 黒褐色(10YR2/3)シルト土多量



第36図 土壌 (7)

- A-A'
 S K 732
- 1 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性強い しまりあり
基本層E層との相違はないが、掘り込み層位との原理上分層
 - 2 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性強い しまりあまりなし 基本層E層に似るが、地山G層ブロックを少量含む
 - 3 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性強い しまりややあり
 - 4 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性強い しまりややあり 地山G層ブロック多量
- S K 800
- ① 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性強い しまりなし 地山Bブロック多量
 - ② 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性強い しまりなし 地山Aブロック少量
 - ③ 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性強い しまりなし
 - ④ 地山F層ブロックの層 様相はF層そのものだが下位に5層が挟在する
 - ⑤ 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性強い しまりなし 地山E層ブロック少量
- B-B'
 S K 802
- ① 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり D層ブロック少量
地山白色粘土ブロック微量
 - ② 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり 地山ブロック微量
 - ③ 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 地山ブロックやや多量
 - ④ 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり 地山ブロック微量
 - ⑤ 地山白色粘土ブロック集積層 粘性あり しまりあり 黒色(10YR1.7/1)粘土多量
 - ⑥ 黒褐色土 10YR3/2 粘土 粘性あり しまりあまりなし
 - ⑦ 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 黒色(10YR1.7/1)粘土ブロックやや多量 D層ブロック少量 地山白色粘土微量
 - ⑧ 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりあまりなし
地山白色粘土微量
 - ⑨ 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり
地山白色粘土ブロック多量
 - ⑩ 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり
地山白色粘土ブロック多量 地山白色粘土を横掘り
 - ⑪ 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり
地山白色粘土ブロック多量
 - ⑫ 地山白色粘土+橙色粘土集積層 地山と見紛うが下面に黒色(10YR2/1)粘土を層状に狭在
- S K 732
- 1 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり
地山白色粘土ブロック微量 炭化物微量 D層土に酷似
 - 2 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり
地山白色粘土ブロック少量 黒色(10YR1.7/1)粘土ブロック少量
 - 3 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりあまりなし
地山白色粘土+橙色粘土多量
 - 4 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりあまりなし
- C-C' ~ E-E'
 S K 732
- 1 黒褐色土 10YR2/3 粘土 粘性あり しまりなし 有機物多量
白色粘土ブロック微量 (E層由来)
 - 2 黒褐色土 10YR3/1 粘土 粘性あり しまりなし 白色粘土ブロック極多量
 - 3 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりなし 白色粘土ブロック少量
- S K 733b
- 1 黒褐色土 10YR2/3 粘土 粘性あり しまりなし 白色粘土ブロック少量
 - 2 黒褐色土 10YR3/2 粘土 粘性あり しまりなし 白色粘土ブロック少量 (D層由来か)
- S K 733a
- 3 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりなし 白色粘土ブロック少量
 - 4 黒褐色土 10YR3/2 粘土 粘性あり しまりなし
白色粘土ブロックやや多量
 - 5 黒褐色土 10YR3/2 粘土 粘性あり しまりなし 白色粘土入らず (D層由来か)
 - 6 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりなし 白色粘土ブロック極多量
 - 7 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりなし 白色粘土ブロック少量
 - 8 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりなし 白色粘土ブロック極多量

- C-C'・F-F'
 S K 733c
- ① 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性あまりなし しまりあり
白色粘土ブロック極多量
 - ② 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あまりなし しまりあり
白色粘土ブロック多量
 - ③ 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりあまりなし
白色粘土ブロック少量
- S K 775
- ④ 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりあまりなし
白色粘土ブロックやや多量 地山白色粘土を横掘りしている
 - ⑤ 黒色土 10YR1.7/1 シルト 粘性ややあり しまりややあり 有機物多量
白色粘土ブロック含まず
- S K 734
- 1 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性あり しまりあまりなし
白色粘土ブロック含まず
 - 2 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりあまりなし
白色粘土ブロック集積層
 - 3 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりあまりなし
白色粘土ブロック含まず
 - 4 黒褐色土 10YR3/2 粘土 粘性あり しまりあまりなし
白色粘土ブロック含まず (D層由来か)
 - 5 白色粘土ブロック集積層 粘性あり しまりあまりなし
 - 6 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性あり しまりあまりなし
白色粘土ブロック極多量
- G-G'
 S K 730
- 1 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりなし D層ブロック多量
白色粘土少量
 - 2 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性あり しまりなし 白色粘土ブロック極多量
人為堆積層



第37図 土壌(8)

土壌と改める。

平面形は、東の谷開削部側に開いた歪な半円形で、規模は長軸6.90m、短軸3.80m、深さ0.63mである。底面は多少の凹凸はあるが、大きく見て平坦である。堆積土は基本層F層の白色粘土やD層(後期前葉の包含層)ブロックを多く含んだ人為堆積土と見られる。粘性が高く、堆積土に木質遺物を含む等、谷の堆積土とも共通する。粘土採掘坑のほか、開削部や木道状遺構との位置関係から、水場遺構を構成する階段状の掘り込みの一部

である可能性も考えらえる。

遺物は第38図69~79に示した。69~77が土器で、78・79は土器片加工品である。

69・70は堀之内2式、71は加曾利B2式の紐線文土器である。72は曾谷式の鉢で口端部は内削ぎ状である。73・74は晩期安行式、75は後期後~末葉の条線文土器であろう。76・77は無文の粗製土器で、76は輪積痕が明瞭に残る素口縁の土器で、77は口縁部が外側に肥厚する、晩期安行式の土器であろう。

78の土器片加工品は、破断面の一端が鋭角になる。79は両側縁がやや括れ、内面に帯状の浅い剥落部がある。同様の資料に、西斜面第189図638や第191図677等がある。

出土遺物並びに層位的な状況から、縄文晩期前葉であろう。

第732号土壙 (第35～38図)

東の谷左岸、D・E-19グリッドに位置し、西斜面から谷へ落ちる傾斜面中にある。第6次調査でD層（縄文後期の包含層）に覆われる土壙として検出した。層位的状況から縄文時代の所産と見られたため、本格的な調査は第7次に実施した。

第733a・733b・800・802号土壙と重複し、第800号土壙と不明であるほかは、いずれの遺構よりも新しい。平面形は不整形で、底面も凹凸がある。規模は長軸3.02m、短軸2.21m、深さは最も深い地点で0.61mである。

堆積土はA・B断面ともに1～4層に分層した。黒色粘土を基本とし、白色粘土ブロックの多寡で細分される。B断面では判断が困難であったが、A断面ではD層が本遺構を完全に覆うことを確認した。

遺物は底面付近から鉢の大型底部破片（第38図80）が出土した。特徴に乏しく判然としないが後期後葉以降だろうか。このほか81～84の堀之内式、85・86の後期後葉以降の条線文や紐線文系土器が出土する。D層（後期前中葉）に覆われる層位的事実と一致しない。土壙の西側はD層が覆わないため、認識できなかったが、新しい別の土壙が重複していた可能性がある。層位的事実を重視し、時期は後期中葉以前と見ておきたい。

第733号土壙 (第35～37・39図)

東の谷左岸、E-19に位置し、西斜面から谷への緩斜面中にある。平面検出当初、ひとつの大型の土壙（第733号土壙）として調査を進めたが、断面観察や掘り込み形状から、別個の土壙と判断するに至った。すでに同名で遺物を取り上げてい

たため、事実記載はa～cの枝番を振った各土壙ごとに、遺物は第733号土壙一括として報告する。

第733a号土壙 (第36～39図)

平面形は東西に長い不整形で、規模は長軸2.48m、短軸1.66m、深さ0.50mである。堆積土はB・E断面で4～8層に分層した。黒色ないしは黒褐色粘土をベースとし、白色粘土ブロックの多寡で細分される。4・5層はD層由来の土層の可能性はある。分析は実施していないが5～7層で土壌サンプルを採取している。

第733b号土壙 (第35～37・39図)

平面形は東西に長い不整形で、規模は長軸1.51m・短軸0.92m・深さ0.68mである。堆積土はC断面で1～3層に分層した。黒色ないしは黒褐色粘土をベースとし、白色粘土ブロックの多寡で細分される。第733a号土壙4層との層界で帰属を分けたが、本土壙の1層から同層まで連続していたようにも見え、実態は不明である。

第733c号土壙 (第35～37・39図)

第733a号土壙や、第775号土壙と重複しており、平面形は不明瞭である。トレンチがあったため、東側は明らかにできなかった部分がある。規模は残存部での長軸2.12mで、深さ0.45mである。F断面③層が本土壙の掘り込みの埋土であるが、東側にはこれより古い③層が形成されていた。これが確認できなかった別の土壙か、単なる包含層かは明らかにできなかった。

第733号土壙の遺物は、分割できず一括で取り上げた。掲載遺物は第39図87～92に示す。87～90は土器、91・92は石器である。

87は堀之内1式、88は晩期中葉の深鉢である。89は晩期前～中葉頃の沈線区画内に列点を施す深鉢で、90はやはり同じ頃の、砲弾形の複合口縁の粗製深鉢であろう。

91は凹石としたが、表面はかなり丁寧な整形研磨があることから、大型石棒の破片の再利用と見られる。凹穴は2箇所確認でき、裏面は凹凸の凸

部を中心に擦れがあることから、設置状態での使用が考えられる。92は安山岩製の石皿の破片である。使用面は2面で、表面は磨面のみ、裏面は凹穴と磨面が形成される。

第734号土壙 (第35・36・39図)

東の谷左岸、E-19に位置する。土壙群中ではもっとも南側の位置にあり、第5号木組遺構とも至近の距離にある。北側で第733c号土壙と重複し、本遺構が新しい。平面形は土壙群中では比較的整った円形で、底面も大きな凹凸はない。規模は長軸1.97m、短軸1.80m、深さ0.49mである。

土壙の底面では鉢(第39図35)が出土した。型式的な特徴に乏しいが、確実に伴う遺物の少ない東の谷周辺の土壙群の中でも、土壙の時期を確実に示す遺物とみなされる。時期は縄文晩期であろうか。

遺物は第39図95~104に示す。96は勝坂式、97は称名寺2式、98・99は堀之内2式、100は曾谷式の鉢である。101は安行1式の台付鉢で、破断面の上部に外側一方向からの抉入があるほか、破断面の凸部に摩耗があり、土器片加工品の可能性がある。102は後期後葉~晩期前葉で103は深鉢の底部である。104は底部利用の土器片加工品である。

第775号土壙 (第35・37・39図)

東の谷左岸、E-19に位置し、西斜面から谷へ落ちる傾斜面中にある。平面的には第733a・733c号土壙とほとんど区別がつかず、積極的な新旧関係を言及しづらい。平面形は、不整ながら円形を基調とするが、底面はかなりの凹凸があり、南西部には横穴状の掘り込みがある。分析は実施していないものの、この付近で土壌サンプルを採取した。規模は、長軸1.77m・短軸1.18m・深さ0.87mである。堆積土は④・⑤の2層に分層し、④層は白色粘土を多く含んでいる。

遺物は第39図105~107に示した。105は阿玉台式、106は後期中~後葉の土器、107は胴部(無文・ケズリ)利用の土器片加工品である。

時期を示す遺物に乏しく詳細は不明だが、時期は後期後葉以降であろう。

第792号土壙 (第35・36図)

東の谷左岸、D-19に位置し、西斜面から谷へ落ちる緩斜面の、西斜面寄りにある。周辺のその他の土壙同様、白色粘土ブロックを含む黒色粘土ブロックの落ち込みとして、平面的に検出した。平面形は東西方向に長い楕円形で、北東部にピット状の掘り込みを持つ。規模は長軸3.15m、短軸1.72m、深さ0.42mである。

出土遺物はなく詳細な時期は不明だが、周辺の土壙群と同様、縄文後~晩期と見られる。

第793号土壙 (第35・36図)

東の谷左岸、D・E-19に位置し、西斜面から谷へ落ちる緩斜面にある。堆積土は周辺同様、白色粘土ブロックを含む黒色系の粘土である。平面形は円形基調と見られるが、隣接土壙と重複する東側は不明瞭である。規模は長軸1.26m、短軸1.14m、深さ0.18mである。

出土遺物はなく詳細な時期は不明だが、周辺の土壙群と同様、縄文後~晩期と見られる。

第795号土壙 (第36~39図)

東の谷左岸、D-19に位置し、西斜面から谷へ落ちる緩斜面にある。堆積土は周辺の土壙と類似し、白色粘土ブロックを含む黒色系の粘土である。平面形は円形土壙が連なる形だが、底面に段差はなく、ほぼ同じ高さで、斜面傾斜に沿うように、西が高く東が低い。規模は長軸1.79m、短軸1.09m、深さ0.48mである。

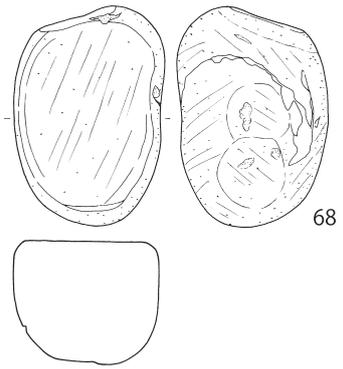
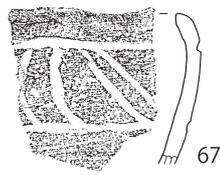
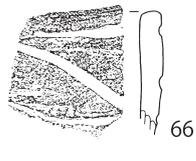
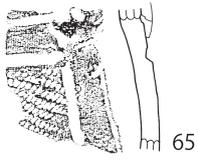
遺物は第39図108~110に示した。108は堀之内1式、109は晩期前葉の条線文だろうか。110は接合帯にキザミのある土器片で、型式的特徴に乏しいが、器壁や胎土・焼成等の特徴から、時期は堀之内1式であろう。

出土遺物より、時期は晩期前葉以降と見られる。

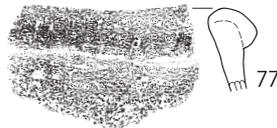
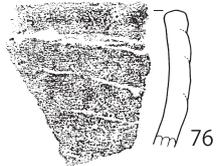
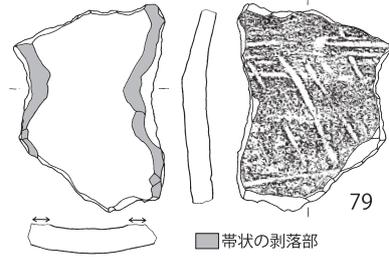
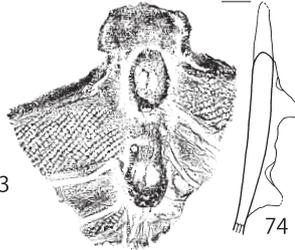
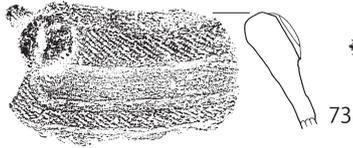
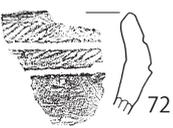
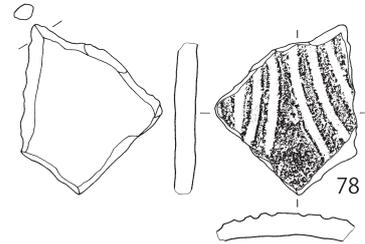
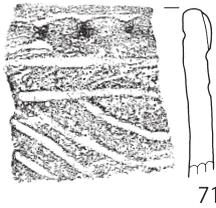
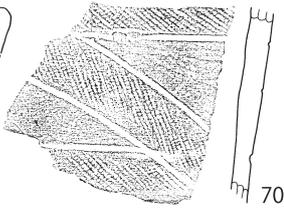
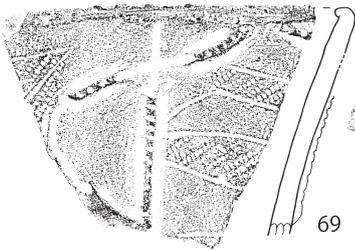
第796号土壙 (第35・36・39図)

東の谷左岸、D・E-19に位置し、西斜面から

S K726

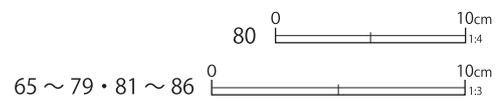
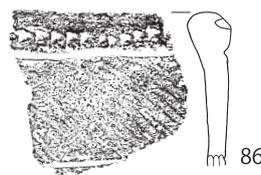
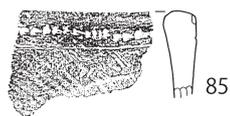
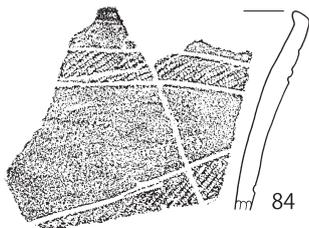
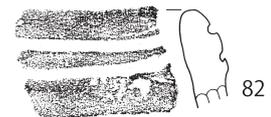
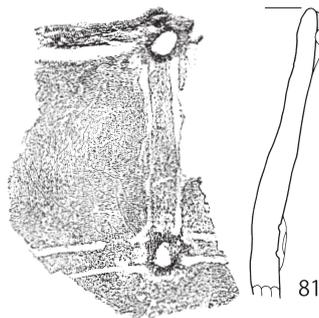
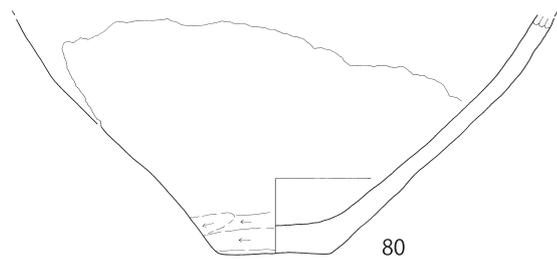


S K730



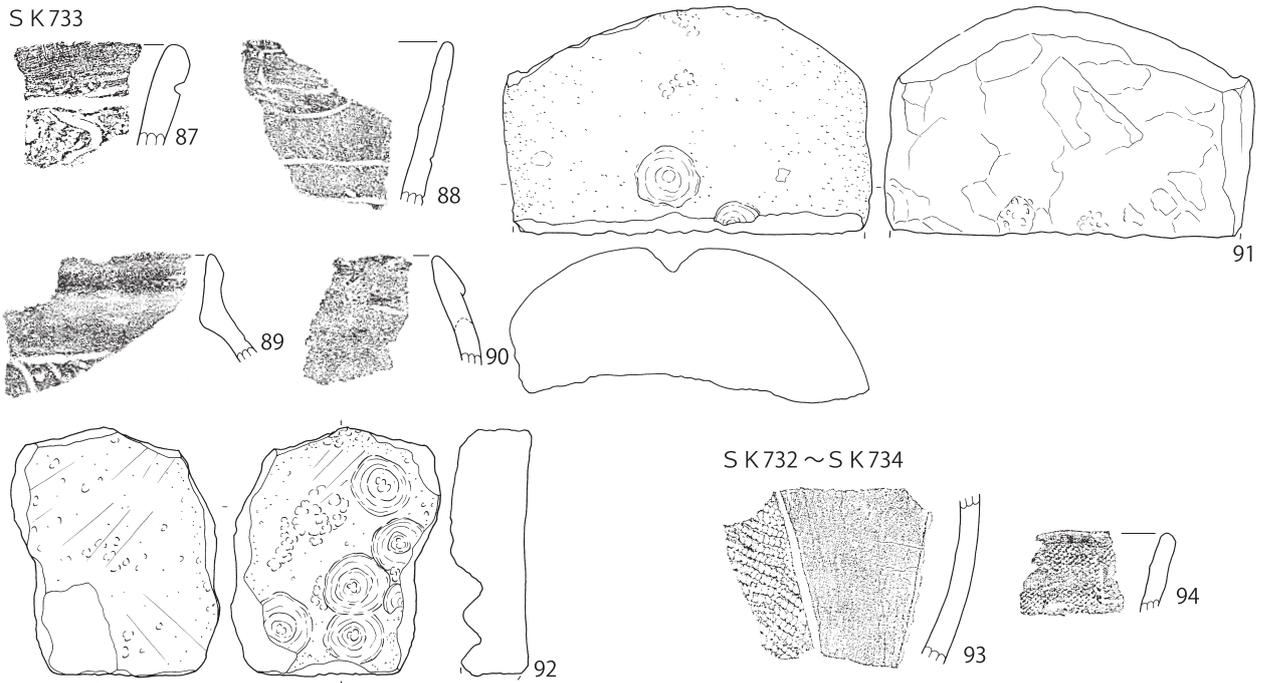
■ 带状の剥落部

S K732

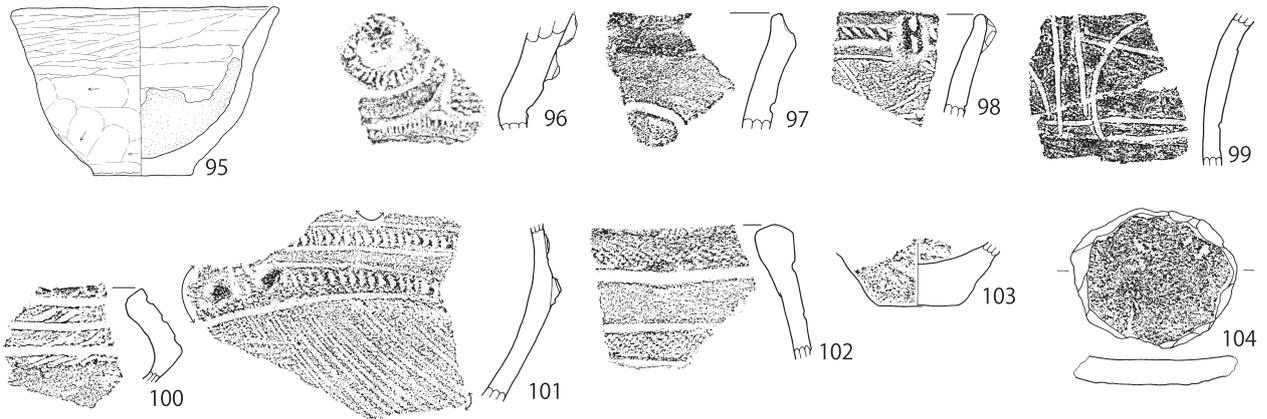


第38図 土壙出土遺物 (5)

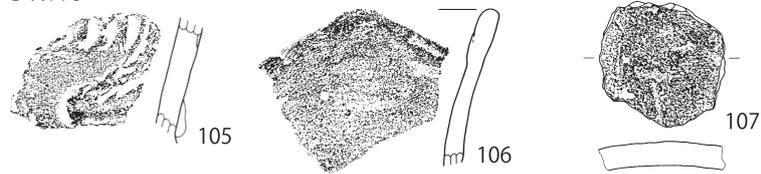
S K 733



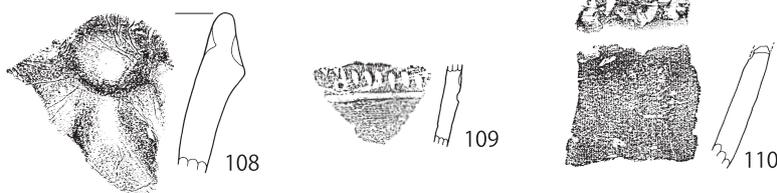
S K 734



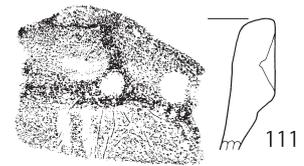
S K 775



S K 795



S K 796



95 0 10cm 1:4 87~94·96~111 0 10cm 1:3

第39図 土壙出土遺物(6)

谷へ落ちる緩斜面中にある。前述の理由により、掘り上げた状態でしか記録できなかったが、堆積土は周辺の土壌と類似する、白色粘土ブロックを含む黒色の粘土であった。平面形は北東から南西方向に長軸をもつ長楕円形で、輪郭は歪んでいる。規模は長軸3.14m、短軸1.67mで、深さ0.10mとごく浅い。

第39図111は出土遺物で、堀之内1式の波状口縁深鉢の波頂部である。出土遺物より、時期は縄文後期前葉以降と見られる。

第800号土壌 (第35～37図)

東の谷左岸、D・E-19に位置し、西斜面から谷へ落ちる緩斜面にある。東の谷の調査初期、谷の土層観察で、縄文時代の遺物包含層にパックされた土壌状掘り込みとして確認した。平面形は周辺土壌の中においては比較的整った円形で、規模は長軸1.47m、短軸1.21m、深さ0.42mである。

堆積土はA断面で①～⑤層に分層した。黒色粘土を基調とし、白色粘土ブロックの多寡で細分される。このうち④層は基本層F層の白色粘土層そのものであったが、地山との間に⑤層を挟むため、理論上分層した。

出土遺物はなく詳細な時期は不明だが、周辺の土壌群と同様、縄文後～晩期と見られる。

第801号土壌 (第35・36図)

東の谷右岸の下流側、E-20グリッドに位置する。谷の中でも流心部からは外れた、東斜面側に寄っている。谷調査の比較的初期に着手し、土壌と認識せぬまま、谷の堆積土とともに掘り上げたため土層の記録は無い。谷の堆積土とはほとんど区別できない黒色粘土層であった。

掘り上げた形状が土壌状となったものの、特に谷の右岸側では、斜面との境に0.5m前後の落差があったことから、しばらく土壌と認定していなかった。調査の進行に伴い、谷周囲の土壌群が認識されるに伴い、土壌状の掘り込みとするのが適当と判断されたため、調査終盤に土壌と認定した。

平面形は谷に向かって開く半円形で、形状はやや歪んでいる。規模は長軸2.70m、短軸は残存値で2.16m、深さ0.57mである。

前述の理由により堆積土の記録は無い。谷の堆積土と識別できなかったことから、谷の堆積土とともに埋没した可能性もある。

遺物は出土せず詳細な時期は不明であるが、層位的状況から、縄文後～晩期と見ておく。

第802号土壌 (第35・36図)

東の谷左岸、D・E-19に位置し、西斜面から谷へ落ちる緩斜面にある。第6次調査で、古墳時代の谷を調査する先行トレンチの土層観察で、D層(縄文後期の包含層)に覆われ、F層の白色粘土を横掘りする土壌状掘り込みとして検出した。層位的状況から縄文時代後期以前と見られたため、本格的調査は第7次で実施した。

平面形は不整形、規模は長軸3.77m、短軸3.26m、深さは深い地点で0.49m、浅い地点で0.29mで、複数の土壌を含んでいる可能性がある。

堆積土は、B断面で①～⑫層に分層した。黒色ないしは黒褐色土を基本とし、白色粘土ブロックや粒子の多寡で細分できる。⑤層と⑫層は白色粘土そのものである。上部は後期の包含層にしっかりと覆われることから、層位から見る時期は縄文後期中葉以前である。

第804号土壌 (第35・36図)

東の谷左岸、E-19に位置し、西斜面寄りの緩斜面にある。検出時点での第733号土壌との堆積土の違いはなく、この一部として調査を進めた。精査の過程で別個の掘り込みと認識し、第804号土壌として調査した。堆積土の記録は無いが、第733号土壌同様の、白色粘土ブロックを含む黒色土であった。平面形は不整形で、規模は長軸1.30m、短軸1.05m、検出面からの深さ0.45mである。

出土遺物はなく詳細な時期は不明だが、周辺の土壌群と同様、縄文後～晩期と見られる。

第4表 縄文時代の土壌一覧

遺構名	グリッド	重複状況 (新旧関係)	規模 (m)			平面形
			長軸	短軸	深さ	
SK687	B-14		0.90	0.88	0.20	不整形
SK688	B-14		1.21	1.19	0.16	不整形
SK689	B-13	<B-13P1	(1.26)	0.97	0.45	楕円形
SK690	B-13		1.50	1.35	0.33	不整形楕円形
SK691	B-13		1.26	1.14	0.47	楕円形
SK692	C-14		0.98	0.89	0.11	不整形
SK694	B-13		1.25	1.09	0.35	不整形
SK695	B-13		0.79	0.57	0.22	楕円形
SK696	B-13	<B-13P3	(0.66)	0.73	0.15	不整形楕円形
SK697	D-17		1.23	0.79	0.28	隅丸長方形
SK698	B-13	<SK699	0.97	0.83	0.20	不整形楕円形
SK699	B-13	>SK698	(0.56)	0.52	0.18	楕円形か
SK701	B-13		0.74	0.73	0.28	円形
SK702	B-13		0.93	0.88	0.48	円形
SK703	B-13		1.88	0.81	0.27	楕円形
SK704	B-13		(0.57)	0.66	0.24	楕円形か
SK706	J-27		2.67	(1.45)	0.33	楕円形か
SK718	I-26	<SJ104	(0.43)	0.69	0.32	不明
SK722	H-26	<SJ102	1.30	1.22	0.45	不整形
SK729	D-18		1.54	0.91	0.18	不整形
SK743	I-28		2.35	1.63	0.58	不整形楕円形
SK744	H-27	<SJ111	1.53	(1.23)	0.38	不整形楕円形
SK750	H-I-27		1.27	1.05	0.28	不整形
SK751	H-24・25	<SJ102	2.12	(1.38)	0.85	楕円形
SK752	H-25	<SJ102	(1.06)	1.15	0.68	円形
SK753	H-25		1.75	0.83	0.55	楕円形
SK755	G-23・24		1.35	0.96	0.35	楕円形
SK756	G-23		1.08	0.91	0.24	楕円形
SK760	G-22・23		0.98	0.69	0.49	不整形楕円形
SK761	G-22・23		0.82	0.65	0.35	楕円形
SK762	H-25		0.77	0.67	0.50	不整形楕円形
SK763	G-21	<SD18	1.22	1.11	0.55	不整形
SK764	G-21		1.03	0.88	0.25	楕円形
SK767	G-23	<SJ109	1.07	0.90	0.40	楕円形

遺構名	グリッド	重複状況 (新旧関係)	規模 (m)			平面形
			長軸	短軸	深さ	
SK768	G-23	<SJ109	0.95	0.80	0.37	不整形
SK770	G-24		1.53	1.07	0.22	楕円形
SK772	H-25		0.76	0.70	0.39	不整形
SK776	I-28		0.67	0.63	0.71	隅丸長方形
SK783	I-25	<SD53	1.12	0.77	0.33	不整形
SK784	I-25	<SD53	1.09	(0.73)	0.30	不明
SK785	I-25		1.59	1.15	0.25	不整形
SK786	I-25	<SJ107	1.05	0.89	0.24	楕円形
SK787	G-23		1.19	0.96	0.40	楕円形
SK788	G-23		0.71	0.61	0.50	不整形
SK789	G-23	<SD46b	0.55	0.52	0.15	円形
SK790	G-23		0.90	(0.39)	0.42	不明
SK791	G-23・24		2.06	0.80	0.32	隅丸長方形
【東の谷周辺の土壌群】						
SK725	F-20		0.95	0.78	0.72	不整形
SK726	F-19		1.82	1.73	0.48	不整形
SK730	D-19		6.90	3.80	0.63	不整形
SK732	D・E-19	<SD52・SK804 >SK802・SK733b	3.02	2.21	0.61	円形
SK733a	E-19	<SK733b >SK733c	2.48	1.66	0.50	不整形
SK733b	E-19	>SK733a <SK732	1.51	0.92	0.68	不整形
SK733c	E-19	<SK733a・734 >SK775	2.12	1.02	0.45	不整形
SK734	E-19	>SK733c	1.97	1.80	0.49	不整形
SK775	E-19	>SK733c	1.77	1.18	0.87	不整形
SK792	D-19	<SD52	3.15	1.72		不整形
SK793	D・E-19		1.26	1.14		不整形
SK795	D-19		1.79	1.09		不整形
SK796	D・E-19		3.14	1.67		不整形
SK800	D・E-19		1.47	1.21	0.42	不整形
SK801	E-20		2.70	(2.16)	0.57	不整形
SK802	D・E-19	<SK802 >SK732	3.77	3.26	0.49	不整形
SK804	E-19	>SK732	1.30	1.05	0.10	不整形

(5) 溝状遺構

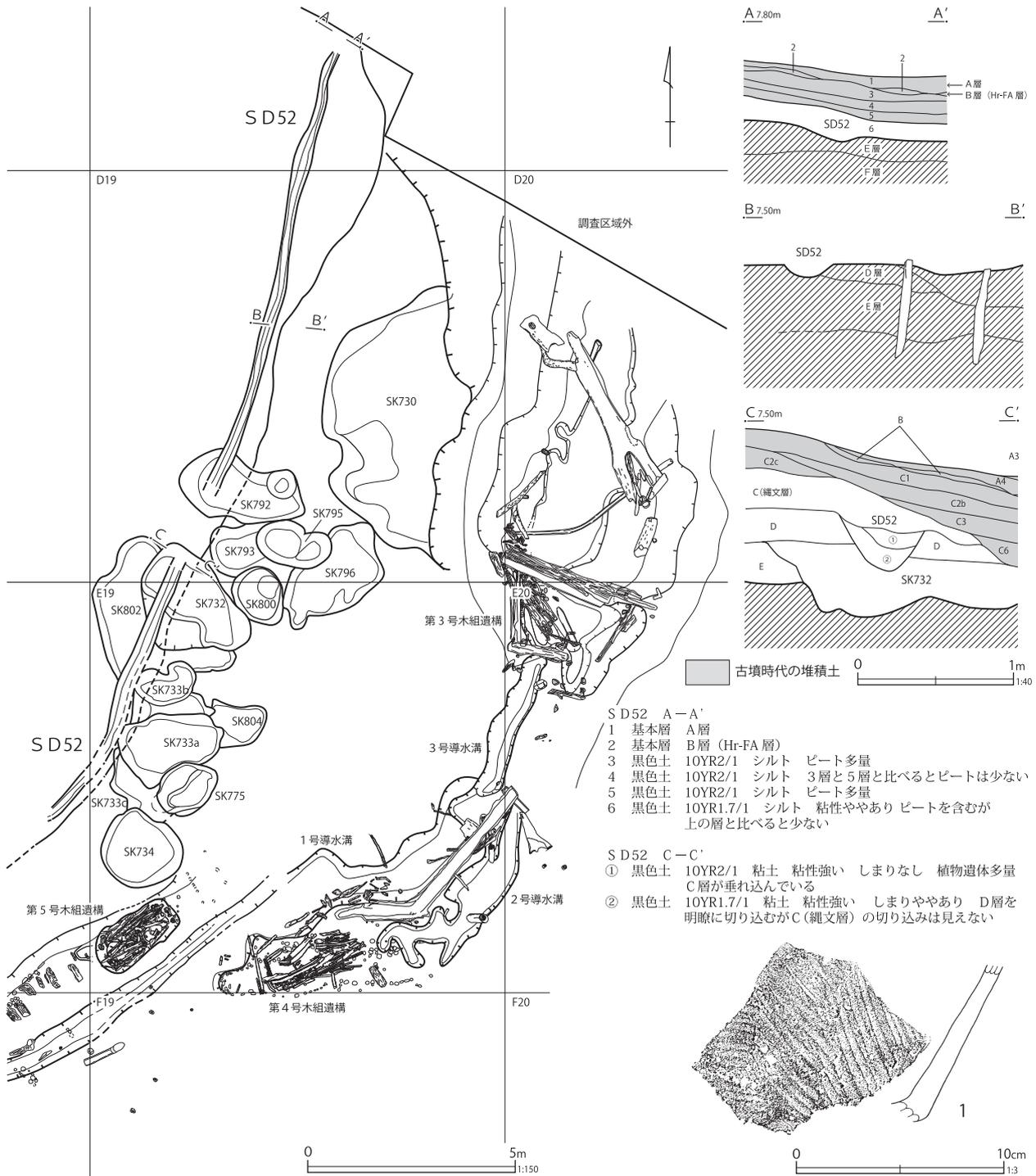
西斜面と東の谷の境界付近で検出した、流路走行方向に沿う幅0.3m程度の小溝である。第6次調査で、古墳時代の東の谷を調査する際の先行トレンチでその存在を確認し、後に平面的に検出した。調査当初は、古墳時代の谷との関係を想定して調査を進めたが、下記二点より、縄文後期後葉以降の可能性を考えた。

一点目として、掘り込み面が縄文後期後葉より前であることが挙げられる。第40図C断面では、古墳時代と縄文時代の堆積層の関係が捉えられている。溝状遺構の立ち上がりは、時期を変え何度

か観察したが、古墳時代の堆積土まで立ち上がらなかった。逆に「C（縄文）層」とする縄文後期後葉以降の土層が、溝状遺構を覆うようにしか観察できなかった。

二点目として、周囲で出土する古墳時代前期の遺物が、溝状遺構の掘り込み面より上位で出土していることである。少なくとも古墳時代前期の土器や木製品が廃棄された頃には埋没していた可能性が高い。

以上、決して類例が多くはないが、調査所見を優先して、縄文時代に帰属する「溝状遺構」として本節で扱う。



第40図 溝状遺構・出土遺物

第52号溝状遺構 (第40図)

C・D-19、E-19・20グリッドに位置し、縄文後期中葉頃までの遺物包含層(基本層D層)を明確に切り込んでいる。縄文後晩期の粘土採掘坑と見られる第732・733・792・802号土壌の上部に位置し、本遺構が新しい。

規模は検出した範囲で南北20.00m、最大幅0.42m、走行方位はおおむね谷筋に沿っており、南側でやや西斜面方向へ折れる。底面標高は北側が7.02m、南側が6.53mで南へ下がっている。

堆積土はC断面で2層に分層したが、①・②層の差は大きくはない。遺構上部を縄文後晩期の包

含層が覆い、溝上部に落ち込んでいる。一方、調査区北側のA断面では、掘り込みがごく浅く、6層自体がそのまま覆っている。

出土遺物は第40図1の1点で、後期後葉～晩期前葉頃の安行式期の深鉢底部である。これが直接時期を示すわけではないが、遺構の時期は、層位的な状況から縄文後期後葉以降と判断される。

(6) ピット

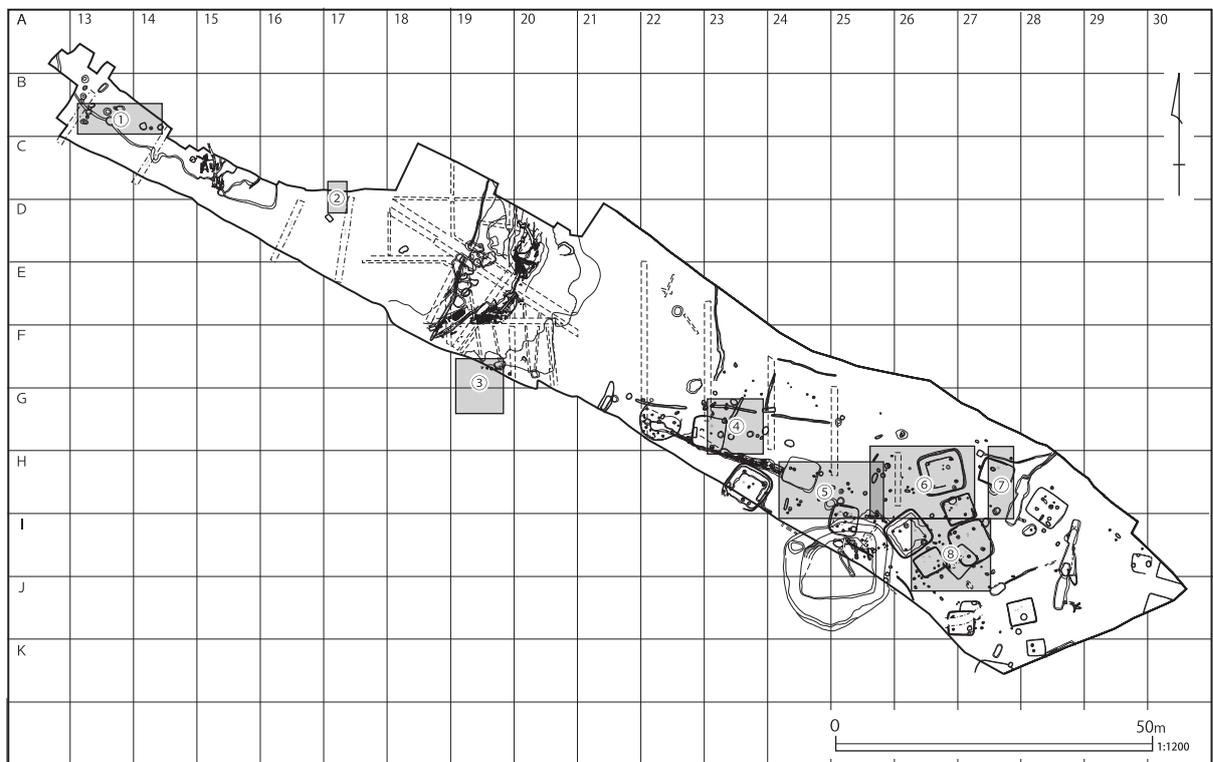
縄文時代のピットは台地部を中心に47基検出した。分布は台地縁辺部（区割図④～⑧）を中心

に、東の谷（同③）や西斜面（同①・②）に及ぶ。

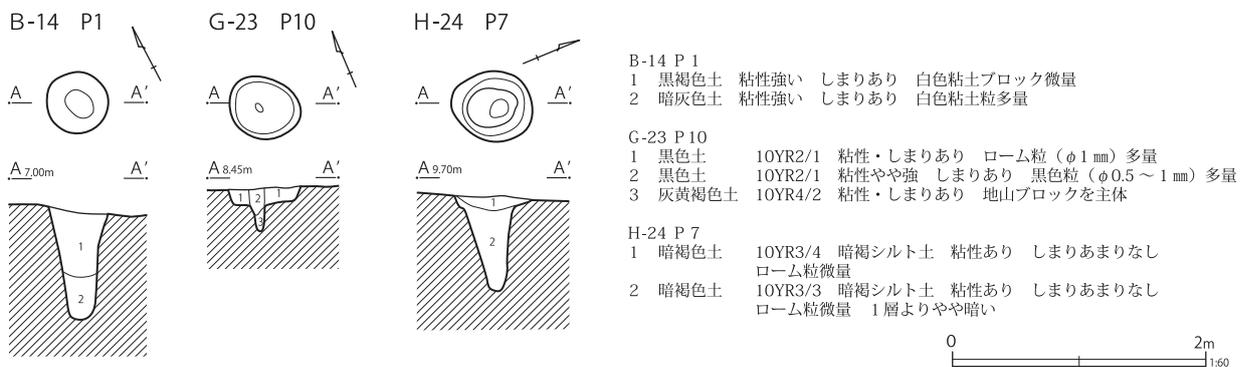
第43・44図にその平面位置を示し、規模や堆積土その他の情報については第5表の一覧に示した。堆積土については、単層の場合は一覧表中に記し、2層以上からなるものを第42図に示す。

いずれのピットも、土器や他の出土遺物に乏しく図示できたものはない。時代限定は、検出層位や堆積土の状況のほか、後世の遺物を含まない状況からの推測である。以下に特記事項を記す。

区割図①・②は西斜面のピット群である。区割図①のB-13・14グリッド周辺では、早期条痕文



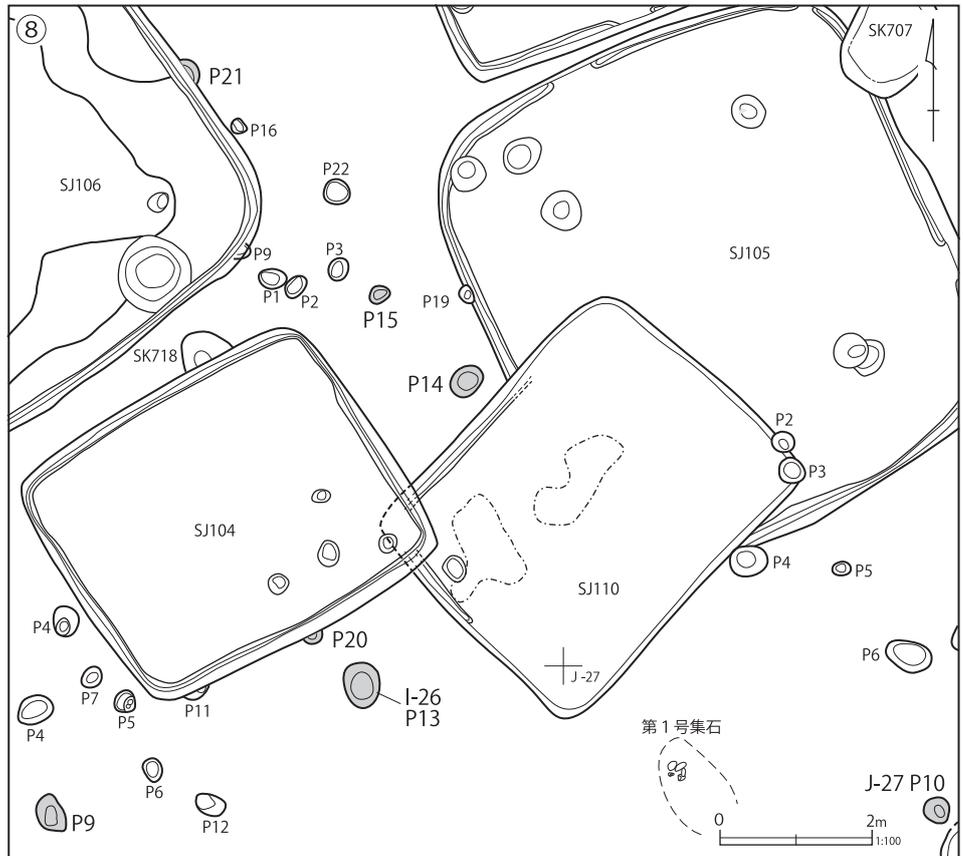
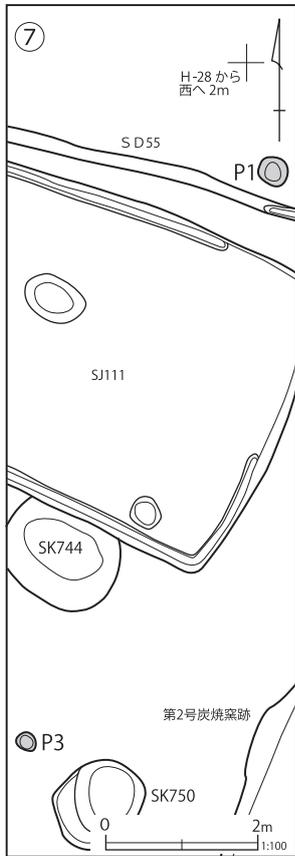
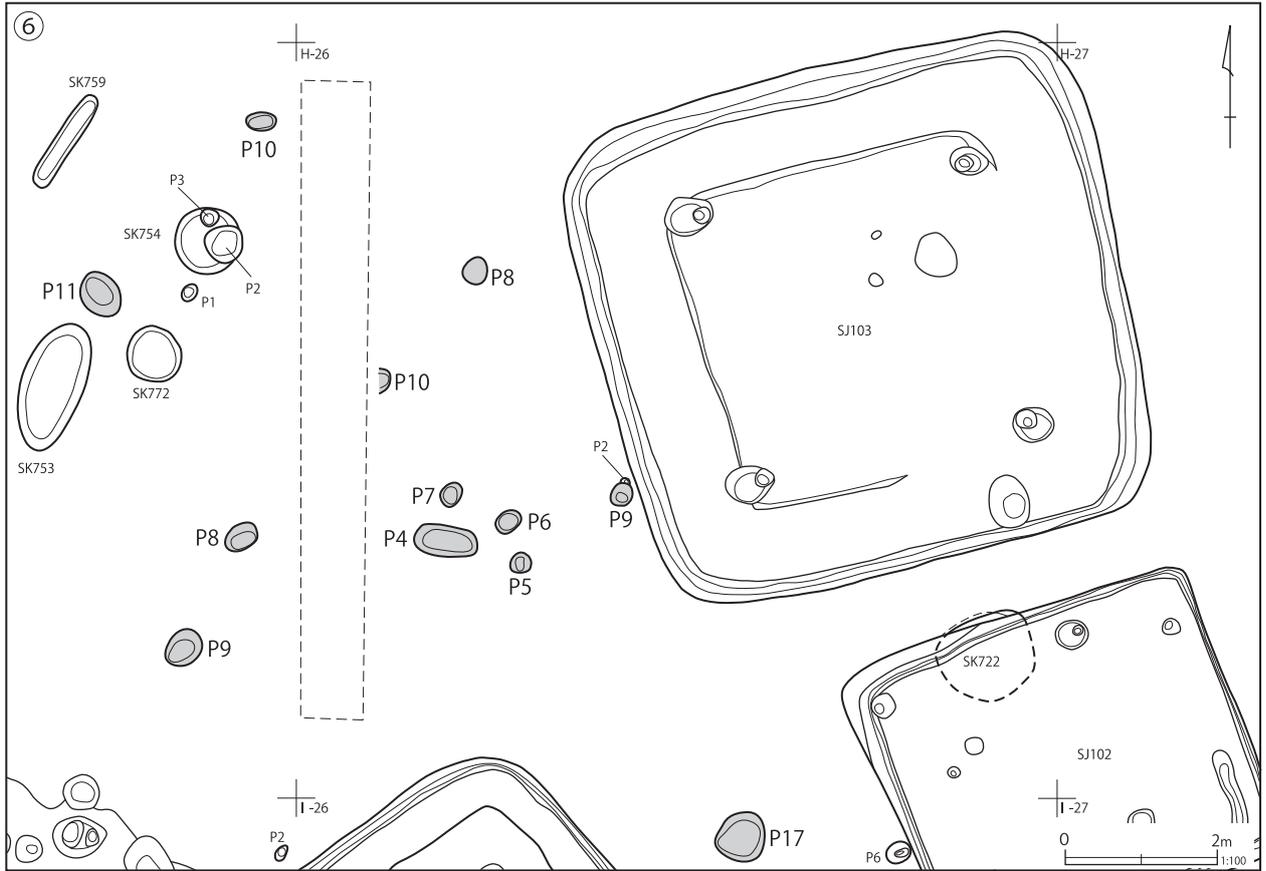
第41図 ピット区割位置図



第42図 ピット断面図



第43図 ピット(1)区割図①~⑤



第44図 ピット (2) 区割図⑥~⑧

期や堀之内式期の土壌に伴って分布している。

同②のD-17P 1は2基の焼土跡に隣接しており関連する可能性が高い。焼土跡・ピットともに、基本層E層（堀之内式以前の無遺物層、層厚0.3~0.5m）を除去した、地山白色粘土上で検出した。分厚い黒色粘土層上位からの掘り込みは考え難いため、出土遺物はないものの、縄文時代中期以前に遡る可能性が高い。同様の検出状況を示す遺構に、D-13グリッドの第689号土壌（早期条痕文期）がある。

区割図③のF-19P 1~3はその位置から、第457集で報告された第31号住居跡（後期前葉堀之内2式期）に関連するピットの可能性が高い。なお、第31号住居跡は古墳前期の水場遺構によって北半を壊されている。

区割図⑤~⑨は台地縁辺のピット群である。台地部を覆う縄文包含層（基本層IV層）中で検出したものもあるが、多くはこの下面の地山ローム層上面で検出しており、多くは後期前葉堀之内式期の可能性が高い。

第5表 縄文時代のピット一覧

グリッド	No.	規模 (m)			堆積土
		長軸	短軸	深さ	
B-13	1	0.62	0.44	0.86	黒褐 粘性極めて強 しまり有 焼土粒 (φ 5 mm) 微 ピット下部は湧水のため観察できず
	2	0.57	0.46	0.18	—
	3	0.71	0.54	0.25	暗褐 粘性やや弱 しまり有 V層粒 (φ 2 ~ 5 mm) 少 ザラザラして砂っぽい
B-14	1	0.50	0.49	0.69	第42図
C-17	1	0.71	(0.41)	0.12	—
E-18	1	—	—	—	黒褐10YR2/2 シルト 粘性やや強 しまりやや強
	2	—	—	—	黒褐10YR2/2 シルト 粘性やや強 しまりやや強
F-19	1	0.36	0.30	0.21	暗褐10YR3/3 シルト 粘性やや有 しまりやや有 V層粒・ブロック多
	2	0.52	0.45	0.33	—
	3	0.39	0.37	0.51	—
G-23	4	0.59	0.37	0.15	暗褐10YR3/3 シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 V層ブロック少
	6	0.25	0.24	0.24	黒褐10YR3/1 粘性やや強 しまり有 炭化物粒 (φ 3 ~ 5 mm) 微
	7	0.36	0.29	0.28	黒褐10YR3/2 粘性有 しまり有 V層粒 (φ 5 ~ 10mm) 多
	9	0.30	0.25	0.13	黒褐10YR3/2 粘性有 しまり有 V層粒 (φ 5 ~ 10mm) 多
H-24	10	0.58	0.49	0.38	第42図
	3	0.69	0.48	0.24	にぶい黄褐10YR4/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 酸化鉄少
	4	0.53	0.31	0.31	にぶい黄褐10YR4/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 酸化鉄少
	5	0.31	0.27	0.22	にぶい黄褐10YR4/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 酸化鉄少
	6	0.45	0.38	0.30	にぶい黄褐10YR4/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 酸化鉄少
	7	0.66	0.57	0.75	第42図
	8	0.30	0.24	0.26	にぶい黄褐10YR4/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 酸化鉄少
H-25	9	0.39	0.35	0.19	暗褐10YR3/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 酸化鉄少
	13	0.35	0.28	0.14	黒褐10YR2/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 V層ブロック少
	5	0.31	0.25	0.24	黒褐10YR2/3 シルト 粘性有 しまりやや有 下位にV層粒
	6	0.37	0.37	0.28	黒褐10YR2/3 シルト 粘性有 しまりやや有 V層ブロック多
	7	0.44	0.44	0.39	黒褐10YR2/3 シルト 粘性有 しまりやや有 V層ブロック多
	8	0.47	0.34	0.29	黒褐10YR2/3 シルト 粘性有 しまりやや有 V層ブロック多
H-26	9	0.55	0.43	0.36	黒褐10YR2/3 シルト 粘性有 しまりやや有 V層ブロック多
	10	0.40	0.25	0.40	黒褐10YR2/3 シルト 粘性有 しまりやや有 V層ブロック少
	11	0.65	0.51	0.11	黒褐10YR2/3 シルト 粘性有 しまりやや有 V層ブロックやや多
	4	0.85	0.41	0.24	—
	5	0.30	0.27	0.37	暗褐10YR3/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 V層ブロック多
	6	0.36	0.27	0.29	暗褐10YR3/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 V層ブロック多
H-27	7	0.33	0.27	0.38	暗褐10YR3/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 V層ブロック多
	8	0.37	0.32	0.29	暗褐10YR3/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 V層ブロック多
	9	0.31	0.28	0.24	暗褐10YR3/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 V層ブロック多
	10	0.34	(0.15)	0.30	暗褐10YR3/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 V層ブロック多
	3	0.40	0.37	0.43	—
I-26	13	0.28	0.23	0.24	灰黄褐10YR4/2 シルト 粘性やや強 しまりやや強 酸化鉄微
	14	0.47	0.36	0.38	灰黄褐10YR4/2 粘性やや強 酸化鉄を含む
	15	0.28	0.23	0.24	灰黄褐10YR4/2 粘性やや強 酸化鉄を含む 一部V層ブロックを含む
	17	0.66	0.61	0.17	暗褐10YR3/3 シルト しまりやや強 V層微
	20	0.26	(0.13)	0.14	黒褐10YR3/1 粘性やや強 しまりやや強 黄褐色ブロック微
	21	0.38	(0.14)	0.20	黒褐10YR2/3 粘性やや強 しまりやや強 黄褐色ブロック少
J-26	9	0.53	0.36	0.14	灰黄褐10YR4/2 しまりやや強 酸化鉄を含む
J-27	10	0.37	0.34	0.32	黒褐10YR2/3 シルト 粘性やや強 しまりやや強 V層ブロック少 炭化物微

(7) 谷と水場遺構

本項の対象は、縄文時代の東の谷と、ここに形成された水場遺構に伴う遺構・遺物である（第45図）。水場遺構を構成する遺構は、木組遺構3基、木道状遺構2基を主体に、その他の水場関連遺構として、流路底面への維持・管理に関すると思われる「導水溝状遺構」3条、下流部の大規模な階段状掘削痕である「開削部」と土器集積層等がある。また、流路との直接的な関わりではないが、谷右岸では斜面を削り出した平坦部である

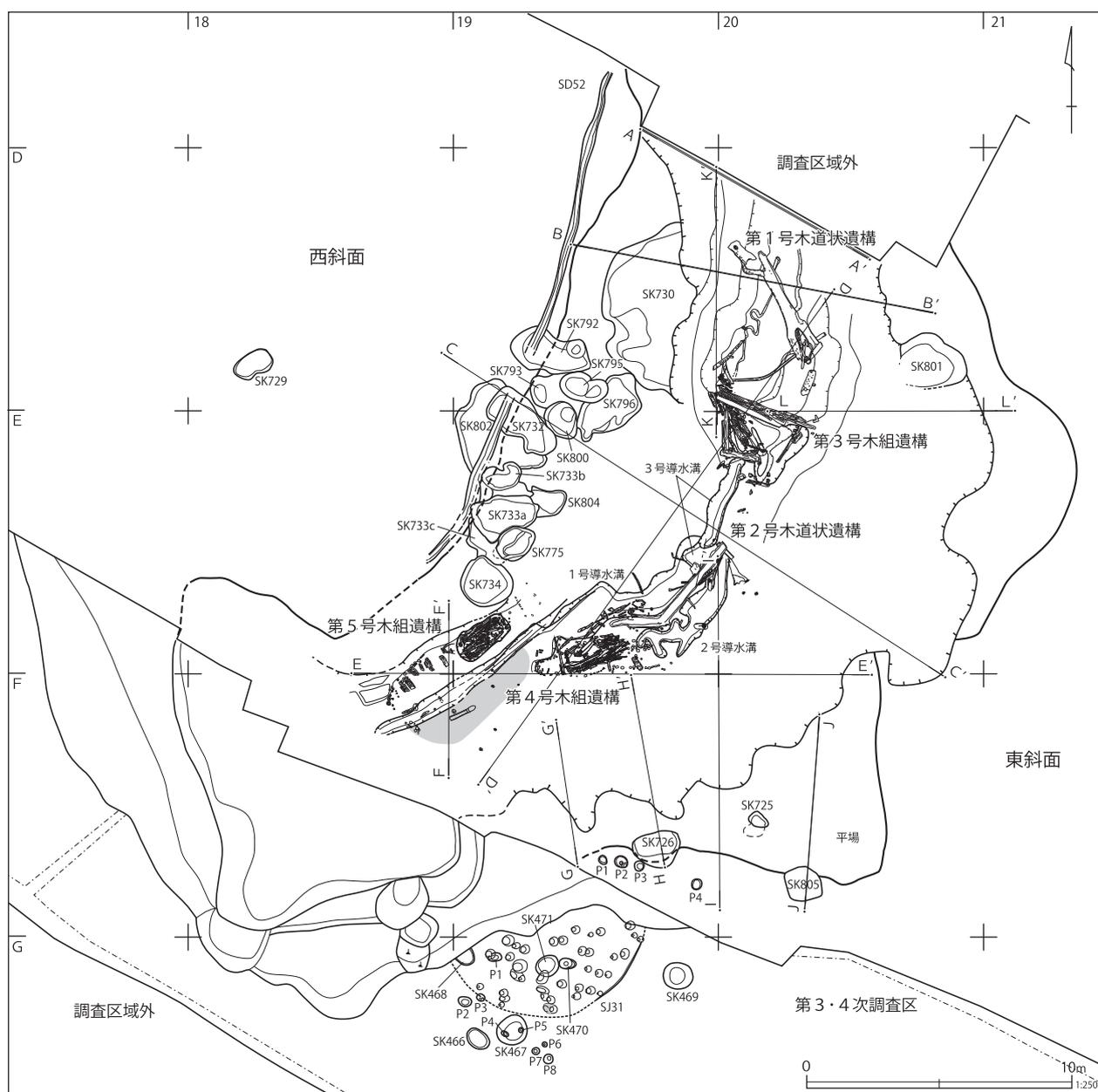
「平場」を確認した。

また、「(4) 土壌」でも記載の通り、流路と直接関係するものではないが、東の谷の緩斜面中の不整形な土壌群は粘土採掘坑の可能性はある。

以下では、水場遺構の舞台である東の谷と調査の概要を示した上で、遺構・遺物を説明する。

縄文時代の東の谷

位置・検出 西斜面と東斜面の間、D～F-19・20グリッドに位置する。第6次調査にて古墳前期の東の谷を調査する過程で、トレンチにより谷の



第45図 縄文時代の谷と水場関連遺構

土層堆積状況を確認したところ、下層よりトチ・クルミ等の堅果類や、摩滅した縄文土器片を含む、古墳前期の堆積土とは異なる砂質土や粘質土を検出した。土層には土師器が一切含まれないことから、縄文時代の遺物包含層と認識した。包含層は厚い地点で0.8m以上にも達することが判明したため、第6次調査では、上位の古墳前期の谷（木製品集積層）の完掘と縄文包含層の規模の把握を主眼とし、第7次調査で本格的に調査した。

範囲 縄文の谷の上部に古墳時代の谷があることからわかるように、谷地形は時代によりその範囲や周辺環境を変えている。谷の東西では、D層と呼称する縄文後期前葉の遺物包含層が斜面を広く覆っており、南北に延びる谷がこれを分断している。よって縄文時代における東の谷と東西両斜面の境界は、D層の分布が途切れる範囲までとした（第Ⅲ章第14図参照）。

調査中は、南側に隣接する第3・4次調査区側から、常時水がこんこんと湧き出していた。もちろんこれは、現況が調節池の隣接地であることにも起因しようが、当時の湧水を窺わせるものである。往時の滞水環境は木組や木道をはじめとする多量の有機物が示している。またかつての流水環境は、谷底面に堆積した砂層が示している（なお、古墳時代には砂層の形成はなく、縄文時代の谷とは環境が異なっていたと推測される）。

上記より、少なくとも縄文後晩期における谷地形は、湧水や流路との関わりの中で理解することが必要である。よって以下では、地点や地形を表す「東の谷」のほか、木組や木道との関係性の中では「流路（跡）」とも表記する。

既報告遺構との関係 南側の第3・4次調査では、東の谷の谷頭部が検出され、古墳前期の「水場遺構」として報告されている。調査は極めて部分的なため、縄文後晩期段階の様相は不明瞭であったが、第6・7次調査を踏まえ、これを再検討した結果、下記①～⑤の知見を得た。

①古墳前期の「水場遺構」の下層には、縄文時代の谷地形とこれを埋積する縄文包含層のほか、本報告の「西斜面」に相当する縄文後晩期の遺物包含層が存在している（第46図）。

②第46図B断面（第457集第298図）の最下層18・19層は、東の谷に埋積する、縄文時代のプライマリーな遺物包含層である。

③同様に、16層（の一部）と20層はそれぞれ西斜面のC層とD層に相当し、22～24層は東斜面のD層に相当する層である。

④②や③の包含層の埋積後、古墳前期にこれを部分的に壊しながら水場遺構（第1・2号木組遺構）が構築される（木組遺構を除く縄文包含層の大部分は残存）。

⑤④より、第457集第298図で古墳時代の「水場遺構」のうち、第46図左の「掘り込みA」とした範囲は、縄文時代に伴うもので、本報告の谷と連続するものである。

なお、本項とは直接関係しないが、この谷頭部は縄文時代からの湧水点であり、古墳前期の第1号木組遺構の南西部（第46図★部）は、これを求めて掘り込んだ水溜状の遺構の可能性がある（第2節（6）で触れ、第Ⅵ章2節で詳述する）。

東の谷の地形と規模 谷は北側に開き、南側に谷頭部（湧水点）を持っている。東西方向では緩やかなすり鉢状の地形となっている。流路は谷頭部を起点に東方へ20m流れ、F-20グリッド杭付近で北側へ向きを変え、調査区北壁まで20m延びる。既報告分を含めた谷の規模は、検出範囲で谷頭部より北側に40mで、谷の幅は地点により一様ではないが、約15～20mである。また、台地部と湧水点との標高差は約2.5mである。

流路付近の基盤土は、標高7.0m以下ではF層（白色粘土層）が厚く堆積し、当時は谷の両岸が白色粘土の露頭となっていたものと見られる。特に谷左岸の不整形の土壌群は、この露頭の粘土採取を目的とした掘り込みの可能性が高い。

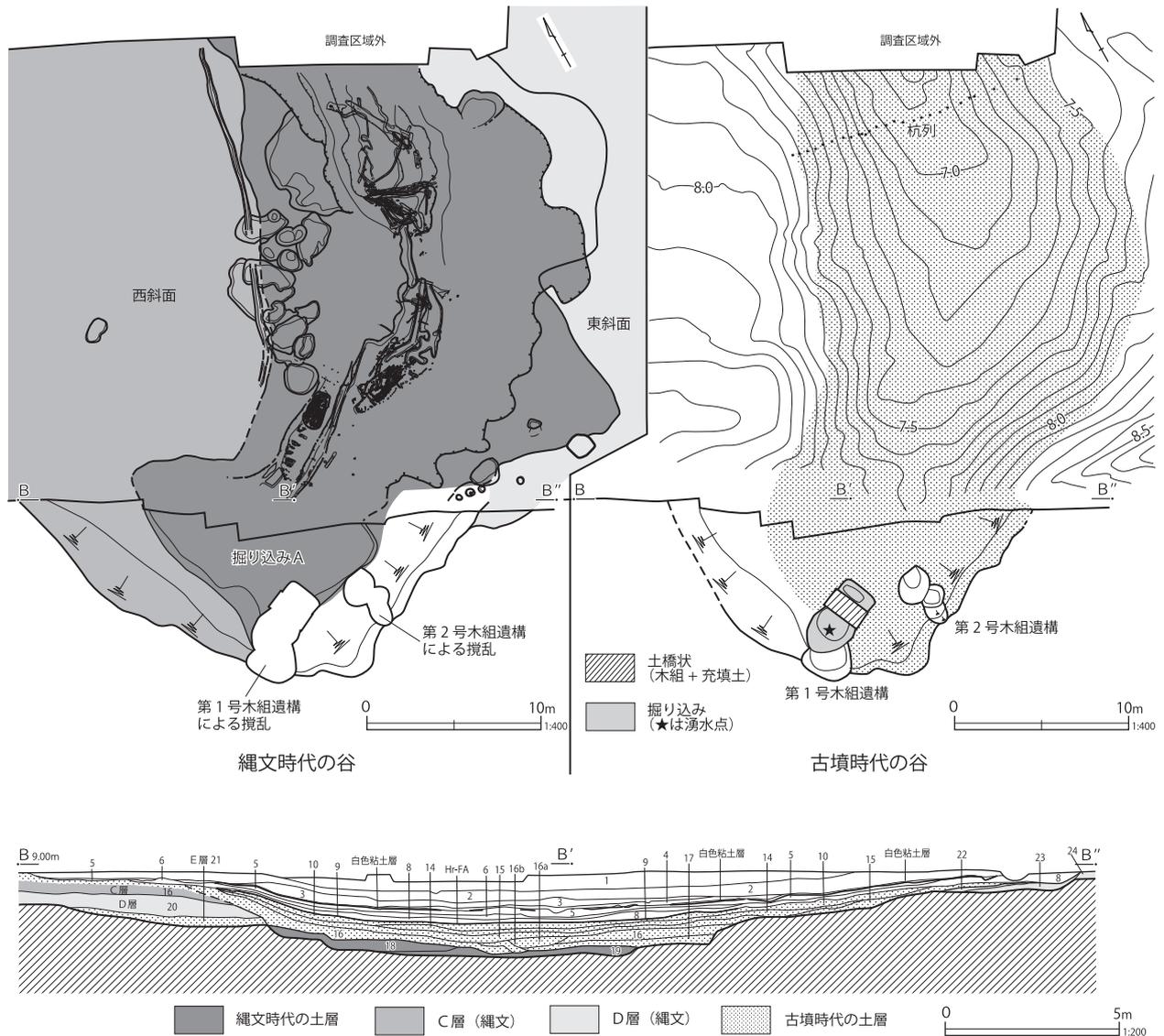
検出遺構の概要 水場遺構を構成するのは、木組遺構3基（第3～5号木組遺構）、木道状遺構2基（第1・2号木道状遺構）、導水溝状遺構3条（第1～3号導水溝状遺構）のほか、下流部の開削部と土器集積層、谷右岸の平地等からなる。

「木道」と呼ばれる遺構は、県内でも赤山陣屋跡遺跡（川口市遺跡調査会1989）で報告されている。本書では、大型の木材を横たえ、杭などで固定した痕跡のある木組施設を「木道状遺構」とした。また、特に流路上に掘削された導水目的と見られる溝を「導水溝状遺構」と呼称した。

谷の底面（地山の白色粘土）と最下層（直上の堆積層）の層界は、手が加えられない地点では乱

れて波状となっているが、一度掘削が及んだ地点では、層界に不整合が生じている（図版43等）。この掘削痕跡は中～下流部において、また流路の周囲より流心部において顕著である。断面観察でこれを確認できた場合、第48図A断面や第49図C断面に示す方法で、地山網掛け部分にその範囲を图示した。

調査の方法—遺物の取り上げ— 遺物の取り上げは、工程上の理由から1点1点の座標の記録は最小限に留めざるを得なかった。一方で、谷や流路といった二次堆積の起こりやすい環境上の特性や、掘方や裏込めが期待できない構造物（木組や木道）の性質上、取り上げには、層位的な情報を



第46図 谷の既報告分との関係

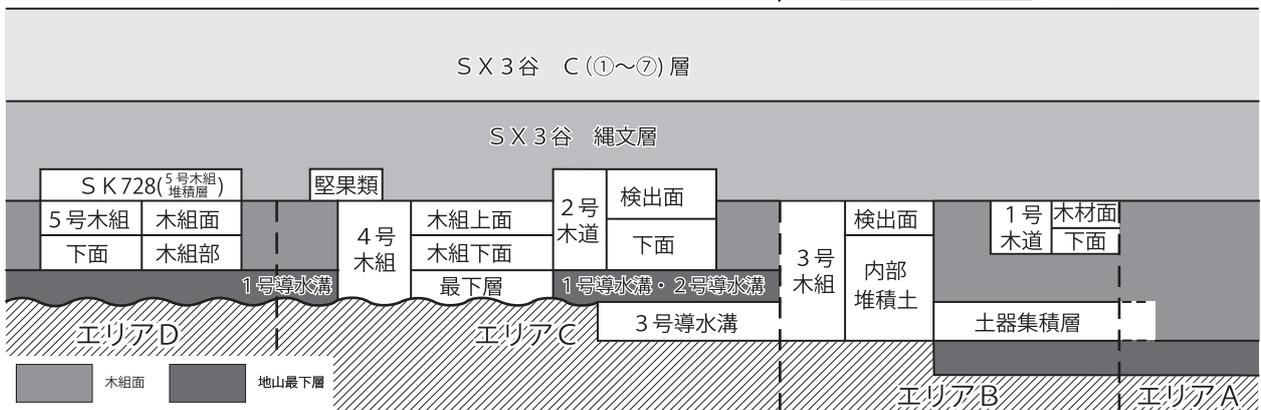
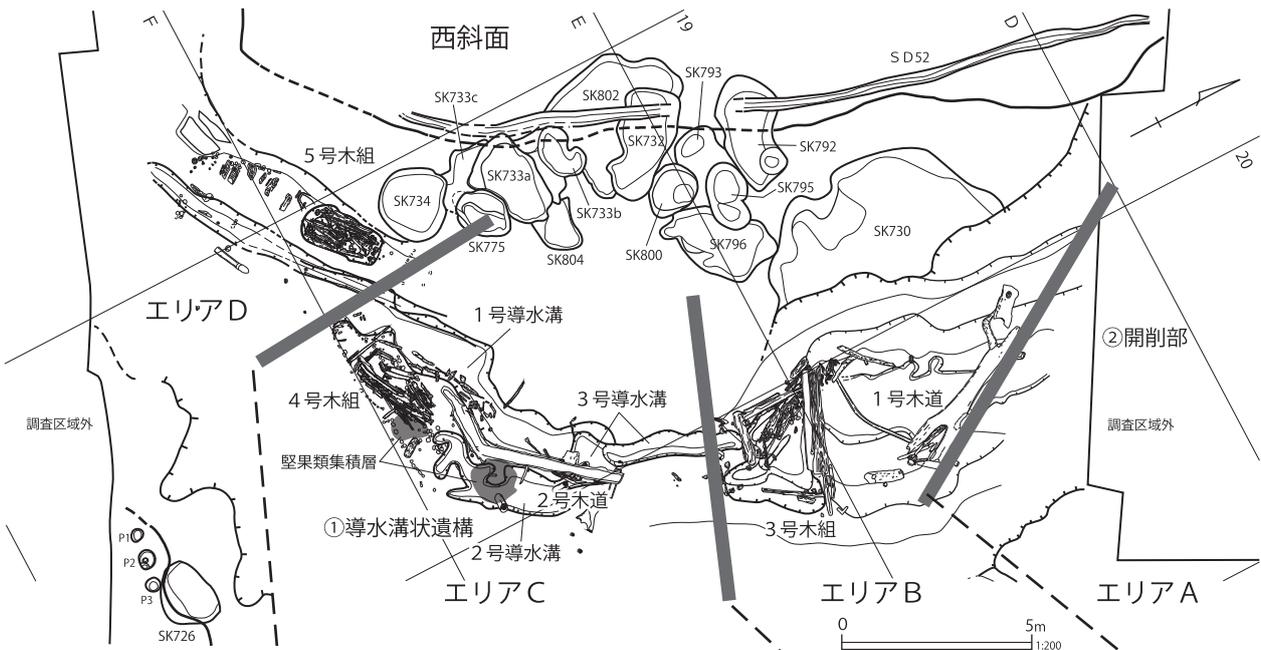
可能な限り細かく注記した。

第47図が遺物取り上げの概念図である。古墳前期の遺物包含層を除去後、木組や木道を検出するまでは「縄文層」としてグリッド単位で遺物を取り上げた。木組や木道の検出後は、それぞれの上下流の位置関係を押さえる必要が生じたため、木組や他の諸施設を起点とした「エリア」という位置概念により、下流側から、第1号木道遺構より下流を「エリアA」、第3号木組遺構までを「エリアB」、第4号木組遺構までを「エリアC」、これより上流を「エリアD」とした。

木組検出後の層位的な取り上げは、上位から「検出面」、木組と概ね同等レベルの「木組面」、これより下位の「木組下面」といった仕分けで

行った。なお、いずれの地点においても地山の直上層に限り、これより下層の出土遺物は無いことを示す「地山（直上）最終層」として遺物を取り上げた。しかしながら「最終層」という語には、最終形成層というまったく逆の意味合いも持つため、報告段階で「最下層」に改めた。

上記のように、遺物は可能な限り細分層ごとに取り上げたが、地点間の層の対応関係をすべて明確に捉えられたわけではない。特に当初は、上層ほど形成時期が新しく、下位ほど古くなる堆積状況を想定して層位的に取り上げた。しかし調査の終盤、流路底面付近で、谷出土遺物群の中でもっとも新相（晩期中葉頃）の土器が見つかり、より上位で出土した。これ以前の遺物群がいずれも流



第47図 谷の土層と遺物取り上げ概念図

れ込みであり、土層の形成時期を直接示さないことが判明した。

蛇足ではあるが、この「最下層」について、これより下層の遺物が存在しない筈の流路底面の地山白色粘土中で、しばしば土器片が出土した。おそらく往時の踏み込み等により、軟弱な地盤にめり込んだものと思われる。また同様に、上部が滅失し下部のみが地中に残る埋没杭も存在し、隣接する杭の断ち割り調査で検出するケースがあった。このため、流路底面の記録後、地山をさらに掘り下げ、埋没杭や沈み込んだ土器片を可能な限り回収したことを付記しておく。

調査の方法－堆積土の観察－ 東の谷の土層の観察は、第45図A～L断面で実施し、土層図を第48～53図に示した。このうちA～D断面は古墳時代の調査と共有する、両時代の関係性を示す土層断面である（土層注記は第2節を参照）。一方、E・F・I・K・L断面は、グリッドライン上にトレンチを入れて土層堆積状況を確認したもので、I・K断面は同一線上にある。またこれ以外に、比高差の著しい谷右岸側では、地形と直交するようにトレンチを設け、土層堆積状況を確認した（G・H・J断面）。詳細は土層各図の註記に譲り、以下に各断面の概要と特記事項を記す。

縄文時代の谷の土層（第48～53図）

A断面（第48図） 流路の最下流部に位置する調査区北壁の土層である。古墳時代の東の谷土層（第272図）と共通し、上部の註記はそちらに譲る。大局的には、ピート層と黒色粘土の互層となる土層群（A～C層）を古墳時代前期とし、砂粒を多く含み灰色味が強い土層群（「縄〇層」とした土層）を縄文時代としたが、境界に曖昧な部分を含む。縄3層や縄6a層などは、ある時点での流路そのものである。

最下層の縄13層は、開削部を埋めた厚さ0.8mにもなる分厚い黒色粘土層である。砂層を多量に含み比較的細かい単位で堆積する流路上の土層群

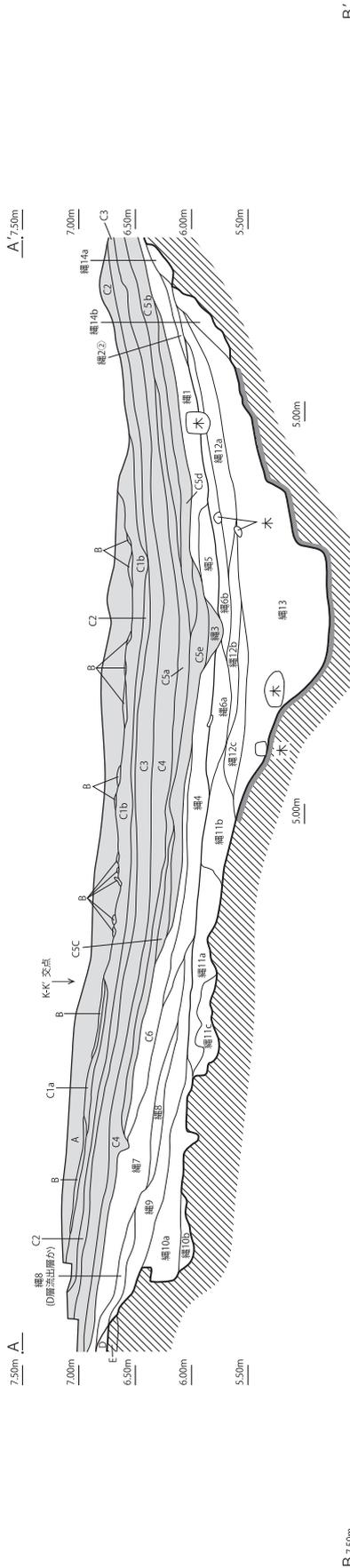
中でもひととき異様である。同層と地山白色粘土の層界は右岸で特に明瞭な不整合面として観察された。右岸側は三段以上の段切り状となっており、これが第3号木組遺構付近まで続く。また、左岸側では、調査区際のため平面的には明らかにできなかったが、縄10a・10b層や縄11a・11c層は、後述のB断面（第730号関連土）との類推から、土壌状の掘り込みの可能性が高い。

B断面（第48図） 古墳時代の杭列を断ち割った際の土層断面である。流心部の最下層の記録はできなかった。古墳時代の土層として確実な部分に網掛けをしたが、前述のとおりその境界は不明瞭である。10～13層中の木質遺物は第54図に示した、木組遺構より上面で出土した自然木群である。古墳前期の杭18や杭19はこれらの自然木群に阻まれ打ち込みが止まっている。①～⑤層は第730号土壌の堆積土である。

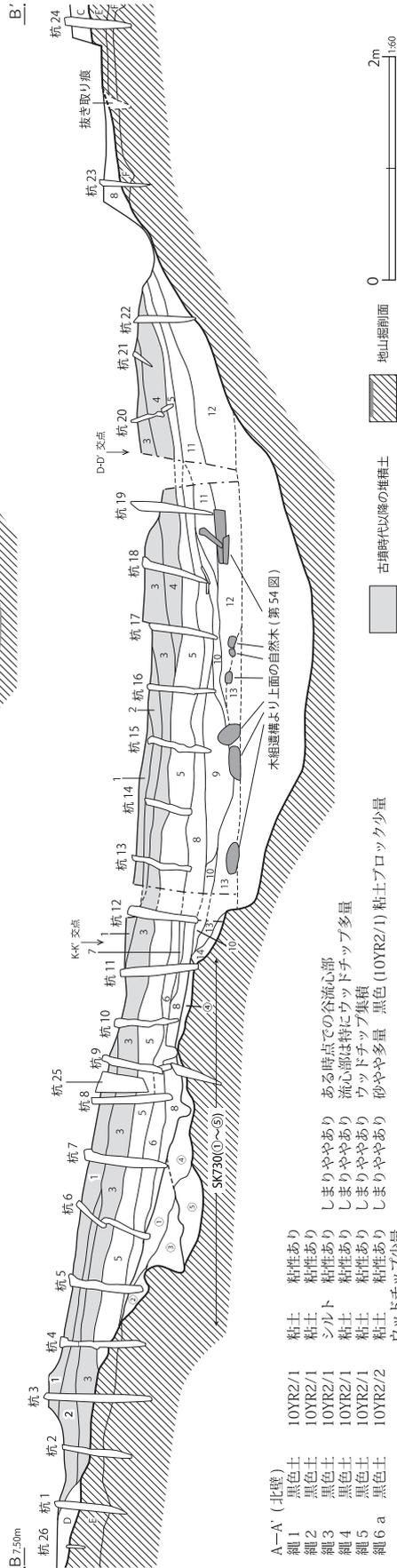
C断面（第49図） 谷の中央付近を横切りする土層で、調査の当初から最後まで、谷を理解する際の基本となった土層である。第49図に全体図と拡大した部分図を示す。A・B断面同様、網掛け部分は古墳時代の形成層で、第6次調査で同層を、第7次調査で下層を観察、分層した。流心部にはU字溝状の第3号導水溝状遺構や、周囲の地山には人為的掘り込みを示す不整合面が確認される。11層以下はかなり多くの砂粒を含み、水が流れていたことが明白である。

左岸側では、粘土採掘坑（第732号土壌）→D層（縄文後期前中葉の包含層）→第52号溝跡→C（縄文）層（縄文後期後葉以降の包含層）の新旧関係が捉えられている。

D断面（第50図） 谷の中央付近を流下方向に観察した土層である。上部の古墳時代の土層を第6次調査で、下部を第7次調査で観察したため、境界付近に不明瞭な部分がある。ここでは、第1号導水溝状遺構が既存の堆積土を掘り込む様子を確認した。同遺構は、流路底面の地山直上で浅い筋



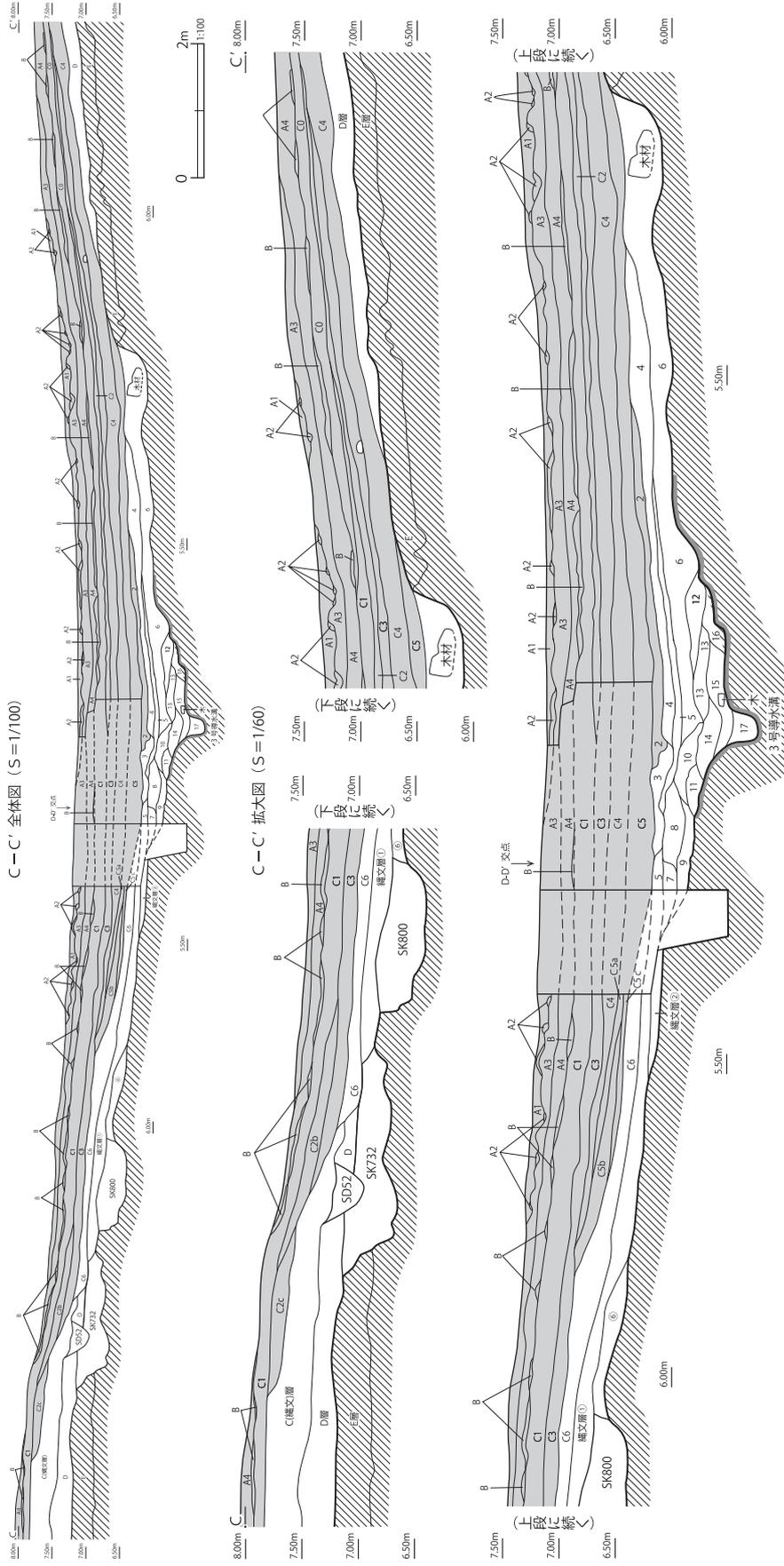
第48図 縄文時代の谷の土層 (1)



- 6 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量 1層よりも暗い
 7 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量 1層よりも暗い
 8 黒褐色土 10YR2/2 シルト 粘性あまりなし しまりややあり 植物遺体やや多量
 9 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あまりなし しまりややあり 植物遺体やや多量
 10 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体やや多量
 11 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体やや多量
 12 黒褐色土 10YR1.7/1 砂層 粘性なし しまりややあり 炭化物粒少量 植物遺体極多量
 13 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体極多量
 14 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 15 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 16 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 17 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 18 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 19 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 20 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 21 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 22 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 23 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 24 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量

- SK730
 ① 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 ② 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 ③ 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 ④ 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量
 ⑤ 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体多量

古墳時代の堆積層は第 272 図参照



C-C' 全体図 (S=1/100)

C-C' 拡大図 (S=1/60)

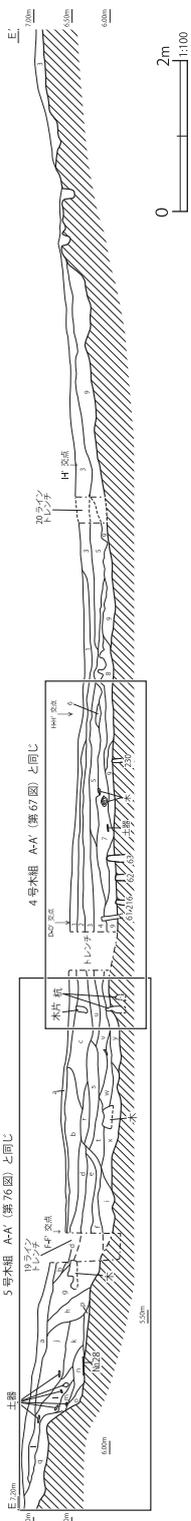
第49図 縄文時代の谷の土層 (2)

C-C'

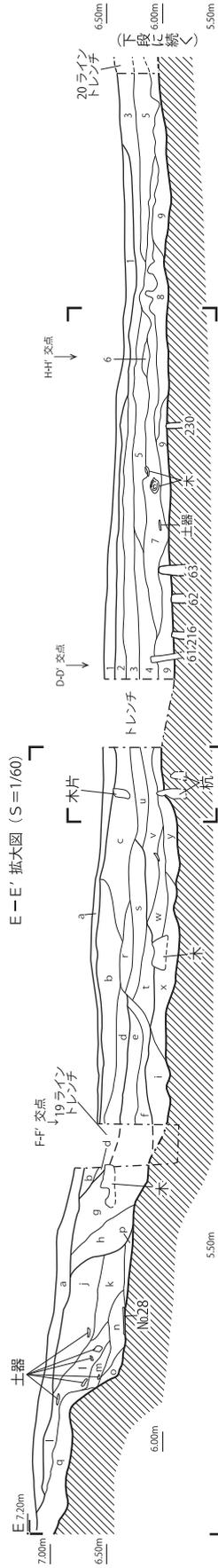
- C 6 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物遺体やや多量 砂少量
 - 縄文層① 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性強い しまりあり 上部のC層とは植物遺体の量が明顯に異なる
 - 縄文層② 黒褐色土 10YR3/2 粘土 粘性強い しまりなし 細かい植物遺体多量 砂粒多量に含み、ところにより摩滅土器片を多く含む流路堆積土 (7層に相当)
 - 1 次層 (C 5層と同じ)
 - 2 黒色土 10YR2/1 砂層 粘性なし しまりややあり 有機物極多量
 - 3 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性あり しまりややあり 炭化物粒少量
 - 4 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性あり しまりややあり 有機物少量
 - 5 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり 有機物少量 (=D-D' 4層)
 - 6 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 有機物全体的に多く、上位に集積 10層側へ近づくにつれ砂多量
 - 7 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性あり しまりややあり 炭化物粒多量 有機物少量 (=D-D' 5層)
 - 8 黒褐色土 10YR3/2 粘土 粘性あり しまりややあり 炭化物粒多量 有機物少量 砂少量
 - 9 黒褐色土 10YR3/2 粘土 粘性あり しまりややあり 炭化物粒多量 砂やや多量 有機物少量
- 地山白色粘土を攪拌した層 8・9層とベース土は酷似する (=D-D' 12層)

- 10 黒褐色土 10YR3/1 砂層 粘性なし しまりややあり トチ殻やや多量
 - 11 黒褐色土 10YR3/1 砂層 粘性あり しまりややあり トチ殻やや多量 10層に似るかやや明るい
 - 12 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり トチ殻やや多量
 - 13 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり トチ殻集積
 - 14 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり 砂多量 トチ殻集積
 - 15 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり トチ殻集積
 - 16 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり 地山白色粘土ブロック多量 地山との層界は明確
 - 17 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり 有機物極多量 地山との層界は明確
 - * 12層以下ベース土が同一 混入物の差あり
 - ⑥ 黒色粘土 10YR2/2 粘土 粘性強い しまりややあり 地山E層ブロック極多量 黒褐色粘土とは半々 SK800より下の層
 - C (縄文)層 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり 植物片多量 肉眼では上部のC(古墳層)との分層困難
 - D層 黒褐色土 10YR3/1 シルト 粘性強い しまりややあり 植物片少量 堆之内~加腐科B式の土器片を多く含む
 - E層 黒色土 10YR2/1 シルト 粘性強い しまり強い 地山白色粘土を含む (地山)
- 古墳時代の堆積層は第273図参照

E-E' 全体図 (S=1/100)



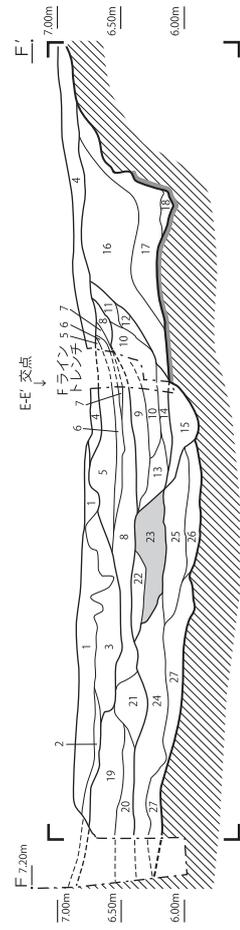
E-E' 拡大図 (S=1/60)



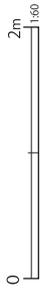
E-E'

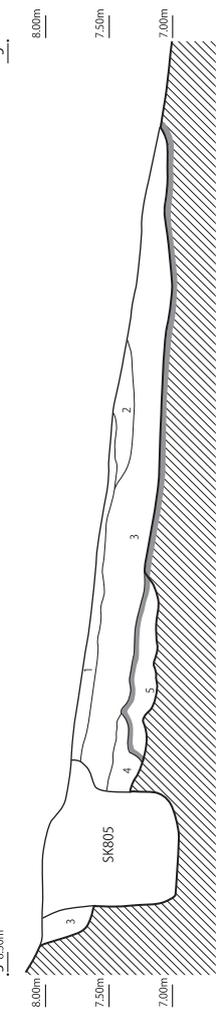
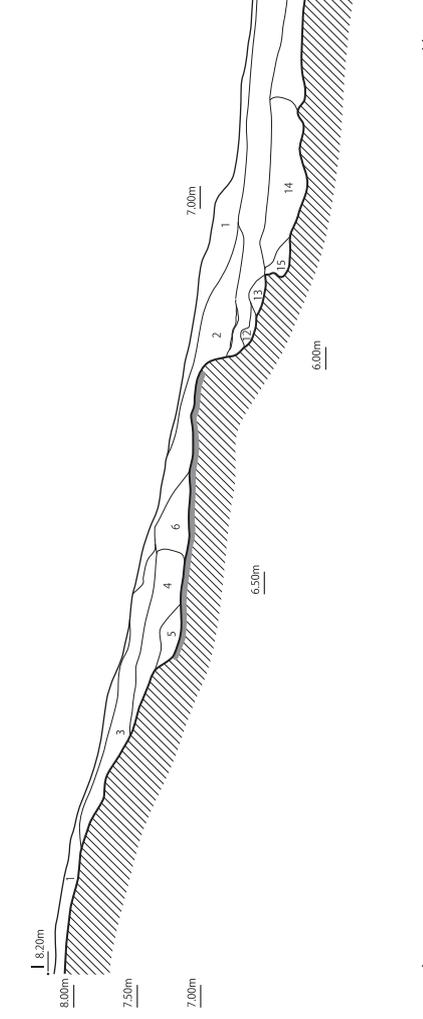
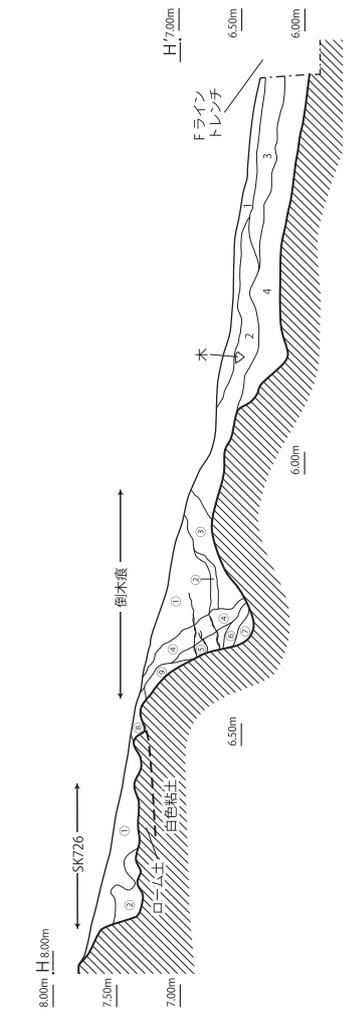
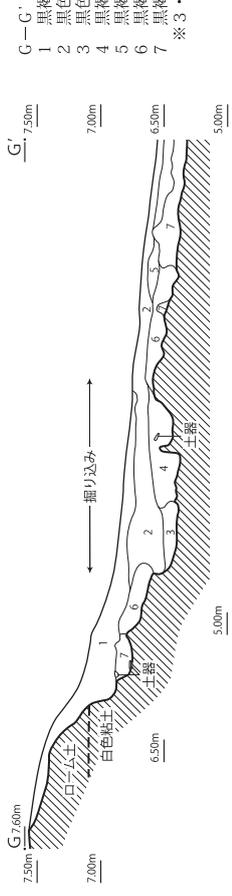
- 1 5号木組 (A-A) のa層
 - 2 5号木組 (A-A) のc層
 - 3 5号木組 (A-A) のu層
 - 4 5号木組 (A-A) のv層
 - 5 黒色土 10YR1.7/1 粘土 粘性あり しまりややあり 有機物多量
 - 6 黒褐色土 10YR3/1 粘土 粘性あり しまりややあり 有機物極多量
 - 7 黒褐色土 10YR3/1 粘土 粘性あり しまりややあり 砂やや多量 有機物極多量
 - 8 黒褐色土 10YR2/2 地山白色粘土ブロック極多量 砂多量
 - 9 黒褐色土 10YR3/1 粘土 粘性あり しまりあまりなし 有機物多量
- a~y層は5号木組(A-A)第76図参照

第51図 縄文時代の谷の土層 (4)



5号木組 B-B' (第76図) と同じ





G-G'

- 1 黒褐色土 粘性ややあり しまりあり 遺物極多量
- 2 黒色土 粘性あり しまりあり 遺物極多量
- 3 黒色土 シルト 粘性あり しまりあり 遺物極多量
- 4 黒褐色土 シルト 粘性あり しまりあり 遺物極多量
- 5 黒褐色土 粘土 粘性あり しまりあり 遺物極多量
- 6 黒褐色土 粘土 粘性あり しまりあり 遺物極多量
- 7 黒褐色土 黒褐色粘土と地山白色粘土との混合層 粘性あり しまりあり 遺物極多量

※3・4層は不整形の落ち込みた堆積した層。粘土採取坑の可能性もある

H-H'

SK726

- ① 黒褐色土 10YR2/3 シルト 粘性あり しまりややあり
- ② 褐色土 10YR4/4 ローム粒・プロックともに多量
- ③ 黒色土 10YR2/1 黒褐色土(10YR2/3)シルト土多量
- ④ 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 有機物多量
- ⑤ 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりややあり 有機物少量
- ⑥ 黒褐色土 10YR2/2 粘土 粘性あり しまりあり 炭化物粒やや多量 有機物微量

- ⑦ にぶい黄褐色土 10YR4/3 粘土 粘性あり しまりあり 炭化物粒微量
- ⑧ にぶい黄褐色土 10YR4/3 粘土 粘性あり しまりあり 黒色(10YR1.7/1)粘土少量
- ⑨ 暗褐色土 10YR3/3 シルト 粘性あり しまりあり ローム粒少量
- ⑩ 黒褐色土 10YR2/1 粘土 粘性あり しまりあり 炭化物粒微量

※①～③層は土性の差はないが、①・②層、②～③の各層界に地山白色粘土の溶出した薄層が
ラミナ状に堆積していたため分離した

- 1 黒色土 10YR1.7/1 ヒート層(古墳時代前期層) 粘性あり しまりややあり 有機物極多量
- 2 黒褐色土 10YR2/3 粘土 粘性あり しまりややあり 有機物やや多量
- 3 黒褐色土 10YR2/2 ロームプロック少量 粘性あり しまりややあり 有機物多量
- 4 黒色 (10YR2/1) 粘土と地山白色粘土の混合層 粘性あり しまりややあり 有機物極多量

E-E' 変点 ↓

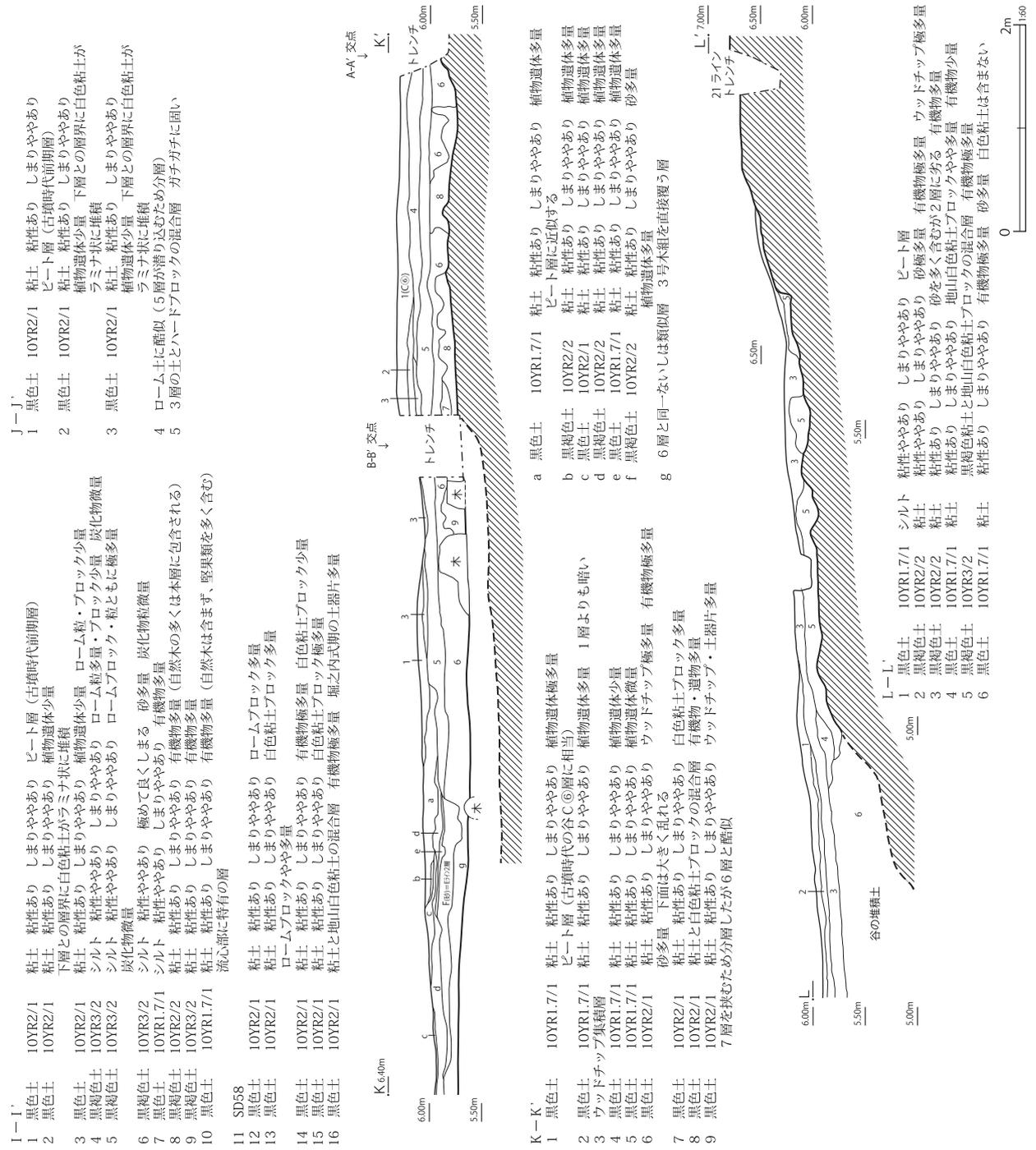


第52図 縄文時代の谷の土層 (5)

状の落ち込みとして確認されたが、実際は10・11層段階→9層段階→6・8層段階といった細かい単位で、堆積と掘削が繰り返された結果と判明した。同様に、第3号木組遺構上流部の12層もc・d層で埋まる掘り込みに切られている。このように堆積土中には平面的に検出の難しい掘削痕跡も存在していた可能性がある。

E断面(第51図) Fグリッドラインに沿った土層図で、全体図と拡大した部分図を示した。西半はa~y層に、東半は1~9層に分層した。上層の一部(a層と1層)は古墳時代の土層と見られるピートを含む粘土層である。西側で第5号木組遺構、中央付近で第4号木組遺構を検出した。

第4号木組遺構は上面の横木と下面の杭群で構



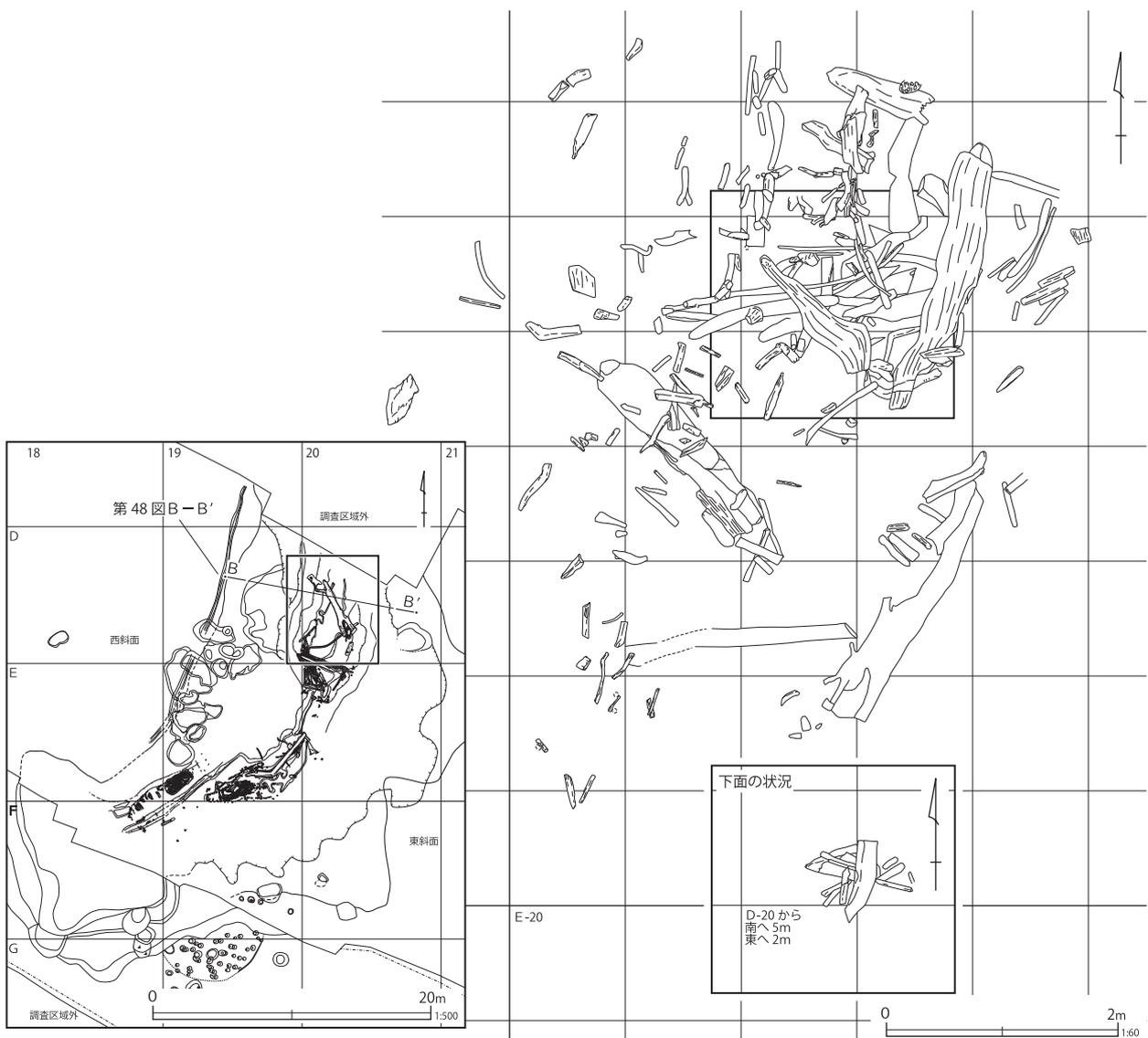
第53図 縄文時代の谷の土層 (6)

成される木組である。下面の杭群は、地山直上のy層・9層上面から打設され、上面の横木群はこれより上位の7層付近の高さに分布する。地山直上ではないが、流路底面に近い遺構（晩期中葉頃）である。一方、第5号木組遺構は西斜面際を切り立たせるよう土壙状に掘り込んだ遺構で、出土土器および木組部木材の年代測定により、時期は後期前葉頃と見られる。両遺構間には、黄褐色ロームの搬入土と見られるs層と、このs層と第5号木組遺構堆積土とを切り込むe～i層という特徴的な土層がある。ともに溝状の掘り込み（「溝跡」として109頁で報告）に関わる土層と見

られ、新旧関係は、（旧）第5号木組遺構⇒第4号木組遺構⇒溝状施設（新）である。

F断面（第51図） 21グリッドラインに沿った土層図で、第5号木組遺構B断面と同一断面で詳細はそちらに譲る。A断面と多くの土層が共通する。第5号木組遺構の堆積土（16～18層）、流路底面の堆積土（25～27層）、黄褐色ローム由来の搬入土（23層）、溝状施設の堆積土（9～15層）、古墳時代の堆積土（1～4層）がある。

G・H断面（第52図） 谷右岸の斜面地形に直交する、第7次調査の当初期に設定した断面である。このうちH断面1層は古墳時代の堆積土である。



第54図 木組遺構より上面の自然木出土状況

G断面中央部には不自然な落ち込みが確認された。調査当初期で判断を躊躇したが、周辺の状況から見れば人為的な土壌状の掘り込みであった可能性が高い。H断面の標高6.5m付近で確認した不自然な落ち込みは、堆積土の状況から倒木痕と見られる。G・H断面ともに、より下位では最下層と地山の層界は沼状となっており、付近では谷底面の人為的な改変はほとんどなされていないと判断される。谷傾斜面の基盤土について、標高7.0m付近で、ローム土と地山白色粘土層の層界を確認した。白色粘土の確認される、もっとも標高の低い地点は、前述A断面の標高4.8m地点で、層厚は2mにも達する。

I～K断面（第53図） 21グリッドラインに沿った同一線上の断面で、I断面は右岸側、K断面は左岸側の流路内に位置する。また、I・J断面は谷右岸で並行する関係にあり、標高7.3m付近に、直上の堆積土と明瞭な不整合面がある平坦な地形を確認した。当初、J断面3層はあまりに硬質なことから、地山の可能性を考えたが、わずかに土器片を含むことから、造り出された平坦面（＝「平場」）と判断した。なお、J断面では硬化面も確認されている。

L断面（第53図） Eグリッドライン上の土層断面で、谷右岸の下流部に位置する。1層はピート層で、流路以後、堆積環境が変化した後の土層で、古墳時代の可能性が高い。流心部から外れた右岸では、縄文時代の堆積土がかなり薄い。流心部から外れた地点で地山と最下層の層界は乱れることから、流心部以外での人為的掘削は顕著ではなかったと推測される。

以下では、木組遺構3基、木道状遺構2基のほか、「その他の水場関連遺構」として、①導水溝状施設、②開削部、③谷右岸の平場、④堅果類集積層を報告する。なお3基の木組遺構について、第6～8表には非掲載も含む使用部材の一覧を示し、第88図で使用部材の規模分布を示した。

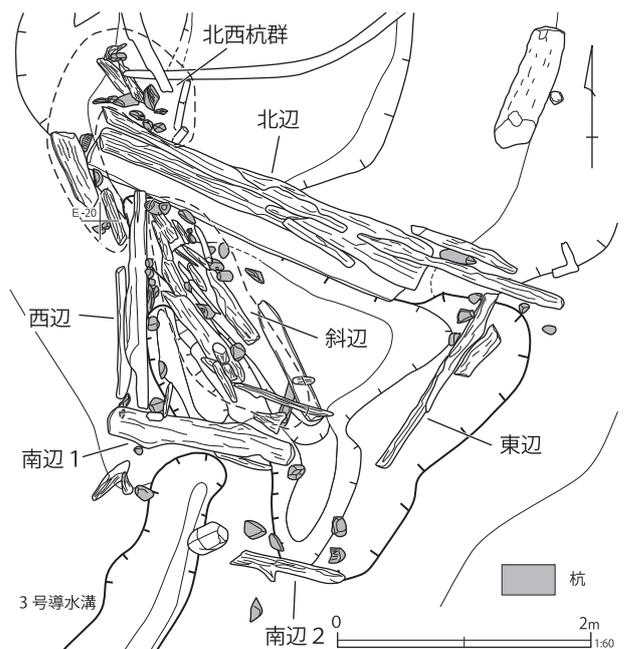
第3号木組遺構（第55～65図）

検出・位置 第6次調査で、第51図E断面のトレンチを掘削時、下部で大型の木材を検出した。トレンチ内では、木材がまとまる地点と、これがなく黒色土のみの地点があり、一定の大きさをもった木組施設との認識に至った。その後第7次調査の流心部を精査過程で、木組遺構の木杵を検出した。

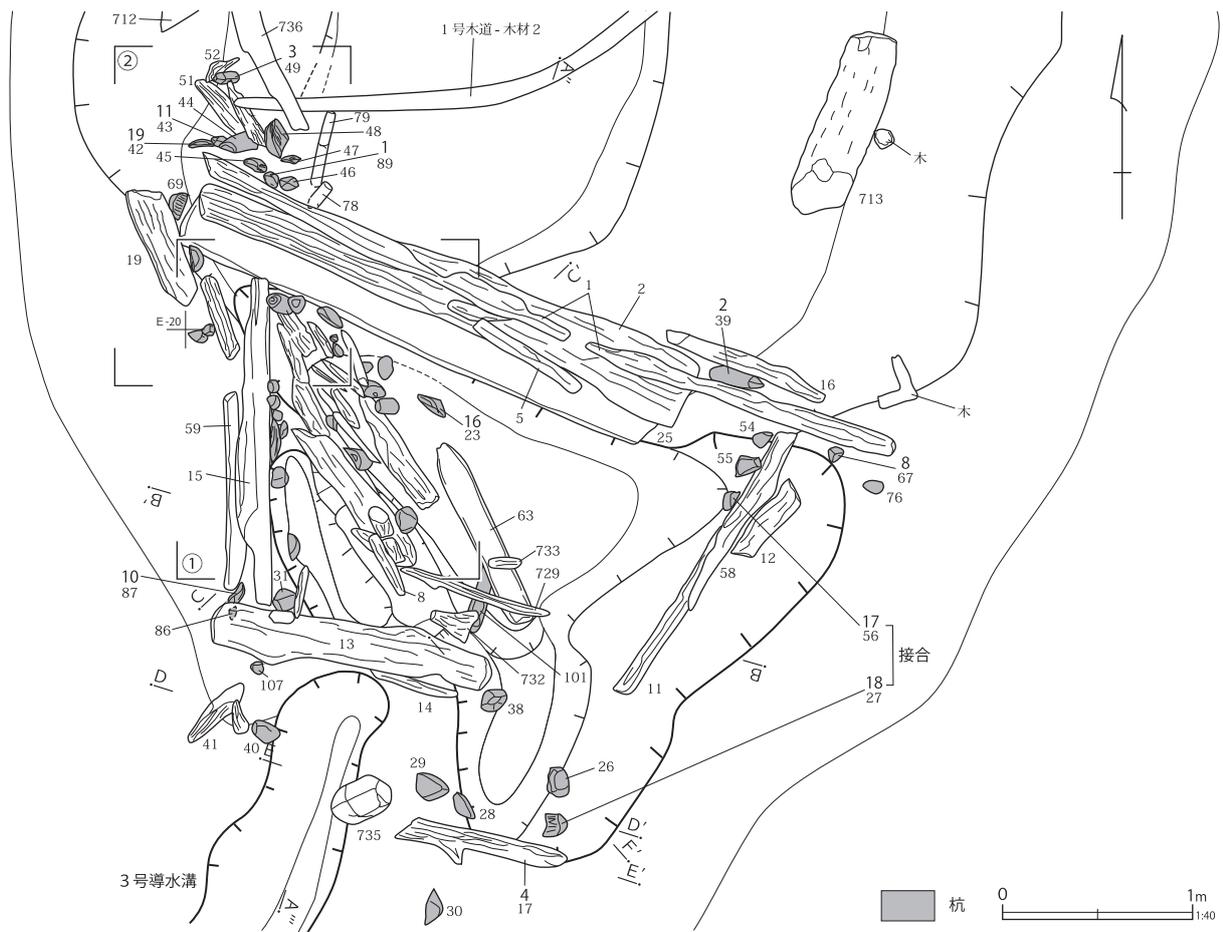
D・E-19・20に位置し、主体はE-20にある。流心部の最下面に位置し、上流からの流れを完全に堰き止めるように造られている。各部は便宜的に第55図のように呼称する。

重複状況・関連遺構 上流側に接続する第3号導水溝状遺構は、構造や層位的状況から本遺構に導くための水路状の施設と判断される。また、下流の第1号木道状遺構の木材3（規模約4.0m）は、北西杭群へ向けて材をしならせて、固定させている状況（図版24-5・39-5等）から、両遺構は併存していた時期があると見てよい。また、下流の開削部は地山が下がっており、本遺構の貯水機能を想定した場合、開削部の埋積が前提となる。

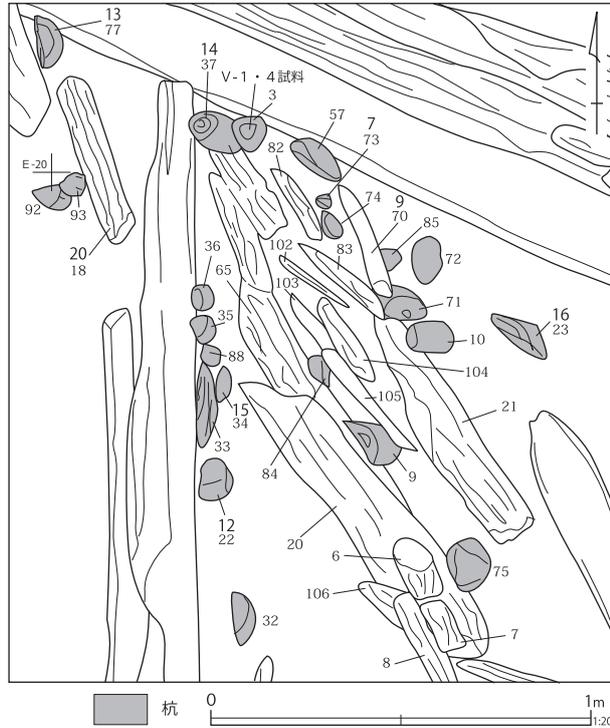
構造・規模 平面形は、下流側に広がる台形で、風呂桶状の構造を持った木組遺構である。構成材



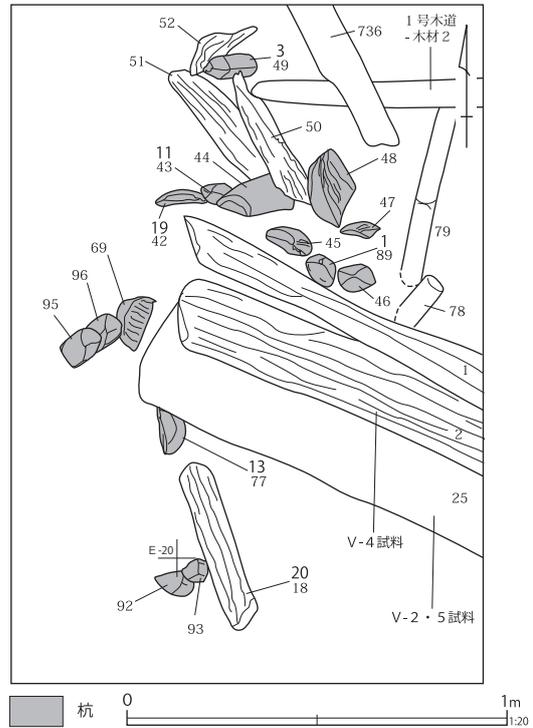
第55図 第3号木組遺構（1）各部名称



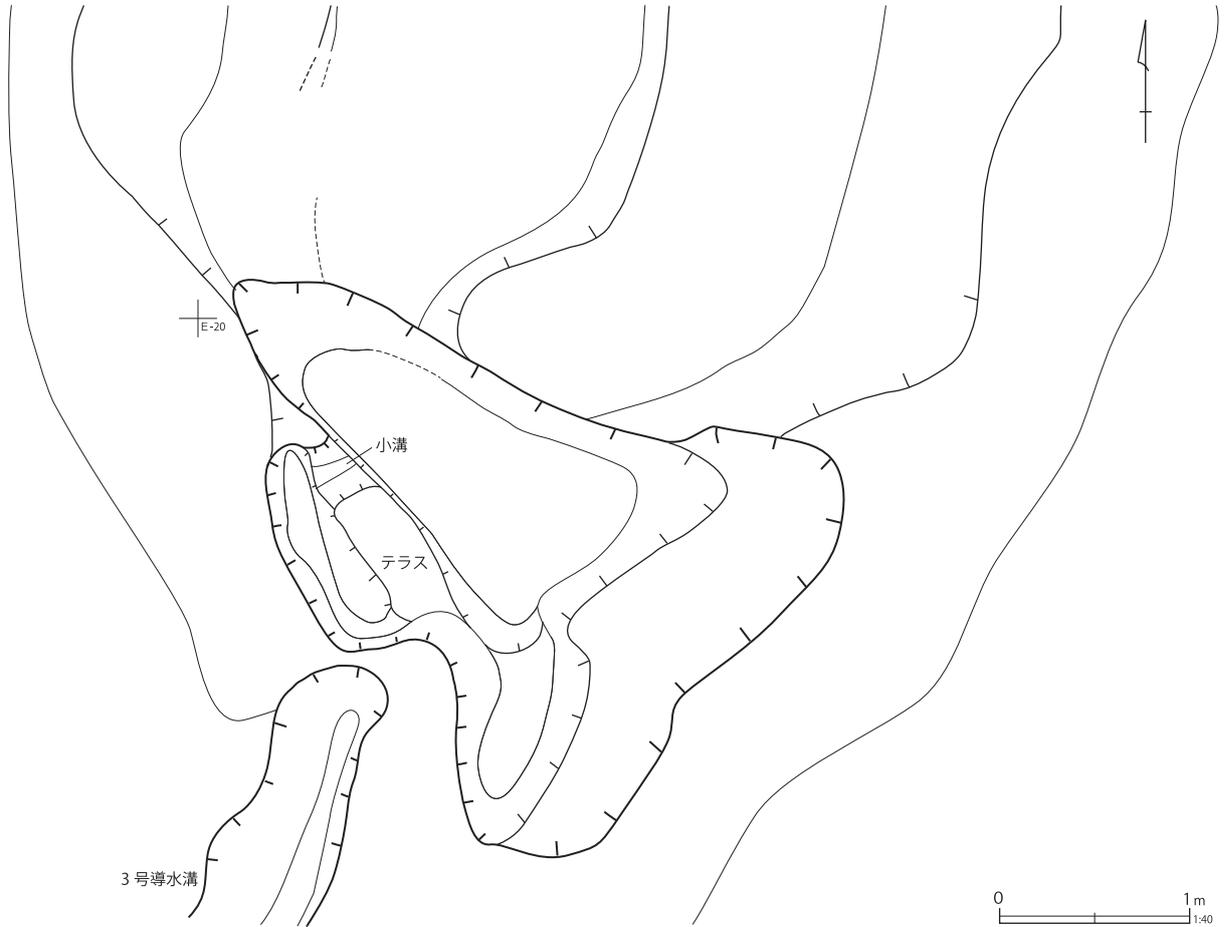
①斜辺



②北西杭群



第56図 第3号木組遺構(2)平面図



第57図 第3号木組遺構(3)掘方

はその他の木組より総じて大きく、下流側の横木で特にその傾向が強い。

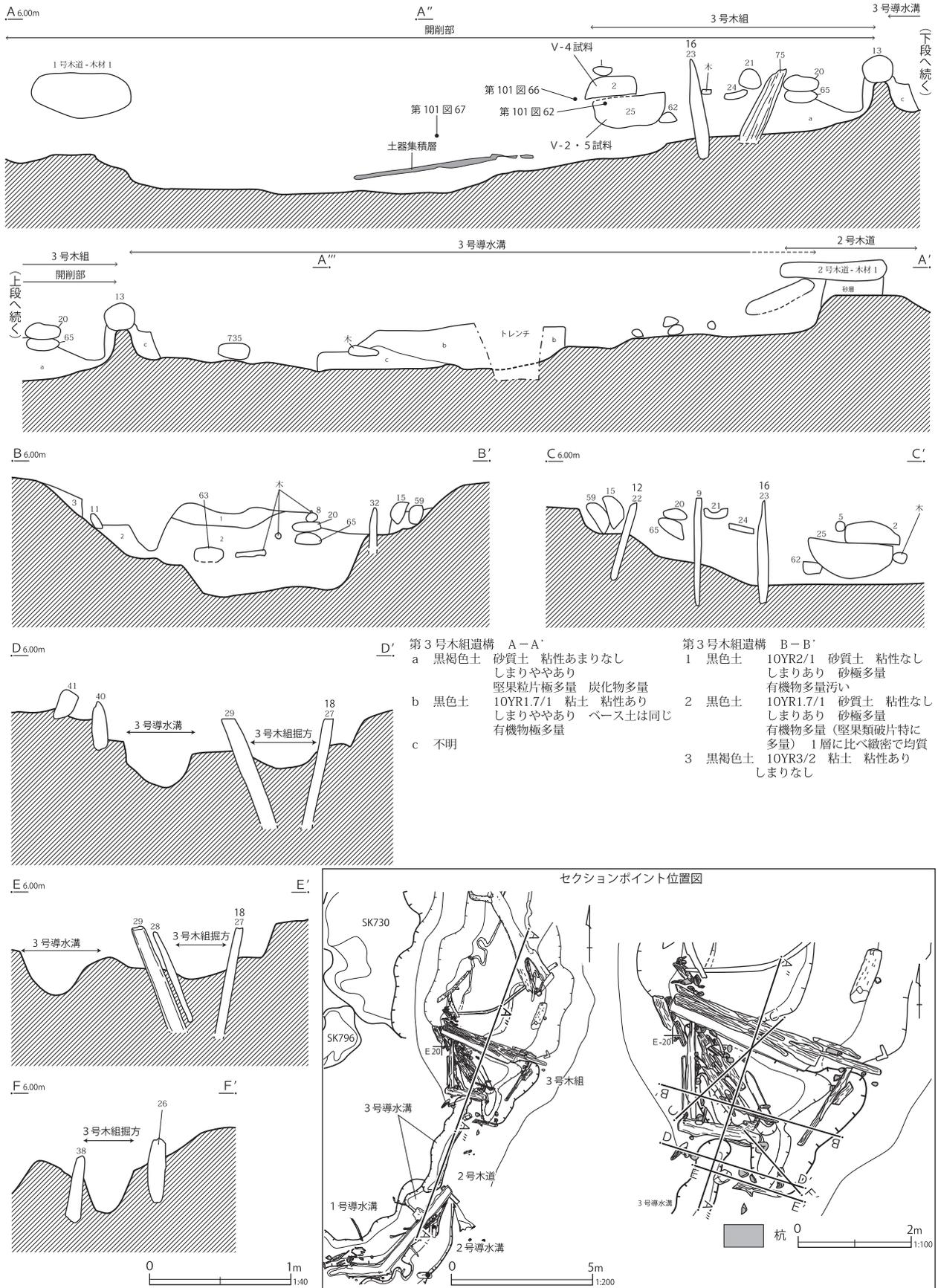
掘方は、木枠よりも一回り大きく、東辺及び西辺側は上方に向かって広がるが、北辺側は立ち上がり、開削部側へ開放されている。北辺の横木は本遺跡で最大径の木材25を基礎として、木材2や1を多段に積み、堰状の構造を取る。水流を堰き止め、水位を上げる仕組みと見られる。木組が機能するためには下流側の裏込め（開削部への黒色土の埋積）を前提とするため、木組と開削部の埋め立ては同時に進行したと考えられる。

上流側の南辺はやや複雑な構造である。南辺1と南辺2は、平行しながら食い違い、南辺1と東辺の木材11の間には幅0.6m程度の開口部がある。第3号導水溝状遺構を通った水の流れが南辺1にぶつかった後、越流分は東へ90°折れ、開口部へと誘われる仕組みである。

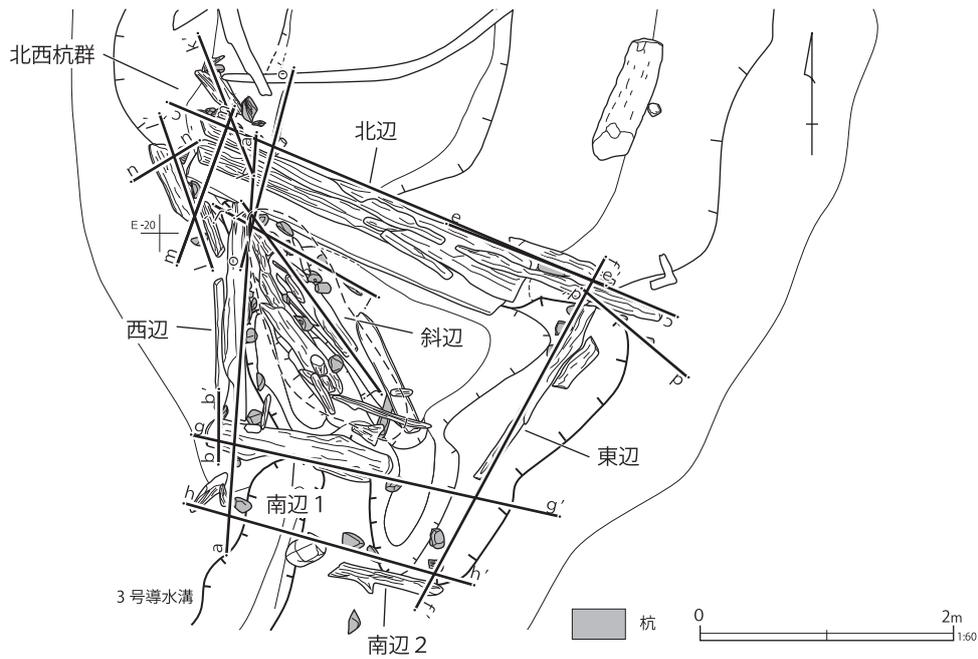
北西隅から開口部へ斜めに向かう多重の仕切りを「斜辺」とした。下流側を除き各辺の横木は、掘り込んだ地山の底面や壁に接しているが、斜辺の横木は、木組内の堆積土上に置かれている。よって斜辺は黒色土形成後に追加されたものである。斜辺の杭57が、構築当初期の横木62に阻まれ、打ち止まった状況（第60図 i・j 断面）も、中途の追加を傍証している。

木組の規模は、長辺2.8m、短辺1.9m、奥行1.9m、検出面から底面までの深さは0.8mである。

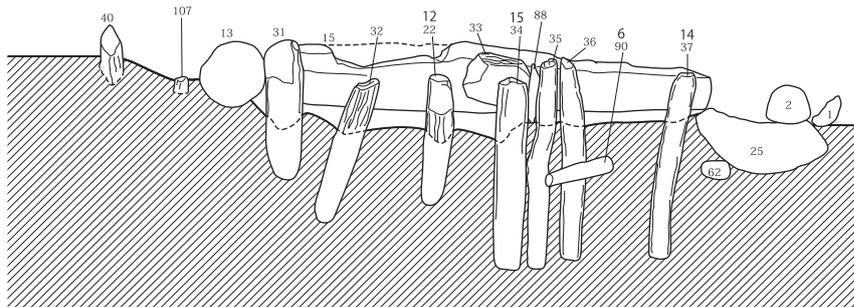
構築材 第3号木組遺構として取り上げた木質遺物一覧を第6表に、また規模分布図を第88図に示す。構成材は木組部（斜辺含む）が82点、南辺2が9点、北西杭群21点、その他5点の総計117点で、横木は44点、杭は60点である。杭は長さ21～92cm、幅4～18cmまでの材があり、大半が50cm以上の材である。横木の最大の部材は南辺のNo.



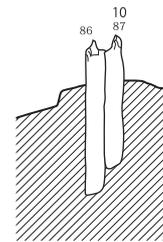
第58図 第3号木組遺構(4)土層



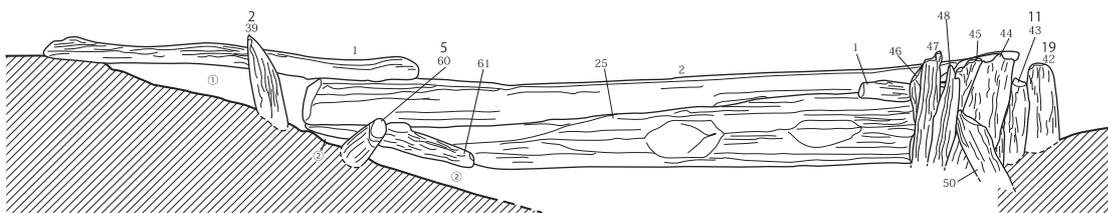
西辺
a 6.00m



a' b 6.00m b'

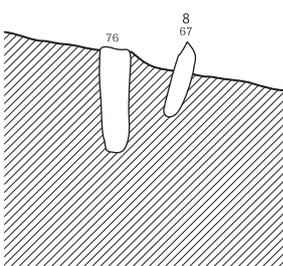


北辺
c 6.00m

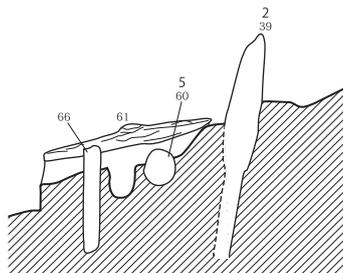


c'

d 6.00m



d' e 6.00m

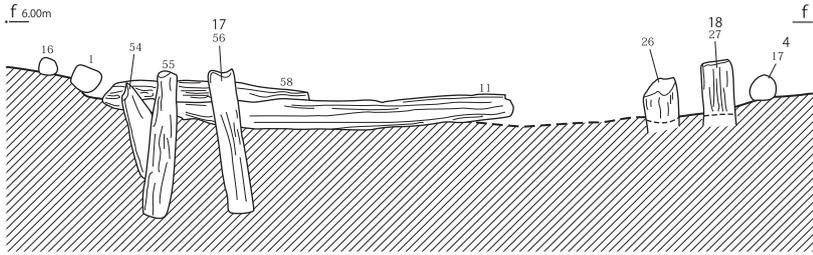


e'

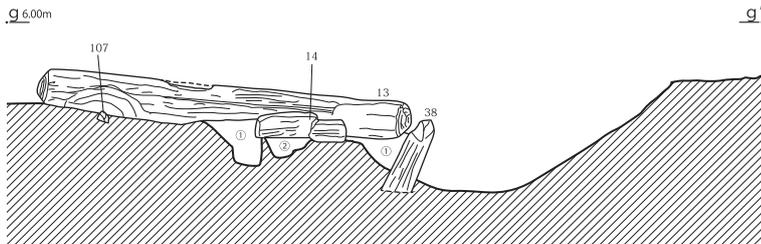


第59図 第3号木組遺構 (5) 杭打設①

東辺

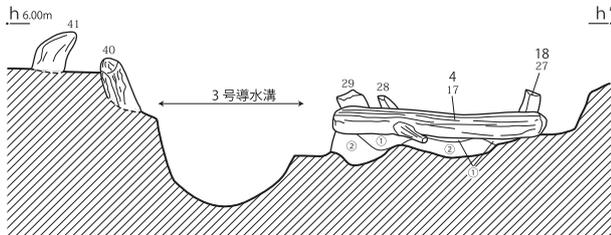


南辺 1

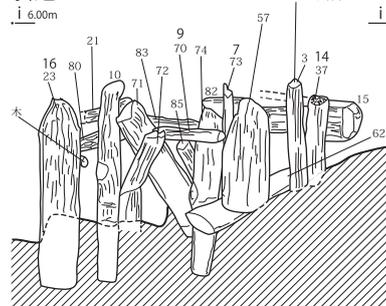


第3号木組遺構 南辺1・2
 ① 黒色土 粘土 粘性あり しまりなし
 ② 黒褐色土 砂質土 粘性あまりなし
 しまりややあり 堅果類片極多量
 炭化物多量

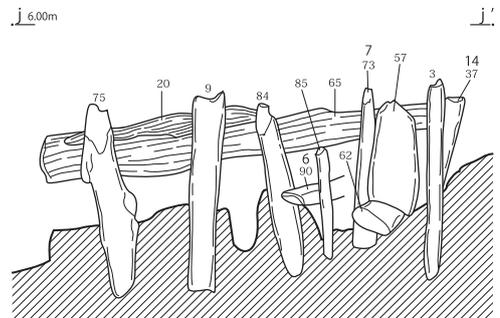
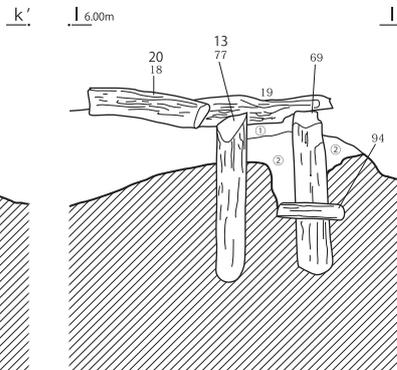
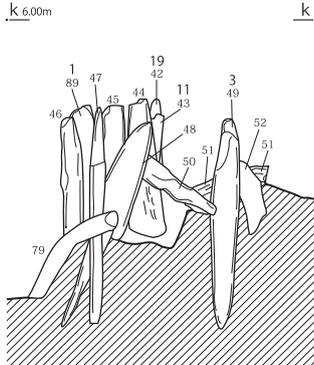
南辺 2



斜辺



北辺杭群



m 6.00m

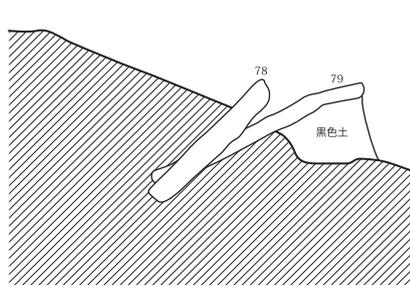
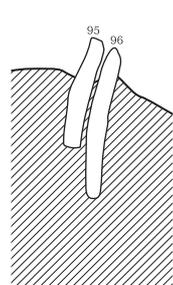
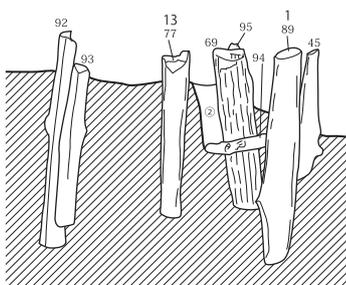
m'

n 6.00m

n'

o 6.00m

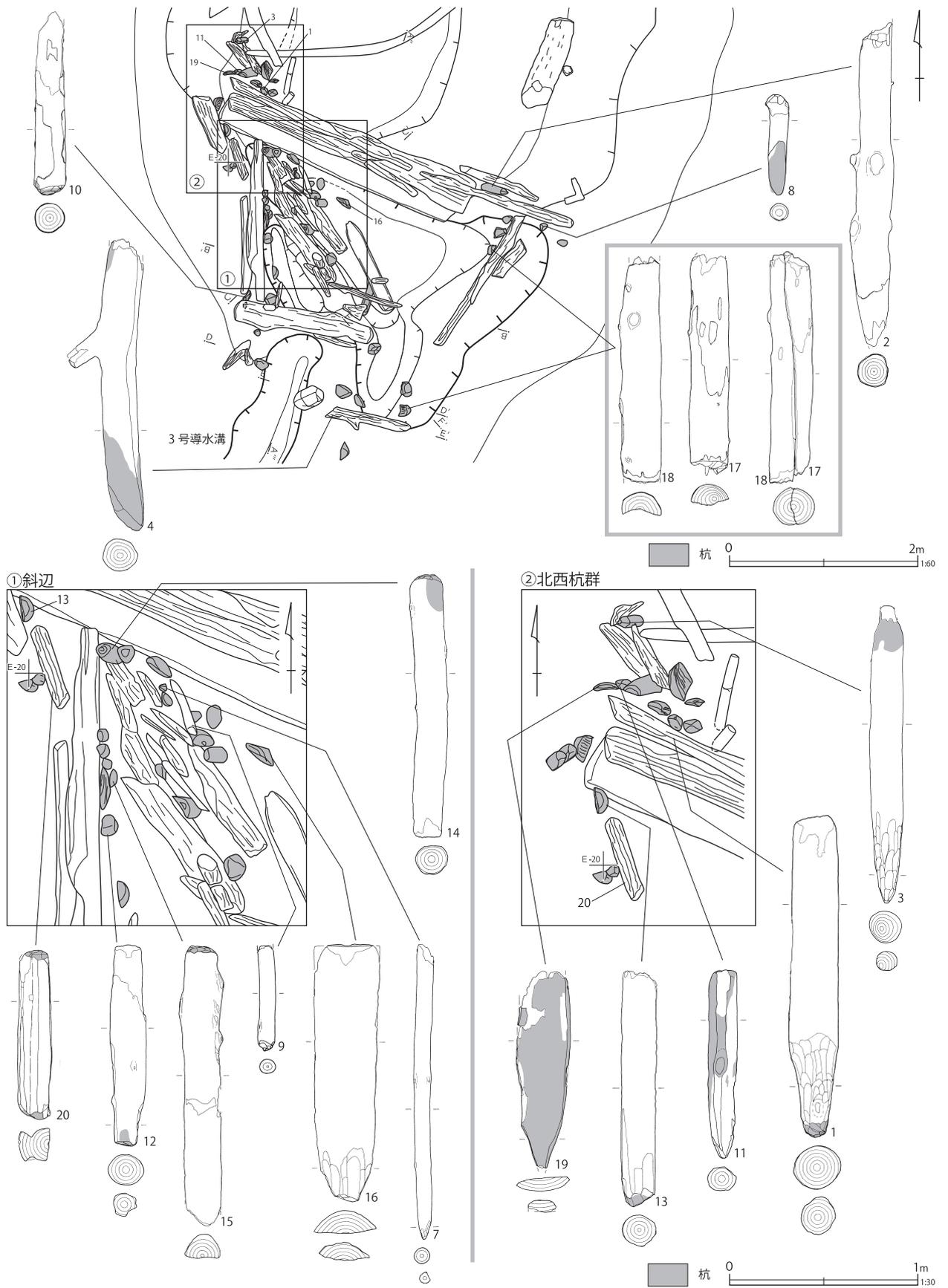
o'



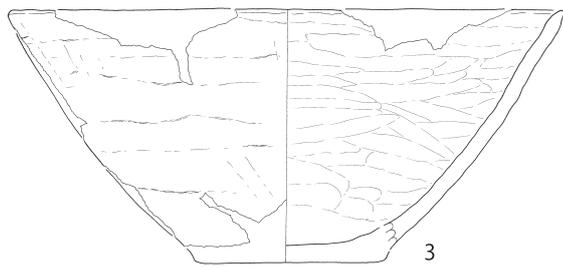
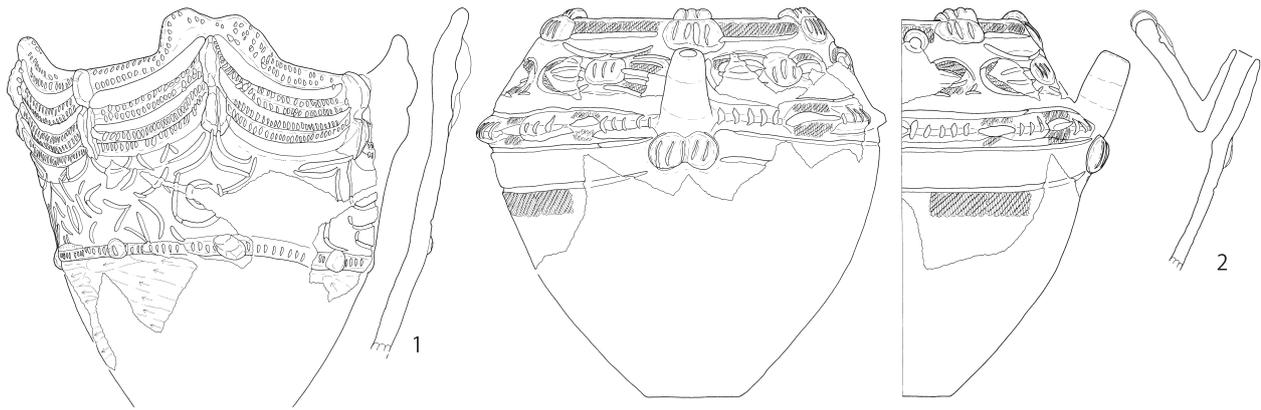
第3号木組遺構 北辺杭群
 ① 黒色土 10YR2/1
 砂質土 粘性なし
 しまりあり
 砂極多量
 有機物多量汚い
 ② 黒色土 10YR1.7/1
 砂質土
 堅果類破片多量



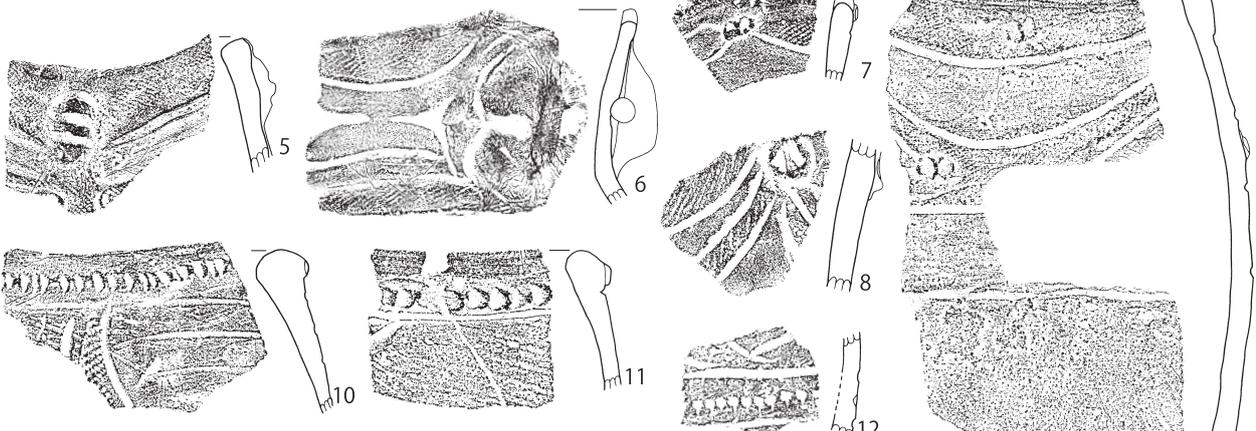
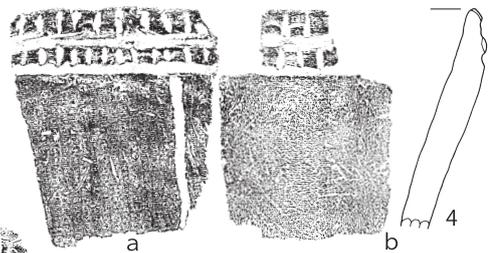
第60図 第3号木組遺構(6) 杭打設②



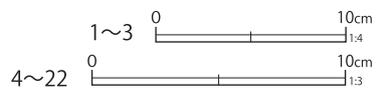
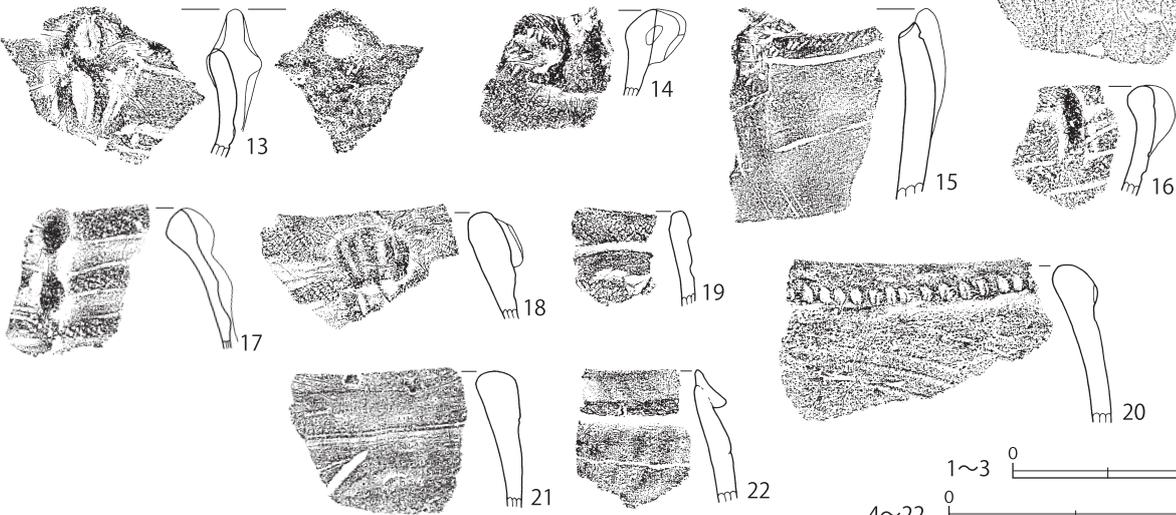
第61图 第3号木组遺構 (7)



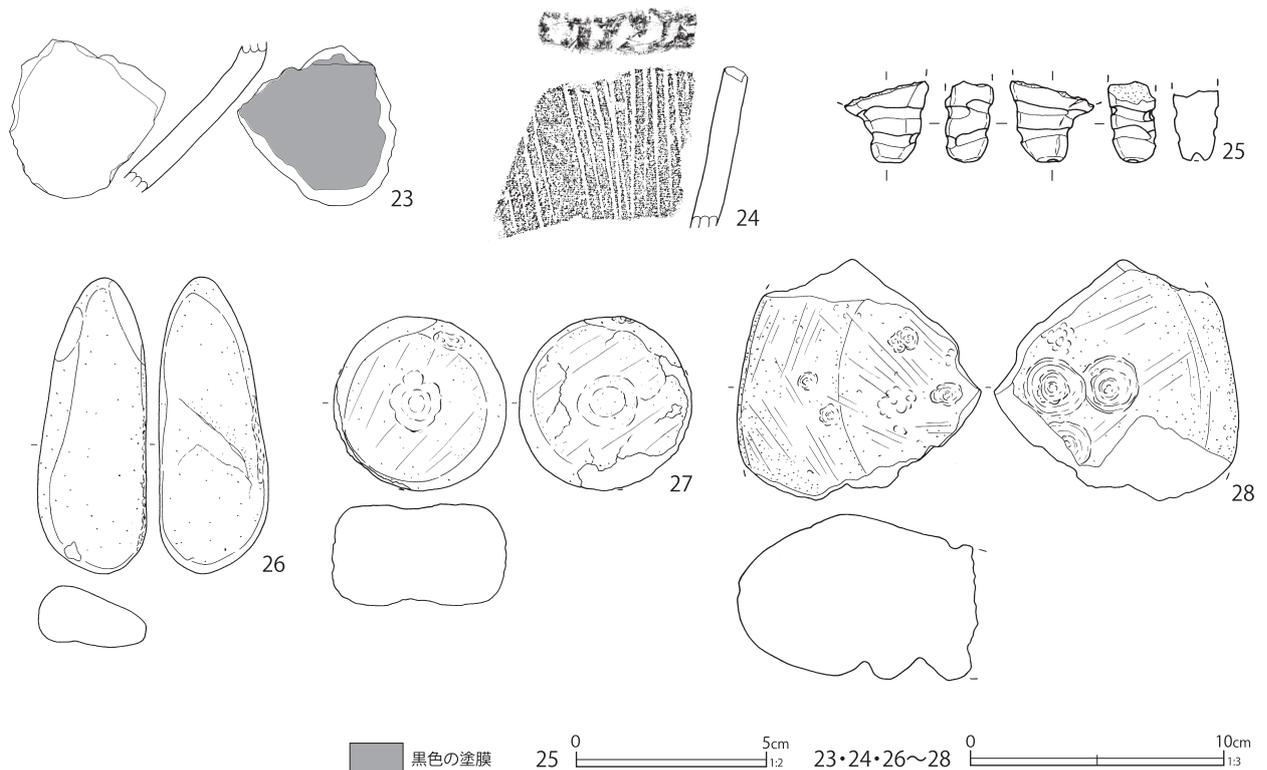
木組内堆積土



検出面



第62図 第3号木組遺構出土遺物 (1)



第63図 第3号木組遺構出土遺物（2）

25で、長さ約280cm、直径50cmのクリ半割材である。下流側の南辺は他にも大型の部材（No.1・2）で構成され、「貯水」の強い意図が読み取れる。その他の木組遺構と比べても、全体的に大型の木材で構成されており、施設そのものの規模とも相関している（第88図）。

杭材の木取は、丸木材35点、半裁材16点、みかん割材1点で、みかん割材の使用がほとんどない。一方、横木でも、丸木材14点、半裁材14点、みかん割材2点で、みかん割材の使用はほとんどない。木枠を構成する横木は半裁材のみである。

炭化した材は、横木で4点、杭11点である。炭化部位は、先端（片側）のみ9点、両端3点、その他3点である。

明瞭に確認できた端部加工は、A類1点、B類6点、C類2点で、その他は不明瞭である。

堆積土・層位 木組内部は2層に分層した（第58図B断面）。1層は砂粒を多く含む、流心部に特有の層で、2層はべったりとした黒色粘土で、開削部の土層（北壁縄13層）に似る。

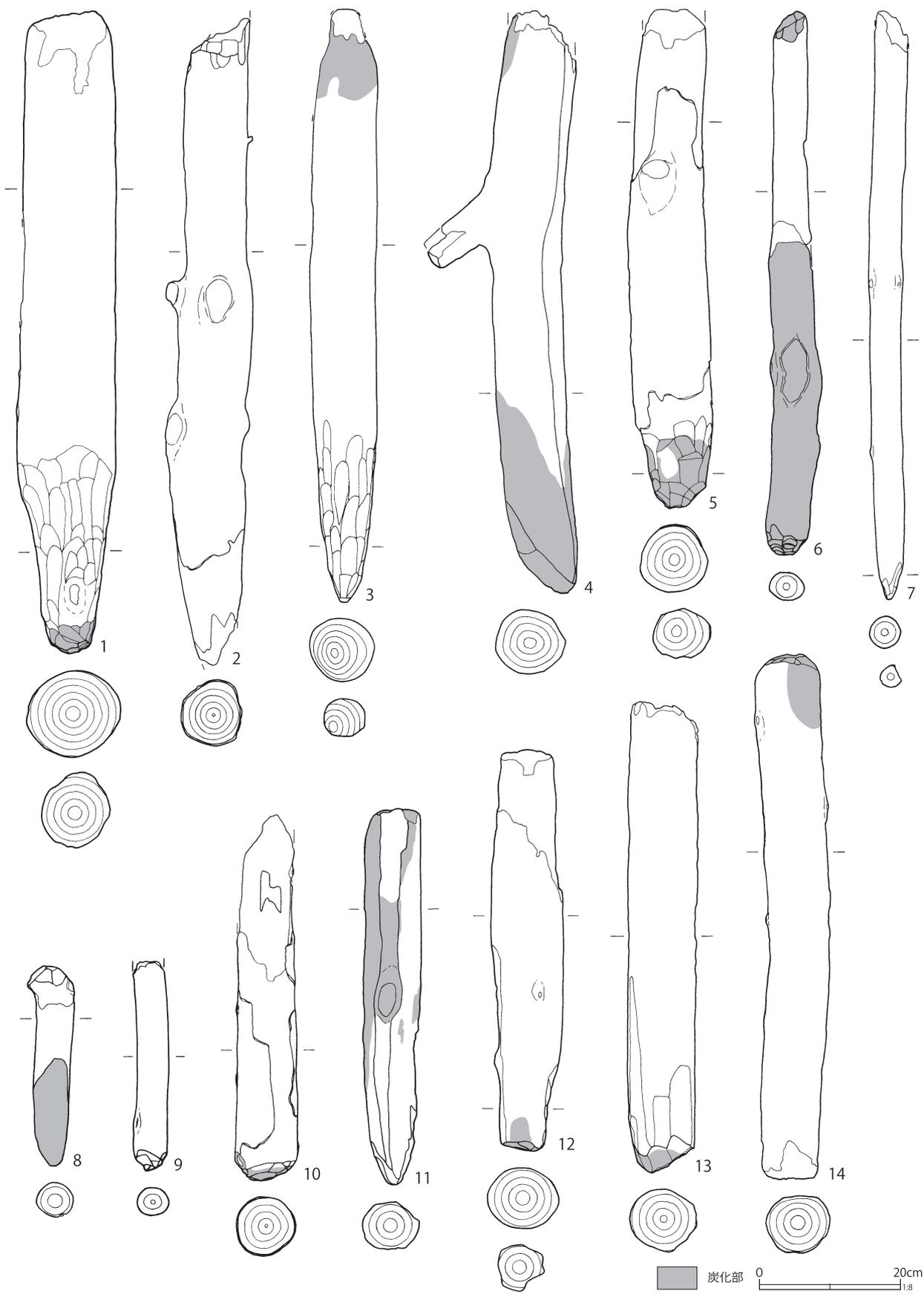
出土遺物 第62～65図に出土遺物を示した。第62

図1～3は復元実測した土器、4～22は破片である。出土層位は3～12が木組内堆積土、13～22が検出面で、第62図1・2は内部堆積土と開削部土器集積層と、4は木組内堆積土と西斜面とで地点間接合がある。

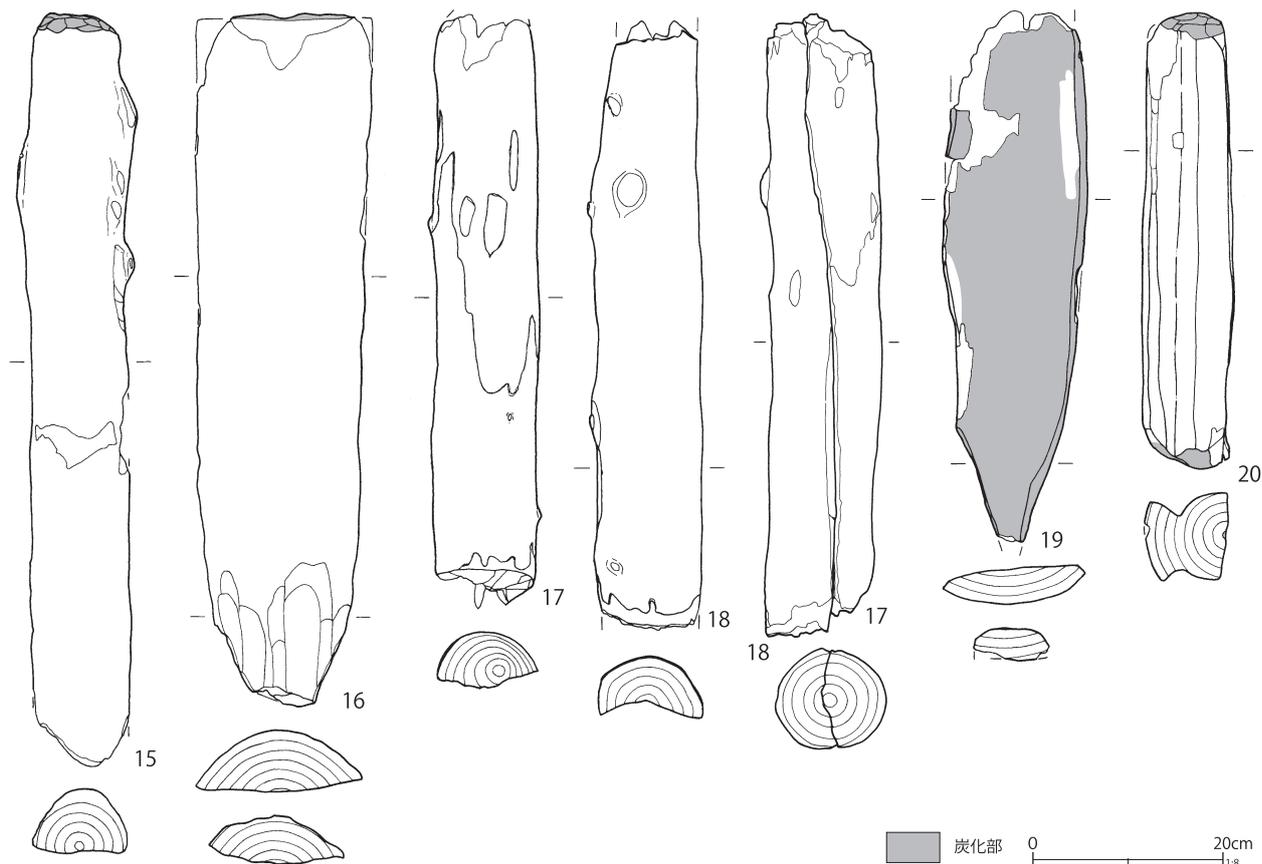
第62図1は大波状口縁深鉢で、波頂部は二山に分かれ、波頂部と波底部には無刻の瘤を二段に配す。隆帯上に縄文施文はなく、刺突列で充填する。波頂部下位の文様は渦巻状にも見えるが、他は「人」字状の文様をランダムに配する。安行1式であろうか。2は安行3a式の注口土器で、口縁部や胴部に縦刻の貼瘤をもつ。注口部下位にはホーデン状の2対の貼瘤をもつ。3は無文の鉢で外面は輪積痕を残す。

4は後期前葉堀之内1式、5は安行2式、6～9は晚期安行式、10・11晚期前葉の紐線文土器の口縁部破片で、12は安行3c式の胴部破片だろう。

13～22は検出面出土資料で、13は加曾利B3式の鉢、14～16は曾谷式で、14は大波状口縁の波底部に橋状把手がつく。把手部側面は盛り上がり、キザミをもった隆起部が口縁部文様へと連続す



第64図 第3号木組遺構出土遺物 (3)



第65図 第3号木組遺構出土遺物(4)

る。16の貼瘤は左にわずかに捻っている。17は安行1式、18は口縁が内湾する砲弾形深鉢で、19は肥厚する口縁部を帯縄文とし入組文を施す。安行2式から3a式である。20は晩期前葉の紐線文土器で、21は条線が消失した晩期中葉の紐線文土器、22も同時期頃の有段口縁深鉢である。

23は内面に光沢ある黒色物質が付着した土器で、漆の可能性が高い。24は接合帯上面にキザミがある堀之内1式の破片である。

25はみみずく形土偶の左腕部の破片で、下端部に円形の刺突があり、腕部に二条の沈線が巡る。

26~28は石器で、26は棒状扁平礫利用の敲石で、片側側縁と端部一方に敲打痕がある。27は花崗岩製の磨凹石で、整形研磨により全体が整えられ、表裏2面に凹穴がある。28は閃緑岩製の石皿破片で、表面は凹面となるよう整形され、磨面、凹穴ともに表裏2面に形成されている。凹穴は裏面の方が深い。

木質遺物 第64・65図に杭16点、横木4点を掲載した。木取は1~14が丸木、15~20が分割材である。17と18は同一の木材で、東辺を構成する杭材が接合した。炭化状況は、片側先端のみが1・3・5・8・10・12~16、両端のみが4・6・20、全体の炭化が19、その他が11である。

端部加工はA類が2・8、B類が3・5・7・11・16・19で、C類は1・13である。

年代測定と樹種同定を2点(杭3、横木25)で実施した(第V章2・5節)。樹種は杭3がカヤ、横木25はクリである。

時期 器形復元した土器も含め、本遺構に明確に伴う遺物はない。木組内と開削部関連土とで複数の接合関係があり、開削部の埋め立てが木組の構築と関係した可能性が高い。木組関連土からは安行3c式期まで、また開削部出土土器は同3b式期までを主体とすることから、構築は安行3b式期、同3c式期まで使用されたと考えられる。

第4号木組遺構（第66～75図）

検出・位置 フライントレンチや第50図D断面のトレンチの流路底面付近で、水平方向に堆積する木材や底面に打設された杭を確認し、何らかの木組施設の存在を予測した。その後、流路の堆積土を精査中に、底面よりやや高い位置で水平方向に集中する木材（上部横木群）を検出した。第3号木組遺構や第5号木組遺構のように、横木と杭が組まれた様子や木枠状の施設もなく、掘り込み等も窺えないものの、横木が一定範囲に集中する様子から木組を想定し、慎重に精査を進めた。

この木材の記録、取り上げ後、下部に多数の杭を検出した。両者に組まれた状況は確認できなかったが、分布範囲が一致すること、横木の一部は盛土で固定されていたこと等から、上部の横木と下部の杭群からなるひとつの構造体として理解し、第4号木組遺構として報告する。

流路上のF-19に位置する。南側が右岸と接岸し、木組が突き出した格好となる。調査序盤のフライントレンチでは明らかにできなかったが、ちょうどトレンチ部（第67図A断面ライン上）に流路と右岸（陸地）の境界があるようで、C～E断面ではトレンチを境に0.2m程度の底面の標高差がある。横木の上面はおおむね右岸の地山と同じ高さで、右岸側から流路上へ、あるいは浮島状となっている第2号木道状遺構までの足場的な機能が想定される。

重複状況・新旧関係 上流側で第5号木組遺構（後期前葉）や、これを切る溝跡やローム搬入土が隣接するほか、下流側で第2号木道状遺構が接する。後者とは標高差や層位差が無く、本遺構の横木が木道を囲って分布する。また、木道に沿う第2号導水溝状遺構は、本遺構の杭群を避けて掘り込む（第66図）ことから、木道とは併存（同時期に機能）していた可能性が高い。横木よりも層位的に上位にある溝跡やローム搬入土は、より新しい時期と判断される。

構造・規模 上部の横木群と下部の杭群からなり、これに伴う掘り込みはない。以下では、両者を分けて記載する。それぞれの木材の一覧表は第7表に示した。

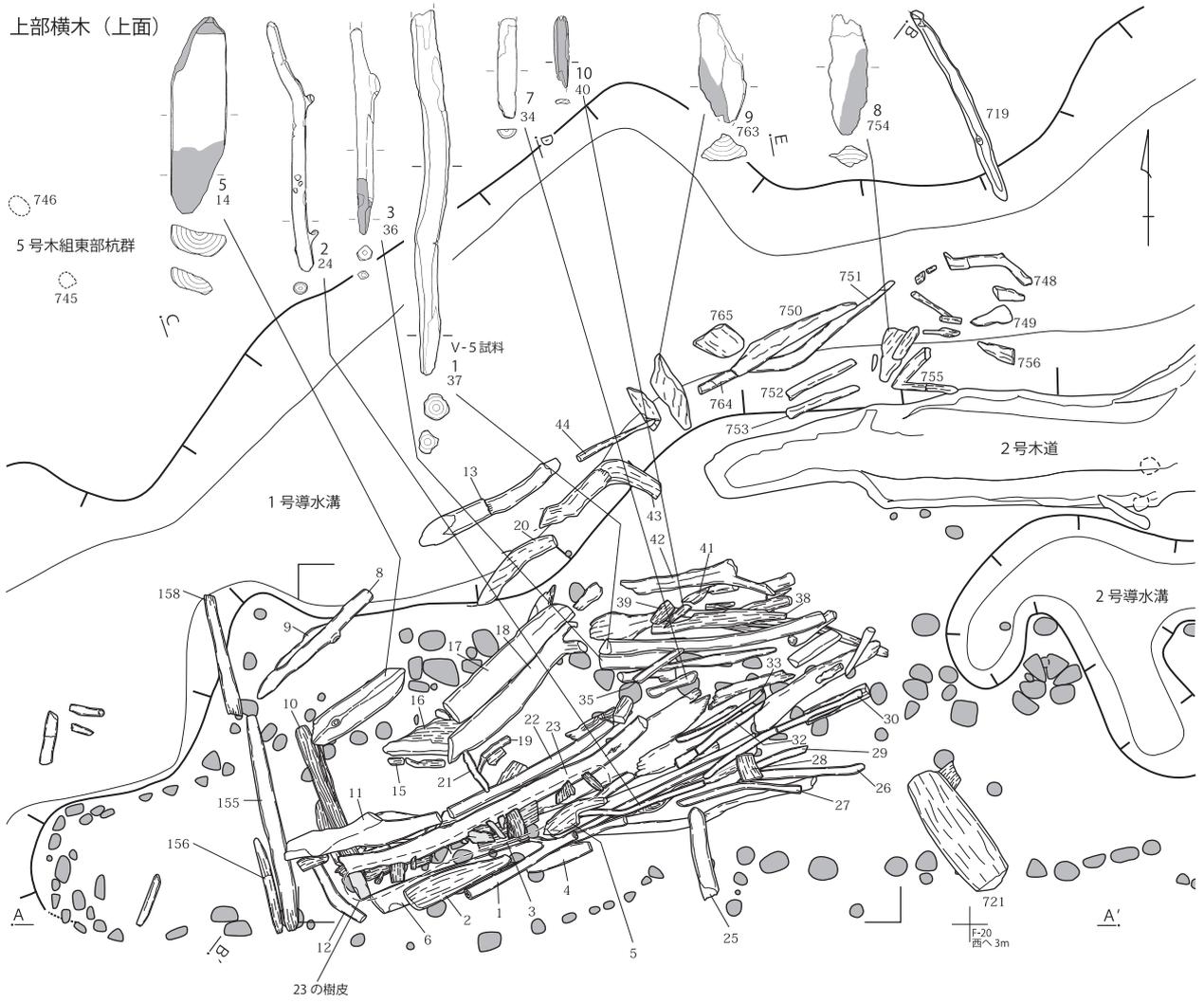
上部の横木 構成材は59点である。一部、下位に重なって検出された木材を「下面」とし、それ以外を「上面」として示した（第66図）。比較的小径の木材を南北1.0m、東西2.7mの範囲に敷き並べている。材の大半は流下方向に向くが、横木155・158・10等はこの下位で直交する。南東側では密集するが北西部はかなり散漫である。木材同士を固定した状況は確認できなかったが、南側の陸地（地山）との接点付近では白色粘土の盛土が分布する（第67図E断面1層と同図A断面7・8層）。横木を固定する機能のほか、盛土自体が足場の一部の可能性がある。盛土は一見地山と見誤るほどで、断ち割りの結果、下位に潜り込む流路堆積土を確認したことで、盛土と発覚した（図版27-5）。

これらの状況から、材の比較的高密度な南東部は旧状を留めている可能性が高く、散漫な西側や木道付近の木材の散在状況は流出を示し、旧状を保っていない可能性が高い。なお、盛土を確認したのは右岸の接岸部付近のみで、横木上面に白色粘土や黄褐色ローム土等は確認できなかったことから、基礎ではなく、横木が露出する構造であったと考えられる。

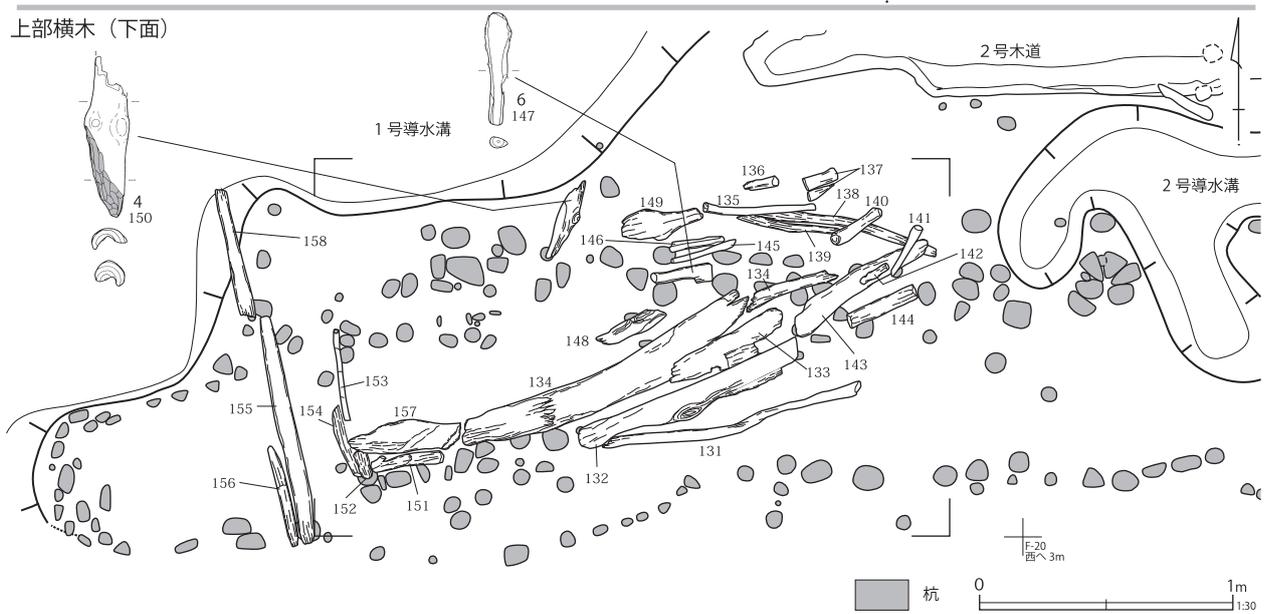
木材は、長さ9～106cm、径3.5～15.0cmまでが確認されるが、分布の中心は無く、多様な規模の木材が使用されている。

下部の杭群 流下方向に長軸をもつ長方形（約5.0m×約1.0m）の範囲に、比較的小径の杭約180本を打ち込んでいる。杭の打設範囲は大きく南北の2列と理解され、上流側（西側）では、両者をつなぐように杭列が閉じ、全体としてコ字状の配列となる。説明の便宜上、各列を第68図左下のよう称呼した。南列は杭237～杭57まで、ほとん

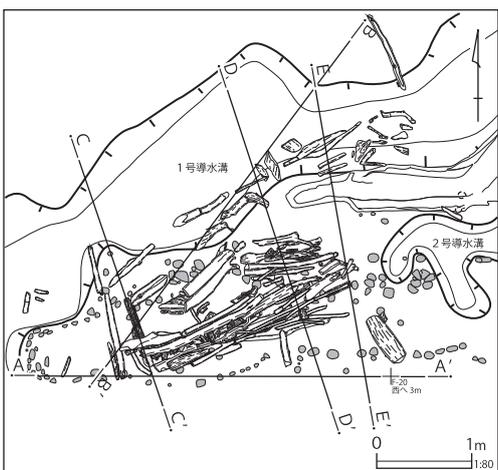
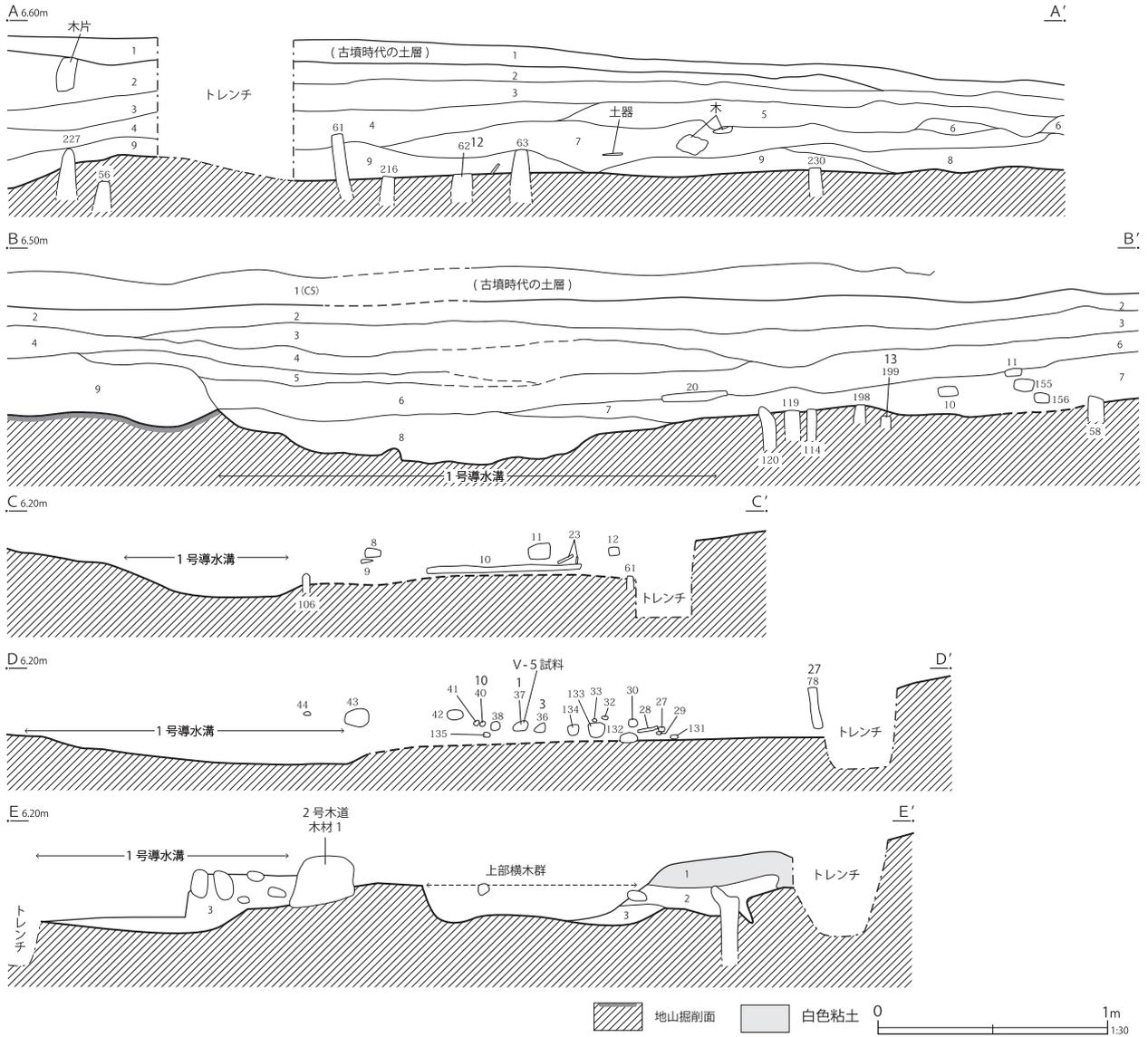
上部横木 (上面)



上部横木 (下面)

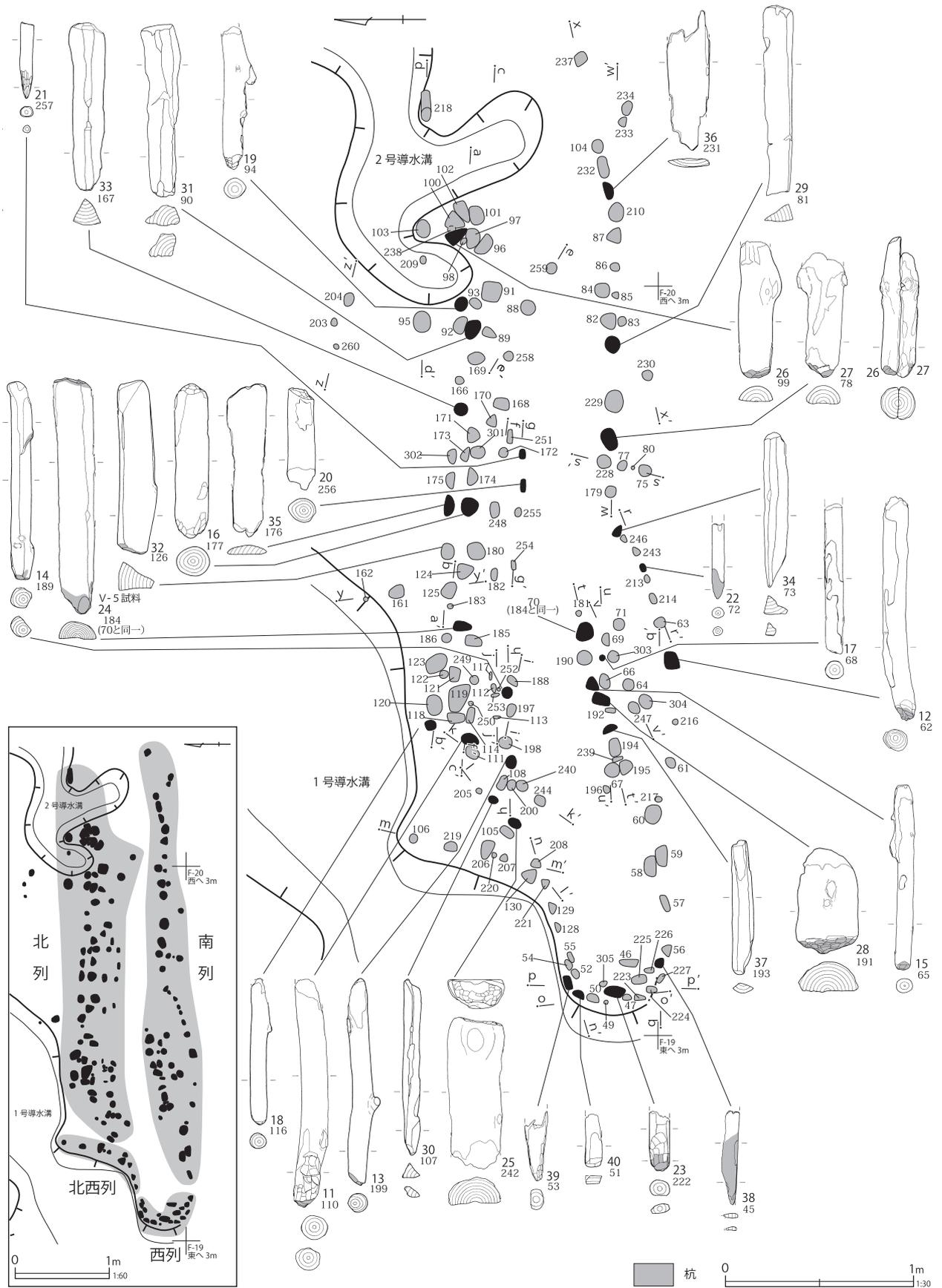


第66図 第4号木組遺構(1)横木

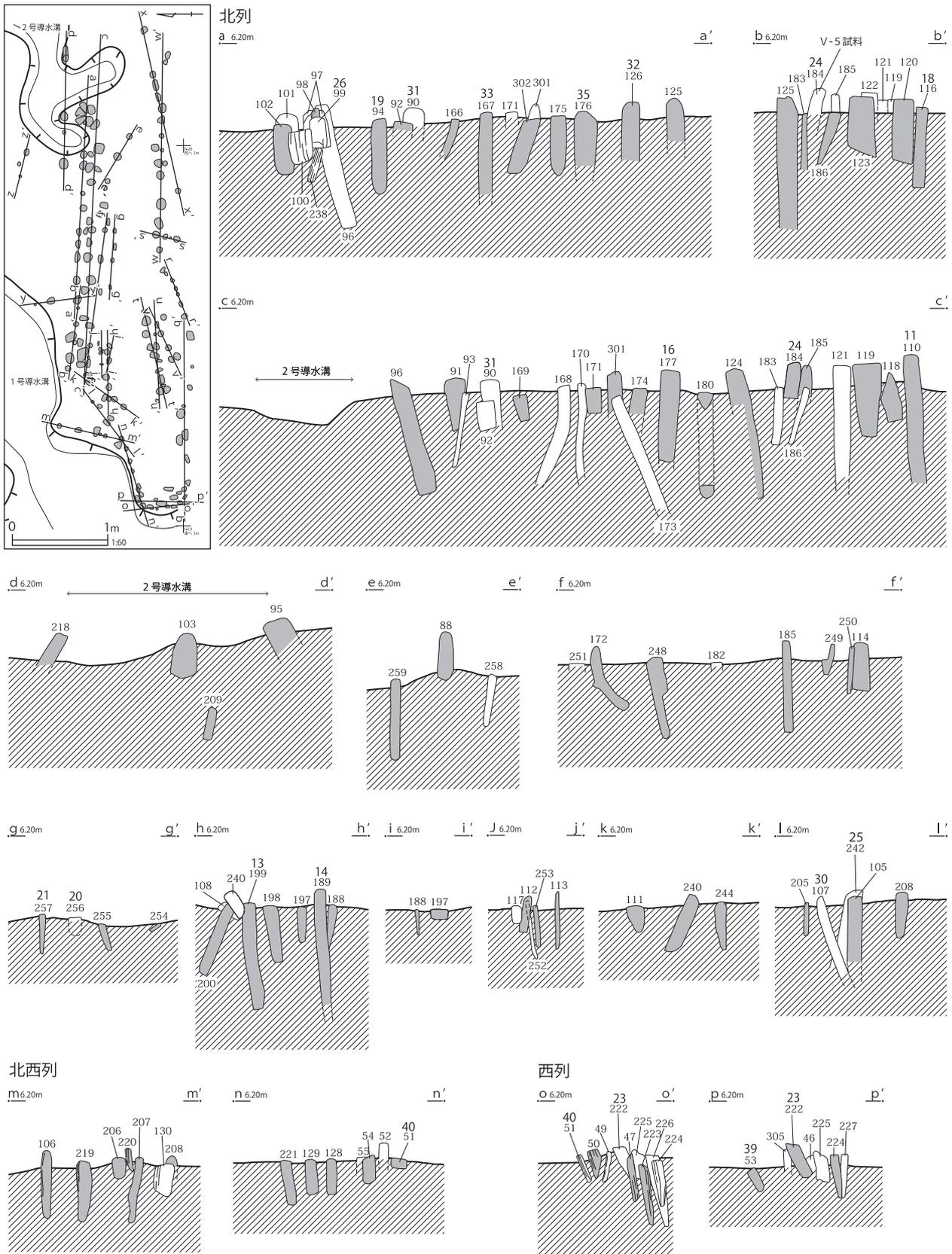


- 第4号木組遺構A-A'
- | | | | |
|---|-----------|-----------|--|
| 1 | 黒色土 | 10YR1.7/1 | 粘土 粘性あり 有機物多量 |
| 2 | 黒色土 | 10YR2/1 | シルト 粘性あり しまりあまりなし 有機物極多量 |
| 3 | 黒色土 | 10YR1.7/1 | シルト 粘性ややあり 植物遺体多量 |
| 4 | 黒褐色土 | 10YR3/1 | 粘土 粘性あり 有機物極多量 白色粘土ブロック多量 砂やや多量 |
| 5 | 黒褐色土 | 10YR3/1 | 粘土 粘性あり 有機物極多量 白色粘土ブロック極多量 砂多量 4層よりも白色粘土多量 |
| 6 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 粘土 粘性あり しまりあまりなし 有機物多量 |
| 7 | 黒褐色土 | 10YR3/1 | 黒褐色粘土ブロックと地山白色粘土ブロックの混合層 有機物多量 砂多量 |
| 8 | 地山白色粘土集積層 | | 第4号木組遺構に伴う人為堆積土 一見地山だが下位に黒色粘土層が潜るため分層 |
| 9 | 黒褐色土 | 10YR3/1 | 粘土 粘性あり 7層に類似するが白色粘土の量は同層より少量 |
- ※5層以上と6層以下で明瞭に土質が異なる。前者が砂を多く含む流路の堆積土。後者は、第4号木組遺構関連土層および、地山白色粘土と黒色粘土がマーブル状に混在する層である。
- 第4号木組遺構B-B'
- | | | | |
|---|------|-----------|--|
| 1 | 黒色土 | 10YR2/1 | 粘性弱い しまり強い 植物片を含む ビート層 |
| 2 | 黒色土 | 10YR2/1 | シルト 粘性あり 遺物極少量 3層よりも明るい |
| 3 | 黒色土 | 10YR1.7/1 | 粘土 遺物極少量 |
| 4 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | シルト 粘性あまりなし しまりあり 砂多量 ロームブロック多量 遺物極少量(第50図D-D' 5層) |
| 5 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | シルト 粘性あまりなし しまりあり 砂多量 ロームブロック微量 遺物極少量(第50図D-D' 7層) |
| 6 | 黒色土 | 10YR1.7/1 | シルト 粘性ややあり しまりややあり 木片他 有機物多量 砂やや多量 |
| 7 | 黒色土 | 10YR2/1 | シルト 粘性あり しまりなし 砂多量 植物多量 (黒色粘土と地山白色粘土の混合層で、地山との境界不明瞭) |
| 8 | 黒色土 | 10YR1.7/1 | 砂質土 粘性なし しまりあり 木片他有機物極多量 摩滅した土器片極多量 谷流心部(1号導水溝)の堆積層 |
- 第4号木組遺構E-E'
- | | | | |
|---|-----------------|-----------|-------------------------------|
| 1 | 白色粘土ブロック集積(充填層) | 人為的 | |
| 2 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 粘土 粘性あり しまりなし |
| 3 | 黒色土 | 10YR1.7/1 | 砂質土 粘性なし しまりあまりなし 木組以前の流心部堆積土 |

第67図 第4号木組遺構(2)土層



第68図 第4号木組遺構(3) 杭群

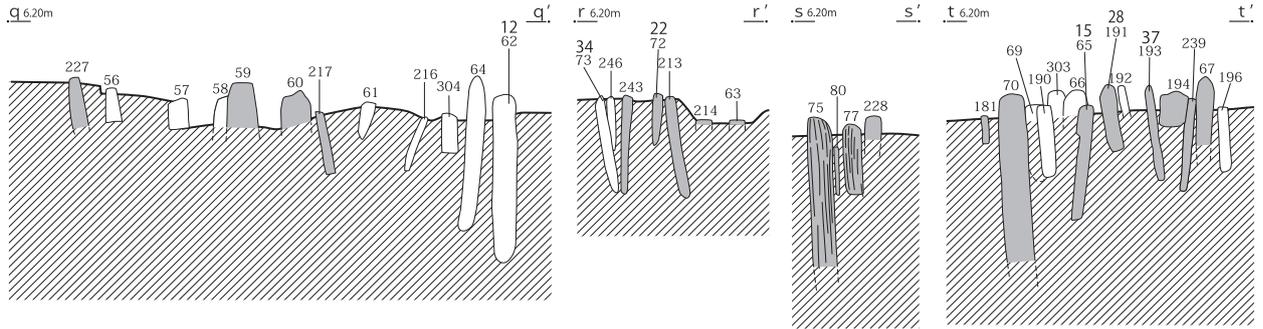


※アミがけは線上・白抜きは見通し

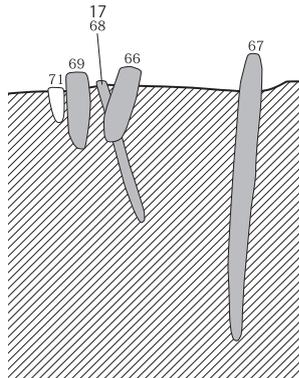
第69図 第4号木組遺構(4) 杭打設①

南列

q 6.20m

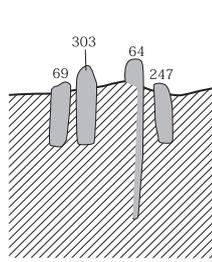


u 6.20m



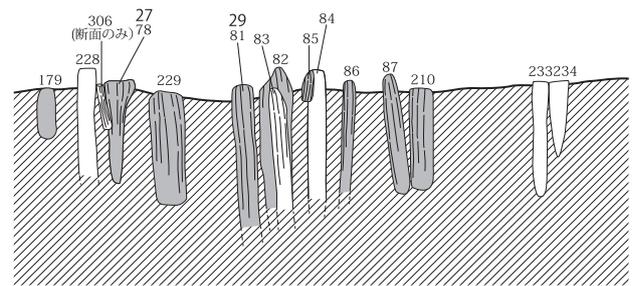
u

v 6.20m



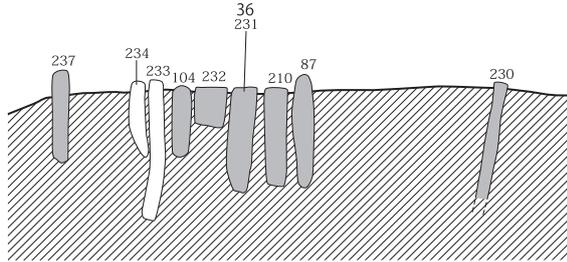
v'

w 6.20m



w'

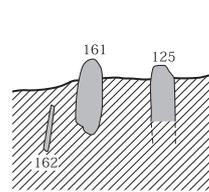
x 6.20m



x'

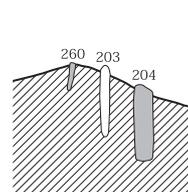
その他

y 6.20m



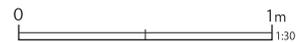
y'

z 6.20m



z'

※アミがけは線上・白抜きは見通し



第70図 第4号木組遺構(5) 杭打設②

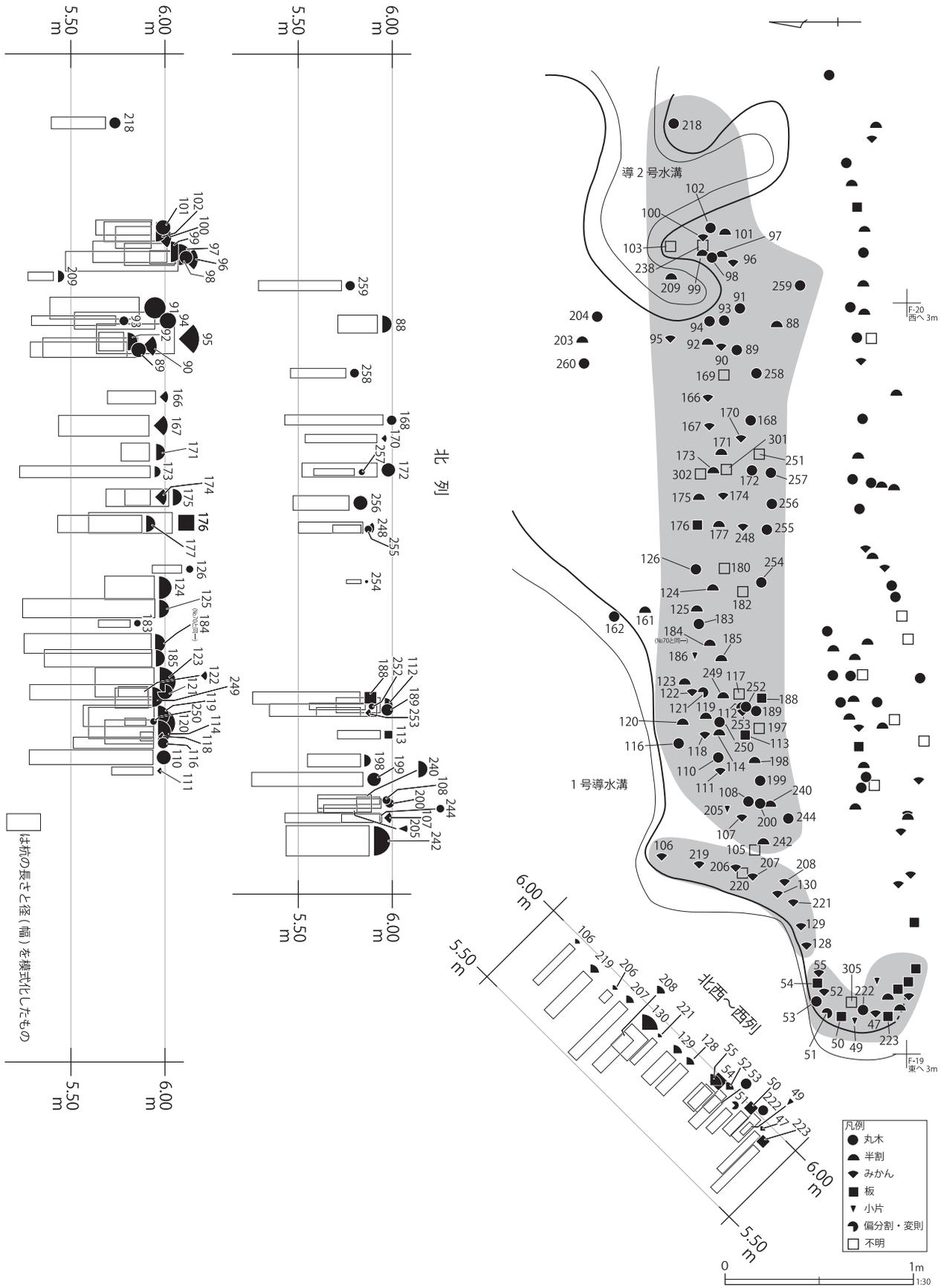
ど隙間を持たず、西側で一部2列になる。一方、北列は基本的に多重となっている。

杭の打設状況は第68~70図に示した。a~l断面は北列、m・n断面は北西列、o・p断面は西列、q~x断面は南列である。また、いずれにも属さない杭をその他としてy・z断面に示した。

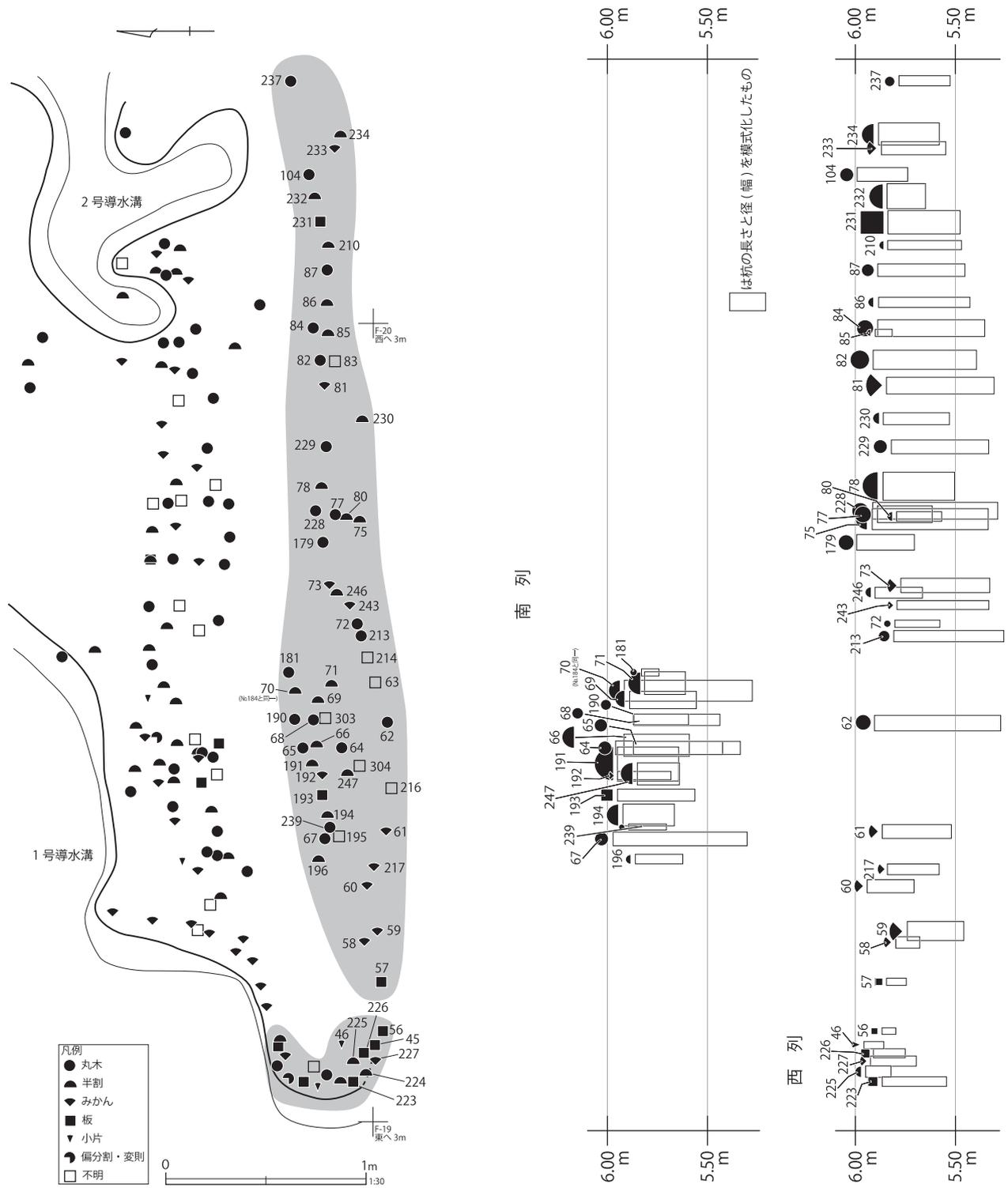
このほか、第71・72図には列ごとに、杭材の規模と深度、木取の分布を示した。

堆積土・層位 本遺構は掘り込みを伴わない、解放された遺構であり、第67図E断面1層の盛土を除き、直接関わる土層はない。同断面2・3層は木組以前の堆積土で、後述の「下層出土遺物」はこの層から出土したものである。

構成材 第4号木組遺構として取り上げた木質遺物一覧を第7表に示し、構成材の規模分布を第88図に示す。構成材は横木59点、杭189点、その他5点の総計253点である。規模は、上部の横木は長さ約80cm以下、幅15cm未満の小径・細身の木材が選択されている。下部の杭群は長さ70cm以下、幅18cm未満の材で占められ、横木同様、小径・細身の材が多用される。地点別では、西列から北西列に極端に短い杭材がまとまり、北西列はみかん割材のみで構成されている。上部の横木が残存する本遺構において、上部の大きな滅失は無く、この程度の規模や打設深度で十分機能する構造だったことを示している。



第71図 第4号木組遺構(6) 杭深度分布①



第72図 第4号木組遺構(7) 杭深度分布②

確認できた範囲での木取は、杭は丸木49点、半裁材45点、みかん割材38点で、多用される木取は無く、どれも満遍なく使用する。横木は丸木34点、半裁材21点、みかん割材5点である。

炭化した杭は15点で、炭化部位は、片側端部のみ13点、両端のみが1点、その他が1点である。横木では、片側端部のみが4点、両端のみとその他が各1点である。

端部加工はA類1点、B類8点でC類は確認されなかった。

出土遺物 第73図に出土遺物を示した。出土層位は、1～13までが下層、14～31はこれより下位の、地山直上に堆積する最下層出土資料である。後者は第4号木組遺構の構築以前の土層として確実なもので、第1・2号導水溝状遺構を覆う土層や水場遺構（エリアC）最下層と同一層位である。よって木組遺構の時期は、安行3c式を含む本層出土資料以降と判断される。

下層出土遺物 第73図1は3単位波状口縁の加曾利B式深鉢、2は後期後葉の台付鉢である。3は安行2～3a式の大波状口縁深鉢、4は安行3b式、5は同3c式の深鉢であろう。6・7は安行2式で、6は条線文土器、7は紐線文土器である。8・9は晩期前葉頃の粗製土器で、8は口端部にB突起が付く。10は後期後葉～晩期前葉の深鉢底部で、底部はケズリ調整で沈線による一文字がある。

11・12は接合帯上面に刻み目のある土器片である。刻みの入れ方は、11では上端を外側より見て左上がり（左傾）で、12は器面に直交する。文様は、11は無文地にキザミのある隆帯が垂下する。また、12は無文部だが、焼成や質感からともに後期前葉の堀之内式であろう。

13は破片のため不明瞭だが、扁平な石材の二側縁の両面に剥離のある石器で、剥離を伴うざらざらの敲打痕（敲打痕B）が形成される側縁部が主たる機能面と見られ、いわゆる半円状扁平打製石器の機能面に類似する。

最下層出土遺物 第73図14～31は最下層出土資料である。14・15は加曾利B式の深鉢で、16～20は晩期安行式である。16～18は深鉢で、19・20は鉢であろう。21・22は列点と沈線区画を持つ条線文土器で、22は条線が欠落している。

23～26は紐線文土器である。24・25は地文に条線があり沈線で文様を描出する。26には条線がない。27は口縁部にかろうじて縄文の痕跡が残る。28・29は粗製土器で、28は口縁部が肥厚し、指頭押圧が巡る。29は素口縁だが口縁付近に輪積痕が残る。30・31は口縁部を沈線で区画し、二本沈線で弧文を描出する土器で、地文に条線を持たない。30は口縁部に円形の工具による刺突列をもつ。

木質遺物 上部横木を10点（第74図1～10）、下部杭群を30点（第74図1～第75図40）の40点を掲載した。

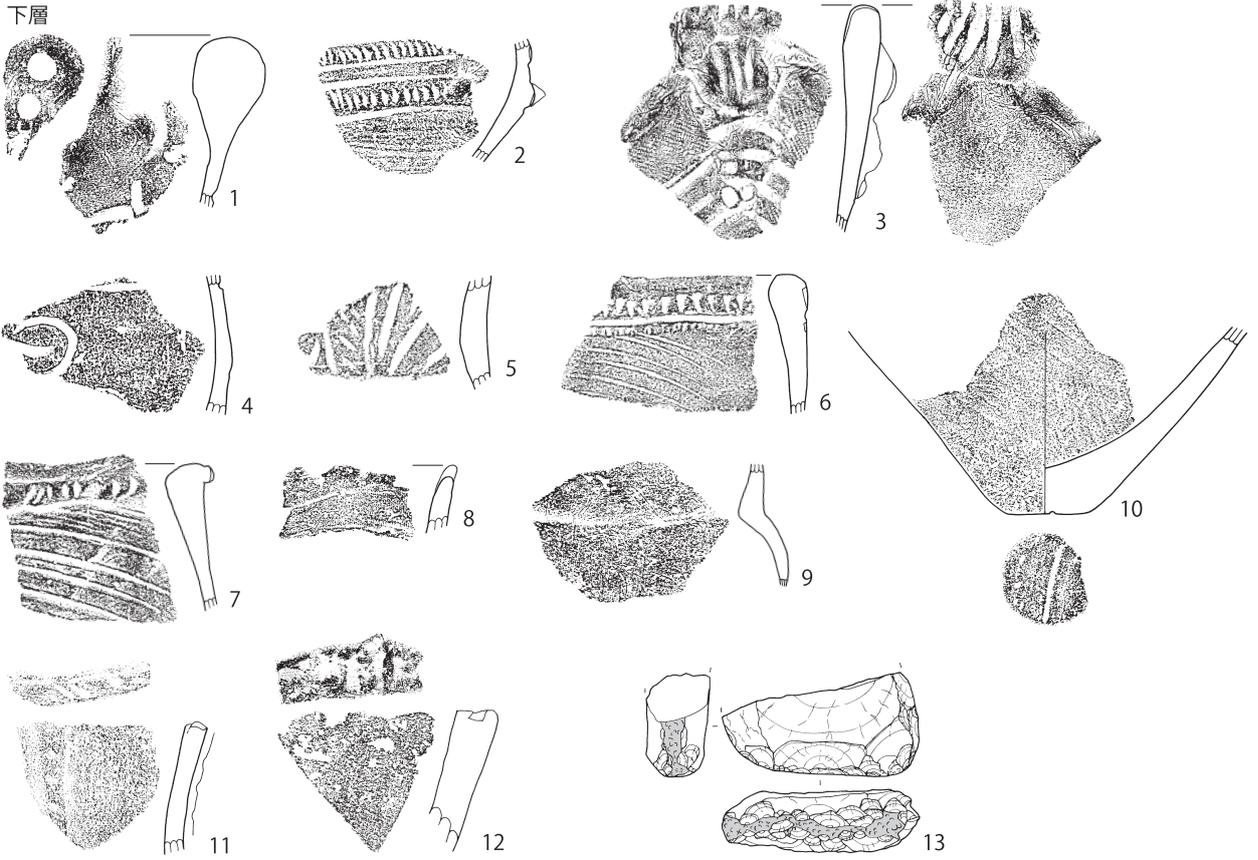
上部横木の木取は、1～3が丸木材、5～10は分割材である。3・21・22は端部加工が明瞭で、求心加工を施す。材の炭化状況は、3・4・8・9は片側の端部のみで、5は両端部のみ、10は全体が炭化する。

下部杭群の木取は、11～23は丸木材、24～28は半裁材、29～34はみかん割材、35～40はその他の分割材である。26と27は同一母材で、北列と南列の杭材が接合した。

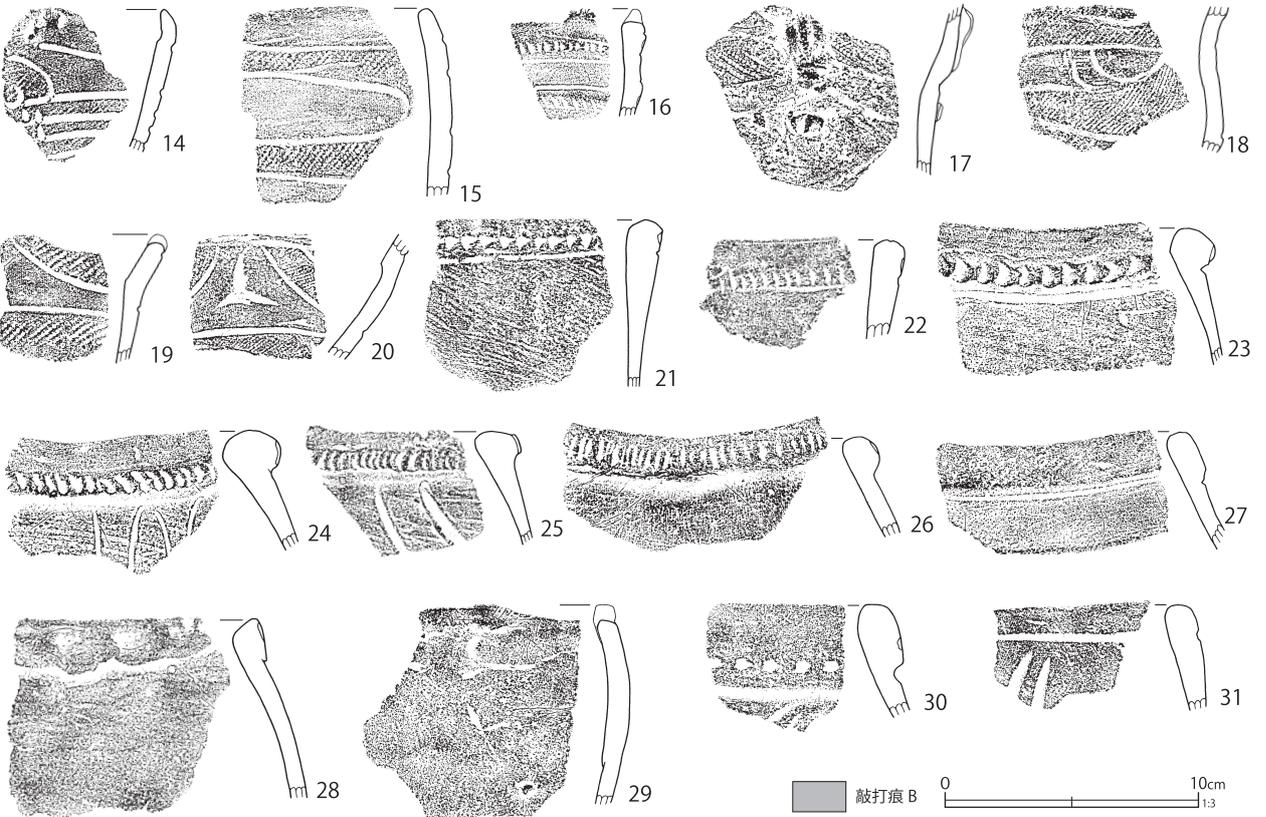
端部加工は、11・16・19・21～23は明瞭でその他は不明瞭である。22はA類、21はB類である。炭化状況は、片側の端部のみが11～15・22～24・26～28・32・36・38で、24は両端部が炭化する。

時期 木組に掘方は無く、直接伴う遺物はないものの、木組の一部と見られる盛土が、安行3c式を含む流路底面の最下層を完全に覆うことから、時期はそれ以降と判断した。右岸と接し、流路上に突き出した構造、足場と見られる第2号木道状遺構との位置関係などから、流路上を移動する足場のほか、水流を利用した作業場といった機能が想定される。

下層

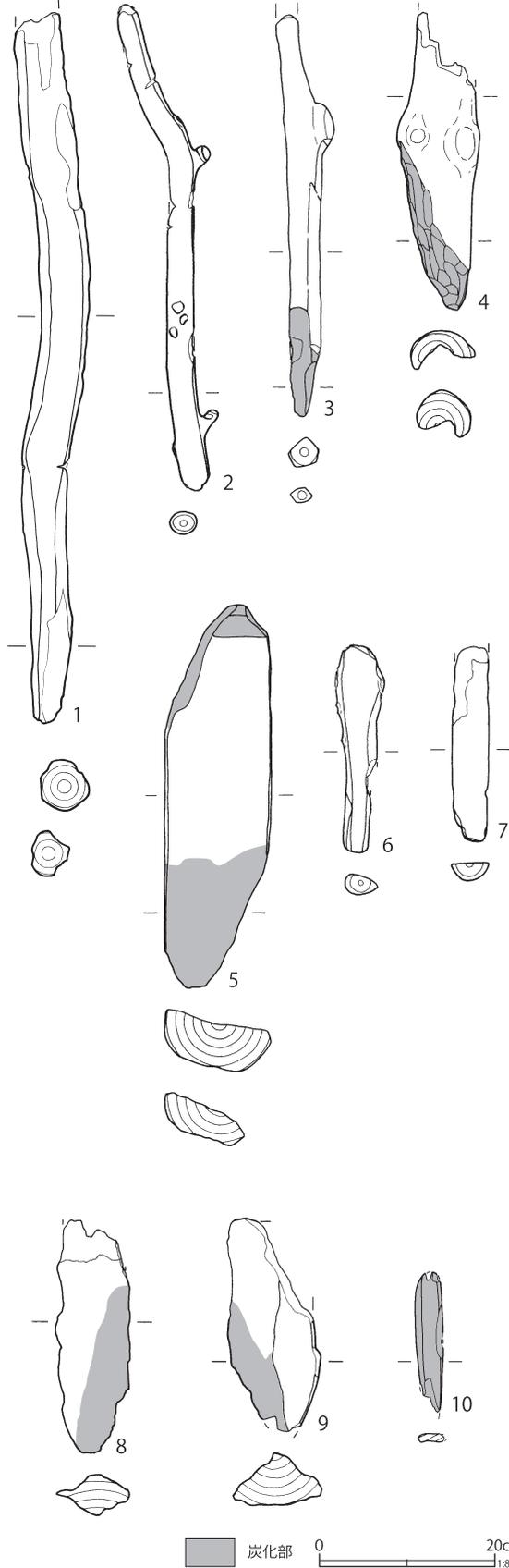


最下層

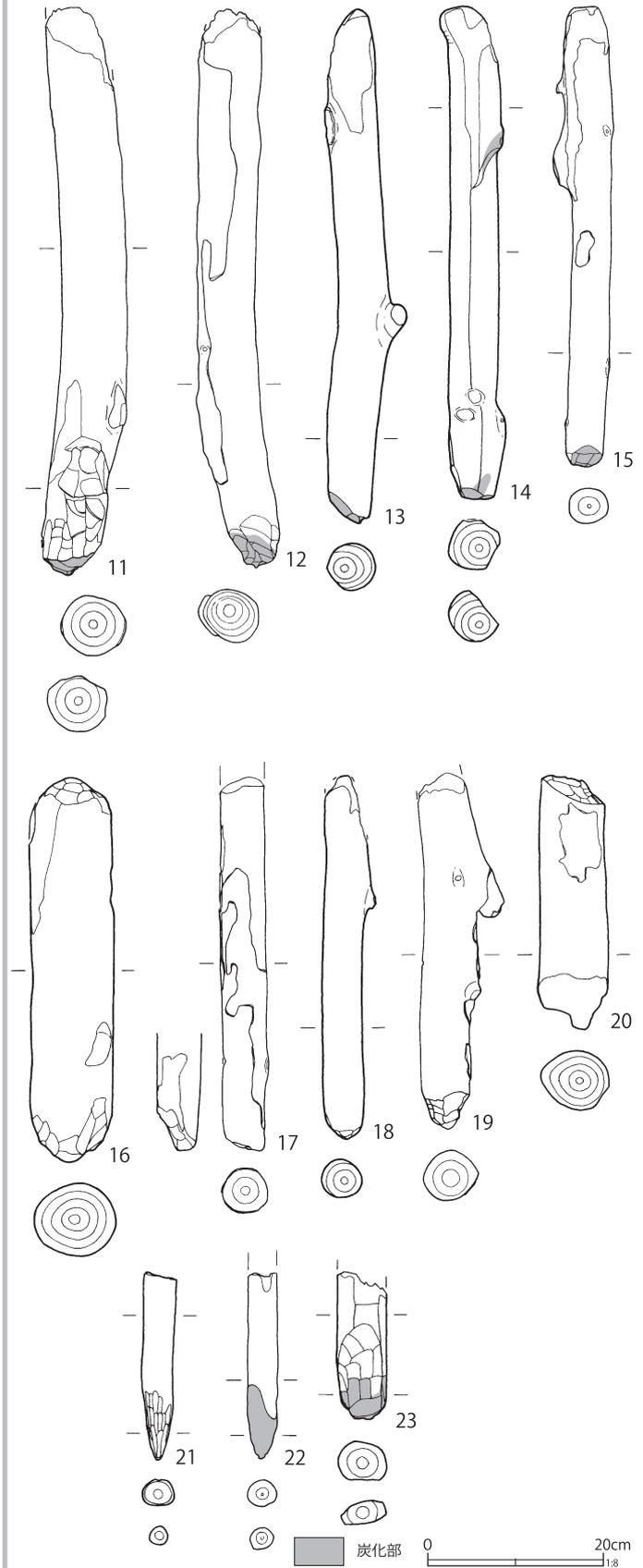


第73図 第4号木組遺構出土遺物 (1)

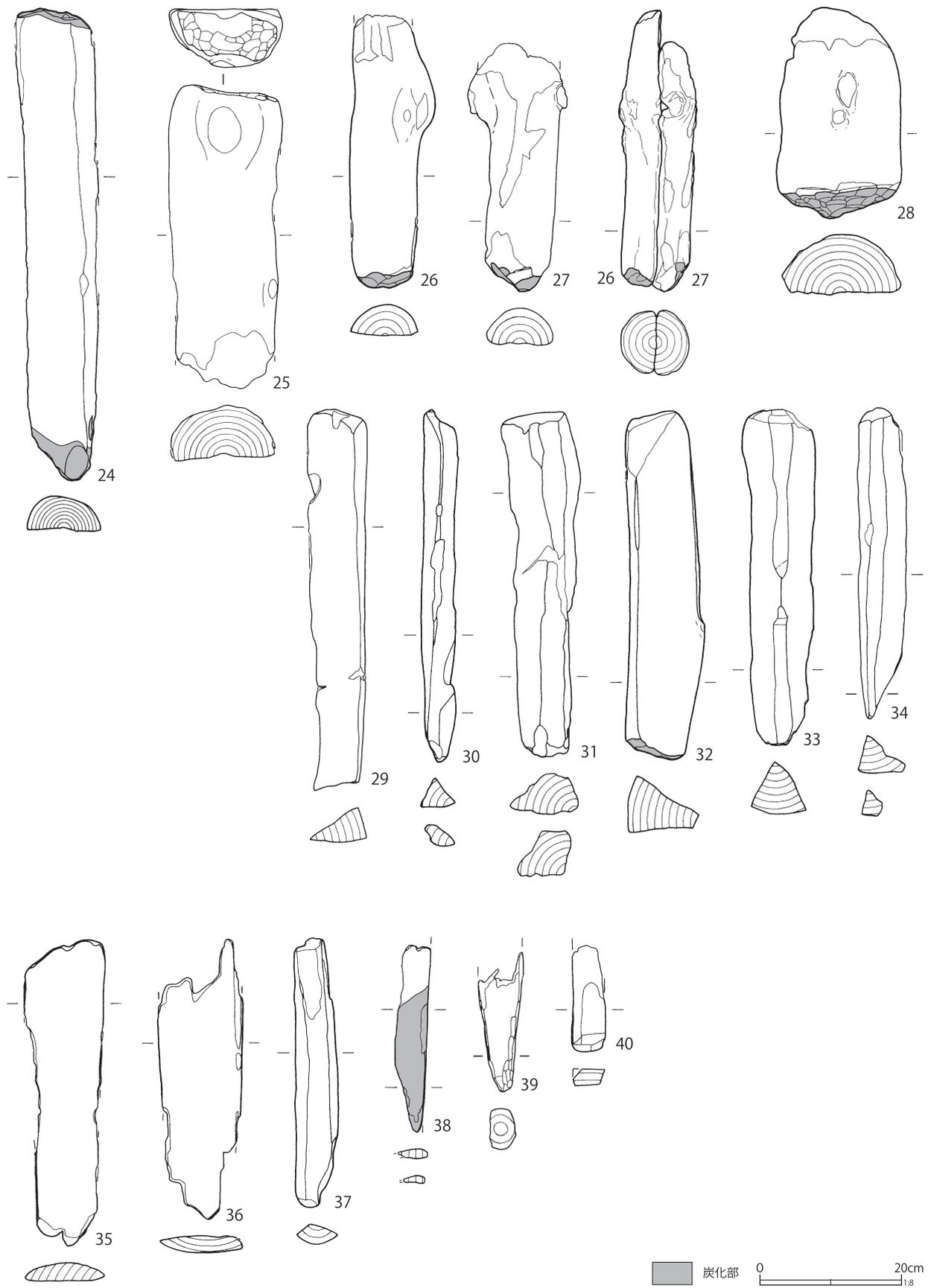
上部横木



下部杭群



第74図 第4号木組遺構出土遺物(2)



第75図 第4号木組遺構出土遺物 (3)

第5号木組遺構 (第76～87図)

検出・確認 縄文時代の東の谷の堆積土を精査中、西斜面寄りの位置で、流下方向に延びる大型の土壌状の掘り込みを検出し、第728号土壌として調査した。その後、掘り込み内部で、木組や板敷き、階段状の掘り込みを検出した。また、木組と隣接した位置で溝状の掘り込みやローム土を検出したため、諸施設全体を第2号木組遺構と捉え、第728号土壌をその掘方と認識した。

その後の整理作業で、層位的状況、遺物の出土状況と時期、木組構成材の年代測定値等を総合的に検討した結果、より西側の木組、板敷き、杭群は、西斜面からの流入土(A断面1～o層及びB断面17層、以下「壁際流入土」)に覆われた一連の施設であること、壁際流入土は後期中葉までの土器を多量に含んだ基本層D層に類似土層であること、木組内の横木の年代測定の結果、後期前葉の値が得られたこと、溝状の掘り込み(A断面d～i層とB断面9～15層、以下「溝跡」)やローム土(A断面s・t層とB断面23層、以下「ローム搬入土」)が木組埋没後の晩期以降であること等が明らかになった。

なお、調査と並行して進められた第457集の整理作業において、「第2号木組遺構」として報告する遺構が生じたため、本遺構を「第5号木組遺構」に振り替えて報告する。

位置・重複遺構 谷上流部の西斜面寄り、E・F-18・19グリッドに位置する。前述のように、隣接する溝跡やローム搬入土は木組遺構廃絶後のものである。

構造・規模 大型の土壌状の掘り込み(=第5号木組遺構の掘方)の内部に、木組と板敷き、杭群、階段状掘り込みを伴う遺構で、いずれの施設も西斜面側の地山白色粘土中に作られる。各部の名称は第76図に示し、記載に当たっては、西斜面側を北壁とする。木組の堆積土を掘り込んだ溝跡やローム搬入土(晩期中葉以降)もここで扱う。

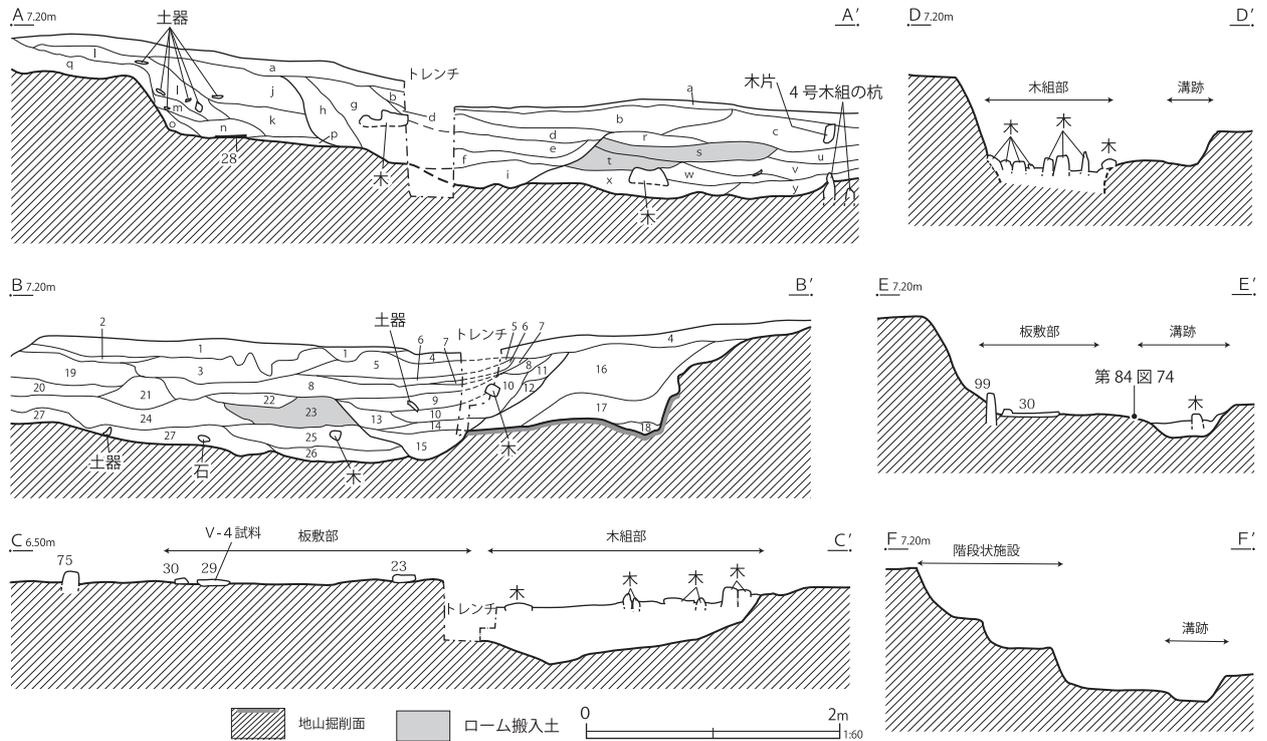
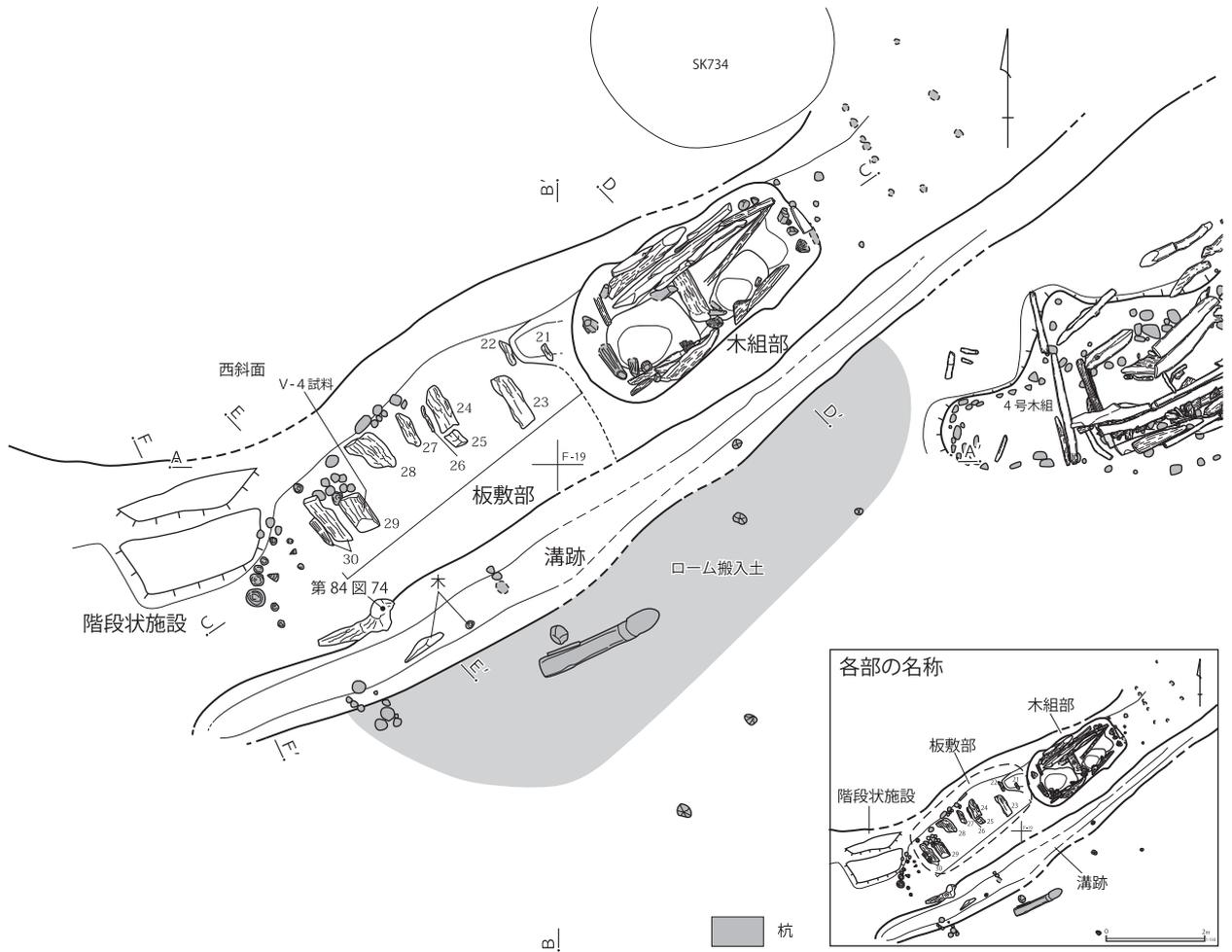
掘方 流下方向(東西)に長い長方形の土壌状掘り込みとして検出したが、東西は検出できなかった(図版40-2ほか)。北壁のみを掘り込んだ開放された施設だった可能性が高い。北壁は西斜面の地山白色粘土を急角度に掘り込む。板敷部付近での立ち上がりは約0.7m、木組部底面との標高差は1.3mである。

階段状施設 掘方内の上流側、西斜面寄りに位置し、地山白色粘土を二段の内階段状に掘り残している。踏面の規模(幅×奥行)は、下段(下から一段目)が1.20×0.50m、上段が1.20×0.30m、段差は一段目が0.30m、二段目が0.25m、二段目から西斜面までが0.40mである。東側は階段状施設に沿って内部杭群が密集している。

板敷部 掘方内の、西斜面側の北壁に沿う。10片の小規模な板材(No21～30)からなる。設置面は地山白色粘土上で木組部よりも一段高い。階段状施設から木組部の間にあることから、両者を接続する足場の可能性が考えられる。10点の板材にはごく小規模な材(No21・22・26・30)も含んでいる。木材No29で樹種同定を実施した結果、樹種はクリであった。

木組部 掘方内の東側に位置し、西斜面から階段状施設を下り、板敷部を進んだ先にある。木組部は全体的に、板敷部より0.2m程度低く造られている(C断面)。長軸2.0m、短軸0.8mの長方形の掘り込み(以下、「木組部掘方」)内の壁際に杭を打ち込み横木を固定している。横木は板敷部側を除く三方の壁面に残存していた。

木組部中央には木材No.18を間仕切り状に渡し、平面上東西2室に分けている。木材No.18は底面からやや浮き、下部には黒色土が堆積しているため、これが構築当初期のものか定かではないが、北辺の横木111を固定しており(第79図I-I')、設置の時期は横木と同時である。検出面から底面の深さは、木材No.18の上流側は0.8m、下流側で0.4mと明らかな段差があり(同M断面)、断面上も2



第76図 第5号木組遺構(1)全体図

A-A'			B-B'			
a	黒色土	10YR1.7/1	シルト	粘性ややあり	しまりあまりなし	ピート層
b	黒色土	10YR2/1	シルト	粘性ややあり	しまりややあり	
c	黒色土	10YR2/1	シルト	粘性あまりなし	しまりややあり	
d	B-B' の8層					
e	B-B' の10層					
f	B-B' の14層					
g	黒色土	10YR1.7/1	粘土	粘性あり	しまりややあり	
h	黒色土	10YR2/1	粘土	粘性あり	しまりややあり	
i	B-B' の15層					
j	黒褐色土	10YR3/2	粘土	粘性あり	しまりあまりなし	
k	黒色土	10YR2/1	粘土	粘性あり	しまりややあり	含有物少量
l	黒色土	10YR2/1	粘土	粘性あり	しまりややあり	含有物少量
m	黒色土	10YR2/1	粘土	粘性あり	しまりややあり	含有物少量
n	黒褐色土	10YR2/2	シルト	粘性あり	しまりあまりなし	砂多量有 有機物少量
o	ロームブロック集積層					
p	褐灰色土	10YR4/1	粘土	粘性あり	しまりなし	ロームブロック少量
q			基本層D層類似のべったりした土			
r	B-B' の22層					
s	B-B' の23層					
t	にぶい黄褐色土	10YR4/3	シルト土	粘性ややあり	しまりあり	
u	黒色土	10YR1.7/1	粘土	粘性あり	しまりややあり	有機物多量
v	黒褐色土	10YR3/1	粘土	粘性あり	しまりややあり	有機物多量
w	B-B' の25層					
x	B-B' の26層					
y	B-B' の27層					

第5号木組遺構関連土層の性格と対応関係

B-B'	A-A'	土層の性格
1~3層	a層	古墳時代の堆積土(ピート層)
5~8層	b~d層	溝跡の埋土(上層)
9~14層	e~h層	溝跡の埋土(下部)
15層	i層	溝跡の埋土(溝部)
16層	j~k層	壁際流入土の一部か(遺物少)
17・18層	l~p層	壁際流入土(遺物極多量)
—	q層	壁際流入土(遺物極多量)
22~23層	r~t層	ローム客土(造成か) 4号木組後、5号木組以前
24~27層	u~y層	流路底面堆積土

第77図 第5号木組遺構(2)土層

室に見える。

横木は西辺を除く三方で確認された。壁がそそり立つ北辺では特に入念に設置され、土留めの意図が明瞭である。逆に南辺や東辺では淡白である。西辺に横木は遺存しないが、地中深くに打ち込んだ杭49や杭50があることから、本来的には存在していた可能性が高い。杭の打設深度は全体的に深く、板敷部側で特にその傾向が強い。また使用部材も大型である(第79図)。

木組内部の堆積土は、有機物を多く含んだ黒褐色粘土の単層で分層はできなかつた。堅果類も多く含まれるものの、周囲の堆積土と比べて顕著な違いは認められなかつたが、木組遺構の機能を推定する目的で、堆積土中の種実の同定分析を実施

した(第V章10節参照)。

杭群 木組遺構の周囲で、横木と組み合わない杭を検出した。本来の杭頭がどれほど地表に延び、どのような上部構造であったかは不明だが、位置やまとまりから、第80図のように、内部・東部・南部の杭群と呼称して報告する。

内部杭群 掘方内の北壁に沿った位置で、地山白色粘土に打設された29本の杭である。階段状施設や板敷部との重複を避ける状況から、本木組に伴う杭と判断される。杭頭は板敷設置面付近から、わずかに露出する。杭材は直径10cm前後、長さ50cmを超える丸木材を多用し、打設深度も全体的にかなり深い。杭67と杭68の間には、かつて存在した杭の痕跡を確認した。

東部杭群 木組部の下流側に隣接する、地山白色粘土に打設された14本が該当する。より西側の杭132～134は木組部に関連する可能性が高い。やや離れた東側の杭は、木組部長軸と直交する2列の杭列である。小規模な分割材を多用し、打設深度も全体的にかなり浅い。

南部杭群 かつての流路の堆積土や、ローム搬入土に分布する杭22本を指す。木組遺構とは近距離にあるだけで、層位的に新しいものも含み、すべてが木組遺構と関連するわけではない。流路堆積土中に打設され、地山まで達する杭、達しない杭(701・702)、流路底面付近の杭(杭135)、地山内に埋没し断ち割るまで発見されなかった杭(杭94・142等)多様な杭を一括した。

溝跡 第5号木組遺構に隣接した、木組埋没後に上部から掘り込まれた溝である。板敷部と同じ面で検出し、同面での検出幅は0.8～0.4mだが、A・B断面を見る限り、上位から掘り込んだ、これより広い溝跡の可能性が高い。堆積土中からは晩期前葉頃までの土器が出土し、層位的には第4号木組遺構(安行3c式)よりも新しい。上下流側ともに途中で追えなくなり収束する。第5号木組遺構や第1号導水溝状遺構と直接重複し、溝跡が新しい。検出長は7.6mで、ローム搬入土を掘り込み面とした時の深さは0.45mである。

構成材ほか 第5号木組遺構として取り上げた木質遺物一覧を第8表に示す。構成材は木組部の杭31点、横木21点、板敷部10点、内部杭群29点、南部杭群22点、東部杭群14点のほか木組内部に廃棄された23点、その他10点の総計160点である。部材の規模は、木組部杭で長さ17～88cm、幅5～17cmまでがあり60cmを超える材も多い。横木は長さ17～90cm、幅5～27cmまでの材がある。各杭群の平均的な規模は、内部杭群で40～80cm程度、東部杭群では15～30cm程度である。木組部と内部杭群の杭材は相対的に長く、東部杭群は短い。特に東部杭群のうち木組部から離れたコ字状の一群

は、上部の逸失の程度は不明ながら、いずれも30cm以下の材で構成されている。

木取は、杭材で丸木36点、半裁材12点、みかん割材22点である。また、横木では丸木材5点、半裁材7点、みかん割材5点である。板敷部は小片で判別不明瞭であるがいずれも分割材である。

炭化した材は杭材で10点を確認した。炭化部位は片側端部のみが8点、両端1点、その他が1点である。炭化した横木はなかった。端部加工はA類1点、B類3点、C類4点で、C類を多く確認した。

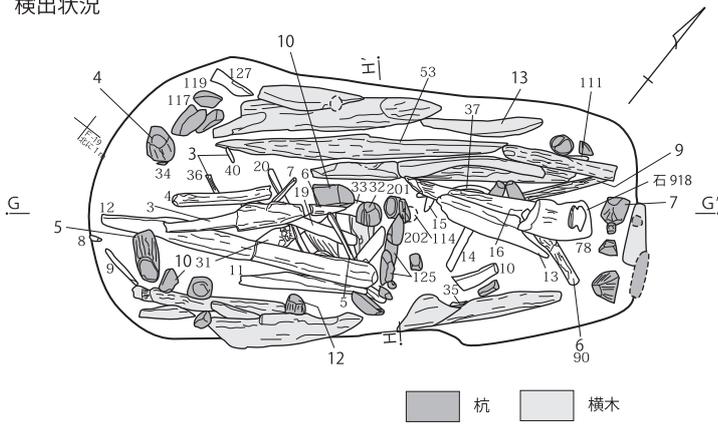
堆積土・層位 第76図A断面でa～y層、B断面で1～27層に分層した。A断面とB断面の対応関係を第77図に示し、特記事項を以下に記す。

A・B断面は以下の5群に大別される。古い方から①第5号木組遺構を直接覆う土層(A断面j～p層)、②流路底面の堆積土(同v～y層)、③ローム搬入土(同s・t層)、④溝跡を覆う土層(同d～i層)、⑤古墳時代前期の堆積土(同a層)である。

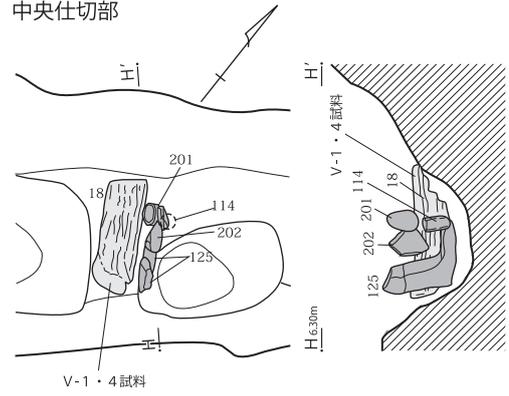
①は西斜面側からの壁際流入土である。土質と出土遺物相が基本層D層(後期中葉までの包含層)と酷似する。q層は西斜面に水平堆積した土層がそのまま流れ込んでおり、D層が流入した土層と判断される。壁際(1～m層)では特に多量の遺物が出土する(図版38-4・5)。②は周辺で安行3c式までを含む土層である。隣接する第4号木組遺構の下部杭群は、y層上面で打設している。

③について、台地部の基本層第IV層(黄褐色土ローム)を母材とする土層で、近場に供給源も無いことから搬入土と判断した。分布範囲を第76図に示す。第4号木組遺構の上部横木よりやや上位にあり、第1号導水溝状遺構よりも新しい。④について、A'(右岸)側では前述のローム搬入土を切り込み、A(左岸)側では壁際流入土を急角度で切り込んでいる。前述のように、溝跡は板敷部付近の高さで検出したが、断面を見る限り掘り

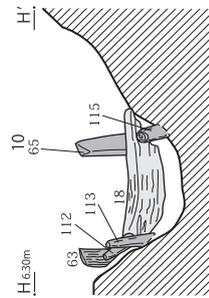
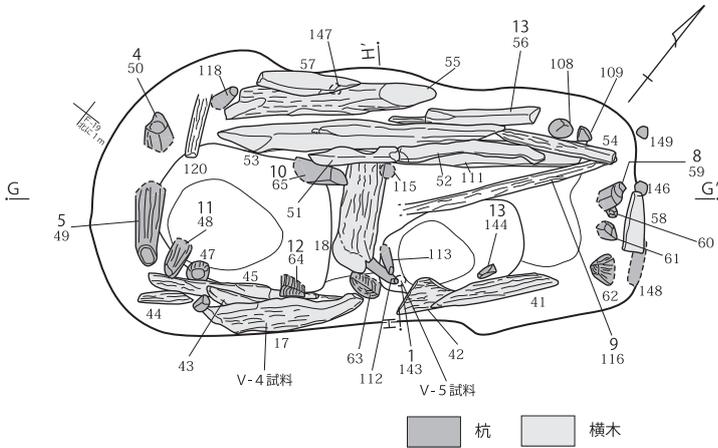
検出状況



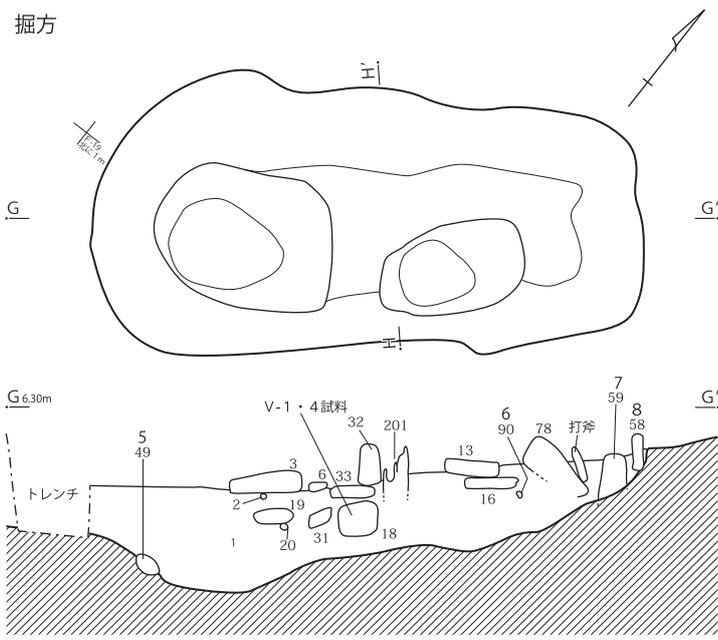
中央仕切部



木組部内木材除去状況

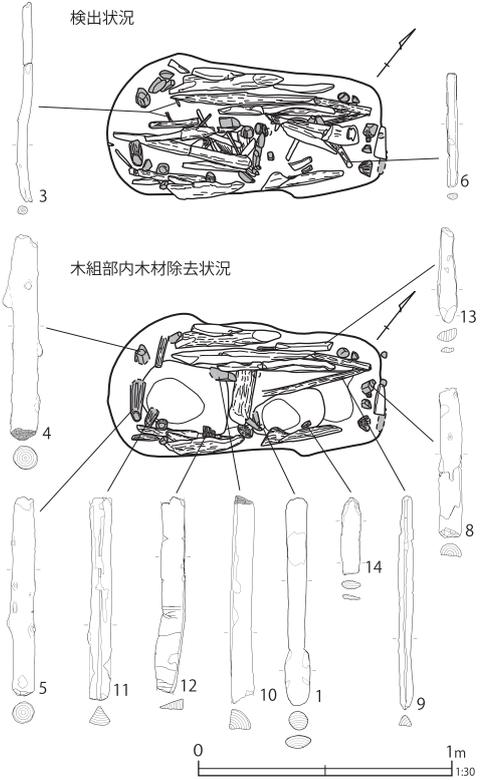


掘方



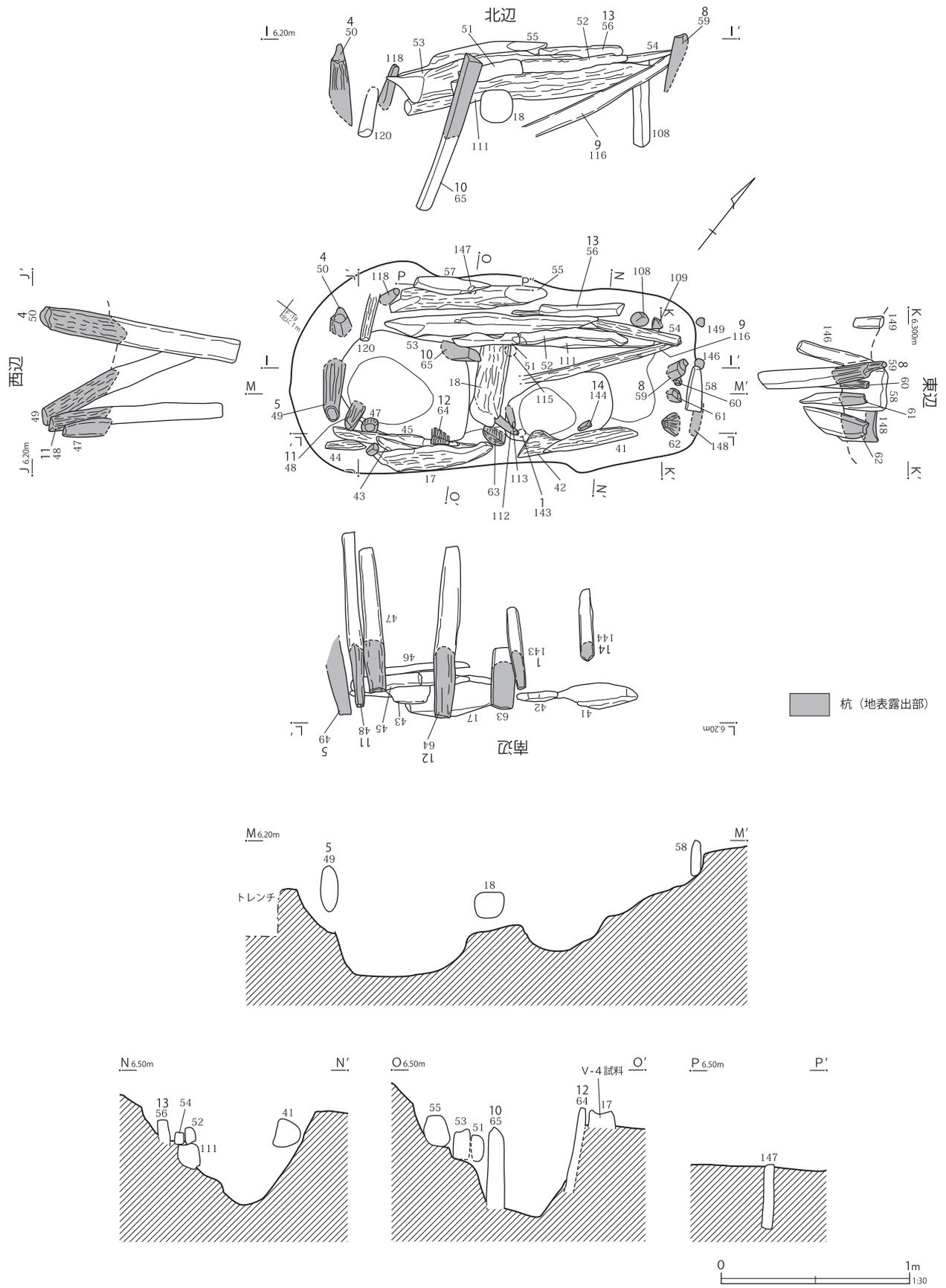
G-G' 1 黒色土 10YR1.7/1 粘質土 有機物を多量に含む 木組内で分層できず

検出状況

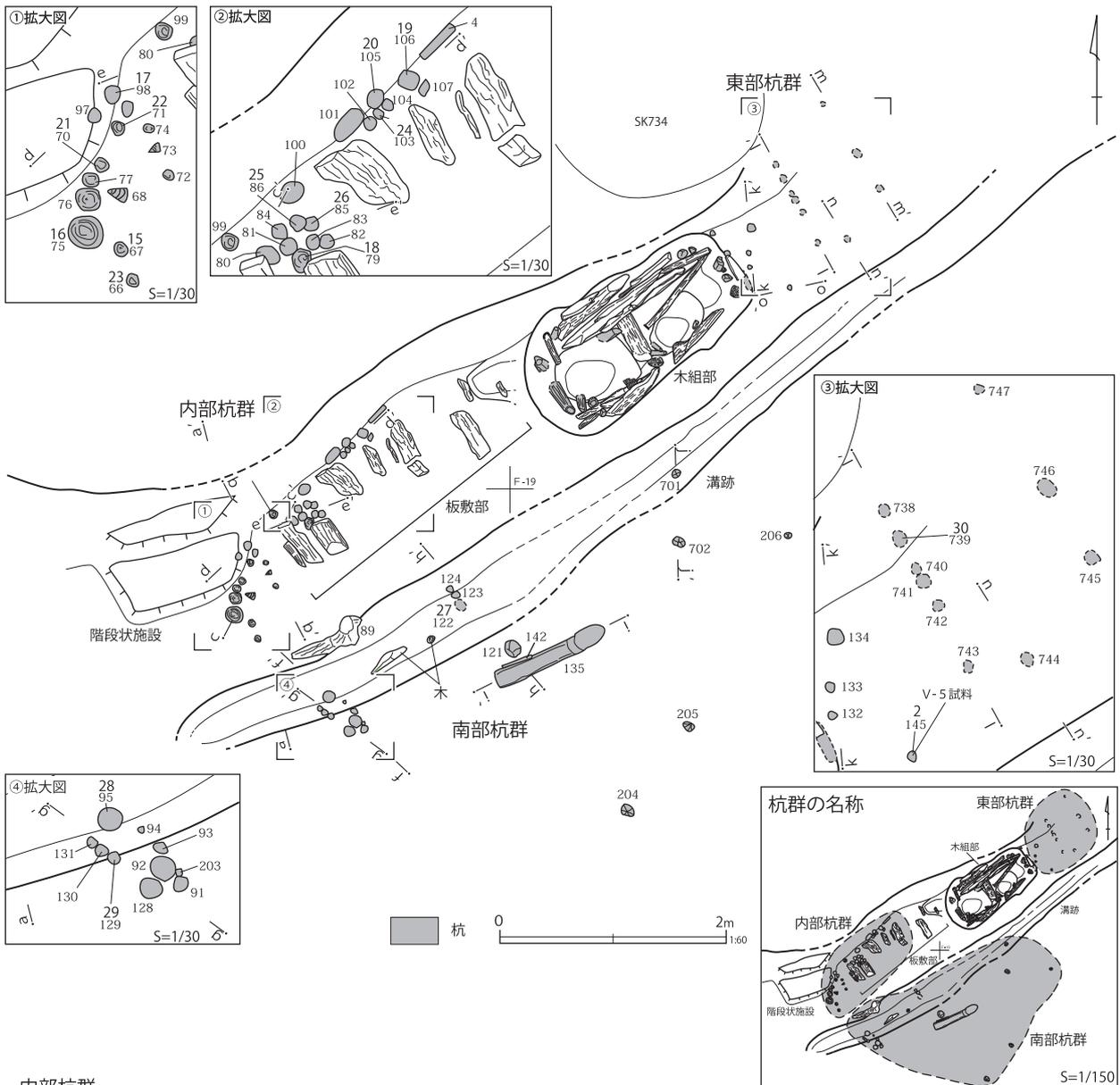


木組部内木材除去状況

第78図 第5号木組遺構(3)木組部①

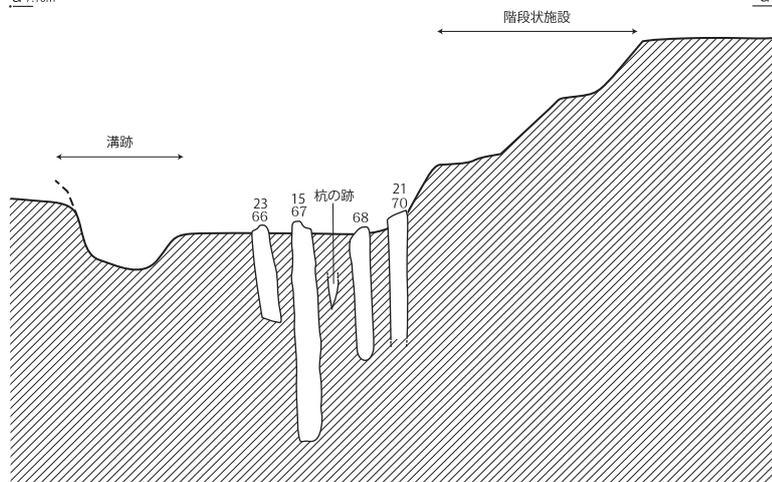


第79図 第5号木組遺構 (4) 木組部②

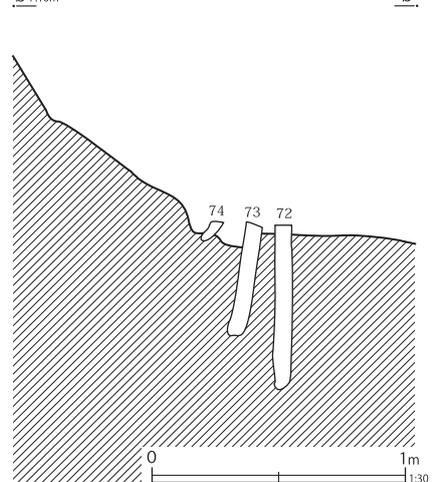


内部杭群

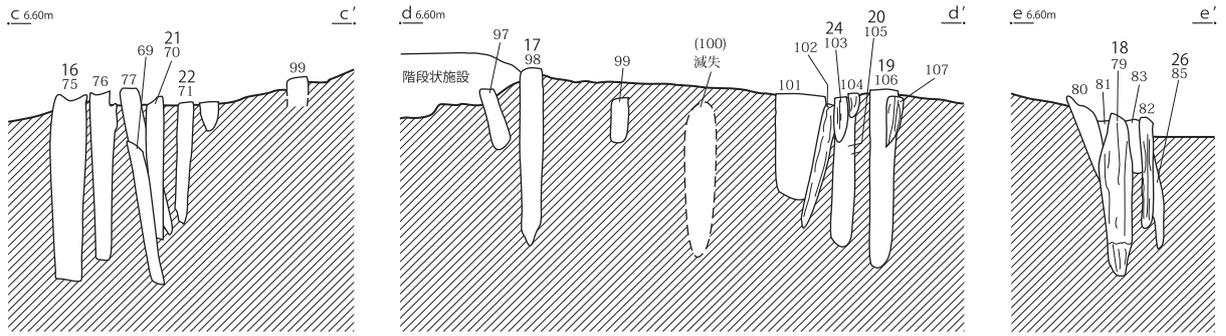
a 7.10m



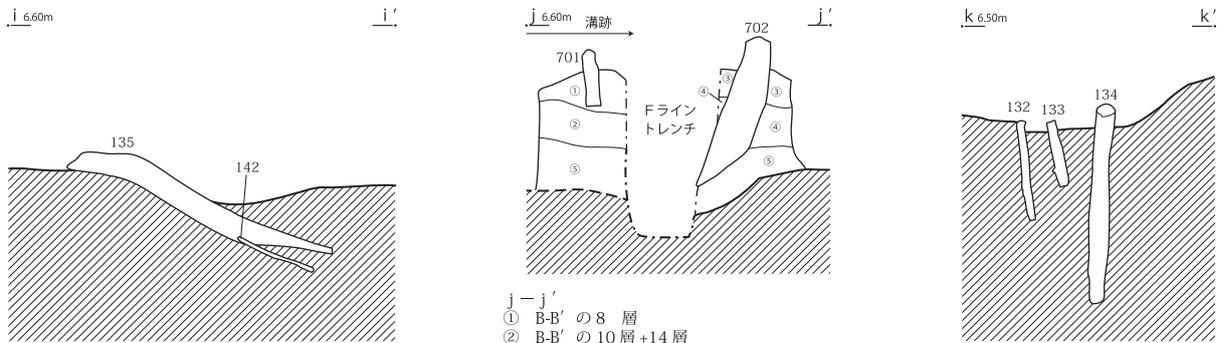
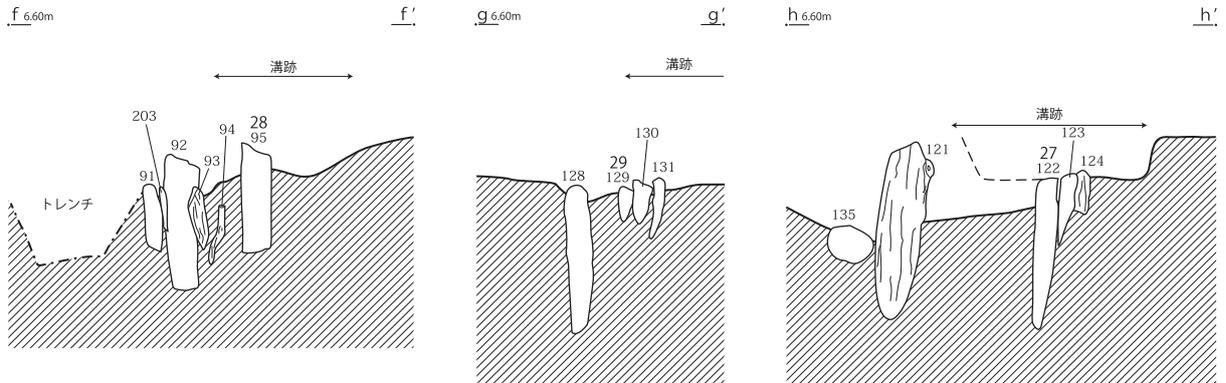
b 7.10m



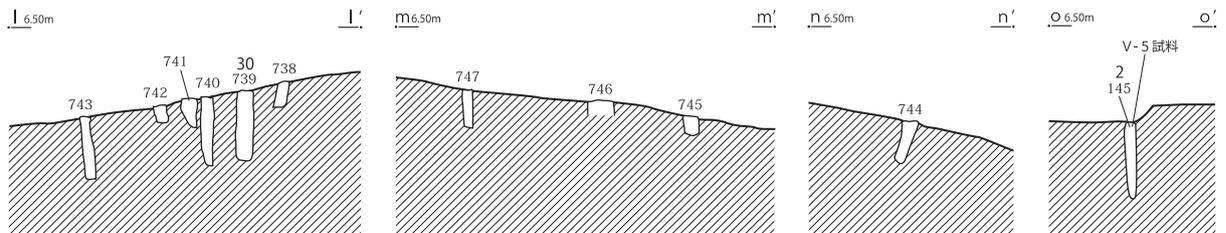
第80図 第5号木組遺構(5)杭群①



南部杭群

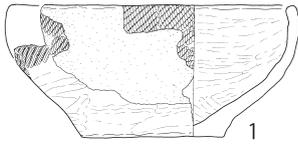


- j-j'
- ① B-B' の 8 層
 - ② B-B' の 10 層+14 層
 - ③ 黒色粘土 10YR1.7/1 粘性あり
しまりややあり 有機物極多
 - ④ A-A' の t 層+B-B' の 23 層
 - ⑤ B-B' の 26 層

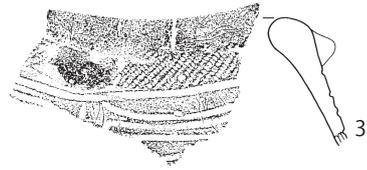
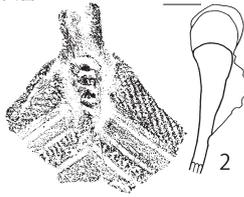


第81図 第5号木組遺構(6)杭群②

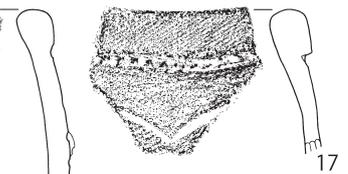
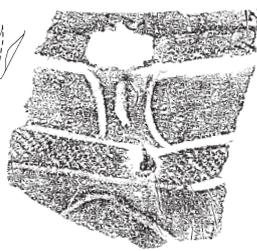
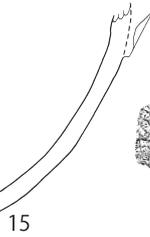
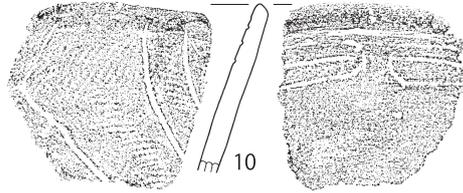
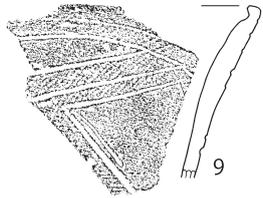
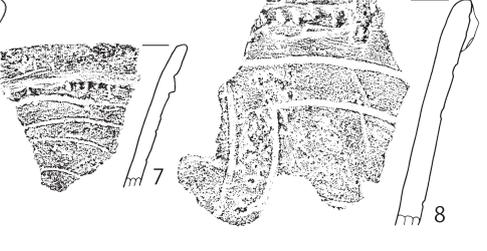
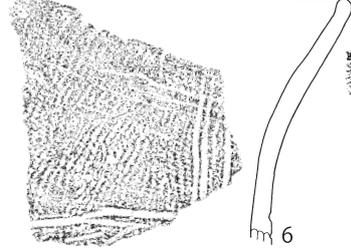
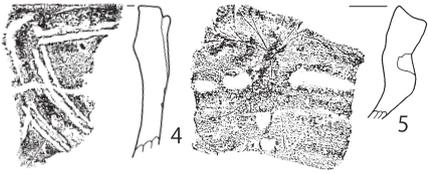
木組内



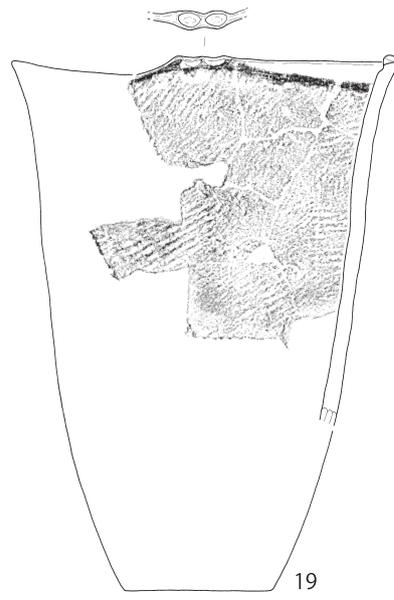
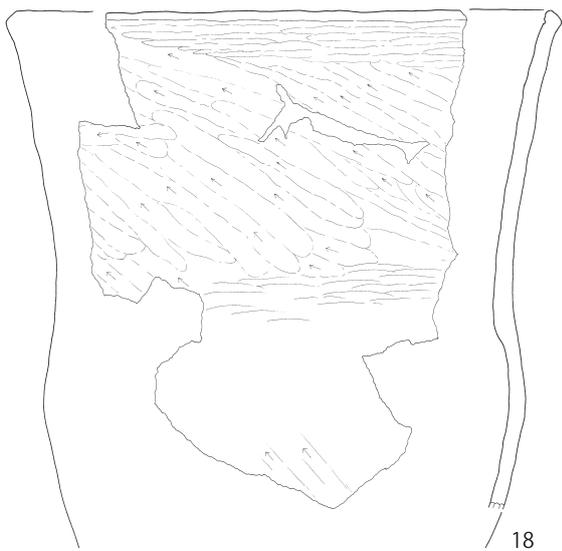
最下層



下層



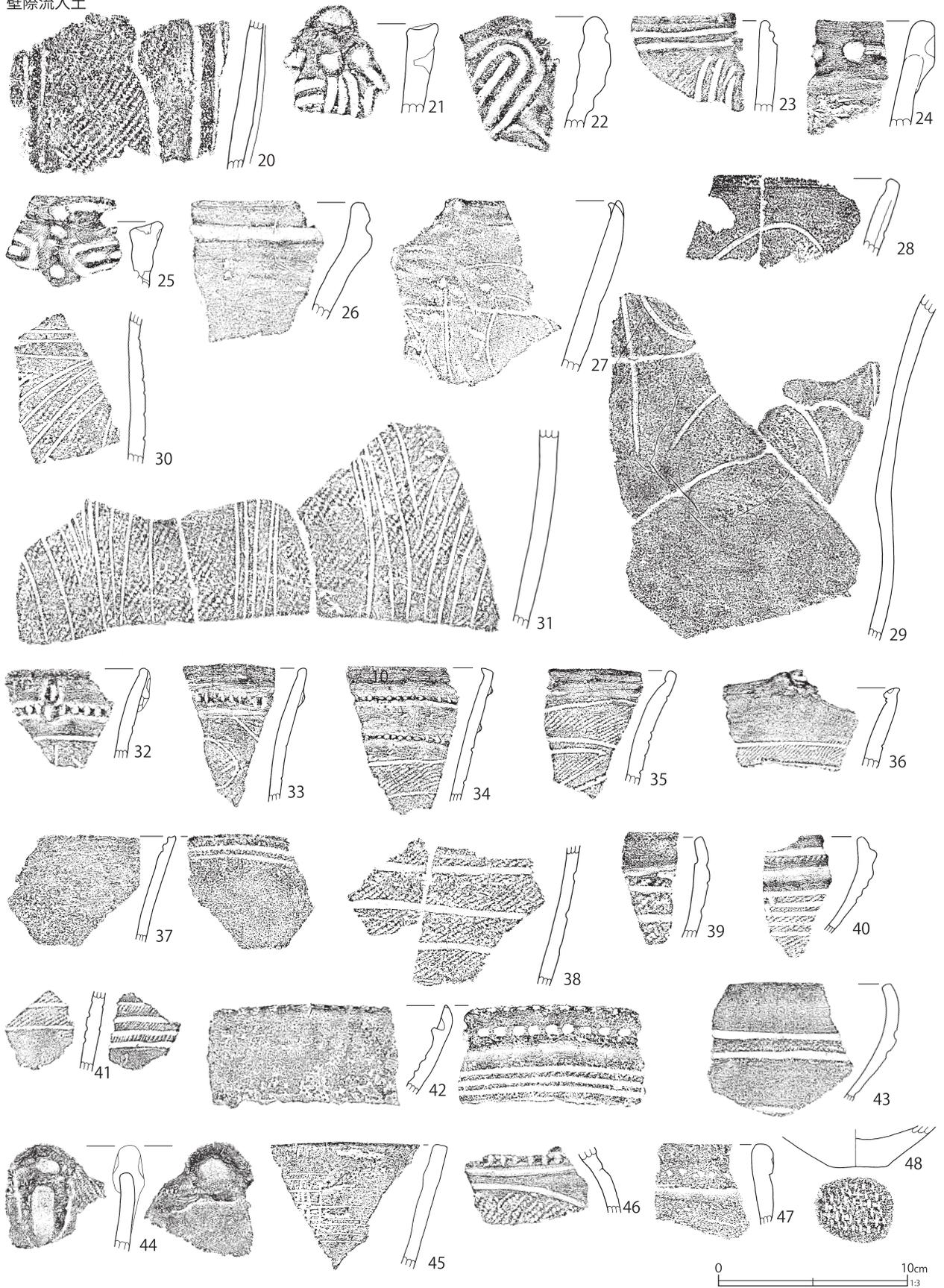
堆積土



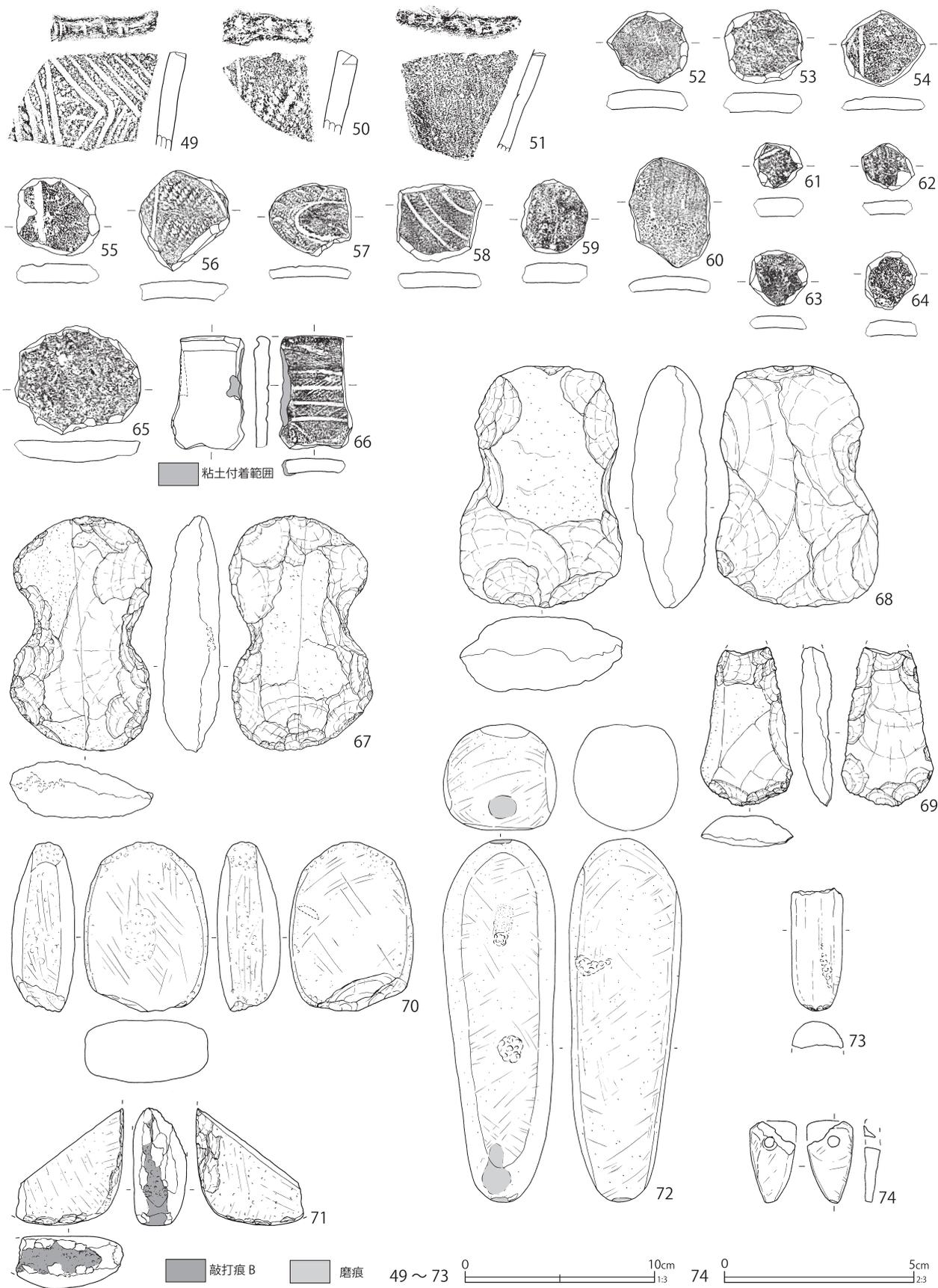
1・18・19 0 10cm 1/4 2~17 0 10cm 1/3

第82図 第5号木組遺構出土遺物(1)

壁際流入土



第83図 第5号木組遺構出土遺物(2)



第84図 第5号木組遺構出土遺物（3）

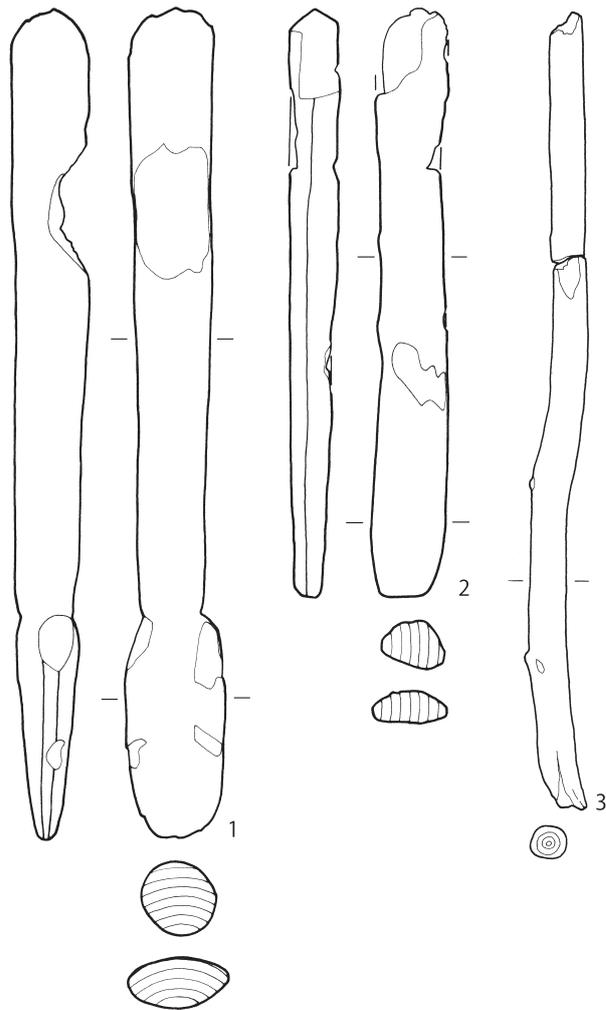
込みはより上面からの可能性が高い。

出土遺物 第82～84図に出土遺物を示した。1～51が土器、52～66が土器片加工品、67～74が石器や石製品類、第85～87図が木質遺物である。

出土層位の1が木組内、2・3は溝跡を含む地山直上の最下層、4～9・11～15・17は掘方(SK728)下層(木組検出面に近い)、10・18～46・48が壁際流入土である。16・47は木組廃絶後の溝跡の堆積土である。層位の詳細は第10表を参照されたい。

第82図1は口縁部に縄文を施文する鉢で、他に特徴がない。加曽利B式であろうか。2は安行2式の大波状口縁深鉢、3は晩期安行の平口縁深鉢

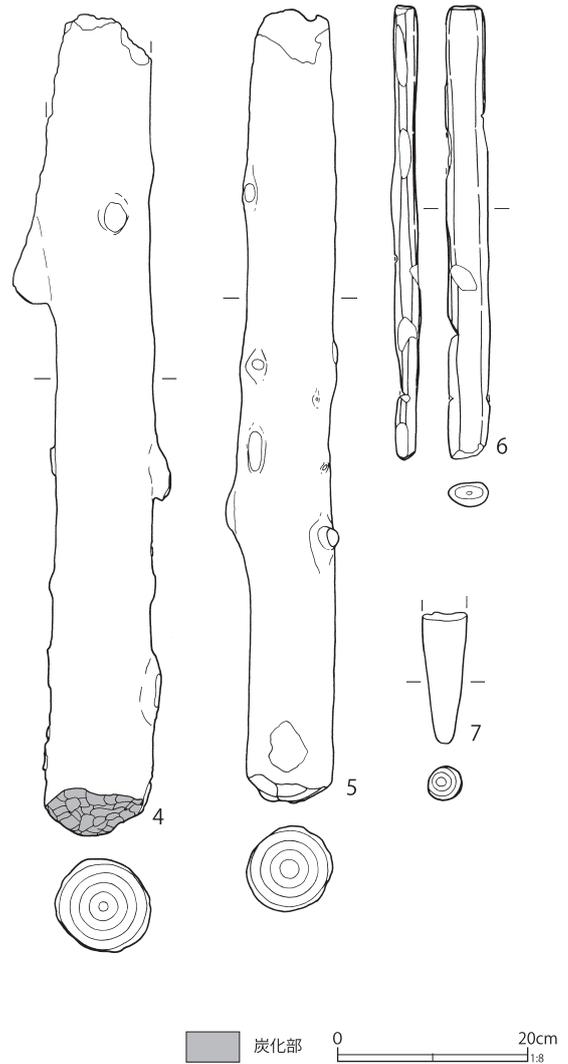
木組部



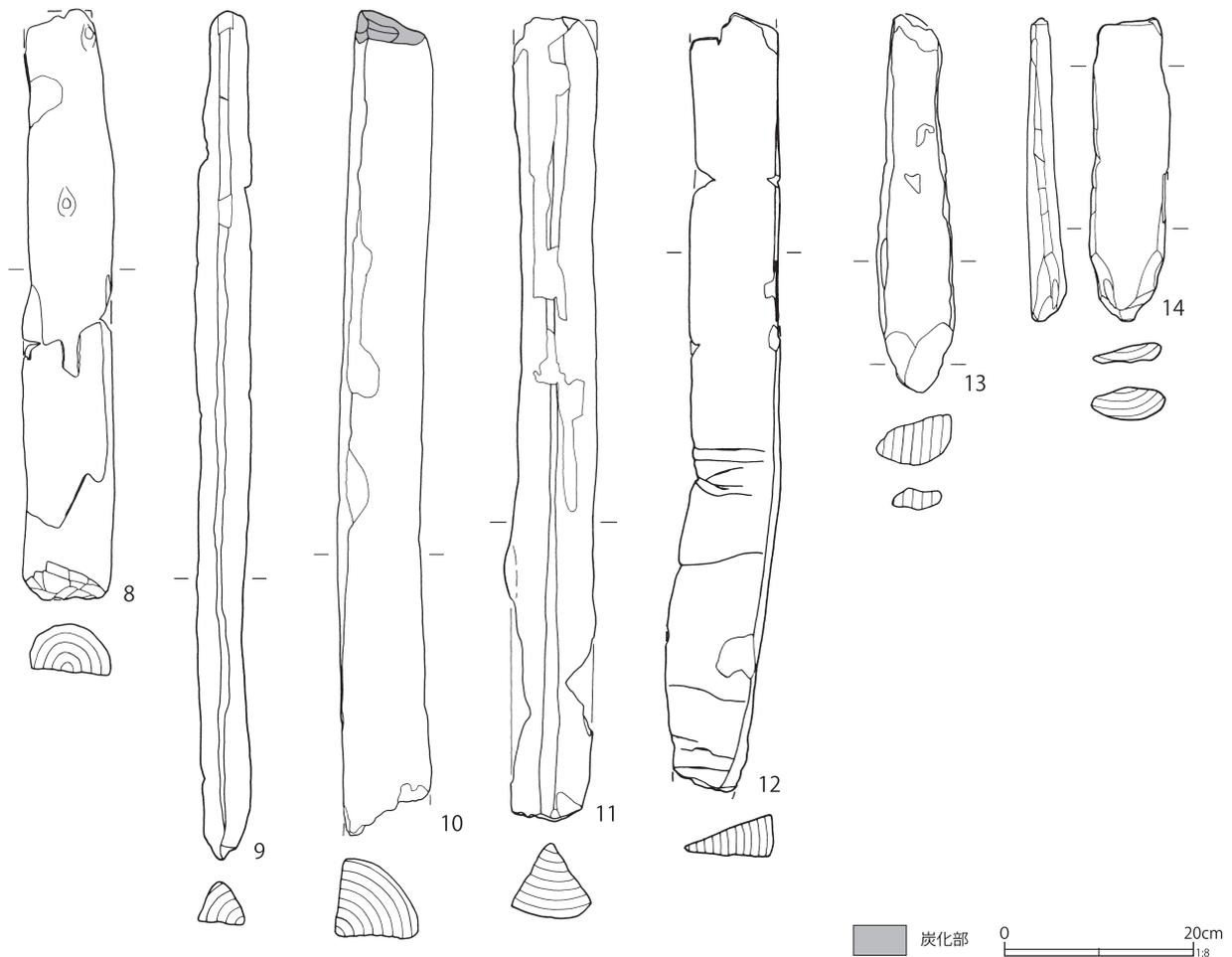
である。

4は中期前葉阿玉台式、5・6は堀之内1式の、7～10は同2式の破片であろう。10は内面に楕円文を配す。11～13は加曽利B式の深鉢で、12は内面の口唇部に刻み隆帯と円形刺突を、これより下位には4本(以上)の平行沈線を配す。14は加曽利B2式の大森タイプの大深鉢であろう。15は中央の窪んだ円文をもつ注口土器である。16は晩期安行式の平口縁深鉢で、口縁部の貼瘤や胴部の豚鼻状貼付文は剥がれ、内面は両側の対向する位置に剥離がある土器片加工品であろう。17は肥厚する口縁部に縄文を施文する。工具を連続的に押し引いて口縁部を区画し、胴部には文様をもつ。

木組部 杭



第85図 第5号木組遺構出土遺物(4)



第86図 第5号木組遺構出土遺物（5）

18は平口縁深鉢で、文様を持たず器面調整は下方から上方への斜方向の粗いケズリである。19は平口縁気味の、緩やかな波状口縁で、波頂部はわずかな山形となり端部に押圧が加えられる。体部は全面にRL 縄文が施文される。

20は加曽利E式、21～26は堀之内1式の口縁部破片で、23・24は縄文地文をもつ。27～29は無文地に細い工具の単沈線で文様を描出する深鉢で、28・29は同一個体である。27は口唇部の一部のみが内屈する。30・31は縄文地に沈線で文様を描く堀之内1式である。32～37は堀之内2式、38～45は加曽利B式で、41・42は内文をもち、41は沈線間に細い刻みを施文する。45は櫛状工具による条線をもつ。46は加曽利B 3～曾谷式の胴部破片で括れ部に刺突列が巡る。47は肥厚した口縁部に列

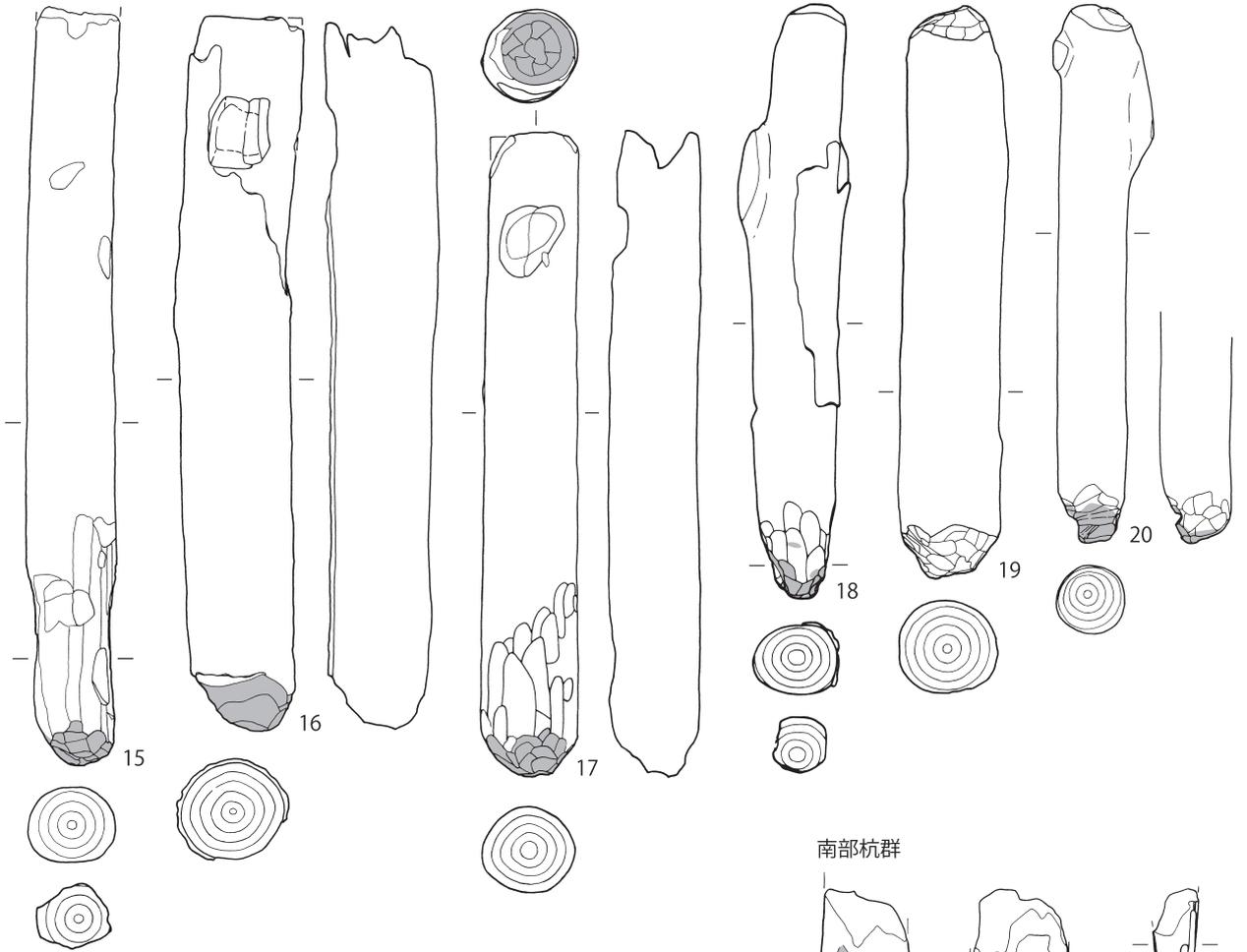
点を持つ、晩期中葉の安行式に伴う粗製土器である。48は後期後葉～晩期前葉の底部で、編組痕を持つ。破断面が摩耗し円形に整えられ、土器片加工品の可能性もある。

49～51は接合帯上面に刻み目をもつ土器片で、いずれも堀之内式期のものである。

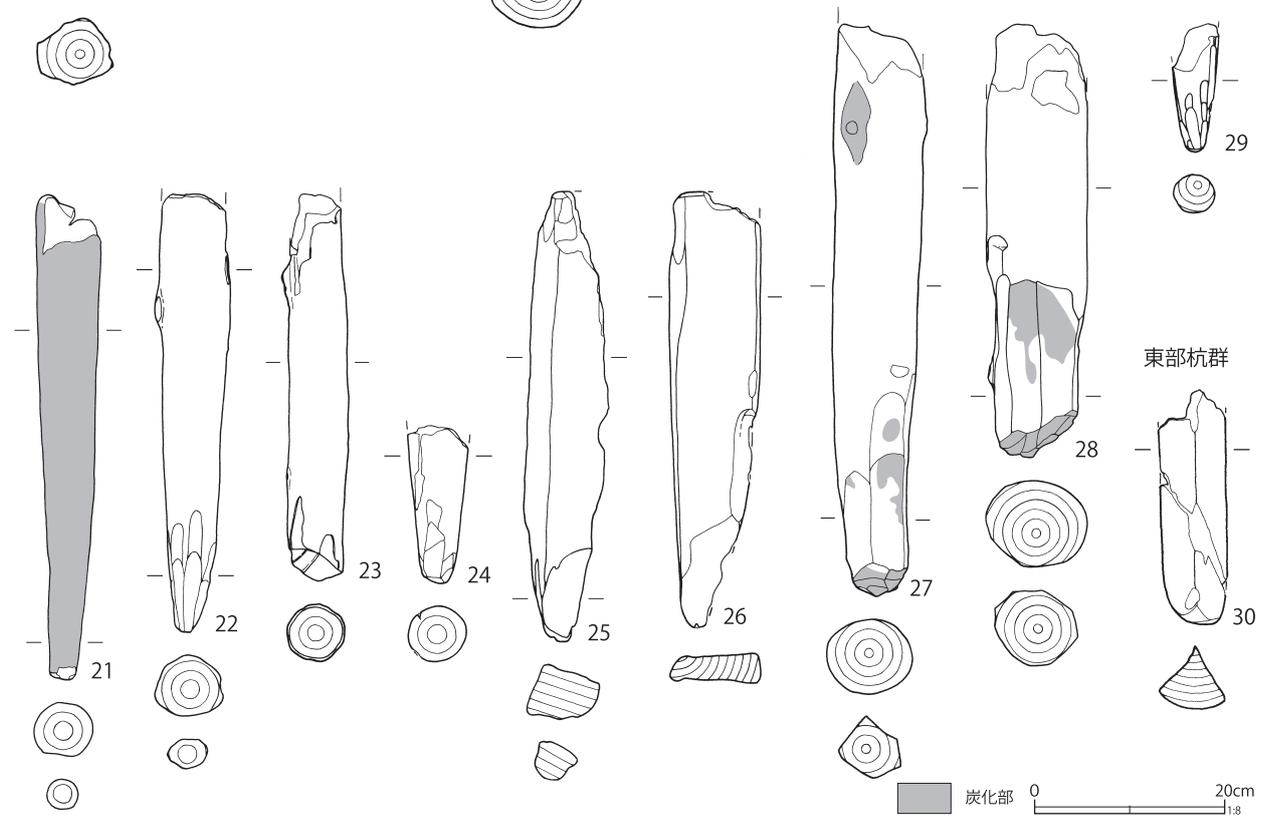
52～66は土器片加工品を一括した。出土層位は52・53が最下層、54～66はそれ以外である。52・53・59～64は無文の胴部、54～58は後期前葉頃の有文の胴部、65は底部を素材とする。66の破断面に付着した粘土は文様を覆っていることから、製作時の修復に係る痕跡かもしれない。

67～74は石器・石製品類である。67・68は分銅形の打製石斧で、67は木組部検出面、68は壁際流入土で出土した。69は縦長剥片の表裏を加工する

内部杭群



南部杭群



東部杭群

炭化部 0 20cm
1:8

第87図 第5号木組遺構出土遺物 (6)

二次加工剥片である。70はいわゆる石鹼型の磨石に相当するもので、分類上は磨凹敲石とした。表裏面の全面に顕著な磨面、側面全面と端部は部分的な敲打痕、表面中央にあばた状の凹痕がある。

71は破片のため不明瞭だが、側面と端部に剥離を伴うざらざらの敲打痕（敲打痕B）が形成される。第73図13に類する、石材の側面を主要機能面とする敲石であろう。72は磨凹敲石とした複合機能の石器である。石材は比較的重量のある棒状礫で凹痕と敲打痕は磨痕ほど顕著ではない。73は石棒の破片である。74はヒスイ製の垂飾で上部は欠損する。二等辺三角形状で、側面はやや曲線状、先端は尖らずエッジがある。片側穿孔である。

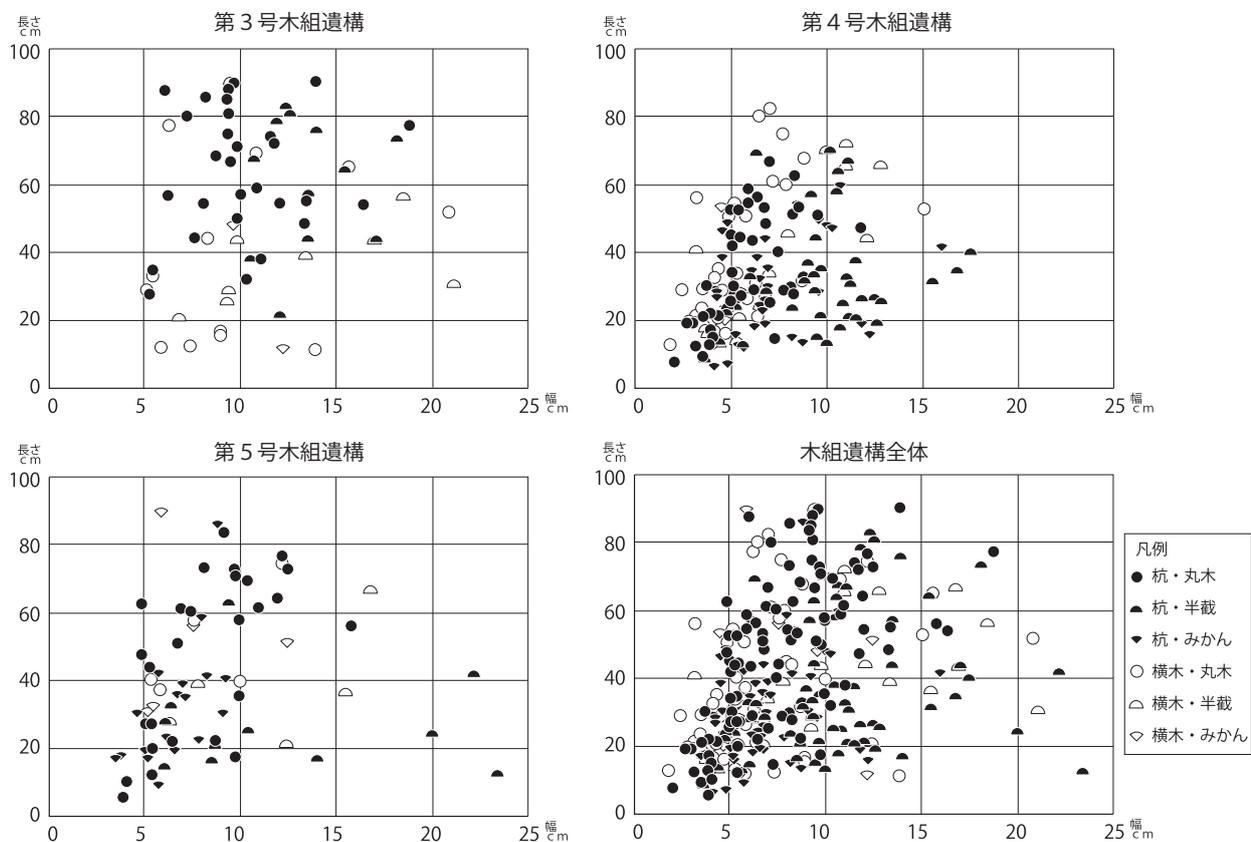
木質遺物 第85～87図に30点を図示した。1は掘り棒で木組部の杭材として利用されている。柄部の断面形は丸く先端に向かって細くなり、身部は開いて扁平になる。2は東部杭群の杭材で、先端を平たく整形した不明木製品である。3は木組部

内に廃棄された、構成材ではない丸木材である。樹種同定は実施していないが、後述の丸木弓（第101図67、イヌガヤ製）と類似した樹種である。2つに分割された状態で、ともに木組部南西隅で出土した。明瞭な加工はないが、折損した丸木弓との関連性を指摘できる。

4～7は木組部の杭の丸木材、8～14は同分割材である。15～26は内部杭群で、15～24が丸木材、それ以外は分割材である。27～29は南部杭群、30は東部杭群である。端部加工は、7・21・24がA類、18・22はB類で、15・17・27～29がC類である。なお25は両端部に加工がある。材の炭化状況は、21は全体、4・10・15・16・18・20・27・28は片側端部のみ、17は両端部が炭化する。

樹種同定は5点実施した。木組部の横木2点、板敷部板材1点はいずれもクリで、第85図1・2はクヌギ節コナラ属であった（第V章第4節）。

時期 出土遺物や、木組部の横木No.18の放射性炭



第88図 木組遺構部材規模一覧

素年代測定から、構築時期は後期前葉と見られる。また、木組内の出土遺物や、壁際流入土（後

期中葉期までの土器を含む）に覆われた状況から、この頃までには廃棄されたと判断される。

第6表 第3号木組遺構の使用部材一覧

取上 No.	用途 (杭/横木)	寸法 (cm)		木取	端部 加工	炭化	備考	掲載 遺物No.
		長さ	径					
【木組部】								
3	杭	87.3	6.0	丸木			V-1・4カヤ	
22	杭	57.1	10.1	丸木		端		64-12
31	杭	55.0	13.3	丸木				
32	杭	67.7	10.6	半裁				
33	杭	—	—	—				
34	杭	[79.9]	10.3	半裁		端		65-15
35	杭	86.1	8.1	丸木				
36	杭	80.3	7.1	丸木				
37	杭	75.2	9.3	丸木		端		64-14
38	杭	54.3	12.0	丸木				
39	杭	[92.3]	10.6	丸木	A			64-2
54	杭	38.3	10.4	半裁	●			
55	杭	59.2	10.8	丸木				
56	杭	[63.1]	10.7	半裁			No.27と接合	65-17
60	杭	[71.1]	11.2	丸木	B	端		64-5
66	杭	44.2	8.0	—				
67	杭	28.4	5.2	丸木	A	端		64-8
76	杭	38.5	11.0	丸木				
86	杭	56.8	6.3	丸木				
87	杭	[52.5]	8.5	丸木		端		64-10
88	杭	21.8	12.0	半裁				
107	杭	—	—	—				
1	横木	39.0	13.3	半裁				
2	横木	56.5	18.4	半裁			V-4クリ	
5	横木	15.5	8.8	丸木				
11	横木	139.2	10.8	半裁				
12	横木	—	—	—				
13	横木	—	—	—	●●			
14	横木	—	—	—				
15	横木	31.0	21.0	半裁				
16	横木	90.3	9.4	半裁				
18	横木	48.4	9.5	みかん		両端		65-20
19	横木	—	—	半裁				
25	横木	270.0	50.0	半裁			V-2・5クリ	
58	横木	11.4	13.8	丸木			No.11の外側	
59	横木	—	—	—			No.15の外側	
61	横木	69.6	10.7	丸木			No.25の下、No.60と 絡む	
62	横木	65.0	15.7	丸木				
【南辺2】								
26	杭	48.8	13.3	丸木				
27	杭	[64.2]	11.2	半裁			No.56と接合	65-18
28	杭	—	—	みかん				
29	杭	78.3	11.8	半裁				
30	杭	76.1	13.9	半裁	●			
40	杭	32.2	10.2	丸木				
17	横木	[83.1]	10.6	丸木	●	両端		64-4
41	横木	—	—	—				
735	横木	—	—	—				
【斜辺】								
9	杭	83.1	12.3	半裁	●			
10	杭	88.4	9.3	丸木				
23	杭	73.5	18.1	半裁	B	端		65-16
57	杭	43.9	17.1	半裁			No.25の留杭	
71	杭	74.0	11.5	丸木				
72	杭	68.2	8.6	丸木			下部で折損	

取上 No.	用途 (杭/横木)	寸法 (cm)		木取	端部 加工	炭化	備考	掲載 遺物No.
		長さ	径					
73	杭	[83.6]	4.6	丸木	B			64-7
74	杭	72.5	11.6	丸木			No.73に隣接	
75	杭	77.2	18.8	丸木	●			
84	杭	80.7	9.3	丸木	●			
85	杭	34.7	5.4	丸木				
101	杭	—	—	—				
6	横木	16.0	8.8	丸木				
7	横木	12.4	7.3	丸木				
8	横木	12.3	5.7	丸木				
20	横木	—	—	半裁				
21	横木	25.5	9.2	半裁				
24	横木	—	—	—				
81	横木	59.7	12.1	みかん			No.79に挟み込む	
63	横木	—	—	—				
65	横木	52.2	20.8	丸木			No.20下	
70	横木	[29.9]	4.4	丸木				64-9
80	横木	21.3	6.7	半裁				
82	横木	—	—	—				
83	横木	29.1	5.0	丸木		●		
90	横木	77.2	6.2	丸木		両端		64-6
102	横木	—	—	—				
103	横木	—	—	—				
104	横木	—	—	—				
105	横木	—	—	—				
106	横木	—	—	—				
729	横木	21.1	—	丸木				
732	横木	22.8	8.6	半裁				
733	横木	—	—	半裁				
【北西杭群】								
42	杭	[56.5]	14.8	半裁	●	●		65-19
43	杭	53.9	8.0	丸木	B	●		64-11
44	杭	57.5	13.5	半裁				
45	杭	44.1	13.4	半裁				
46	杭	89.7	9.6	丸木				
47	杭	49.7	9.8	丸木				
48	杭	54.0	16.3	丸木				
49	杭	85.1	9.2	丸木	B	端		64-3
69	杭	64.4	15.4	半裁	●		No.19の留杭	
77	杭	[67.0]	9.7	丸木	C	端	No.19の留杭	64-13
78	杭	—	—	—			No.79の内側 (斜めに打込)	
79	杭	70.6	9.7	丸木			No.78の外側 (斜めに打込)	
89	杭	90.3	13.9	丸木	C	端		64-1
92	杭	—	—	—				
93	杭	81.2	12.5	半裁				
95	杭	44.1	7.5	丸木				
96	杭	66.3	9.4	丸木				
50	横木	43.7	9.8	半裁			No.44と48と組む	
51	横木	43.3	16.9	半裁				
52	横木	28.9	9.3	半裁				
94	横木	44.3	8.2	丸木				
【その他】								
(53)	杭	—	—	丸木				
(64)	杭	—	—	—				
(68)	杭	—	—	—			No.19の下	
(91)	不明	20.5	5.0	丸木				
(97)	不明	61.5	7.5	半裁				

第7表 第4号木組遺構の使用部材一覧

取上 No	用途 (杭/横木)	寸法 (cm)		木取	端部 加工	炭化	備考	掲載 遺物No
		長さ	径					
【横木群】								
1	横木(上)	50.7	5.8	丸木			股木	
2	横木(上)	—	—	半裁				
3	横木(上)	—	—	みかん				
4	横木(上)	16.0	3.8	半裁				
5	横木(上)	25.4	5.2	板				
6	横木(上)	70.0	10.0	半裁				
8	横木(上)	31.3	8.7	丸木				
9	横木(上)	—	—	板				
11	横木(上)	53.3	15.0	丸木			股木	
14	横木(上)	44.0	12.1	半裁		両端		74-5
15	横木(上)	23.9	6.5	半裁				
16	横木(上)	20.0	4.7	みかん				
17	横木(上)	66.8	12.5	偏分割				
18	横木(上)	65.3	11.0	半裁				
19	横木(上)	17.2	3.7	半裁				
21	横木(上)	29.2	3.5	丸木				
22	横木(上)	75.2	7.7	丸木				
23	横木(上)	82.5	7.0	丸木			樹皮残存	
24	横木(上)	56.2	3.2	丸木				74-2
25	横木(上)	26.4	6.8	丸木			股木	
26	横木(上)	79.8	6.5	丸木				
27	横木(上)	34.9	4.3	丸木				
28	横木(上)	12.7	6.7	板				
29	横木(上)	28.4	5.4	みかん				
30	横木(上)	106.3	3.8	丸木				
31	横木(上)	12.9	4.1	丸木				
32	横木(上)	—	—	半裁				
33	横木(上)	32.4	4.2	丸木				
34	横木(上)	[22.2]	4.3	半裁				74-7
35	横木(上)	23.4	3.5	丸木				
36	横木(上)	[46.0]	4.0	丸木		端	股木	74-3
37	横木(上)	[82.8]	6.2	丸木			V-5クリ	74-1
38	横木(上)	54.9	5.2	半裁				
39	横木(上)	9.2	3.6	板				
40	横木(上)	[16.0]	3.1	板		●		74-10
41	横木(上)	13.1	4.4	半裁				
42	横木(上)	60.7	7.3	丸木				
43	横木(上)	—	—	板				
10	横木(下)	50.5	4.9	丸木			下面で直交	
12	横木(下)	33.8	5.3	丸木			下面で直交	
131	横木(下)	—	—	半裁				
132	横木(下)	65.5	12.8	半裁				
133	横木(下)	—	—	板				
134	横木(下)	—	—	丸木				
135	横木(下)	40.5	3.2	半裁				
136	横木(下)	13.8	4.1	丸木				
137	横木(下)	15.8	4.7	丸木				
138	横木(下)	53.2	4.5	みかん				
139	横木(下)	45.5	8.0	半裁				
140	横木(下)	20.6	6.4	丸木			股木	
141	横木(下)	20.5	4.4	丸木				
142	横木(下)	13.7	5.3	半裁				
143	横木(下)	67.0	8.8	丸木				
144	横木(下)	28.7	4.6	丸木				
145	横木(下)	28.8	2.4	丸木				
146	横木(下)	—	—	不明				
147	横木(下)	23.7	5.6	掘り棒				74-6
148	横木(下)	26.5	5.9	丸木				
149	横木(下)	22.6	15.2	樹皮				
【杭群 (北西列)】								
106	杭	27.6	4.3	みかん				
128	杭	18.5	6.2	みかん				
129	杭	19.3	6.8	みかん				

取上 No	用途 (杭/横木)	寸法 (cm)		木取	端部 加工	炭化	備考	掲載 遺物No
		長さ	径					
130	杭	15.8	12.3	みかん				
206	杭	6.3	4.1	みかん				
207	杭	38.6	6.3	みかん				
208	杭	24.6	6.6	みかん				
219	杭	29.5	6.9	みかん				
220	杭	—	—	—				
221	杭	17.2	3.7	みかん				
【杭群 (西列)】								
45	杭	26.8	4.5	板		端		75-38
46	杭	9.9	3.7	小片				
47	杭	28.5	4.2	みかん				
49	杭	7.4	2.6	小片				
50	杭	13.9	5.7	板				
51	杭	[15.1]	4.6	偏分割				75-40
52	杭	12.8	5.5	みかん				
53	杭	[19.1]	6.1	丸木	B			75-39
54	杭	14.0	7.3	板				
55	杭	14.7	8.1	みかん				
56	杭	7.0	3.4	板				
222	杭	[16.7]	5.5	丸木	B	端		74-23
305	杭	—	—	—				
150	横木(下)	[34.1]	9.1	半裁	B	端		74-4
151	横木(下)	30.3	6.3	丸木			股木	
152	横木(下)	20.8	5.4	半裁				
153	横木(下)	12.5	1.9	丸木				
154	横木(下)	21.8	3.2	半裁				
155	横木(下)	72.0	11.0	半裁			下面で直交	
156	横木(下)	15.7	4.2	丸木				
157	横木(下)	—	—	みかん				
158	横木(下)	20.2	4.2	丸木			下面で直交	
13	横木(流)	60.0	7.8	丸木			股木	
20	横木(流)	33.4	7.0	半裁				
44	横木(流)	19.4	2.8	丸木				
748	横木(流)	—	—	—				
749	横木(流)	—	—	—				
750	横木(流)	—	—	—				
751	横木(流)	21.9	7.3	—				
752	横木(流)	30.3	4.5	—				
753	横木(流)	33.4	5.5	—				
754	横木(流)	26.3	8.3	—		端		74-8
755	横木(流)	9.1	4.4	—				
756	横木(流)	17.8	4.8	—				
763	横木(流)	[24.4]	10.0	—		端		74-9
764	横木(流)	7.2	3.9	—				
765	横木(流)	16.0	12.0	—				
【杭群 (北列)】								
78	杭	34.8	9.7	半裁		端	No.99と接合	75-27
88	杭	21.1	9.7	半裁				
89	杭	51.3	8.2	丸木				
90	杭	48.0	10.1	みかん				75-31
91	杭	47.3	11.8	丸木				
92	杭	13.2	10.0	半裁				
93	杭	44.6	5.0	丸木				
94	杭	[40.6]	6.3	丸木	B			74-19
95	杭	41.5	16.0	みかん				
96	杭	59.6	10.6	みかん				
97	杭	26.3	11.8	半裁				
98	杭	13.9	7.3	丸木				
99	杭	[38.8]	9.5	半裁		端	No.78と接合	75-26
100	杭	18.8	11.8	みかん				
101	杭	25.0	10.8	半裁				
102	杭	29.6	8.1	丸木				
103	杭	—	—	—				
105	杭	—	—	—				

取上 No.	用途 (杭/横木)	寸法 (cm)		木取	端部 加工	炭化	備考	掲載 遺物No.
		長さ	径					
107	杭	48.4	4.8	みかん				75-30
108	杭	12.2	3.9	丸木				
110	杭	[65.0]	7.4	丸木	B	端		74-11
111	杭	22.0	4.3	みかん				
112	杭	23.5	8.2	半裁				
113	杭	22.7	4.5	板				
114	杭	25.9	12.8	半裁				
116	杭	41.6	5.0	丸木				74-18
117	杭	—	—	—				
118	杭	7.0	4.8	みかん				
119	杭	37.5	11.5	半裁				
120	杭	34.7	16.8	半裁				
121	杭	66.0	8.0	変則			両側面裂ける	
122	杭	15.7	5.3	みかん				
123	杭	31.3	15.5	半裁				
124	杭	26.5	12.5	半裁				
125	杭	70.1	10.2	半裁				
126	杭	49.6	9.6	みかん		端		75-32
166	杭	25.6	6.8	みかん				
167	杭	47.6	10.2	みかん		●		75-33
168	杭	52.2	5.5	丸木				
169	杭	—	—	不明				
170	杭	38.2	4.5	みかん				
171	杭	15.0	9.5	半裁				
172	杭	40.0	7.6	丸木			股木	
173	杭	69.2	6.3	半裁				
174	杭	13.4	8.8	みかん				
175	杭	33.2	9.3	半裁				
176	杭	42.7	11.1	板				75-35
177	杭	44.1	9.4	半裁	B			74-16
180	杭	—	—	不明				
182	杭	—	—	—				
183	杭	16.8	4.0	丸木				
184	杭	66.8	11.1	半裁		両端	V-5クリ、No.70と同一か	75-24
185	杭	57.1	9.2	半裁				
186	杭	—	—	小片				
188	杭	14.4	4.0	板				
189	杭	56.5	6.4	丸木		端		74-14
197	杭	—	—	—				
198	杭	28.3	6.8	半裁				
199	杭	58.7	5.9	丸木		端		74-13
200	杭	33.7	5.1	丸木				
205	杭	17.6	4.3	小片				
209	杭	13.6	4.4	半裁				
218	杭	28.8	6.2	丸木				
223	杭	32.1	4.9	板				
224	杭	—	—	半裁				
225	杭	12.5	5.7	半裁				
226	杭	16.0	4.4	板				
227	杭	22.7	5.0	みかん				
238	杭	—	—	—			滅失	
240	杭	28.5	9.4	半裁				
242	杭	[43.4]	16.0	半裁				75-25
244	杭	21.2	4.4	丸木	●			
248	杭	34.2	6.1	みかん				
249	杭	17.8	10.7	半裁				
250	杭	21.8	3.9	丸木				
251	杭	—	—	—				
252	杭	29.8	3.7	丸木				
253	杭	23.3	4.8	みかん				
254	杭	7.7	2.1	丸木	●			
255	杭	14.9	4.1	丸木				
256	杭	[29.1]	7.7	丸木				74-20
257	杭	21.0	3.6	丸木	●			74-21
258	杭	29.5	5.2	丸木				
259	杭	44.1	5.5	丸木				

取上 No.	用途 (杭/横木)	寸法 (cm)		木取	端部 加工	炭化	備考	掲載 遺物No.
		長さ	径					
301	杭	—	—	—				
302	杭	—	—	—				
【杭群 (南列)】								
57	杭	10.0	3.7	板				
58	杭	12.1	5.7	みかん				
59	杭	28.3	9.5	みかん				
60	杭	23.5	6.7	みかん				
61	杭	34.5	7.0	みかん				
62	杭	[64.2]	7.2	丸木	B	端		74-12
63	杭	—	—	—				
64	杭	53.3	6.8	丸木				
65	杭	52.7	5.1	丸木		端	股木	74-15
66	杭	32.6	11.1	半裁				
67	杭	66.9	7.0	丸木				
68	杭	[42.8]	5.0	丸木				74-17
69	杭	33.3	8.8	半裁				
70	杭	64.0	10.6	半裁			No.184と同一か	
71	杭	20.5	11.5	半裁				
72	杭	[21.3]	3.4	丸木	A	端		74-22
73	杭	44.3	6.7	みかん				75-34
75	杭	57.8	10.5	半裁				
77	杭	27.3	8.3	丸木				
80	杭	22.5	4.8	半裁				
81	杭	54.3	8.5	みかん				74-29
82	杭	50.9	9.6	丸木				
83	杭	—	—	—				
84	杭	53.5	8.5	丸木				
85	杭	8.3	3.6	半裁				
86	杭	45.5	5.0	半裁				
87	杭	43.4	6.2	丸木				
104	杭	25.2	7.0	丸木				
179	杭	28.7	7.7	丸木				
181	杭	8.8	3.5	丸木				
190	杭	27.5	5.5	丸木				
191	杭	39.9	17.5	半裁		端		75-28
192	杭	26.8	4.3	みかん				
193	杭	38.2	6.0	板				75-37
194	杭	14.2	—	半裁				
195	杭	11.7	—	—				
196	杭	23.7	4.8	半裁				
210	杭	36.8	9.0	半裁				
213	杭	54.8	5.8	丸木				
214	杭	—	—	—				
216	杭	—	—	—			欠番	
217	杭	25.7	5.4	みかん				
228	杭	62.3	8.3	丸木				
229	杭	48.5	6.8	丸木				
230	杭	32.9	6.0	半裁				
231	杭	[39.8]	11.8	板		端		75-36
232	杭	19.3	12.6	半裁				
233	杭	32.1	6.5	みかん				
234	杭	30.4	11.2	半裁				
237	杭	25.5	5.0	丸木				
239	杭	19.0	3.0	丸木				
243	杭	46.0	4.6	みかん				
246	杭	23.7	5.3	半裁				
247	杭	20.9	11.2	半裁				
303	杭	—	—	—				
304	杭	—	—	—				
306	杭	—	—	—				
【その他】								
161	その他	31.8	8.8	半裁				
162	その他	18.8	2.7	丸木				
203	その他	28.3	5.2	半裁				
204	その他	—	—	丸木				
260	その他	11.8	3.2	丸木				

第8表 第5号木組遺構の使用部材一覧

取上 No.	用途 (杭/横木)	寸法 (cm)		木取	端部 加工	炭化	備考	掲載 遺物No.
		長さ	径					
【木組部】								
47	杭	70.7	9.8	丸木				
48	杭	85.9	8.8	みかん				86-11
49	杭	83.9	9.2	丸木				85-5
50	杭	[87.0]	10.2	丸木		端		85-4
59	杭	63.0	9.4	半裁				86-8
60	杭	20.0	6.6	みかん				
61	杭	35.5	7.2	みかん				
62	杭	22.9	7.9	みかん				
63	杭	—	—	半裁				
64	杭	[83.2]	9.4	みかん				86-12
65	杭	[88.1]	9.3	みかん		端		86-10
108	杭	73.2	8.1	丸木				
109	杭	—	—	—				
115	杭	—	—	—				
117	杭	23.7	6.2	みかん				
118	杭	—	—	—				
119	杭	—	—	—				
143	杭	43.9	5.3	丸木			V-5コナラ 属クヌギ節	85-1
144	杭	32.7	8.2	板	●			86-14
146	杭	41.2	8.2	みかん				
147	杭	32.7	6.4	半裁				
148	杭	—	—	みかん				
149	杭	14.8	6.1	半裁	●			
32	杭(中央)	17.7	9.8	丸木				
33	杭(中央)	20.5	5.5	丸木				
112	杭(中央)	—	—	—				
113	杭(中央)	—	—	—				
114	杭(中央)	—	—	—				
125	杭(中央)	36.5	17.7	板				
201	杭(中央)	—	—	—				
202	杭(中央)	—	—	—				
17	横木	36.7	15.5	半裁			V-4クリ	
18	横木	67.0	16.8	半裁			V-1・4クリ	
34	横木	27.9	6.3	半裁	●			
41	横木	39.4	10.0	丸木				
42	横木	21.6	12.4	半裁				
43	横木	17.2	5.8	板				
44	横木	—	—	—				
45	横木	57.8	7.6	丸木			No.46の上	
46	横木	56.3	7.6	みかん			No.45の下	
51	横木	32.4	5.5	みかん				
52	横木	30.6	5.2	みかん				
53	横木	51.6	12.5	みかん				
54	横木	40.5	5.4	丸木				
55	横木	74.7	12.2	丸木				
56	横木	39.2	7.8	半裁				86-13
57	横木	—	—	—				
58	横木	26.1	27.7	半裁				
111	横木	—	—	板				
116	横木	90.0	5.8	みかん				86-9
120	横木	37.3	5.8	丸木				
127	横木	—	—	半裁				
2	流入	—	—	—				
3	流入	35.3	8.8	半裁				
4	流入	34.2	4.9	みかん				
5	流入	32.1	2.1	丸木				
6	流入	—	—	みかん				
7	流入	26.1	3.0	丸木				
8	流入	11.0	1.7	丸木				
9	流入	27.8	2.0	丸木				
10	流入	—	—	不明				
11	流入	47.5	7.1	板				

取上 No.	用途 (杭/横木)	寸法 (cm)		木取	端部 加工	炭化	備考	掲載 遺物No.
		長さ	径					
12	流入	93.3	7.6	みかん				
13	流入	33.3	10.8	半裁			No.16の上	
14	流入	9.7	2.6	不明			No.40と接合	
15	流入	12.4	2.8	板				
16	流入	47.0	9.8	半裁			No.13の下	
19	流入	42.4	6.7	丸木				
20	流入	40.9	4.5	みかん				
31	流入	48.7	10.2	丸木				
35	流入	30.4	9.6	板				
36	流入	13.1	2.0	丸木			No.40と接合	85-3
40	流入	29.5	2.2	丸木			No.36と接合	85-3
78	流入	24.4	20.0	—				
90	流入	[47.9]	4.3	半裁				85-6
【板敷部】								
21	板敷	—	—	—				
22	板敷	15.3	5.2	板				
23	板敷	27.6	10.3	板				
24	板敷	—	—	板				
25	板敷	—	—	板				
26	板敷	—	—	—				
27	板敷	18.3	6.8	板				
28	板敷	—	—	板				
29	板敷	28.2	17.8	板			V-5クリ	
30	板敷	33.2	14.0	板				
【内部杭群】								
66	杭	[41.1]	6.2	丸木			樹皮残存	87-23
67	杭	[81.8]	9.5	丸木	C	端		87-15
68	杭	58.7	7.9	みかん				
69	杭	—	—	樹皮				
70	杭	51.1	6.7	丸木	A	●		87-21
71	杭	[46.6]	7.2	丸木	B			87-22
72	杭	62.9	4.9	丸木				
73	杭	42.2	5.7	みかん				
74	杭	8.5	4.0	不明				
75	杭	77.0	12.2	丸木		端		87-16
76	杭	73.0	12.5	丸木				
77	杭	61.4	6.9	丸木			樹皮残存	
79	杭	64.1	11.9	丸木	B	端	樹皮残存	87-18
80	杭	35.8	10.0	丸木	●			
81	杭	30.9	9.1	みかん				
82	杭	36.3	6.7	みかん	●			
83	杭	20.9	8.7	半裁				
85	杭	46.2	9.6	板				87-26
97	杭	22.5	8.7	丸木				
98	杭	69.4	10.4	丸木	C	両端		87-17
99	杭	—	—	—				
100	杭	17.0	14.0	半裁			滅失	
101	杭	42.0	22.2	半裁				
102	杭	47.7	4.8	丸木				
103	杭	[16.5]	6.1	丸木	●			87-24
104	杭	6.0	3.9	丸木				
105	杭	57.8	10.0	丸木		端		87-20
106	杭	61.7	10.9	丸木				87-19
107	杭	16.7	7.2	板				
【南部杭群】								
89	杭	—	—	—				
91	杭	25.3	10.4	半裁	●			
92	杭	51.5	12.5	丸木				
93	杭	28.1	6.1	半裁				
94	杭	17.6	3.6	みかん				
95	杭	[45.7]	10.5	丸木	C	端		87-28
121	杭	56.3	15.8	丸木		●		
122	杭	[60.6]	9.2	丸木	C	端		87-27
123	杭	40.8	9.2	みかん	●			

取上 No.	用途 (杭/横木)	寸法 (cm)		木取	端部 加工	炭化	備考	掲載 遺物No.
		長さ	径					
124	杭	—	—	—				
128	杭	60.5	7.4	丸木				
129	杭	[20.5]	[4.5]	丸木	B			87-29
130	杭	12.3	5.4	丸木				
131	杭	31.1	4.6	みかん				
135	杭	12.6	23.4	半裁				
142	杭	18.2	3.8	みかん				
203	杭	—	—	—				
204	杭	—	—	—				
205	杭	—	—	—				
206	杭	—	—	—				
701	杭	22.6	6.5	丸木				
702	杭	—	—	—				
【東部杭群】								
132	杭	38.7	7.0	みかん				
133	杭	27.4	5.4	丸木				
134	杭	72.7	9.7	丸木				
145	杭	[31.2]	3.8	半裁		V-5コナラ 属クヌギ節		85-2
738	杭	10.2	4.2	丸木				

取上 No.	用途 (杭/横木)	寸法 (cm)		木取	端部 加工	炭化	備考	掲載 遺物No.
		長さ	径					
739	杭	[24.8]	6.9	みかん				87-30
740	杭	27.3	5.2	丸木				
741	杭	9.3	5.7	みかん				
742	杭	—	—	—				
743	杭	19.8	5.0	みかん				
744	杭	17.8	5.2	みかん				
745	杭	7.8	3.9	板				
746	杭	—	—	—				
747	杭	16.7	8.5	半裁				
【その他】								
38	不明	11.9	2.6	丸木				
39	不明	14.8	3.9	板				
84	不明	56.3	8.5	みかん				
86	不明	47.6	8.5	みかん	B			87-25
126	不明	26.5	7.3	半裁				
136	不明	[13.9]	4.6	半裁	A			85-7
138	不明	16.8	5.3	丸木				
139	不明	23.2	11.5	みかん				
140	不明	23.5	6.6	丸木				
141	不明	15.0	5.4	半裁				

第1号木道状遺構 (第89・91図)

検出・確認 第3号木組遺構の下流、D-20グリッドに位置し、層的には開削部の上部に相当する。流路の堆積土を掘削中に、流路と直交し、谷の左右兩岸を渡すように横たわる大型の木材1を検出した。当初、自然の倒木か人為的なものか不明だったが、周辺を精査する過程で、木材1を固定したと見られる木材2や木材3を検出したことから、これらをひとつの構造体とみなし、「木道状遺構」として調査した。

重複状況・関連遺構 重複遺構ではないが、上流の第3号木組遺構や下部の開削部とは関係が深く、後述する状況より、木組の構築や開削部の埋め立てと並行して造られたと推測される。

構成材 木材1は直径50cm、長さ4.4mの大規模な半裁材で、年輪は99年分計測できた。木材3は分割材で、杭のようにおおむね垂直方向に打ち込まれ、荷重によりやや下流方向へ傾いている。地山まで到達せず黒色土中で留まることから、打設時期は開削部の黒色土の埋積後である。

木材2は、直径15cm、長さ4m以上の丸木材で、木材1の下に噛ませ、末端を上流の第3号木組遺構まで延ばしている。途中、材をしながら向きを変え、木組の北西杭群の位置で固定してい

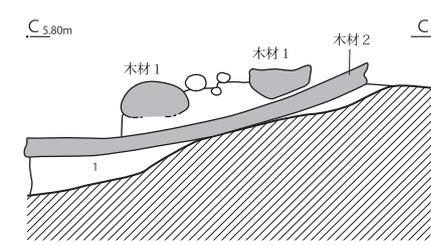
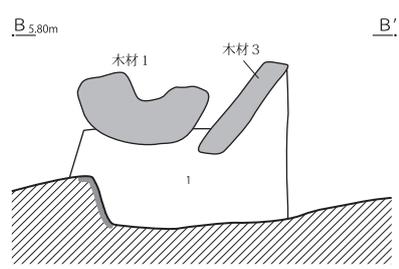
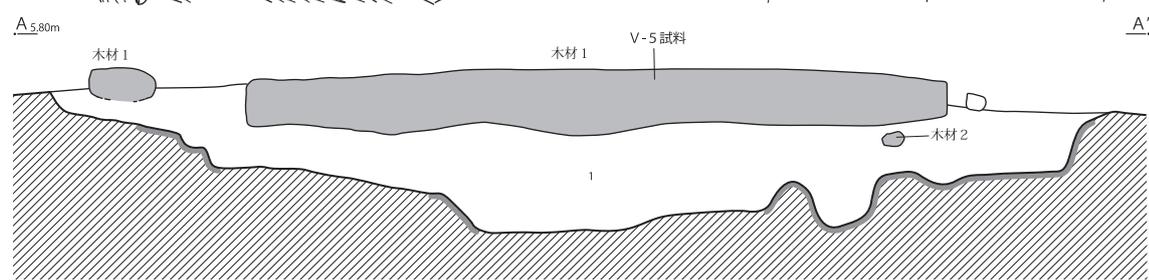
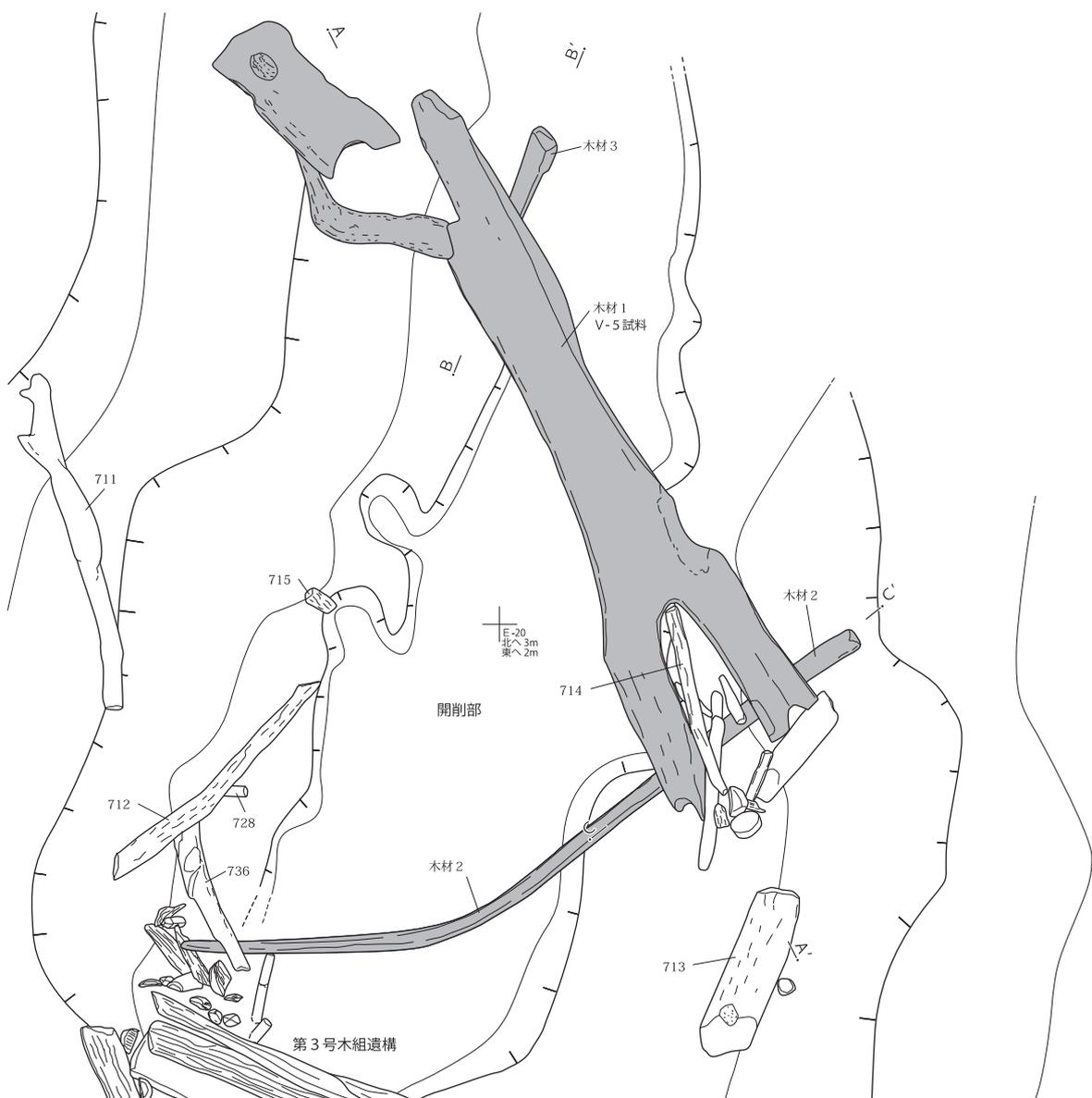
る。この状況から推定される、木組や開削部を含む構築順序は、①第3号木組遺構(北西杭群)→②木材2→③木材1(木道部)→④木材3となる。

木道部(木材1)が高架していたのか、開削部黒色土上に設置されたのかは調査で明らかにできなかったが、第3号木組遺構でも既述のように、木組が機能する時点では、北辺の横木の裏込めとして、開削部の黒色土がある程度埋積している必要があることから、その形成時期は、早ければ②の後、遅くとも④の前である。

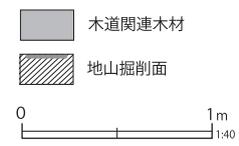
いずれの場合においても、第3号木組遺構と木道の構築が、開削部(黒色土)の埋積と並行している点に特徴がある。木材2を下に噛ませたのは、木道部を下流へ流さないようにした処置と考えられる。

出土遺物 木道部と打ち込み杭からなる掘方のない施設のため、厳密な意味で伴う遺物は無いが、木道部直下で出土した遺物を、第91図1～3に示した。1は堀之内2式期、2は晩期安行式、3は安行3b～c式の粗製深鉢であろう。

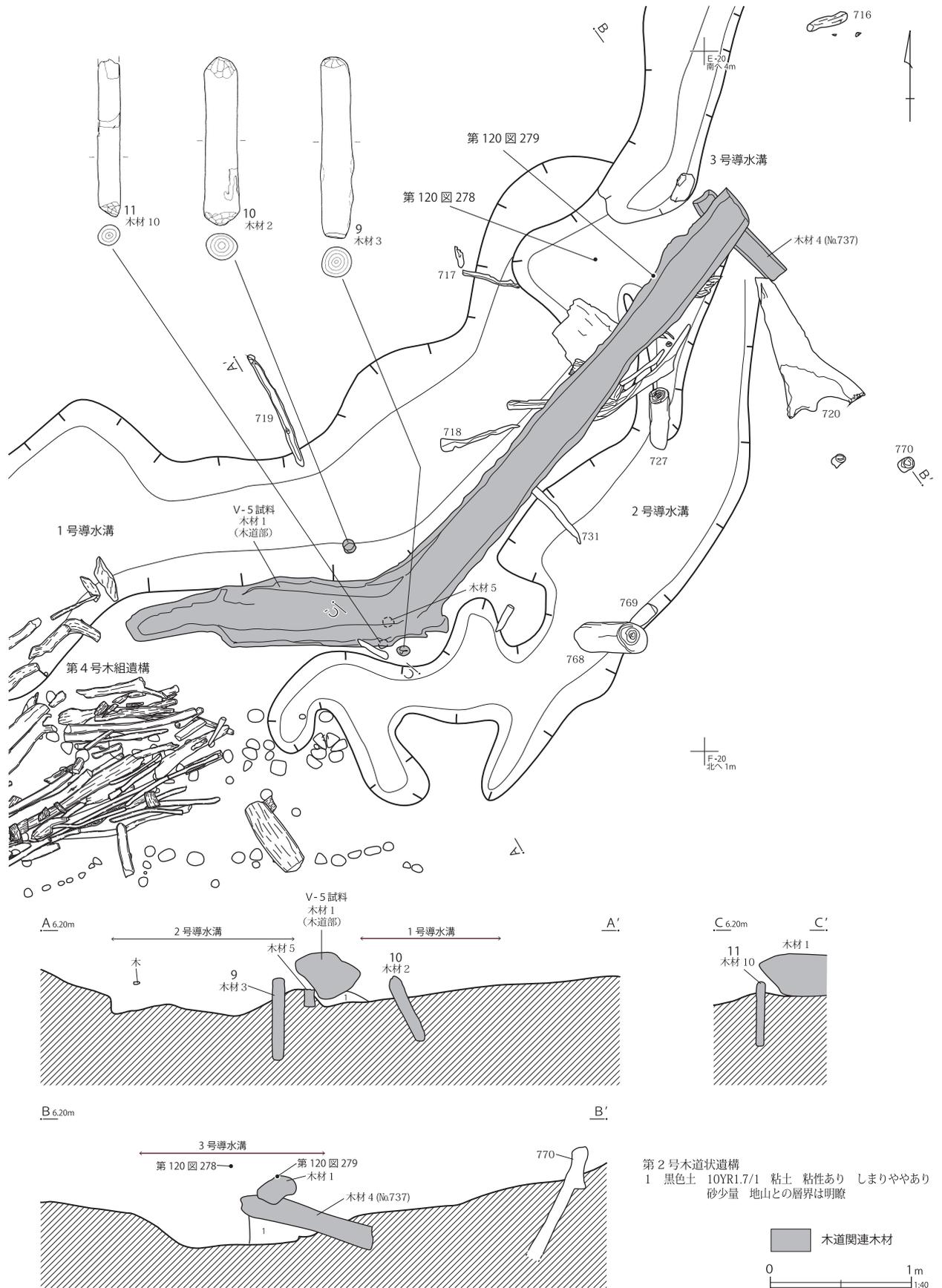
時期 直下で出土する最新の遺物は安行3b～c式で、土器集積層(安行3b式期)の形成後とする所見とも調和する。兩岸を渡す状況から、流路を横断するための足場を想定できるだろう。



第1号木道状遺構
 1 黒色土 10YR2/1 粘土 粘性あり
 しまりあまりなし
 ロームブロック少量



第89図 第1号木道状遺構



第90図 第2号木道状遺構

第2号木道状遺構 (第90・91図)

検出・確認 流路堆積土を掘削中、大型の木材1を検出した。当初、自然の倒木か否かの判断がつかなかったが、調査を進める過程で、木材1を挟み対向する位置に木材2や木材3を、また下流側では木材1の下部に木材4を噛ませた状況を確認した。以上から、大型の木材1(木道部)を流路内に固定したひとつの構造体と捉え、第2号木道状遺構として報告する。

位置・関連遺構 流路底面のE-19に位置し、第4号木組遺構と隣接する。第1号木道状遺構が流路に直交するのに対し、流心部に位置し、流下方向に沿う。木道を挟んだ東西両側には、木道に沿って導排水を促したと見られる第1・2号導水溝状遺構が延びており、おおむね同時期のものと推測される。

構造・規模 大型の木材1を横たえ、上流側では木材2・3を対向する位置に打ち込んで固定している。また、下流側では木道下部に木材4を噛ませ、末端を沈ませない構造を持つ。木材5・10は木道直下にあるが、ある時期の関連杭と推測される。木道部は、流路底面の地山直上に設置される箇所と、やや浮いて流路堆積土が下位に入り込む

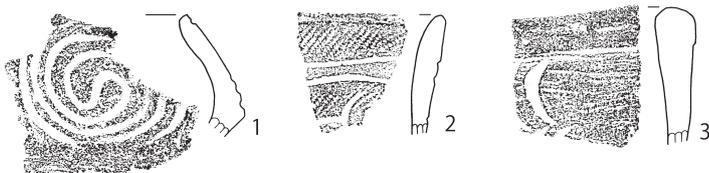
箇所がある(第90図A断面)。木道の両側では、導水溝が掘られた結果、木道直下の地山だけが、馬の背状の高まりを見せる。第1号木道状遺構が流路の横断機能が想定されたのに対し、本遺構は流路内を上下流方向へ移動するための足場が想定されるだろう。

構造材 木材1は直径45cm、長さ5.5m以上の木材で、本遺跡における最長の部材である。樹種は不明で、年輪は70年分計測できた。上流側の杭4本(木材2・3・5・10)は径10cm前後の細身の部材ながら深く打設している。下流側の木材4は直径約20cmの太い丸太材で、木道部との接点は荷重で沈み込んでいる(B断面)。

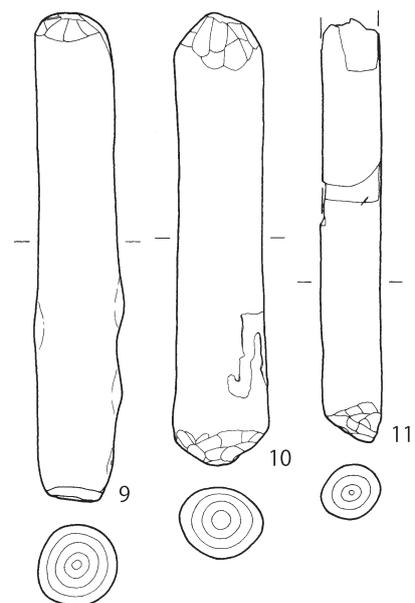
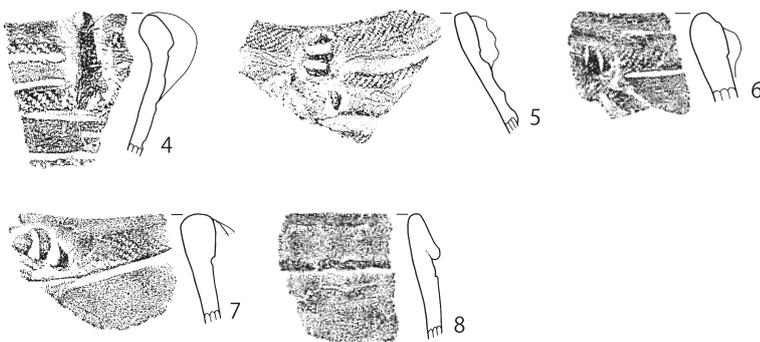
出土遺物 掘方のない木道部と打ち込み杭からなる施設のため、厳密な意味で伴う遺物は無いが、木道部直下で出土した遺物と、打ち込み杭を第91図に示した。4~8は後期後葉~晚期前葉頃の土器で、4は安行1式、5~7は同3a式の平口縁深鉢である。8は晚期安行式に伴う砲弾形の有段口縁粗製深鉢である。

9~11は木道部を固定した杭で、10と11は木道の左右対の位置にある。9は木道直下の杭で、最終段階では機能していなかった可能性が高い。

第1号木道状遺構



第2号木道状遺構



1~8 0 10cm 1:3

9~11 0 20cm 1:8

第91図 木道状遺構出土遺物

その他の水場関連遺構（第92図）

東の谷の水場遺構に関連する、木組遺構や木道状遺構以外の人為的な痕跡を①導水溝状施設、②開削部、③平場、④堅果類集積層として報告する。

①導水溝状施設（第93～96図）

流路底面で溝状や土壙状の掘り込みを検出し、SD56～59、SK774として調査した。位置や層位、検出状況から主に導水目的の施設と判断し、上流からSD58を第1号、SD59を第2号、SD57とSK774並びにSD56を第3号導水溝状遺構として報告する。

第1号導水溝状遺構（旧SD59）（第93・94図）

E-19グリッドに位置する浅い溝状の落ち込みで、流路の底面を精査中、比高差0.10～0.15mの浅い窪みを検出した。堆積土と地山白色粘土との層界に不整合が生じていたため、人為的な溝状の掘り込みと判断し、SD59として調査した。

平面的には流路底面で検出したものの、既述のように、第50図D断面でも溝は流路の堆積土上から繰り返し掘削されている。掘削深度は各段階で異なるが、0.3m程度の深さはあったようだ。

上流側は第5号木組遺構と第4号木組遺構の間を通り、下流側では第2号木道状遺構の西側（北側）を通過し、後述の第3号導水溝状遺構に接続する。前述のように、木道下部の地山が高まりとなっていることから、掘り込み自体は木道設置後で間違いないが、木道が視認できている時点において、同時期（併存している）可能性が高い。また、第4号木組遺構の輪郭をかすめ、新旧関係を持たないことから木組とも同時期の可能性が高い。

第2号導水溝状遺構（旧SD58）（第93・94図）

第2号木道状遺構の東側に延びる浅い溝状で、流路の底面を精査中、周辺の地山白色粘土の窪みとして検出した。掘り込み状況は木道西側の第1号導水溝状遺構と類似し、同様の機能を推測させる。上流側は第4号木組遺構付近を起点とし、その接点付近では下部の杭群を避けて掘り込まれて

いる様子から、厳密には木組設置後で、大きく見れば同時性がある。また、第1号導水溝状遺構同様、第2号木道状遺構下部の地山が馬の背状に掘り残される状況から、木道設置後の掘り込みと判断され、大きく見れば同時併存とみなせる。下流側では木道の下部で第3号導水溝状遺構と接続して収束する。

第1・2号導水溝状遺構の出土遺物 流路底面で木道部を残しながら、全体的に堆積土を掘り下げていたため、「導水溝状遺構」の発見時には、その大半を掘り上げていた。両遺構へ帰属させることができた遺物は少ないため、第94図には両者を一括して掲載した。詳細な出土地点は、節末の第10表に譲る。なお層位的には「エリアC最下層（地山直上層）」や、「第4号木組遺構最下層」と同一の層で、中でも木道部の直近で出土したものと理解されたい。

第94図1は横帯文をもつ加曾利B1式の深鉢で内文をもつ。横帯文内に縄文が施文され、段違いの区切文をもつ。2は櫛状工具による条線をもつ土器で口縁部内面には稜をもつ。第5号木組遺構出土土器（第83図45）と同一個体である。3・4は台付鉢の口縁部破片で同一個体である。口縁部は内側に折り返され肥厚し、内面に稜をもつ。3は小孔を起点に沈線と充填縄文による弧文が描出される。縄文はかなり節が細かい。5は安行3c式の波状口縁深鉢で、列点は部分的に複列になっている。6は条線文土器、7～9は紐線文土器である。6は胴部に沈線と列点による区画を持つ。9は胴部の弧線文内に列点を充填する。10は肥厚する口縁に列点を巡らせる。地文の条線はなく、器面調整はケズリである。安行3c式になるだろうか。11・12は底部で、11は底面に網代痕をもつ。12は底面がひしゃげており不安定である。底面の調整は太めの棒状工具を不特定方向から強くナゲつけ波板状になっている。器壁が3～4mmの薄さの部位もあり、全体的に粗雑な作りである。



第92図 その他の水場関連遺構 (1)

13は底径4cmに満たない資料で、ミニチュア土器とした。底径に対して厚底で、外面はわずかに弧線状の文様が見られるのみである。

第3号導水溝状遺構（旧SD56・SD57・SK774）

（第93・95・96図）

流路の底面、E-19・20グリッドに位置し、第2号木道状遺構の木道下部から第3号木組遺構へ向かって延びる。調査当初は、U字溝状のSD56、木道部直下のSD57、SK774という異なる3つの遺構であったが、堆積土は酷似し、明瞭な切り合い関係もなかったことから、一連の機能をもった構造体「第3号導水溝状遺構」として報告する。なお、各部を指す場合は、調査時の旧名称をそのまま使用する。

SD56は、谷を東西に断ち割る第93図A断面の土層観察で、比較的早い段階で確認されていた。その後、流路最下層を精査段階で、第2号木道状遺構付近から第3号木組遺構の方へに真っすぐ延びる水路状の溝として検出した。

上流部のSK774も同様に、流路最下層の精査中に、木道下へ潜り込む、方形土壇状の掘り込みとして検出した。地山と掘り込みの境界はかなり鮮明で、一見で人為的掘削痕として認識できた（図版41-1）。木道からはみ出した範囲では、比較的整った方形であるが、木道下で形状は乱れ、不自然な形で収束している。

SD57も第2号木道状遺構の下部に位置する短い溝状の掘り込みである。SK774とは木道下で歪んで接続する。SK774内部には加工の明瞭でない木材が詰まっていたほか、SD57に栓をするように丸太（木1）が出土した（第93図左下）。

このように、SD57とSK774とした掘り込みは、木道下部に位置するが、上部の木道を意識した（木道に依存する、または木道の影響を受ける）掘削状況から、木道設置後の掘削痕と判断される。機能としては、周辺の状況等から、木道右側（第2号導水溝状遺構）から木道下を通して、左

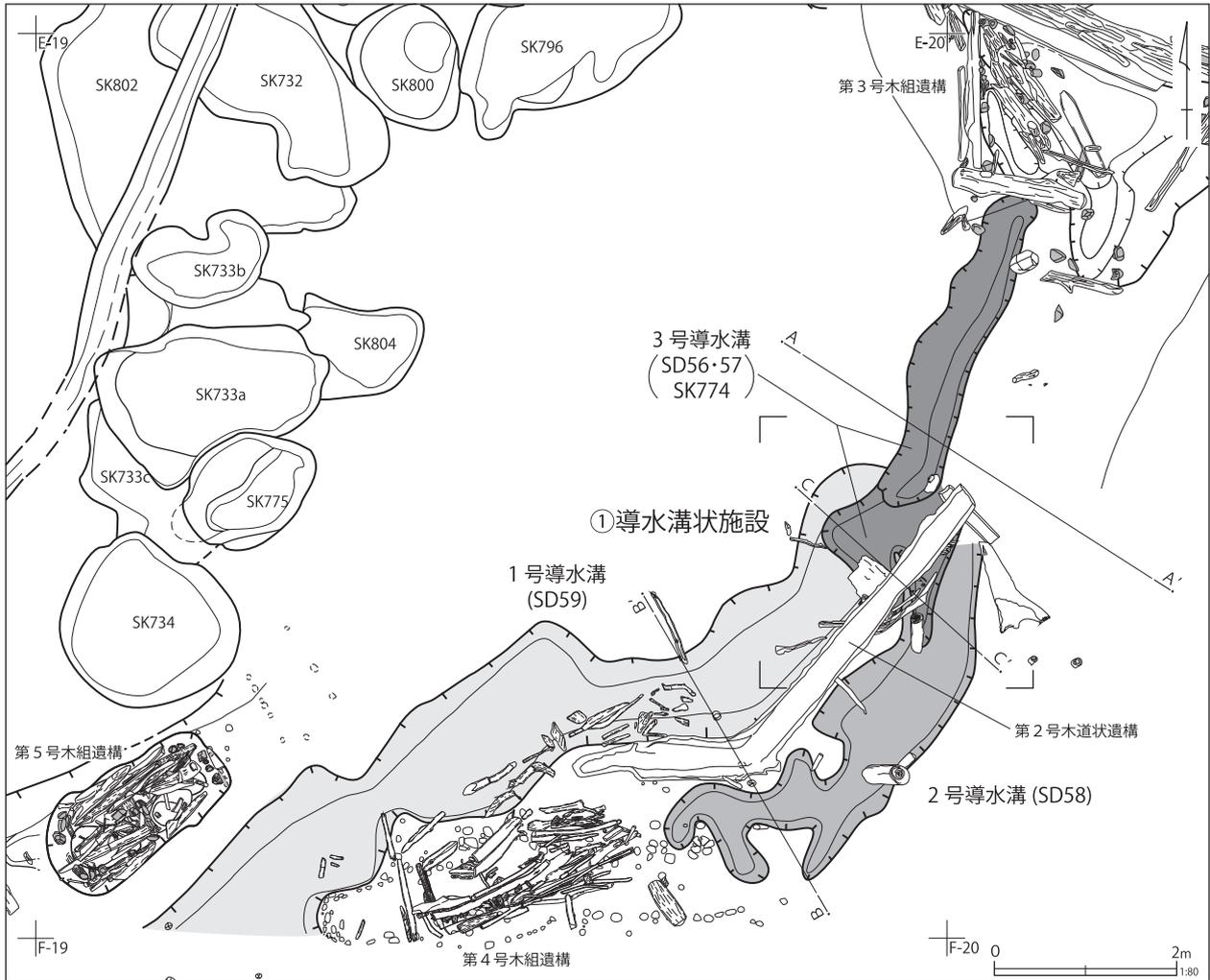
側の第1号導水溝状遺構側へ合流させる目的と推察される。よってその構築は、厳密には第2号木道状遺構設置後で、大きく見れば同時期と判断される。

出土遺物 第95・96図に出土遺物を示した。調査では、各掘り込み単位（SD56・SD57・SK774）で取り上げたが、一括で掲載し、詳細な出土地点は節末の観察表・一覧表に譲る。

1～52は土器、53～55は土器片加工品、56～58は土製品である。1は堀之内1式、2・3は同2式の深鉢である。1は口縁部に沿って沈線を巡らす緩い波状口縁深鉢で、起点の波頂部の1対の円文と、直下に対応するように二本の沈線が垂下する。4も口縁部に沿って沈線が巡る土器で同じ後期前葉の土器だろう。

5～8は加曾利B式で、7は口縁直下に押圧隆帯がつく紐線文土器である。9～12は口縁部に縦長無刻の貼瘤をもつ土器で、9・10の貼瘤は下部が左側に流れている。曾谷から安行1式にかけての土器である。13～15は無刻の二段瘤が貼付される安行1式である。16はキザミのある縦長の瘤をもつ大波状口縁深鉢で、山形の波頂部をもつ。17～20は横刻の貼瘤をもつ土器で、前二者は大波状口縁、後二者は平口縁である。20・21は口端部に縦刻の横長貼付文をもつ。21は口縁内面に不規則な列点状の刺突がある。22・23は縄文帯ではなくキザミ隆帯をもち、23の口縁部には二山の小突起が付く。24～27は晩期安行式で、25は第1・2号導水溝状遺構（第96図3・4）と同一個体である。25は三叉文と弧線文が描出され、26は胴部の最大径付近に入組文を横位に展開させる土器である。安行3b式であろう。27は上下二段の貼瘤間を多重の弧線で連結する。弧線間にわずかにLR縄文が見える。28・29は安行3c式の深鉢で列点は複列化している。30は台付鉢の脚部で円窓がある。31～33は鉢であろう。

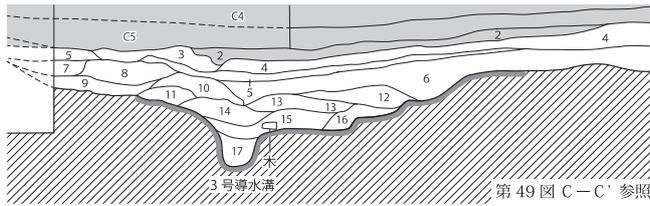
34は縦刻と横刻の貼瘤を上下二段に配する。下



①導水溝状施設

A 6.80m

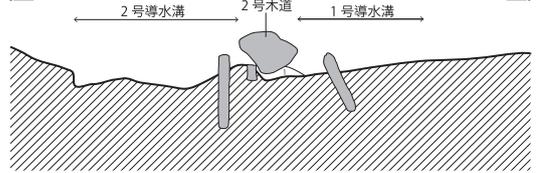
A'



第49図 C-C' 参照

B 6.30m

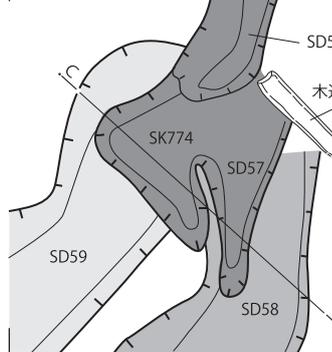
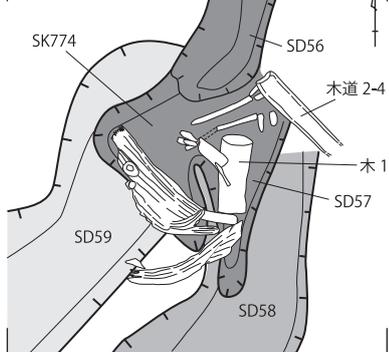
B'



木道関連木材

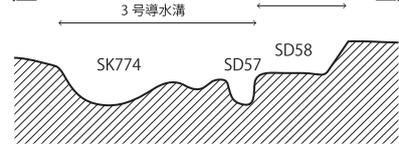
2号木道下面の状況

木質遺物除去後掘方



C 6.20m

C'

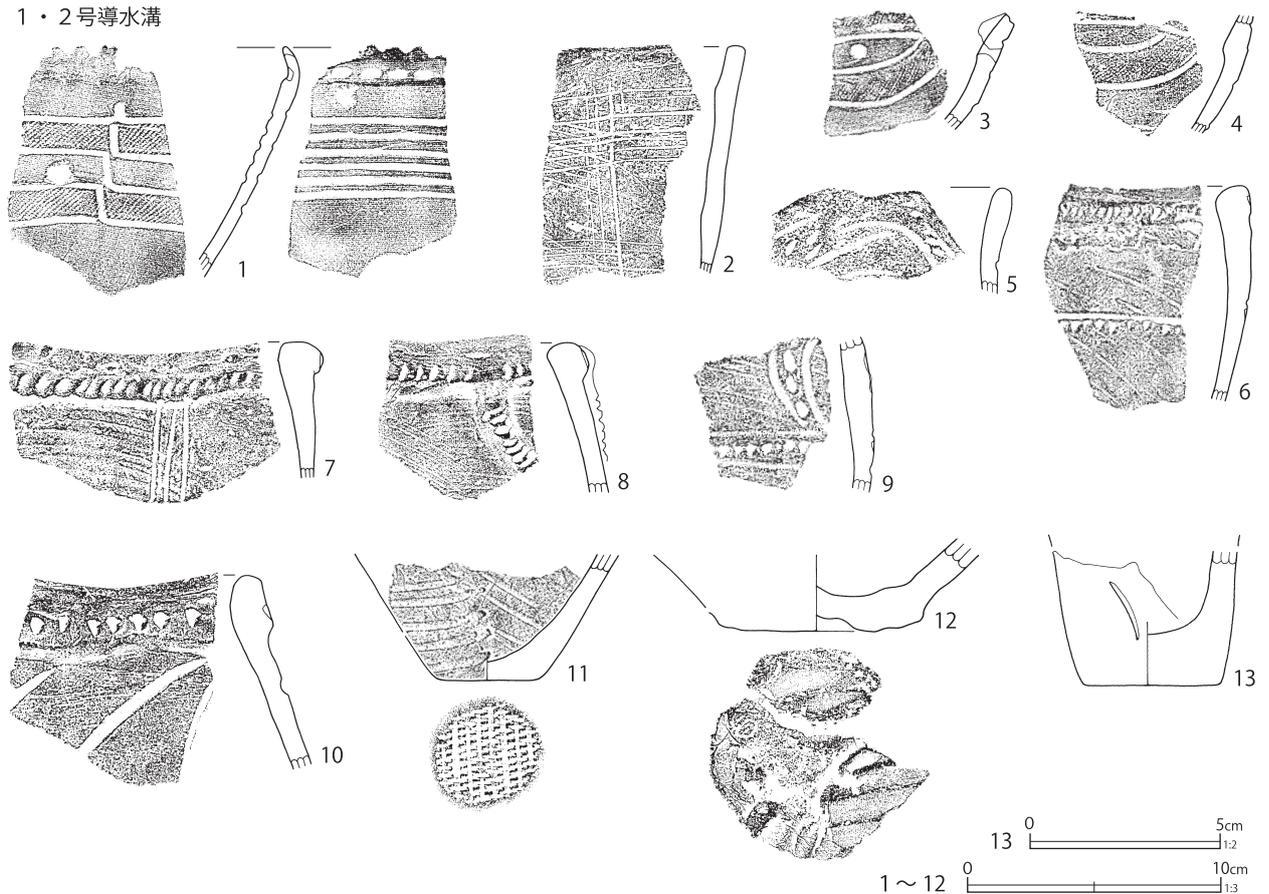


1号導水溝 2号導水溝 3号導水溝

0 2m 1:60

第93図 その他の水場関連遺構 (2)

1・2号導水溝



第94図 第1・2号導水溝出土遺物

部の貼瘤から弧状の隆帯が派生する。35は縦刻の貼瘤を持つ安行2式で、36は口縁部に紐線が巡る安行3a式である。36は三叉文、玉抱三叉文が描出される。

37~44は条線文ないしは紐線文土器である。37は口唇部が肥厚し下位に列点が巡る。38~41は条線を施し、42・43はこれがなく器面はケズリ調整である。45~47は安行3c式まで下るだろうか。

48~52は晩期前~中葉頃の砲弾形の有段口縁粗製深鉢である。51の有段部は外面上部に粘土紐を被せ、48は内面側から外側に被せている。

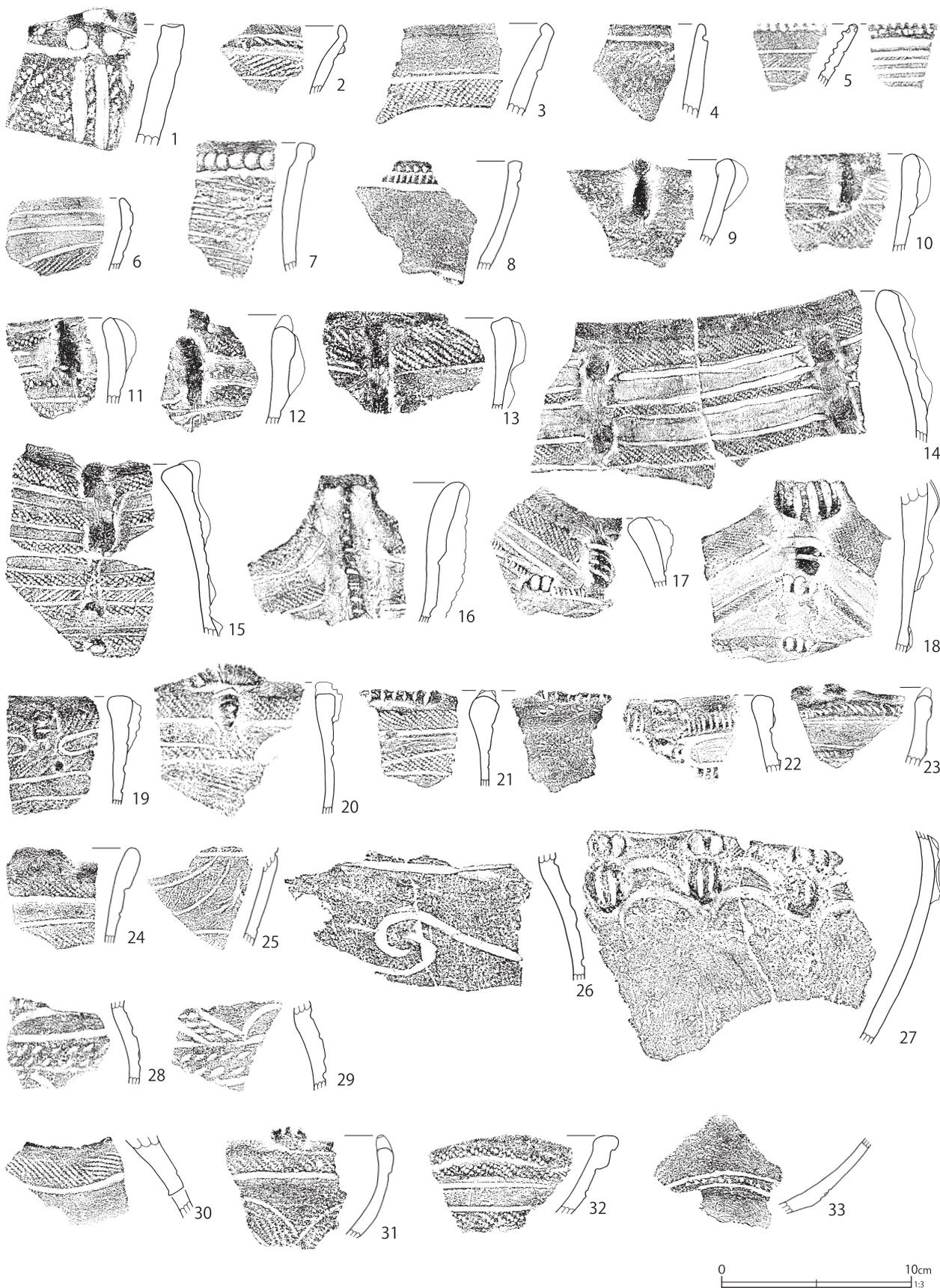
53~55は土器片加工品で、前二者はIIa類で素材はともに無文部、55は紐線文系土器で、口縁部沈線区画の下位には、口縁部の列点描出に伴う工具痕が観察される。

56は小型の筒形でミニチュア土器としたが、類例に乏しく判然としない。大きさに対して器壁は

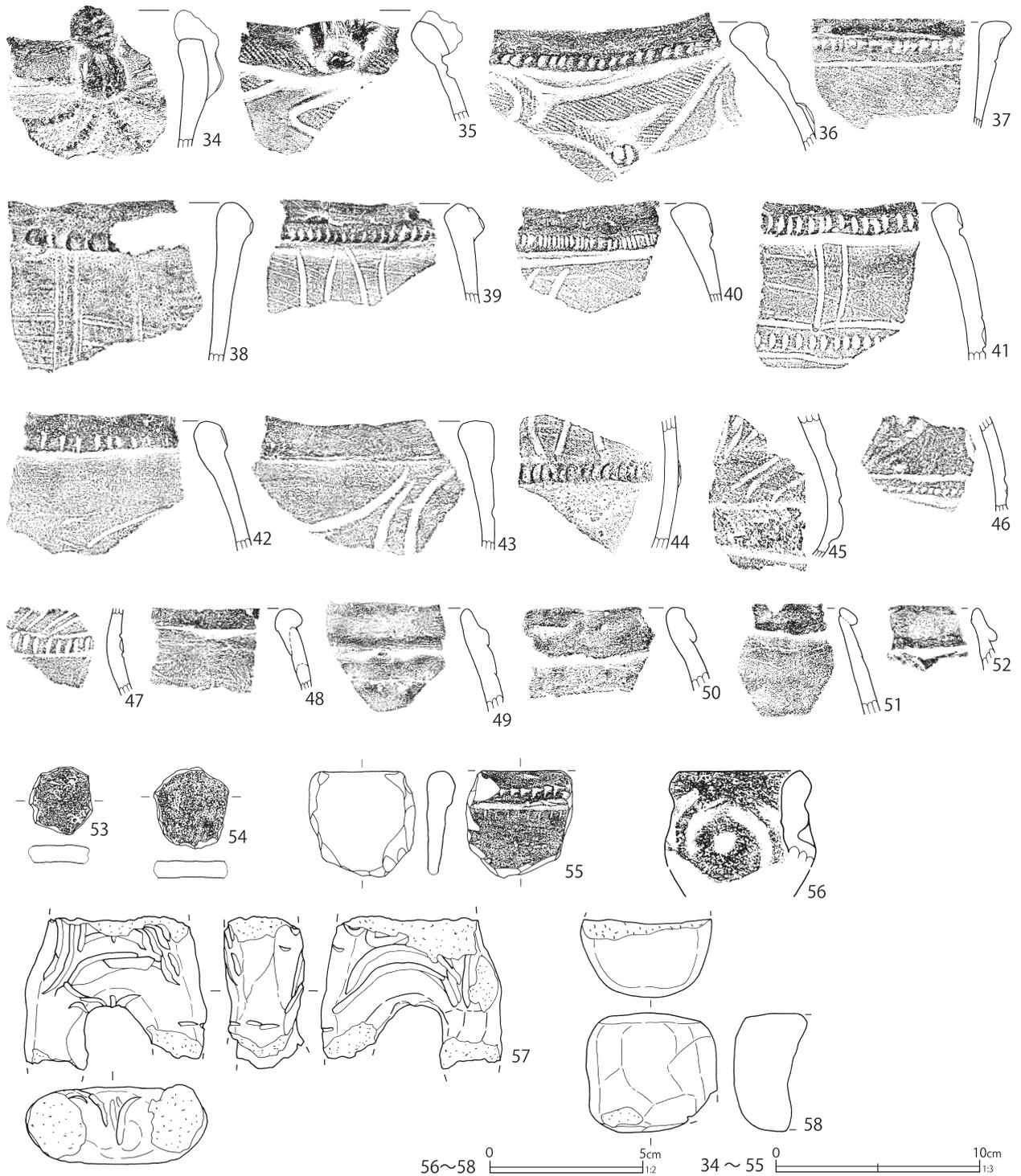
厚く、小さいながらも頸部は括れ、胴部は円形刺突を中心に、外側に弧線文を対向させている。後期前葉頃のものだろうか。

57は土偶の胴~脚部である。内外面の文様は沈線のみで表現される。58は低い柱状の土製品で両端部は平坦に作られている。水場遺構出土の土製品(第120図283)とは接合はしないものの、同一個体ないしは同一製作者と見て良い。

以上、第1~3号導水溝状遺構は、周辺の木組や木道と構築の前後関係はあるものの、大局的には同時期に機能した溝跡と言える。第3号導水溝状遺構と第1・2号導水溝状遺構には、掘削状況や深度に明瞭な差がある。前者は歴とした「水路」と表現できるほどのU字溝状の掘り込みである。一方、後者はやや浅く、平面形も不定で、同一地点にて堀の堆積土と掘削が繰り返されている。以上の状況から、木道両脇の第1・2号導水



第95图 第3号导水沟出土遗物（1）



第96図 第3号導水溝出土遺物(2)

溝状遺構は浚渫のような臨機的な側面もあった溝と推測される。木道両脇に沿う状況から、掘削の足場として木道が機能していた可能性がある。

導水溝状遺構同士の新旧関係は明らかにできず、木道両脇に同時期に分流していたのか、流路

の変遷があったかのは明らかにできなかった。理由は定かではないが、ある段階で、木道の下流ではなくあえて下部を掘り抜き、第2号導水溝状遺構側の流れを左側へ引き込んだものが、第3号導水溝状遺構であると考えられる。

②開削部（第92・97～102図）

位置・検出 第3号木組遺構の下流、D・E-19・20グリッドに位置し、主体はD-20にある。自然の谷（流路）の底面を大規模に掘削した痕跡である。谷（流路）は木組や木道以外にも各所に手が入られていたが、掘削の無い地点での地山と谷底面の堆積土との層界は、波を打ち不明瞭であった。底面の精査時にもこの凹凸は、掘削高を高い地点の地山白色粘土に揃えれば窪みの黒色土を除去できず、また逆に窪んだ黒色土まで掘り下げようとするれば、本来手の加えられていない白色粘土を痛めるという葛藤が生じるほどである。

この不明瞭な層界は、特に谷の流心部を外れた地点で多く確認できた。一方、流心部では人為掘削を示す不整合面が確認され、特に第3号木組遺構の下流部では、水平方向にも垂直方向にも発達していた。これを大規模な掘削痕と判断し「開削部」として報告する。

規模・構造 開削部の右岸は1m程度の標高差を3～4段の階段状に切土し、左岸も同様に2～3段程度の階段状切土となる。掘り込み角度は底面付近で特にきつく、最下段は「堀」とも表現できそうな箱型となる。掘り込みは直線的ではないものの、幅1.5m程度の水路状となり下流の調査区域外へ延びる。階段状切土の最下段では、地山を横方向に抉り込むようなピット状の掘削痕を各所で確認した。

範囲 掘削の範囲は、第3号木組遺構の掘方を起点とし、東西方向は、3号木組遺構付近で幅約6m、これより下流の北壁付近で幅約10mである。

掘削以前のかつての流路は推測するしかないが、ほとんど手の加えられていない上流側の流路底面の勾配は3%程度である。同程度の勾配で北壁付近まで続いていたと仮定すれば、北壁付近のかつての標高は約5.4m前後だろうが、開削部の底面標高は約4.8m付近（第48図A断面）であることから、開削部では少なく見積もっても下方へ

0.5m以上の掘削があったと推測される。

堆積土 開削部の堆積土は北壁（D断面）と第1号木道状遺構（E断面）の2箇所を確認したが、べったりとした黒褐色粘土が分厚く堆積するのみでほとんど分層できなかった。特に流心部に特有の砂層の形成はない。

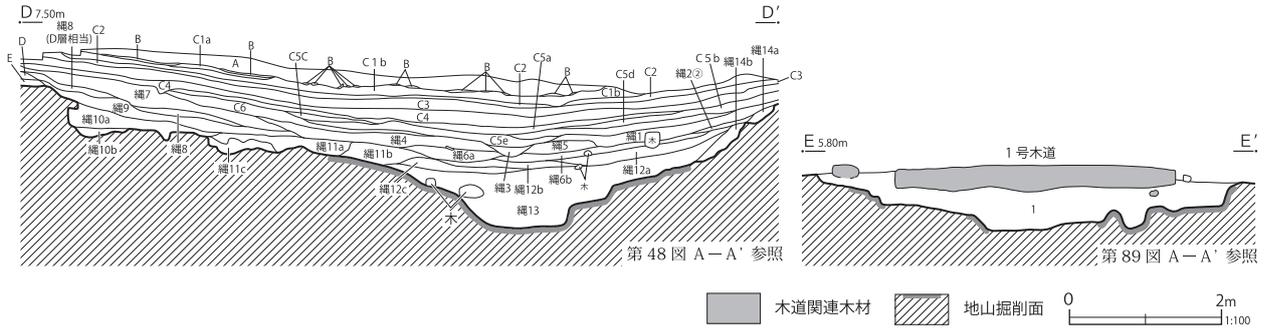
土器集積層 第92図に破線で示した範囲では、底面から0.15～0.20m程度浮いた高さで、晩期前葉安行3b式までの、土器片を中心とする夥しい数の遺物が出土し、「土器集積層」として報告する。この地点は、調査区内でもっとも標高が低く、調査区のすべての水が集まった。加えて、この場所自体が当時の掘削痕跡であったため、いたずらに排水用側溝も設けられなかった。また底面付近では、谷頭部の湧水点とは別に直接水が噴き出し、強制排水をしながらでも、常時水を湛える状況であった。開削部でも特に土器集積層以下は水面下の調査、もしくは泥田の掘削といった様相で、調査は極めて難渋した。

よって記録については、座標を伴う遺物の取り上げはできず、その範囲と出土層位を確認しながらに泥土ともに掘り上げ、この中の遺物を層位ごとに回収するに留まった。また、出土状況の写真記録もわずかを除きほとんど残せなかった。

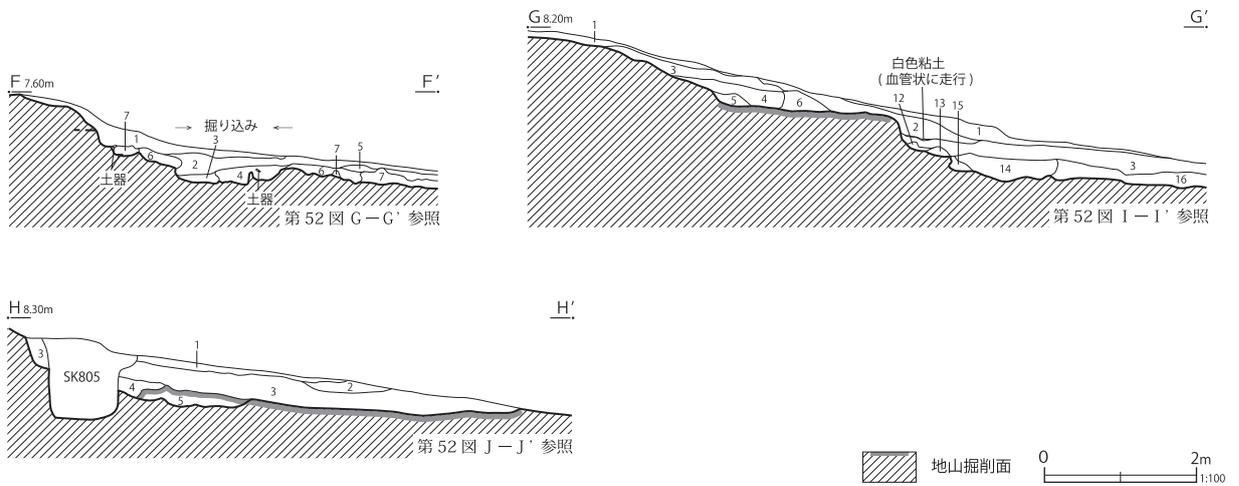
土器集積層の範囲は南北方向では、第3号木組遺構の下流部から、第1号木道状遺構の下部付近まで続き、これより下流部は調査区域外のため不明である。東西の範囲は、左右の階段状切土の一段目をちょうど埋め尽くし幅約1.5m、また南北は約2.5mの規模である。底面からは約0.2m程度の高さで出土し、層厚は0.05m程度で底面からは浮いている。出土状況を確認できた範囲では、土器溜まりや敷き詰められたと表現できる密集状態であった（図版44-2・3）。これより下層を「開削部最下層」として取り上げたが、出土量はわずかであった。第102図にその一部を掲載した。

出土遺物は、玉類や岩版、耳飾り、丸木弓な

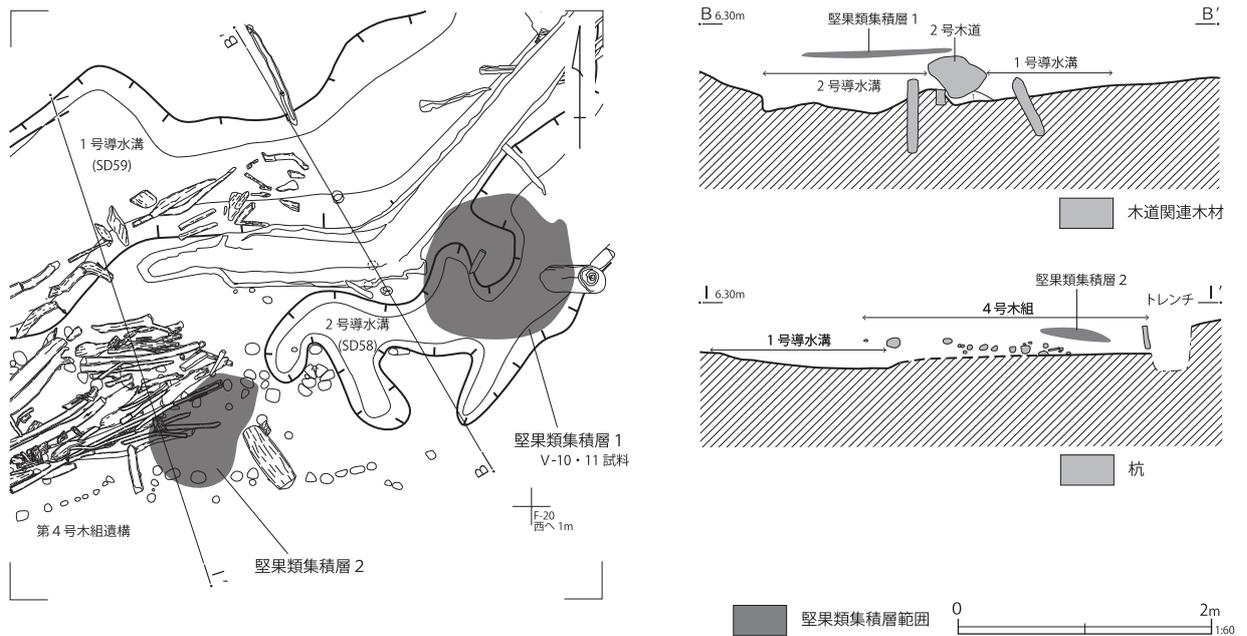
②開削部



③平場



④堅果類集積層



第97図 その他の水場関連遺構 (3)

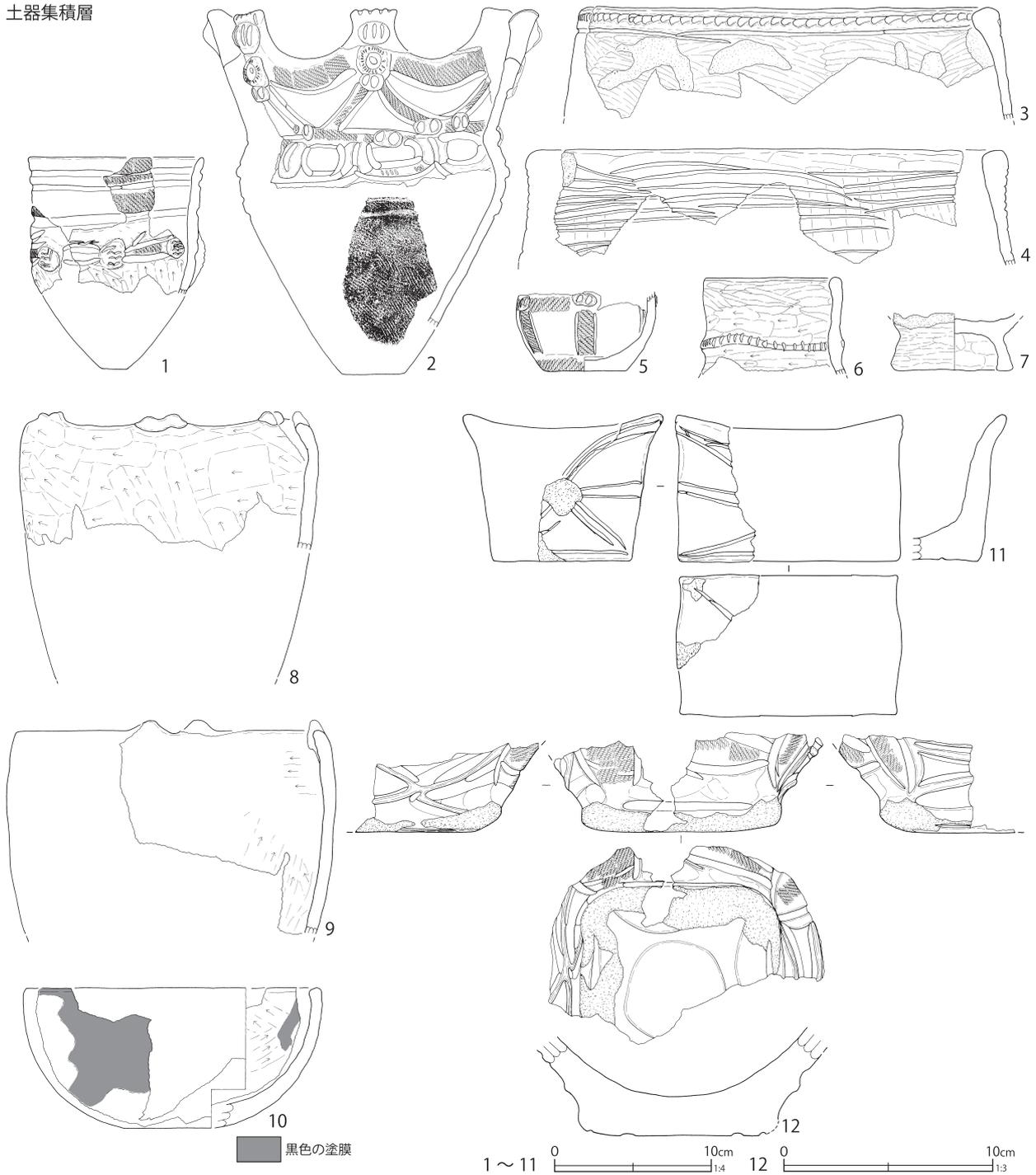
どその他の地点と様相を異にする（第103図）。また、第98図2や第99図30など、第3号木組遺構関連土出土土器との接合関係が複数ある。

土器集積層出土遺物 第98～100図は出土土器で、第101図はその他の出土遺物である。1は小型の平口縁深鉢で、口縁部には二本の沈線とRL

縄文を施文し、胴部には横刻をもつ貼瘤を一定間隔に配し、沈線で貼瘤を連結する。横刻は極めて特殊な原体を用いており、沈線ではなく凹凸のある工具（貝殻腹縁か）を刺突している。安行3a式であろうか。

2は安行3a～b式の大波状口縁深鉢で、色調

土器集積層



第98図 開削部土器集積層出土遺物（1）

は全体が黒色である。波頂部は鱗状の突起に縦刻があり、直下に縦刻貼瘤と円形の貼付文、豚鼻状貼付文が配される。胴部文様帯は楕円形の区画が横位に連続する。

3・4は条線文土器で、4は横方向の条線があり口縁部の沈線や列点は省略されている。5は胴部の括れ部の豚鼻状貼付文を起点に縄文帯が横位、縦位に展開する。6は口縁部が直立し、頸部に刻目のある隆帯を巡らせる。7は台付鉢の脚部であろうか。

8・9は無文の粗製土器で、平口縁にB突起状の突起が付く。ともに最終調整はケズリである。10は浅鉢で内外面に黒色物質が付着する。晩期前葉であろう。

11・12は角底土器で、11は底部から口縁部までの一部が残存する。器形は、底部付近は直角に立ち上がり、口縁部はやや外側へ開く。文様は、無文地に沈線のみで描出しているが、正面中央の剥落部には貼付文でもあったのだろう。これを起点に横方向と、口縁部と底部を結ぶ対角線上に二本沈線で文様を描出する。側面も文様は同様と見られるが、正面から推す限り、側面は長手（長方形）になる可能性がある。12も角底土器の底部破片で、底面外周は剥落が顕著である。いずれも安行3 a～3 b式にかけてのものであろう。

13は加曾利EⅢ式、14～17は堀之内式である。16は平口縁の一部のみを内側に折り返す。粗い器面調整の上に単沈線で文様を描出する。17は波状口縁の浅鉢であろうか。突起部は欠損する。波頂部に貫通孔を持ち、内接する口縁部には円形刺突を充填する楕円区画文を描出する。

18は加曾利B 2式で、口縁部の押圧隆帯が二段である。19～21・23は曾谷式と思われる。21は浅鉢で屈曲部付近に円形の列点が巡る。23は波頂部が山形になる波状口縁深鉢で、帯状に肥厚する口縁部に円形刺突が巡る。

24は安行1式で、25・26はいわゆる豚鼻状貼付

文を配する安行2～3 a式で前二者は平口縁、27は波状口縁の深鉢である。22は平口縁の安行3 b式か。

28は安行3 a～b式の鉢で、器壁は薄く器面調整が丁寧で黒色である。29は口縁上端に縦刻のある瘤をもつ。胴部には二本沈線で楕円文、横位区画を持つ。

30は平口縁深鉢で、文様や焼成がかなり特徴的である。口唇部にB突起とこの直下に縦刻の横瘤を配す。文様は、口縁部と胴部に並行沈線を、またこの上下に弧線を組み合わせる。沈線はかなり細く貧弱である。4片の接合資料で、口縁部片は第3号木組遺構の内部堆積土で出土した。後述の最下層でも同一個体破片が出土している（第102図69）。安行3 b式であろうか。

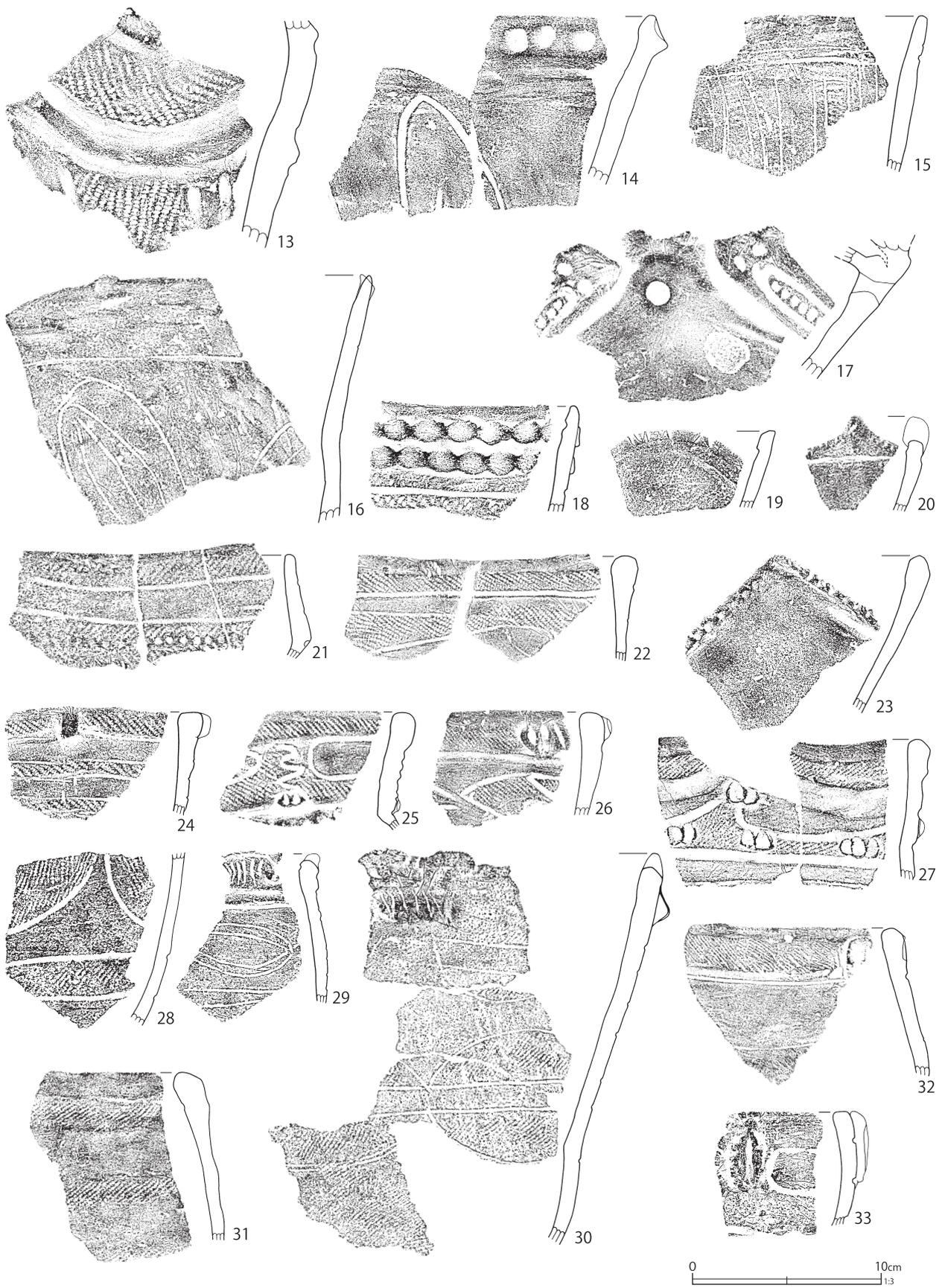
31は口縁が肥厚し内湾する深鉢で、縄文帯はあるが、沈線区画等を持たず、LR縄文を横位施文するのみである。32は平口縁深鉢で口縁部縄文帯にわずかに豚鼻状貼付文が見える。33は背割沈線をもつ縦長瘤と楕円文を持つ。安行3 a～3 b式であろう。

34は安行1式の台付鉢で、円形貼付と沈線区画内には条線風の沈線を羽状に充填する。35は縦刻横瘤と豚鼻状貼付文、36は横刻縦瘤と豚鼻状貼付文が施される注口土器であろう。

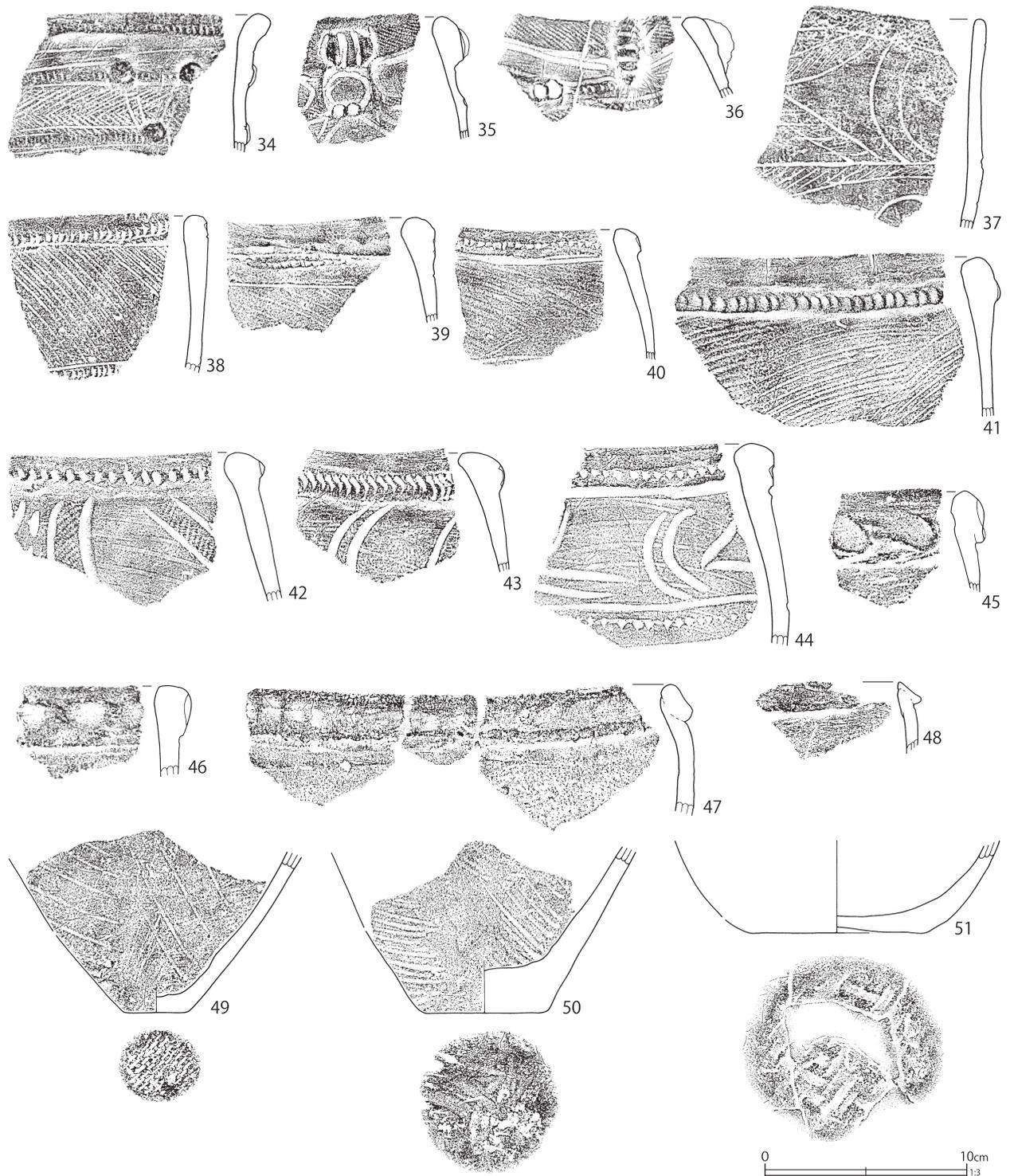
37は晩期前葉の細密沈線文土器である。38～40は後期後葉～晩期前葉の条線文土器、41～44は紐線文土器である。42～44は同部区画の間に沈線で文様を描出する。42は縄文と列点を伴う。45～48は晩期の粗製土器で、45・46は肥厚する口縁部に指頭押圧を加えている。47・48は晩期前葉の有段口縁深鉢である。

49～51は底部で、前二者は後期後葉～晩期前葉の安行式の深鉢で、後者は鉢であろう。50の底面は幅広の棒状工具で調整している。

第102図52～57は土器片加工品である。52は晩期の条線文土器の胴部で、53～57は後期後葉～晩



第99図 開削部土器集積層出土遺物 (2)

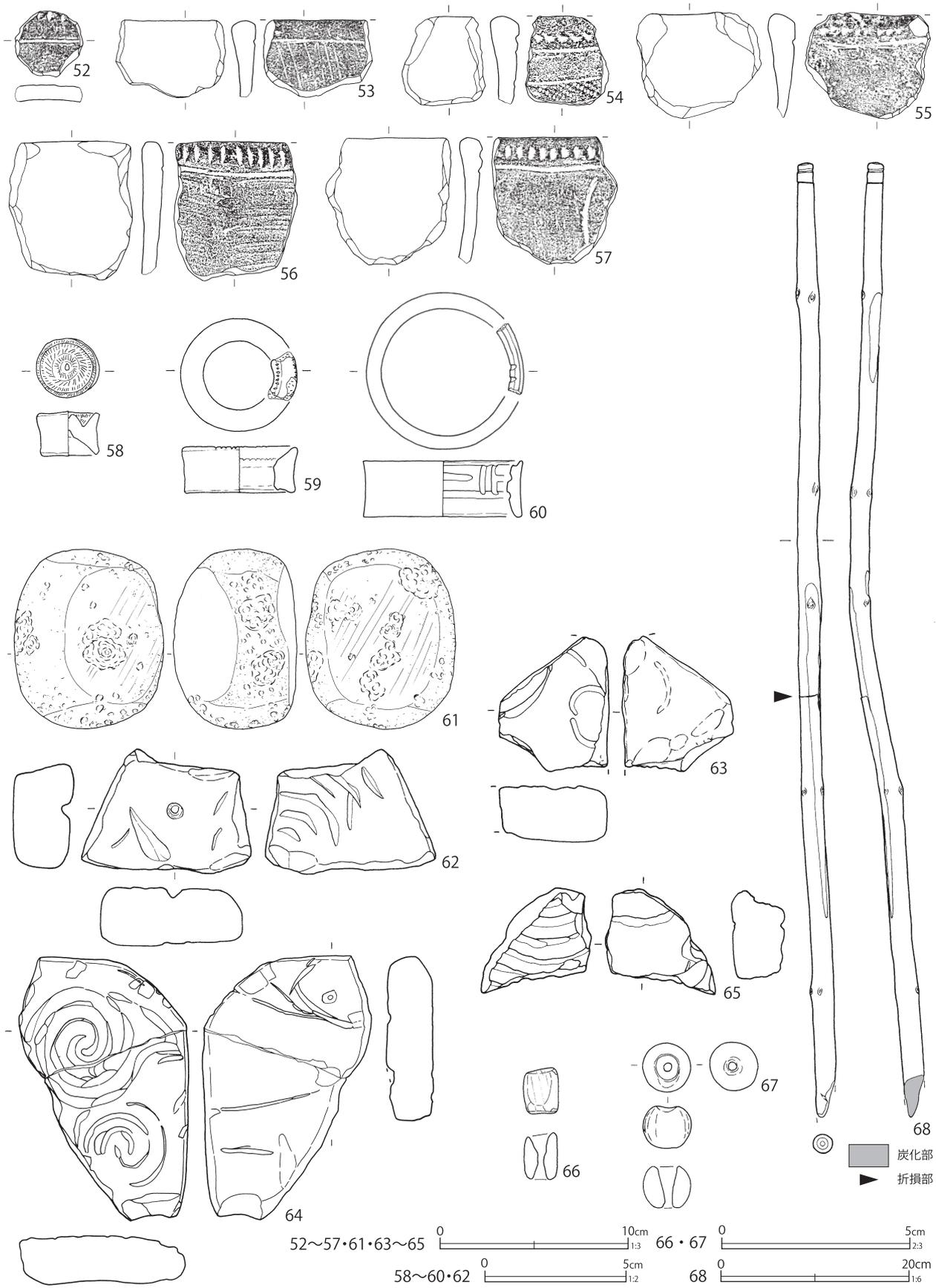


第100図 開削部土器集積層出土遺物（3）

期前葉頃の口縁部を素材とする。54は瓢形土器であろう。55・56は口縁部両端に対となる剥離がある。また、56は縁辺が全体的に摩耗し、内面で特に顕著である。

58～60は耳飾りで、58は完形、その他は破片である。58は裏側が大きく抉られた無孔タイプの耳

飾りで、表は外周が高く、内側へ下がりながら中央部は突起状に盛り上がる。中心には貫通しない穴が開き、放射状の刻み目が四重に巡る。サイズや瘤の有無に相違はあるが、後述の水場遺構出土耳飾り（第120図278）と良く似ている。59は環状の耳飾りで、断面は台形状で外縁および内縁に細



第101図 開削部土器集積層出土遺物（4）

かい刻みが巡る。60は内面に沈線文様のある環状の耳飾りで、断面の薄い作りである。文様は円周方向に二本の平行沈線が巡り、正面側から裏面方向へこれと直交する二本の沈線が垂下し、円周方向の沈線と連結する。正面側端部は細い沈線が巡り有段となる。

61は円礫利用の磨凹敲石で、いずれの痕跡も極めて顕著である。特に磨面は両端部を含むほぼ全面に及び、片側は平坦面が形成されている。

62～65は泥岩製の岩版で、62以外の3点は同一個体として確実なもので、62も材質やモチーフが共通する。64は隣り合う二辺は概ね直角の関係で、角は隅丸状となる。表は渦巻モチーフ2つを中心をずらして配置し、裏は端部側の点を中心に弧線を配す。62は破片のため不明瞭だが、表面は多重の沈線で渦巻ないしは弧線を描出し、裏面は点の周囲に弧線を配している。

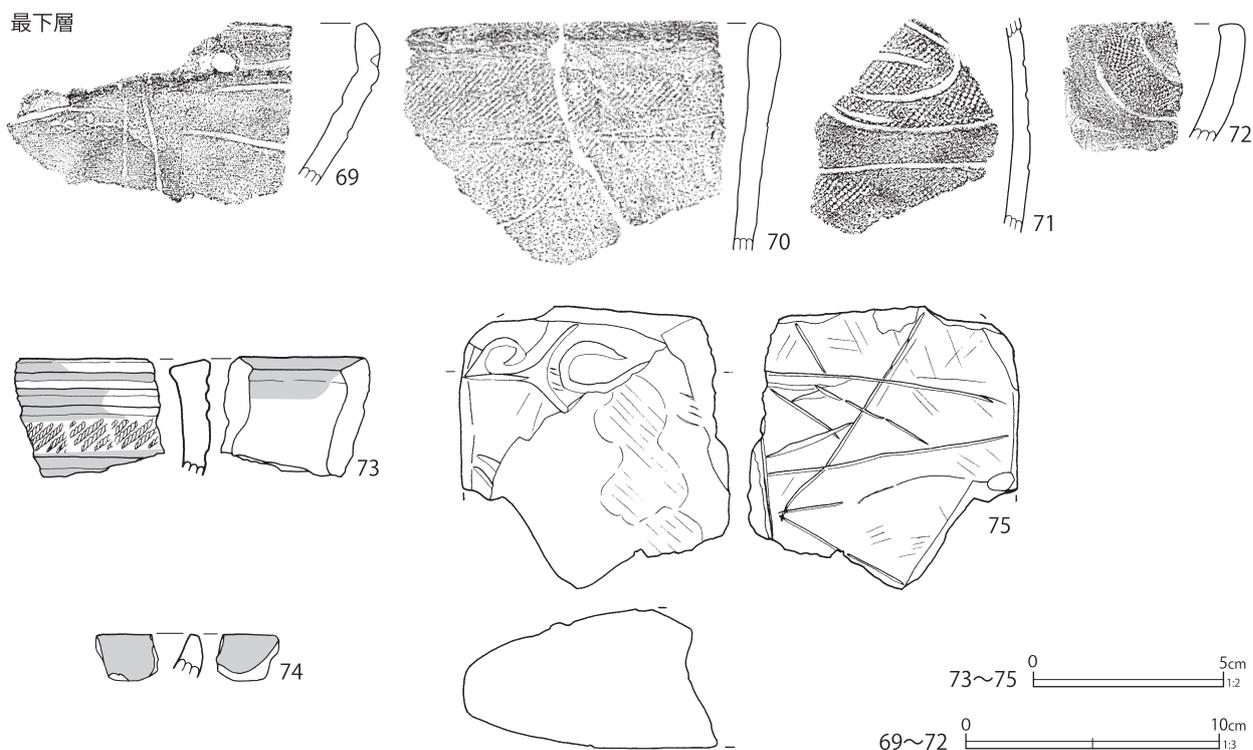
66は緑色の石材を使用した玉で側面は多角形状に整形される。両面穿孔である。67はヒスイ製の玉で片側穿孔である。

68は丸木弓で、本遺跡では唯一の出土資料である。上端の弓弭は浅い切込を二条入れているが、下端部は炭化し不明である。中央付近(▶部)で折損している。樹種同定と年代測定を実施し、樹種はイヌガヤであった(第V章2・5節)。

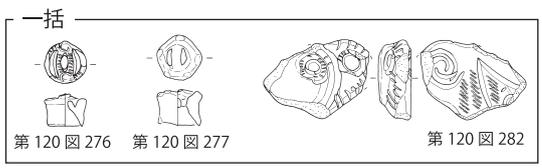
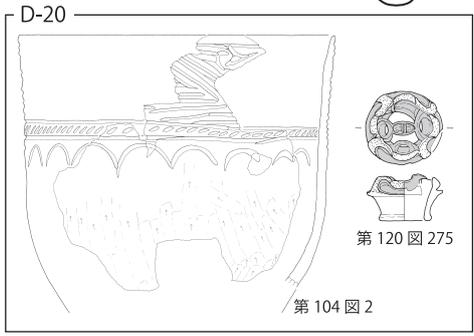
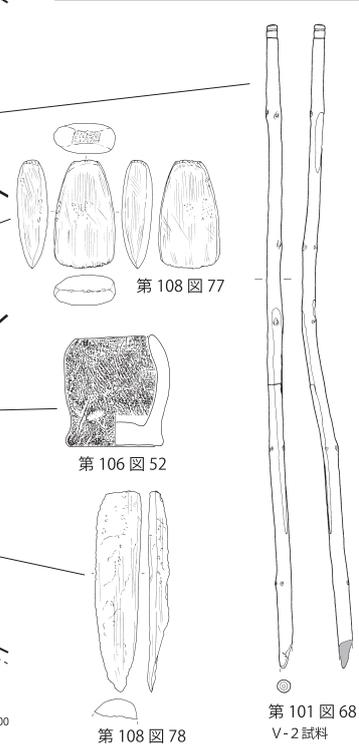
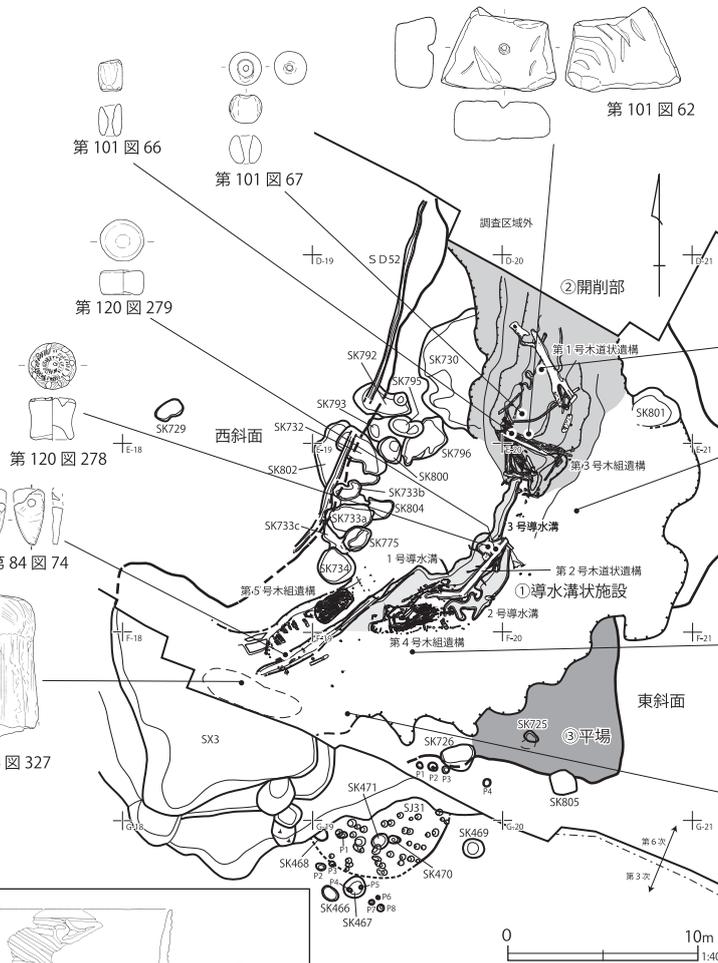
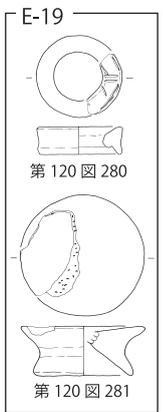
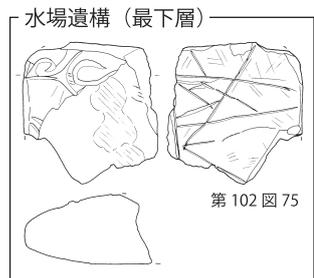
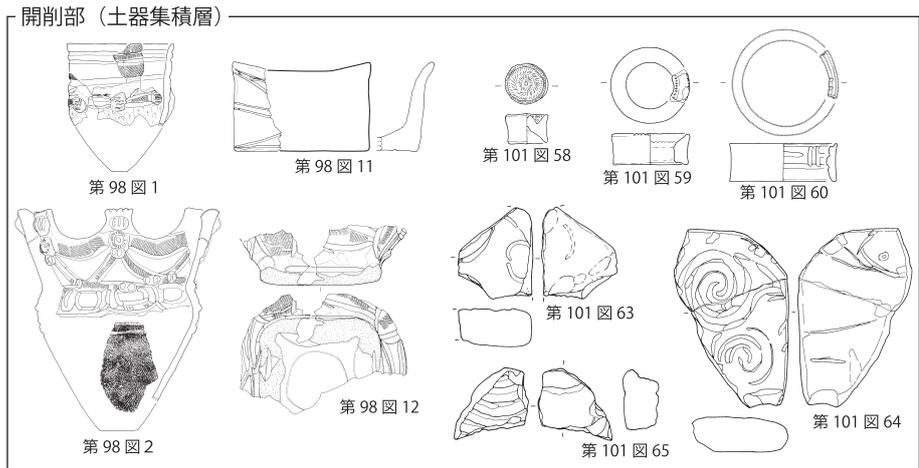
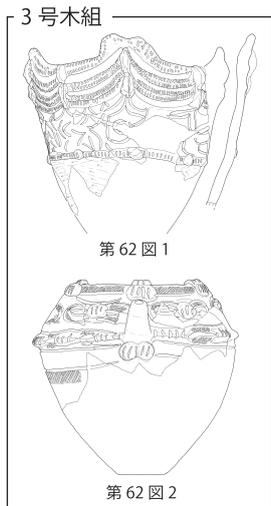
開削部最下層出土遺物 土器集積層の下層で出土した遺物で、出土量は少ない。第102図68～74に掲載した。68は加曾利B2式、69～71は晩期前葉頃の土器で、69は第99図30と同一個体である。71は台付鉢であろうか。

72・73は赤彩のある口縁部破片である。72は口縁部がやや厚く内屈し、外面には三条の平行沈線とLR縄文が施文される。外面と口縁部内面に赤彩がある。73は器種不明の小片で、内外面に赤彩がある。

75は凝灰岩製の岩版の破片で、側面は一辺と隅角部がわずかに残るのみである。表面は比較的太い曲線モチーフ、裏面は細かい刻線の直線的文様が描出される。



第102図 開削部土器集積層最下層出土遺物



第103図 水場関連遺構出土遺物分布

③谷右岸の平場（第92・97図、図版45）

位置・検出 谷右岸、F-20グリッドに位置する。上部の古墳時代の谷堆積土を除去後、地形の傾斜に直行するトレンチ（第97図G・H断面）において、谷地形と一致しない平坦面と、直上土層との不整合面を確認し、人為的掘削の可能性を考えた。調査の結果、これが一定の面積を持ち、かつ硬化面を伴うことから「平場」と判断した。

規模・範囲 谷上流部の右岸に位置し、谷の傾斜面を水平に削り出している。南北約7.0m、東西約6.0mの三角形の平坦面で、面積は約20m²である。南側は、H断面では急激に立ち上がるが、G断面側ではこの段差は解消され、自然地形へと移行していく。また東側はほとんど段差なくそのまま東斜面へと移行する。流路に面する北側は急激に落ち込んでおり、人工的な掘削痕の可能性もあるが、これを明らかにすることはできなかった。

平場の底面は全体的に極めて硬く締まり、直上層とは明瞭な不整合を見せる（図版45-8）。H断面3層は当初、地山と判断するほどのしまりであったが、時期不明の縄文土器片を微量含んでいたため、縄文時代の堆積土と判断した。

時期 正確な形成時期は不明であるが、直上層には古墳時代の遺物は一切含まず、第805号土壙（古墳時代前期）の掘り込み面もかなり上位にあることから、縄文時代の遺構と判断される。谷の位置関係から、縄文後晩期の水場遺構と関連する可能性もあるが、詳細は不明である。

④堅果類集積層1・2（第92・97図）

第2号木道状遺構の右岸で、堅果類を含む有機物を集積したユニットを2箇所検出し、「堅果類集積層」として調査した。1は下流側、2が上流側に位置し、1は木道部上面より、また2は第4号木組遺構の上部横木よりやや上で検出し、木道や木組の使用時期と同時期ではない。

規模は、堅果類集積層1が1.0×0.6m、同2は1.2×1.1mの広がりをもつ。断ち割りの結果、どちら

もほとんど厚みはなかった。それぞれ土壌と一部の水洗選別した有機物をサンプルとして回収した。

堅果類集積層1では種実ほか大型植物遺体の同定分析を実施した（第V章10・11節）。堅果類はトチノキとクリが多く、少量のオニグルミを含む。完形品や破片のほか、炭化したものを含んでいる。その他の木本植物では、ケヤキ、ムクノキ、イタヤカエデ、ミズキ、クマノミズキ等を、草本植物ではスゲ属、ホタルイ属等が多く検出された。詳細は第V章に譲る。

水場遺構最下層出土遺物（第104~108図）

東の谷で出土した遺物のうち、谷の底面で出土した遺物を一括する。これには、流路（流心部）で出土したものと、流路から外れた左右兩岸の底面で出土したものを含んでいる。ただし、このうちの下記は遺構に帰属させた。

第4・5号木組遺構の最下層出土遺物

第1~3号導水溝状遺構の全出土遺物

開削部の最下層出土遺物

土器 第104図は復元実測したもので、第105・106図はそれ以外の破片である。

1は口縁部に押圧隆帯を巡らせる加曾利B1式の平口縁深鉢で、4単位に半円状の突起を持つ。隆帯下に横位沈線を多段に施文し、突起下にコンパス文状の区切文が垂下する。口縁部内面には二条の幅広沈線が巡り、突起裏側に円文を持つ。地文はRL縄文で、第105図14と同一個体である。

2は安行3c~3d式の平口縁深鉢で、胴部は張らず、口縁部は直立する。対向三叉文や三角形文が描出され、胴部区画の列点は単列である。

3は頸部から胴部にかけての破片で、屈曲した胴部以下に無数の列点を施す。三十稲場式との関係を想起させる。4は沈線区画内に列点を充填する称名寺2式である。5~7は堀之内1式の口縁部破片で、5・6は地文に縄文を持ち、7は無文地である。5は波状口縁の波頂部から刻み隆帯が垂下し、左右対の位置に貫通孔を持つ。6は口縁

部が無文で、器形は外側に開く。小波状の波頂部下の円文間を沈線で結ぶ。

8・9は堀之内2式の平口縁深鉢で、ともに口縁部に8字貼付文と刻み隆帯、曲線的なモチーフを持つ。8は貼付文下に渦巻モチーフを配す。

10~14は加曾利B式で、10・14はB1式、12・13はB2式、11はB3式から曾谷式であろう。10は口端部が内屈し横帯文内に縄文を充填する。11は5単位の波状口縁深鉢で、波底部に小突起を持つ。口縁端部の沈線区画内に列点を施し、口縁に沿った幅広の縄文帯を持つ。12は8字状の突起を持つ鉢ないしは浅鉢で、突起内面に円文を持つ。

13・14は押圧隆帯文土器で、前者の隆帯は二段である。後者は第104図1と同一個体であろう。

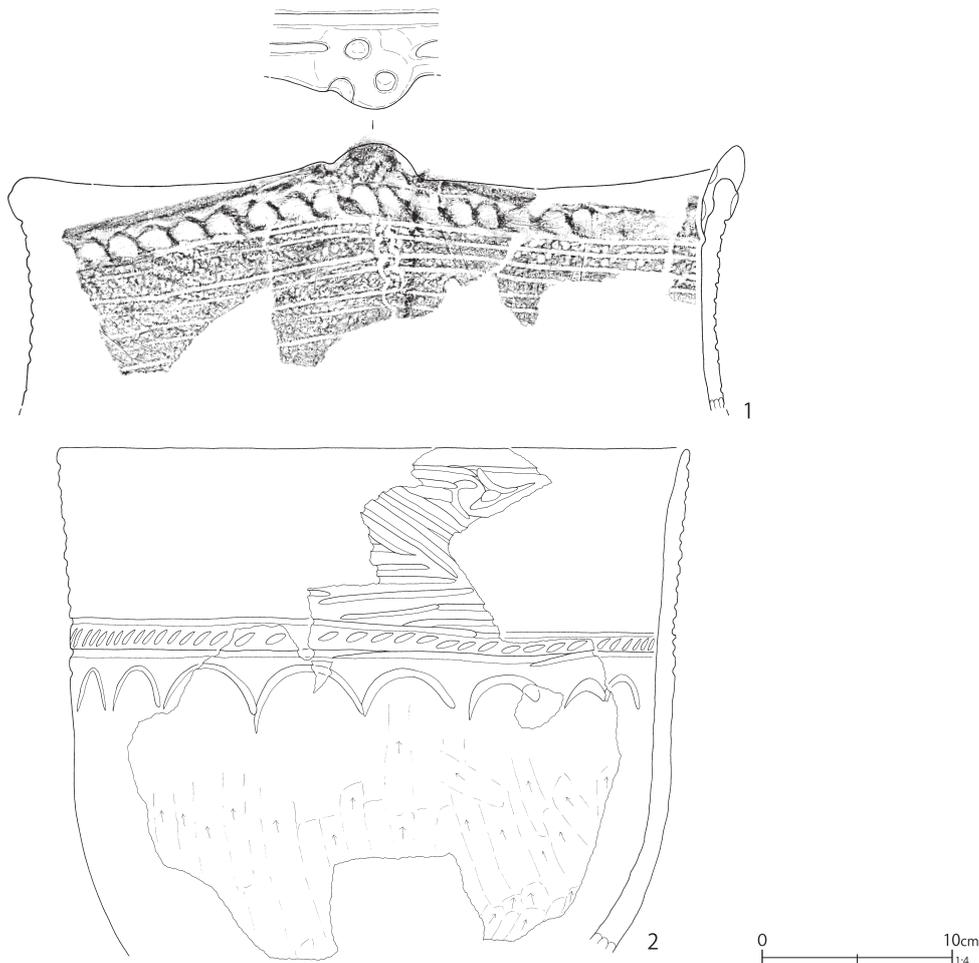
15は曾谷式の口端部が内削ぎとなる鉢で、口縁部に二条の列点が巡る。16は波状口縁深鉢の波底

部であろう。

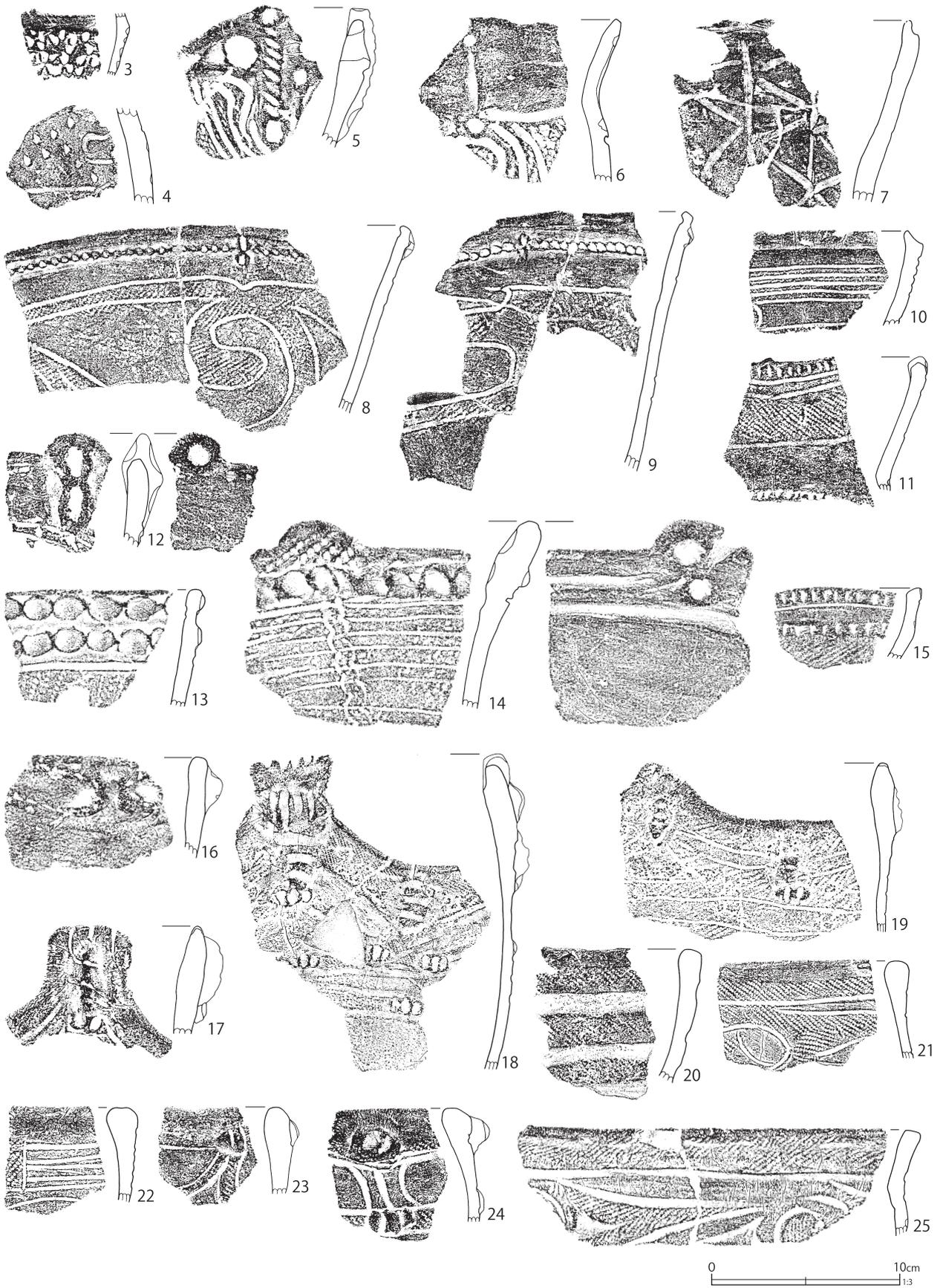
17~19は安行3a式の大波状口縁深鉢で、波頂部は、17は山形の波頂部に縦刻、18は鱗状の波頂部に縦刻横瘤と横刻縦瘤を縦列に配す。19は波頂部が三角形で、波底部は横刻縦瘤と豚鼻状貼付文を縦列配置する。縄文帯は沈線区画のみで器面の凹凸はない。

20は口縁部が肥厚して内湾する平口縁深鉢で縄文帯のみを持つ。21は内湾して立ち上がる平口縁深鉢で入組帯縄文を持つ。安行3b式か。22は縦位の縄文帯と横位の多条沈線を施文する。23・24は口縁部に縦刻横瘤を持つ土器で、23は横瘤を起点に弧状の縄文帯が派生し、24は口縁部下に楕円形区画文を持つ。

25は口縁部が短く外反する平口縁深鉢で、帯縄文で玉抱三叉文風を描く安行3a式であろう。



第104図 水場遺構最下層出土遺物(1)



第105図 水場遺構最下層出土遺物（2）